.hack//×SAO -繋がり、続く物語-

ムラキ　ヒロヨシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
・ｈａｃｋ／／×ＳＡＯ　－繋がり、続く物語－

【Ｎコード】
Ｎ５３７８Ｍ

【作者名】
ムラキ　ヒロヨシ

【あらすじ】
ＡＬＯに新たにアインクラッドが出現して早一年半、ＡＬＯでもたくさんの出会いと別れを体験したキリト達はギルド「フェアリーダンス」を作り、他のプレイヤーやギルドと協力し、すでに４９層までクリアしていた。
デスゲームだったかつてのアインクラッドの緊迫した雰囲気は、今は攻略を目指すプレイヤー達の活気に包まれている。
そんな中、なかなか全員で集まれないフェアリーダンスのメンバーも、今日は大型アップデートで５０層代解放があり、５０層のボス

攻略のために主要メンバーがほぼ全員集まっていた。
これから起こることも知らずに……

＊この作品は・ｈａｃｋ／／シリーズとソードアート・オンラインのクロスオーバー作品です。
原作を読んでなかったりプレイしていないとわからないこと、ネタばれになることがあります。
またできるだけ原作の設定に沿っていますが、いくつか本作オリジナルのスキルや仕様があるのでご注意ください。
またこの作品が初めてのものなので、至らないところが多々あると思いますが、改善できるところは進めていくうちにしていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

序章　始まりの足音

その空間は黒で埋め尽くされていた。遥か太古から存在するそこは、その他の、黒に近い闇や影でさえ存在することを許さず、一片でも異物があればたちまち呑み込み、塗りつぶしてしまう……そんな絶望感を訪れるものに抱かせるような場所。

もっとも、この空間に入ることができたものは今まで誰もいない、いや、いなかったのだが……

そんな所に、今一つの光が少女と共に浮かんでいる。その光は、光というにはあまりにも儚げで、今にも消えてしまいそうな幻のような存在感しか無い。

しかし、その光をまるで赤子でも抱きかかえるかのように優しく、しかし力強くしっかりと包み込んでいる少女の顔には焦燥や諦めの色は微塵もなく、ただ自分の為すべきことをしているという確信に満ちた穏やかながらも決然とした表情を顔に浮かべている。

もし彼女を見る者がいれば、まずはじめに浮かべる印象は敬虔なシスターか、もしくは聖母だろう。

「さすが、アウラだな……」

しかし、その空間において初めて彼女、アウラを見たものの彼女に対する定義はそのさらに上をいっていた。

中肉中背の男が白衣をなびかせ、時間や距離の概念すらあやふやなこの場所で、一歩一歩、歩くような速さでアウラに近づいていく。

「この空間で単独世界を存在させているのは神のみぞ振るえる奇蹟といったところか……まさに電脳世界に顕現せし女神……」

「……」

何の反応も見せず、彫刻のようにピクリとも動かないアウラの目の前まで辿り着いた白衣の男は、徐にポケットに手を入れ、何かを取り出した。

そしてそれが取り出された瞬間、空間が光で溢れかえった……

大型アップデート（前書き）

この小説は．ｈａｃｋ／／とソード・アート・オンラインのクロスオーバーファンフィクションです。時間軸的にはマザーロザリオの話しから半年くらいたった８月ごろです。ただし、年度は．ｈａｃｋ／／と話しを繋げるためにかなりずれています。

大型アップデート

―アインクラッド第２４層≪パナレーゼ≫―

パナレーゼは全体が広大な湖で覆われた、蒼一色の世界。リアルと同じ夏のキツイ日差しが湖面に反射して眩しく煌めいている。湖の中ほどには人口の島を中心にいくつもの小島を橋でつないで成り立っているこの層の主街区があり、そしてその群島の北の端にある巨大な大樹がシンボルの小島に、キリトとアスナ、そしてユイは来ていた。

「……それじゃ、また来るね」

猛暑を一瞬忘れさせてくれる涼しい風が湖から時折吹く中、アスナは黙祷を終え瞑っていた目を開き、最後にそう言って花束を大樹の前に建てられた小さい石碑の前に置いた。

その石碑には『至上の剣士、Ｙｕｕｋｉ、ここに眠る』と書かれている。

ユウキの死後、誰ともなしにお墓を建てないかという話が持ち上がった。彼女は最後をここで生き、ここで死んだから……

当時は掲示板などで賛否両論の嵐が飛び交ったが、彼女の残していったものが多くのプレイヤー達の心に残っていたらしく、結局小さいものがひっそりと建てられることになった。これを見ると、この世界がもう一つの現実であると改めて実感させてくれる。

「よし、じゃあ行こうか」

キリトがそう言うとアスナは無言で頷き、羽を展開して雲ひとつない真っ青な空へと飛び立った。

―第４９層都市・転送ゲート前―

「あっ、キリト、アスナにユイちゃん！お～い！」
ケット・シー特有の三角耳をピコピコさせながら、リズベットが元気よくこちらに手を振っている。
待ち合わせ場所であるゲート前にはすでにクライン以外のメンバーが集合していた。
「おはようございます。二人でどこか行ってたんですか？」
使い魔であるフェザーリドラのピナを肩に乗せたシリカが訪ねてきた。
「うん、ちょっとユウキのところにね」
「そっか、今お盆ですもんね……」
「久しぶり～、アスナちゃん！」
「あ、アリシャさん、それにサクヤさんとユージーンさんも。今日はよろしくお願いします」
続いてアスナは何やら話していた３人、シルフの領主サクヤと、ケット・シーの領主のアリシャ・ルー、そしてサラマンダーの将軍ユージーン（このメンツだと言葉を交えているだけで数々の策謀が渦巻いているように見える……）に挨拶した。
「こちらこそ、よろしくお願いしますね」
「いっしょにガンバロ～ね～！」
「うむ……」
そんな声を右から左に聞きながら、キリトはなんとなく賑やかな雑踏が溢れるゲート前の光景を眺めていた。
（やっぱり昔とは大違いだな……）
以前のＳＡＯ時代にも活気はあったものの、あの時はやはりみんなどこか切羽詰まった感じがしていた。それが今では明るく楽しげな雰囲気で場が満たされているような気がする。
（っと、こんなこと言ったら、またアスナにジジくさいってつっこ

まれそうだな……）
　そんなとりとめもないことをキリトが考えていると、街へと続く道からクラインが走ってくるのが見えた。
「おっ、やっと来たな……」
　クラインは腰の刀をガチャガチャ鳴らして、息を切らせながらゲート前に辿り着いた。
「ぜぇっ、はぁっ……いやぁ、すまん、またせた！」
「もう、遅いですよ、クラインさん！みなさんとっくの昔に集合してますよ！！」
　キリトの横でふわふわ浮いているナビピクシーのユイが、頬をふくらませてぷんぷんと擬音が聞こえそうな表情で言うと、クラインは申し訳なさそうに苦笑いを返した。
「わりぃわりぃ。長期休暇の前で仕事が立て込んじまって、夜勤が長引いちまってよぅ。さっき帰ってきたとこなんだ」
「まあそう怒るなよ、ユイ。いくらみんなが集まれる日を楽しみにしてたからって」
　そう、今日は数ヶ月ぶりの大型アップデートによる５０層台解放で、フェアリーダンスのメンバー全員が集まり他のギルドやソロの腕自慢達と共に５０層のボスを倒しに行くというギルドにっとて一大イベントの日なのである。最近はリアルが何かと忙しい日々が続き、こうやってメンバーのほぼ全員が集まれたのはギルドを結成した半年前から数えるほどしかなかった。
「あれ、スリーピングナイツのやつらはやっぱこれねぇのか？それとシノンの奴とクリスハイトの野郎はやっぱこれねえのか？」
　クラインが辺りを見渡しながら口にした疑問に、アスナが残念そうに答えた。
「クリスハイトはできれば来るって言ってたわ。シノンは午前中はバイトだけど、午後からはこれるって。スリーピングナイツのみんなも午前中は病院の検査とか用事があってダメだけど、午後からの方は大丈夫って言ってた」

ちなみに討伐メンバーが集まる本番は午後だが、久しぶりにフェアリーダンスのメンバー（ちなみにユージーン、サクヤ、アリシャ・ルーの各種族の領主や将軍という豪華ゲストメンバーは一応各勢力の代表ということで今回の偵察に参加している）みんなでボスの偵察がてら冒険しようということになり、こうして午前中から集まっている。

「まぁクラインも来たし、とりあえず時間もないことだから、サクッと行くか」

キリトがゲートの方に進むと、そろってぞろぞろと転送ゲートへとアクセスしていった。

そんなこんなで出発したキリト達フェアリーダンス（＋数名）は初めて通るまだマップが真っ白な迷宮区の攻略を開始した。アップデートされるのを待つ間にレベルも上がっているのに加えて、この日の為の準備も万端なので、手探りの状況だったが遭遇するモンスター共は軽くなぎ倒せており、今のところサクサク進めている。

「そういえばキリトよぉ、例の噂知ってるか？」

リザード系モンスターの群れを葬った後、木陰で小休憩を取っている時にクラインが唐突に訊ねた。

キリトは手頃な高さに剥き出ている幹に座って飲んでいた体を動かした後にピッタリのアスナ特製ドリンクからいったん口を離した。

「例の噂？ってこのアインクラッドを含めてＡＬＯには噂なんていくらでもあるし、どれのことかわかんないだろ」

呆れた感じで聞き返すと、クラインが当前と言わんばかりに答えた。

「今一番ホットな噂って言ったら、例の幽霊話しに決まってるだろ」

「あっ、それってもしかして白い女の子の幽霊の話し？」

ここで近くに座っていたリズベットが話しに入ってきた。

「確か、ダンジョンにフッと現れては消えるってやつでしょ？でもそれってよくあるただの画像の処理ミスって聞いたけど」
それ系の話しは確かにここではよく耳にする。
ネットの中で怪談話なんて思うかもしれないが、逆にネットの中だからこそ削除残しやバグで時々ありえないものがそこにいたりすることがある。もともと茅場の作った完璧なプログラムＳｅｅｄにゲーム製作者が後から付け加えたものがエラーを起こしたためというのがほとんどだ。
しかしそれらはすぐにカーディナルが自己修復してしまうので、めったにお目にかかれるものではなく、見れたら逆にラッキーでそういうスポットをまとめたサイトもいくつかあるほどだ。
「それがよ、今回オレが聞いたのは違うみたいなんだよ」
ここでクラインは少し真剣そうな表情になり、さらに話しを続けた。
「こりゃあオレのダチの知り合いが聞いたって話なんだけどよ……」
「って、またずいぶんと胡散臭そうな話しだな」
キリトがツッコムと、クラインが苦笑いした。
「まあんでだ、そいつが５人でパーティー組んで４７層の思い出の丘に、使い魔を復活させるプネウマの花を採りに行ったらしいんだけどよ……」
思い出の丘の話しが出たところで、シリカも水色のふわふわした羽毛に包まれたピナをギュッと抱きしめて話しを聞きだした。
「そいつらの平均レベルは６０以上はあったから、まあ普通に迷宮区を攻略できたんだよ。んで、さっそく花を採ろうと思ったら、いつもは白いはずのその花がなんと真っ赤な花の蕾だったってぇわけよ」
周りにいたリーファやレコンも集まってきて、クラインの話しを聞いているのに気付いたが、意外と興味深い話しだったのでキリトは注意を話しに戻した。
「後から調べたら、その花はリコリスっつう花だったらしいんだけ

どよ……まあそれはおいといて、とりあえず特殊イベントかと思って摘んでみようとしたら、なんといきなり花が大きくなって、蕾が開いて中から赤いドレスを着た女の子が現れたんだってよ！そんでそいつがそのパーティーのメンバー全員を見渡した後、首を横に振ってノイズがかった声で何か呟いた後消えちまったらしい。んで、その後そこには普通のプネウマの花だけが残っていたらしいぜ」

その場にいた全員が、このオチに首を傾げた。

「そんなイベント聞いたことないですね……ノイズがかってたってことはクエストのバグか、それとも、キリトさんから聞いたカーディナルの自動クエスト生成システムが働いてるか……？」

「えっ、また都市崩壊レベルの危機ですか……！？」

レコンの予想でエクスキャリバーイベントであわや大惨事になりかけたことを思い出したのか、シリカが不安げな表情を浮かべる。

「だけどよ、そしたらまたあの神の一族が絡んでくるってことか？」

「あんたはただあの女の人に会いたいだけでしょ。デレデレして顔が気持ち悪くなってるわよ」

「なっ、別にそんなんじゃねぇぜ！」

リズベッドの指摘にクラインが少し躍起になって反論しようとしたが、ここでユージーンの出発の号令がかかり、キリトたちは話しながら歩き出した。

その後、そうかからないうちにボスの部屋の前にたどり着いた。

いつものことだが、ボスの部屋付近はかなり精緻に作りこまれており、ナーヴギアより一段落ちるアミュスフィアにも関わらず（まあ最近はさすがに慣れてきたが……）かなりのクオリティを実現している。

「ここのボスはアップデートしたばかりだし、ＳＡＯ時代のデータが役にたたない以上はっきり言って未知数だ」

ボスの部屋へと続く巨大な門の前で装備の最終チェックと補助スペルをかけながらみんなと最後の確認をしていたキリトはニヤッと笑って続けた。
「まあ今回は午後の本番に向けての偵察のみのつもりだけど、もし勝てそうだったらそのまま倒しちゃってもいいかな」
キリトの強気の発言に全員が「「おー！」」とやる気満々で答えた。みんなの返事を合図にキリトは一歩踏み出し、それに反応して重たそうな扉がぎしぎしと開いていく。
そしてその瞬間、異変が起こった。

ポーンッ……

何かを弾くような音が前触れなく鳴り響いたかと思ったその直後、物凄い雑音が耳をつんざいた。そして……

ビリ、ビリビリ、ブーーーン！

謎の音を契機に雑音とノイズの嵐に視界が包まれ、同時にもの凄い揺れがキリト達を襲う！
「おい、どうなってんだ、こりゃ！？」
「くらくらするー！」
「なにごとだ！？」
みんなの慌てた声が聞こえるが、キリトはキリトで隣にいたアスナの手をつかむことぐらいしかできない。
「キリトくん、これって！？」
「わ、わかんないけど、なんかやばそうだ、わわわわぁっ！？」
全部言いきる前に、今度はその場にあったものや風景からテクスチャがどんどん剥がれていき、ポリゴンや数字の羅列が剥き出しになっていく。それはあたかもこの世界が仮初のものであることを暴かれているような光景……

そんなことをその場にいた全員がシンクロでもしたかのように脳裏に浮かべているうちに、とうとう足元の地面だった場所が崩れ落ちて、あっという間にその下に現れた虚空に全員そろって落ちていった。

キリトは上も下もわからない闇に意識を呑まれそうになりながら、なんとかアスナの手だけは離さないよう必死に握りしめ……そして思考が途切れた。

大型アップデート（後書き）

冒頭のユウキの墓は今作オリジナルです。
・ｈａｃｋ／／Ｇ．ＵＣＥＬＬの碧を思い出したので、加えてみました。
あとＡＬＯではフィールドの敵やボスがＳＡＯ時代といくつか違った仕様になっているみたいなので（２７層で５０層のボスのはずの二頭四腕のモンスターがでてきてたりとか。まあＳＡＯと同じだったら元ＳＡＯプレイヤーが有利過ぎますもんね）ボスは未知数ということにしています。

とりあえず読んでみてくれた方、ありがとうございます。
感想、誤字脱字、設定がおかしい等気付かれたことがありましたら感想に書いて頂けるとありがたいです。

Welcome to 『The World』 ―01―

気を失って倒れ伏していたキリトが最初に感じたのは、頬に当たっているひんやりとした石畳の感触だった。
「いつつ……いったい何が起こったんだ？」
何とか起き上がり、まだくらくらしてはっきりしない意識を覚醒させるために頬を叩こうと手を顔に持ってこようとしたキリトだったが、その時やっと、いまだに手をつないだまま気絶しているアスナに気がついた。
「アスナ！おいっ、大丈夫か！？目を開けてくれ！！」
キリトが必死に揺すって呼びかけると、アスナが身じろぎをし、まぶたをゆっくりと開いた。
「んっ、んーーー……あれ、キリトくん？ここは……私たち、どうなったんだっけ？」
「よかった、ほんとによかった……」
涙目になりながらアスナの温かい手をぎゅっと握って無事を喜ぶキリト。
「いててて、いったい何だったんだ、ありゃあ？」
「うーーっ、まだ頭がクラクラする……」
「ここはどこなんだ……？」
アスナの無事が確認でき、ようやく余裕ができると、ちょうど周りでは他のみんなが起き上ってくるところだった。とりあえず全員そろって無事なようだ。
ほっと胸をなでおろすと同時に、キリトはすぐ思考を切り替えてまわりの状況を確認し始める。
ここはどうやら大きな湖か海に架かる橋の上らしい。いや、潮の香りがしないし、ほぼ一定の間隔で吹き付けてくる穏やかな風の匂いがパナレーゼと似ているからたぶん湖だろう。夕焼けか朝日かどちらかわからないが、遥か遠くの水平線から半分出ている太陽の光

が水面に反射して、幻想的な風景を作りあげている。橋はキリトたちが倒れていたちょっと先で不自然に終わっていたが、反対側を見ると何やら大きな建物が見える。
　そして一番重要なのが、周りを見る限り、ここはあの扉の向こう側のボス部屋ではない……どころか記憶を探っても見覚えのある風景ではないのでアインクラッドやＡＬＯの中ですらないようだ……と、キリトは結論付けた。
「エギル、ＡＬＯの責任者からなにか仕様の変更とか聞いてないか？」
「いや、俺は何も聞いてねえが……」
　言葉を濁すエギルを見ていると、その端で先ほどからメニューウィンドウを操作していたシリカとリズベットが顔を真っ青にしてがくがくと震えているのが目に入った。
「お、おいっ、どうしたんだ二人とも、大丈夫か？」
　声をかけられて二人がびくっと反応すると、リズがぎこちなくキリトの方に顔を向け恐る恐る尋ねた。
「ねっ、ねえ、キリト……ロ、ロログアウトできる？」
「……は？どういう……」
　その問いにはピナをギュッと抱きしめたシリカが答えた。
「その、あたしたちのメニューウィンドウこ、壊れちゃったみたいで、ログアウトボタンがないんですけど……」
　一瞬全員の体がぴきっと硬直した。だれもが二人が言ってることの意味がすぐにはわからなかった。否、理解するのを拒否しようとした。
　しかし次の瞬間、全員が一斉にメニューを開いて確認し始めた。
「うっ、嘘だろ、おい！？」
「そっ、そんなばかな……？」
「うそ、うそよっ！」
　キリトも左手を真横にさっと動かしメニューを開き確認してみたが、確かにそこには本来あるべきはずのログアウトのボタンがない

……
一瞬４年前のあの時感じた絶望感がキリトの頭を占めそうになるが、なんとか自制し他に手掛かりがないか探してみる。
するとある項目に気がついた……と同時にシンカーが叫んだ。
「み、みなさんっ、クエストログを見てください！何か更新されています！」
全員が慌ててクエストログに指を滑らせ、一斉にそれを読み始める。
そこには短く、『グリーマ・レーヴ大聖堂へ向かえ』とだけ書かれていた。
「グリーマ・レーヴ大聖堂って……？」
「ほら、あの建物じゃないかな？」
困惑ぎみに呟くシリカに、アリシャが答えて橋の一方を指差す。
そこには先ほど目に入った大きな建物が見えた。

とりあえず今は前に進むしかないと、全員で橋の端にある建物の前までやって来た。
「それにしても、すごいですね……」
今だ不安をぬぐい切れていない状況ながらも、サクヤが感嘆の声をあげた。それにはその場にいた全員が同感だったらしく、巨大な聖堂の前に立ち止まり、その荘厳さに動けずにいた。
作りは尖塔群を伴った石造建築で派手さは無くシンプルだが、何千年も前からそこに建っていくつもの歴史を見てきた重厚さが醸し出され、見るものを圧倒する。
「よし、開けるぞ」
一時感動に浸った後、ユージーンが前に出て古そうな大きな扉を開こうとしたが、寸前でキリトが手で制した。
「待て、中から話し声が聞こえる」

そう言ってキリトは扉に静かに近づき耳を付けた。それにならってみんなゆっくりと近づき、耳をすませると……

かつんっ、かつんっ、こつん……かつんっ、かつんっ、こつん……

聖堂内に大理石を踏む足音が響いている。先ほどから、少女がその場を忙しなく行ったり来たりしている。その落ち着きのない行動をその少女の目の前にいる女性が諌めた。

「まったく、ちょっとは落ち着きなさいな」

腰まである少しウェーブがかった見事なプラチナブロンドの髪を指ですきながら、その女性は呆れた表情で少女をたしなめた。

「……って、こんな風に焦ってるのも、全て母さんのせいじゃないですか！？だいたい母さんは無責任なんです。なんであんなことをしたんですか！」

こちらも腰まであるシルバーブロンドの髪を聖堂のステンドグラスから差し込んだ光を受けて煌めかせながら、新雪ののように白い肌をした顔を今は怒りで赤く染めながら言い返した。

「まっ、まあ、なんて言い方するの！だいたい本来あれらはあなたが管理運用するべきものでしょう？それなのに埃をかぶってほったらかしになってたから、私が有効活用しようと思って……」

「それで間違えてばらまいてしまったわけですか……まったく、なんてことかしら！

だいたい母さんは私が生まれる前から行き当たりばったりの行動で、みんながどれだけ迷惑を被っていることか……」

少女が大きく溜息をつきながら肩を落とした。

「あっ、あの時はああするしかないと思って……もう、昔のことを蒸し返すなんて！この粘着質な性格はきっと父親のハロルドに似たのね。母さん悲しいわ。こんな子に育てた覚えはないのに……」

「と、父さんは粘着質なんかじゃありません！た、ただ……そう、

一途だっただけです！
それに、母さんに育ててもらった覚えもありません！だいたい母さんがしたことといったら、私を生まれてこれないように縛ったり、やっと不完全ながらも生まれることができたと思ったら、今度は八相をけしかけて私の体をばらばらにしたりしただけじゃないですか！！」
「獅子は子を千尋の谷に突き落とすというじゃない。私はあなたを強く賢い子にするためにあえて酷いことをしたんですよ……たぶん？」
自分でもその言い訳にあまり自信が持てないような疑問形で答えると、少女はもうなんと突っ込んでいいのかわからないという表情をした。
「それで何人ものプレイヤーを意識不明にした上にネットワーククライシスまで起こしたんですか……いったいどんな教育方針ですか！？」
母親はさらに何か反論しようとしたが、ふと言いかけてやめ、扉の方を見た。釣られて少女も扉の方を見て首を少し傾げた後、扉へと歩み寄って行った……

話しが途切れたと同時に、横からつんつんと突かれてキリトがふり向くと、困惑しきった表情のアスナが小声で話しかけてきた。
「いったい何の話なんだろう？」
「さあ、さっぱりだ。とりあえずなんか言い争ってるみたいだけど……」
肩をすくめて、さらに何か聞こえないかまた耳をすませようとすると……
「そんなに気になるのならそんなところでこそこそ聞いていないで、入って事情を聞いてみてはどうかね？これはイベントなのだから、

接触しない限り進行しはないが？」
「えっ！？」
突然後ろの方から声をかけられ振り返ると、そこにはいるはずがない、しかし見覚えのある姿があった。
線の細い鋭角な顔立ち、秀でた額の上に鉄灰色の髪に、金属的な瞳。赤いサーコートを着て、左手には剣を収めてある巨大な純白の十字の盾を装備している。
そう、その人物は……
「ヒッ、ヒースクリフッ！？」
「えええっ！？って、どわぁーーー！？」
と、ここでキリトのびっくりした声にさらにまわりがびっくりして、さらにさらになぜか急に開いた扉に体を預けていた全員が、将棋倒しになって扉の内側に雪崩れ込んでしまった。
「いててててっ……あれ？なんだ、真っ暗……？」
体を後ろにいたみんなに踏みつぶされ、身動きをほとんどとることのできないキリトは不思議そうに呟いた。
すると隣にいたはずのアスナの
「キ、キリトくん、早くそこから出て！！」
という慌てた声が後ろからしてきた。そして暗い中そこに二本の白い足らしきものが震えてるのを見て、ああ、もしかしてここって……なんて無駄に早い思考を巡らせていると……
「きぃ、きゃーーーー！？」
という悲鳴とともに、キリトは顔面に見事な蹴りを喰らい、その中から蹴り飛ばされた。
「ひでぶっ！？」
変な声をあげてしまったキリトは、鼻にクリーンヒットした現実だったら鼻血だらだら間違いなしな威力の蹴りの痛みをこらえながら、なんとか背中に乗っかっている誰かの体を跳ね除け前を見た。
そこには胸に無限を表す∞の形をしたゴールドのアクセサリを付けた白いシンプルなドレスを着ている女の子が尻もちをつきながら

顔を真っ赤にしていた。そしてその後ろには先ほどの会話からするとその子の母親であろう女性が立っている。こちらは女の子と対称的で黒を基調にした喪服ともとれるドレスを着たスラリとしている美人だ。

そんなふうに悠長にキリトが観察していると、女の子が普段はかわいいだろう顔を真っ赤にしながら、怒りで震える体をがばっと立ち上がらせた。

（やばっ、謝んないと……）

しかしキリトが謝罪の言葉を言おうとした瞬間、先ほどノイズが来る前に聞いたポーンッ……、という音がまた響いたかと思うと、三つの蒼い玉がふわふわと目の前に漂ってきた。

それらが蒼い炎に包まれ膨れ上がると、中に胎児のように体を丸めた人影が浮かび上がる。そして人影を包んでいる蒼炎が卵の殻が破れるかのように弾け飛び、中にいた奴らはまるで重力などないかのようにふわっと浮かび上がり、そして静かに着地した。

向かって右側に現れたのは全身を碧色にペイントした大柄で蛮族風な衣装を着ている茶髪をオールバックにしている白目の戦士。左側に出てきたのは継ぎ接ぎだらけの黒ずんだ銀と青を基調にした騎士鎧を着て、背中には翼らしきものが生えている銀髪を伸ばし放題の騎士。そして最後にその真ん中に立ったのは毒々しい蛍光オレンジの襤褸服に身を包み、水色の髪にギロリとした三白眼の華奢な体格の少年だった。

３人に共通しているのはその眼や表情には生気がなく体もぼろぼろのつぎはぎだらけでところどころグラフィックが欠けていて、まるで壊れた人形か亡霊のようなところだ。

しかし彼らが放っている異様で圧倒的な存在感はＮＰＣ（ノンプレイヤーキャラクター）のものとは到底思えない。

そして全員がすくっと立ち上がったり、徐に虚空からエフェクトを迸らせながら武器を取り出した。両側の二人の男は禍々しい意匠をした片手剣。真ん中の少年は歪んだ鉈のような双剣を逆手に構え

て両手をクロスさせたかと思うと、刃が鈍い金属音をともなって分かれ、三つ又の爪のような刃を形成した。
「ア＃％様＆」
「何＝」
「しや＜＄！」
そしてそんな思考と分析も、次の瞬間意味不明な叫び声と共に襲いかかってきたそいつらのために中断させられた。

Welcome to 『The World』 ―02―

襲いかかられたと同時に、キリトと隣にいたアスナとユージーンはすぐさま立ち上がり、エフェクトを迸らせながら目にもとまらぬ速さで抜刀し応戦した。長年の経験から、相手の攻撃を上手くパリィできればすでに後ろで構えているであろうクライン達が追撃してくれるという確信があった。

そしてキリト達は完璧に相手の攻撃に合わせることができ、なおかつ後ろでは予想通りクライン達が起き上って臨戦態勢に入っていた。が……

バキィンッ！

「なっ！？」

しかしキリト達の攻撃は、『Ｉｍｍｏｒｔａｌ　Ｏｂｊｅｃｔ（不死属性）』という無慈悲なメッセージと共に、いとも簡単に弾き返されてしまった。

「こいつら、いったい！？」

キリト達に驚く暇も与えず、体勢を全く崩していない不死身の敵は休むことなく追撃してくる。

「まっ、まずい……みんな逃げろ！ここは俺達がなんとかする！！」

キリトは朱色の服を着た双剣士の強烈な一撃を急いで取り出したもう一振りの剣、エクスキャリバーでなんとかまたパリィし、弾かれた勢いで後方に体を流して、すかさず後ろで構えていたクラインとスイッチしながら叫んだ。

「で、でもっ、キリトさん達は？」

おろおろしながら問いかけるサーシャに対し、アスナが

「早く！みんなを守りながら戦うのはちょっと厳しいから！」

と言いながらリーファ、サクヤ、アリシャと組んで翼の生えた騎士を囲み、多面的に攻めて一人一人に対する注意を散漫にすることにより、アスナの閃光とバーサークヒーラーの名が霞むほどの速さ

と苛烈さで繰り出されている敵の剣戟をなんとか防いでいる。
「とりあえず橋の向こうまで戻れ！それまではなんとか持ちこたえてやる！！」
「まあその後のことはそんとき生きてたら考えればいいだろうよっ！」
その向こうでは蛮族風の戦士が聖堂内にあった長椅子をもぎとり、もの凄い勢いで振り回している。その一撃一撃が文字通り必殺の威力がある怒涛の攻勢を必死に凌いでいるユージーンとエギルは早くも息を切らしていた。
そして、状況はさらに絶望的になる……
「なっ！？魔法が、使えない……？」
先ほどから呪文を詠唱していたユリエールが唱え終わっても何も起こらずに呆然としている。
「ついでに、ソードスキルも使えないみたいっ、だ、よ！」
ユリエールの魔法より詠唱が短い補助魔法が使えなかったリズベットが、アスナ達に加勢すべくスキルのモーションをとりながら銀髪の剣士に躍りかかったが、いつもはシステムアシストが働き光に包まれるはずの武器が何の反応も示さず、唯の槌の一撃はいとも簡単に弾き返され、リズベットはたたらを踏みながら叫んだ。
「ピナもダメみたいです！？」
今まで数多くの場面で助けてくれたシリカの使い魔のピナも、今はもどかしげに宙を舞っているだけだ。
「くっ、ここは撤退すべきですかね……でも、例えさっきの場所に戻ってもログアウトできなければ意味がないし……！」
シンカーは見た目は冷静さを保っているものの、内心混乱しているのか一人問答を繰り広げている。
そしてみんなが必死に抗いながらも敗北という文字が心を浸蝕し始めた時、一人動けずに佇んでいたサーシャは白い服の女の子をじっと見ていた。
（あの子はこんなどうしようもない絶望的な状況を作っている張本

人なのに、なんだか違和感がある。そうだ、表情が怒りとか憎しみだけじゃなくて……？）
　そして後ろにいる母親らしき人が「はぁ……」とため息をつきながらあきれた表情で自分の娘を見てるのが目に入り、サーシャは単純だがもっとも効果的だと思われる方法を閃いた。
「キリトさん！！」
「なっ、なんですか、サーシャさん！？」
　その真剣な声に、クラインと5度目のスイッチをして後方に下がりながらキリトは何とか答えた。
「早くその子に謝ってください！」
「……は？」
「だから、たぶんその子は死ぬほど恥ずかしかったからこんなことをしてると思うんです！なので、早く謝ってください！まだ謝ってないでしょう！？」
「そっ、そういえば……」
（確かに謝ろうとした直後に攻撃されて、そのあとはなし崩し的に戦闘になったから……よしっ、それなら一か八か！）
「ごめん、ほんっとうにごめん！悪気はなかったんだ。何でもするから許してくれ！！」
　と、戦闘中にもかかわらずキリトはいきなりその場でジャンピング土下座をくりだした！
「おっ、おい、キリト！？」
　必死に双剣士の連撃を食い止めていたクラインがキリトの突飛な行動に驚いて後ろを振り返った瞬間、その致命的な隙を突いて双剣士はクラインを鍔迫り合いをしていた刀ごと吹っ飛ばした。
「ぐへっ！？」
　クラインは軽く数メートルの距離を飛び、壁に叩きつけられ嫌な音をたて、そのままその場へ崩れ落ち動かなくなった。
　そして漆黒の双剣が、今度は土下座中のキリトの無防備な背中に突き刺さろうとした、その瞬間！

「はぁ……、もういいでしょう？」
溜息と共に静かで落ち着いた声が聖堂内に響いたと思うと、キリトと双剣士の間に一人の少年が青いリングの中から姿を現し、その強力な一撃を同じく双剣で軽々と食い止めていた。
無表情だったオレンジ色の双剣士の少年の顔に微妙に苛立ちの表情が浮かび、さらに攻撃を繰り出したが、その追撃を新たに現れた紫がかった黒髪の少年は片手で楽々と防ぎながら、土下座を続けているキリトを見下ろして呆れたような表情を作った。
「まったく、君もバカだね。戦ってる最中に土下座をする奴なんて始めてみたよ……」
「いや、まあ俺もこんなことしたのは初めてなんだけど……」
キリトはまだ土下座の姿勢を崩さず苦笑しながら答える。
「アウラ、もういいだろう？というか、スカートの中に顔突っ込まれたくらいでやりすぎ……」
「にっ、兄さんにはわからないんです、この屈辱が！！」
「いや、そりゃまあ僕は男だからわからないけど……でもやっぱりそれだけのために三葬騎士を呼び出すのはどうかと思うよ」
「そっ、それは……」
口ごもる少女に対し、今まで苦笑いを浮かべながら傍観していた女性が、
「まあそれに何でもするって言っていることだし、丁度いいじゃない」
と、援護した。
「そっ、それもそうですね……」
やっと納得したのか少女はうなずいて、絶賛土下座中のキリトに向かって落ち着きはらった声で言った。
「それでは、私がする頼みごとをしてくれたら許します」
「本当か！？ありがとう！」
ここでやっとキリトは土下座の姿勢を崩した。

「ではまず初めに自己紹介を。私はアウラ、この世界で女神をやってます。そしてこちらが私の母のモルガナ、それと先ほどそちらの方を助けたのが兄のクビアです」
　自己紹介を始めた白い服の少女は、さっきの慌てぶりからは考えられないほど静かで落ち着いた声で語り始めた。しかし自分で女神と自称するとは……確かに綺麗な外見だけど、あんまり神々しいものは感じないような……？
　そんな考えを全く顔に出さず、キリトも彼女の自己紹介に答えた。
「俺はキリト。俺たちはフェアリーダンスっていうギルドのメンバー＋ゲストで、アインクラッドの５０層を攻略中にここへ飛ばされてきたんだ」
「アインクラッド？それは何ですか？」
　アウラの半ば予想していた答えに、キリトは内心やはりと思いながら話しを続けた。
「えっ、それじゃあここはアインクラッドじゃないのか？」
「はい、ここはＴｈｅ　ＷｏｒｌｄというＭＭＯＲＰＧの中です。ちなみにこのエリアは隠されし禁断の聖域といいます。ここはモンスターも出ない隠し観光スポット的なエリアなので、普段プレイヤーは入ってこないんですが……」
「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ？」
　キリトはみんなの方を振り返るが、誰も知っているものはいないようだ。
　いや、こいつなら絶対何か知っているだろう男が一番後ろに佇んでいるのを見つけた。
「ちょっと状況を整理したいから、みんなで話し合いたいんだけど、いいかな？」
「わかりました。私たちも何をどう頼むか決めておきます」

「さぁ、この状況を説明してもらおうか、ヒースクリフ。いや、茅場晶彦」
聖堂を出てからすぐに、キリトはあの双剣士にやられて気絶しているクラインを担いでいたのを放り出し、鞘に収まっている剣をいつでも抜けるように柄に手をかけながら、今まで後ろで何も言わず傍観していたヒースクリフに問いかけた。みんなもいつでも動けるように武器をとっている。
「まず最初に、あんたがなぜここにいるのかと、今俺たちがおかれてる状況はいったいなんなのかをな」
茅場は臨戦態勢にあるキリトたちの緊張もどこ吹く風というように、あいかわらずの無表情でくだらない質問だなと言わんばかりに答えた。
「それはもう私が姿を現した時点でおおよその見当はついているんだろう、キリト君？私が自分にしたことは彼女から聞いているのだろう？」
その通りだった。キリトは須郷との戦いで茅場の助けを借りたことで彼がネット上に未だに存在する可能性を知り、神代さんという茅場の協力者から、茅場が自分の脳をスキャニングすることで死と引き換えに自分の分身をネット上に作り上げようとしていたことを聞くことで、彼がネット上で生きているのを確信していた。
「まああんたのことだから、俺たちがアインクラッドを攻略していたら何かしてくるとは思った。けどこの状況がいったい何なのかはさっぱりだ」
そう言ってキリトが肩をすくめると、茅場はキリトをじっと見た後少し悩む様子をみせたが、また直ぐにいつもの無機質な表情に戻った。
「ふむ、まああまり勿体ぶってもしょうがない。今君たちがいるこの世界は、２１世紀初頭に開始されたＴｈｅ　ＷｏｒｌｄというＭ

ＭＯＲＰＧを元にしている世界だ」
「さっきも聞いたけど、そのＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄっていうのは？」
「Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄは当時プレイヤー数千万人以上という世界最大規模のネットゲームだった。内容はファンタジーもので、ＡＬＯやＳＡＯとも似た点は多いな」
「で、なんでんな昔のゲームの世界に俺たちがいんだよ？」
　ここでどうやら意識を回復させたらしいクラインがふらふらしながら起き上り、その場に胡坐をかいてポーションを飲みながら話しに割り込んできた。
「そうですよ！だいたいログアウトできないっていうのもいったいなんなんですか？まさかまたデスゲームとかじゃないですよね……」
　不安そうな顔をしながら心配そうにシリカも問いただす。
「まあまちたまえ。まず最初に私が君たちをこの世界に招待した理由は今のところは言えない。それはプレイしていればおのずとわかるだろう。それとログアウトのことだが、わたしはこのイベントをノンストップでクリアしてもらいたいからこのような仕様にしたのだ。最後に、先ほどから心配しているデスペナルティはこのゲームに限ってはない」
　このゲームがデスゲームでないことに、全員がとりあえずほっと溜息をつく。
　しかしここで、今まで腕を組んで黙って話しを聞いていたユージーンが口をはさんだ。
「しかし一度もログアウトしないでプレイするとしたらクエストの内容にもよるがかなりの時間が必要になってくるはずだ。ずっとログインしっぱなしというのは非現実的だと思うが？
だいたいまたこのような事件が公になったら、せっかく以前起きたＶＲＭＭＯを利用した一連の凶悪事件による悪いイメージを払拭でき、さらに医療器具やその他多方面でも世間から注目を浴び、また軌道に乗りかけているフルダイブシステムの発展の邪魔をすることになる。それは貴様も本意じゃないだろ？」

ユージーンの問いに対し「そうだそうだ！」という声が周りから上がってくる。
すると茅場はニヤッと笑って、不敵そうに答えた。
「なるほど、確かに一里ある。しかしもし、プレイ時間が現実の時間で1時間くらいしかかからなかったとしたらどうだね？」
「なに？」
眉をひそめたユージーンに対して茅場は軽いノリで答えた。
「このシステムは私がまだ生きていたころには完成していなかったのだが、ネットの中に身を投じることによりなんとか実用できるレベルまでにこぎつけたのだよ」
「システム？」
リズベットがオウム返しに訊ねた。
「そう、今はまだ名前もないが、簡単に言うとこのシステムはネット上での過ごす時間を現実の時間の数千倍にすることができるのだよ。まだ試作段階である程度の時間しか延ばせないが、完成すれば人類は永遠に近い時を手にできるかもしれないな。まあ今はそんなことはどうでもいいんだがね……ん、どうかしたかね？」
「「……」」
全員が茅場の説明に対する驚きで、開いた口がふさがらなかった。
そんな凄いシステムを作っていたなんて、天才の名は伊達じゃない……
キリトは昔から憧れていた人のさらなる発明に、嬉しいようなやるせないような微妙な心境になった。
「まあこれで君たちの懸念は晴れただろう？どうだろうか、このイベントをやってみる気はないかね？」
「というより、やらないと帰れないんですよね？」
アスナが溜息をつきながら諦めたように、かつて彼女が所属していたギルドの団長だった男に訊ねた。
「いや、とりあえず期限をこちらの時間で1ヶ月に設定してあるから、待っていればいずれ強制的にログアウトされる。まあその場合、

二度とこのイベントはできないがね」
ここでキリトは肩をがくっと落としてため息交じりに言った。
「つまり、あんたは俺たちに新しいシステムのモニターをしてもらうためにこんなことをしたってことか？」
「今のところはそういう考えでもいいだろう」
とまた無表情に戻って茅場は俺の問いに答えた。
そして最後に、
「まああまり難しく考えず、楽しんでくれたまえ。それとこれから君たちはこのゲームに一時的にコンバートする形になる。容姿は変わらないが、ジョブ、スキル、装備とアイテムは一部を除きＴｈｅ Ｗｏｒｌｄ仕様になる。レベル、操作性はＡＬＯと同じだが、それ以外はマニュアルとチュートリアルで確認しておいてくれたまえ。それでは諸君、最後にこの言葉を君たちに贈ろう。Ｗｅｌｃｏｍｅ ｔｏ Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ」
「あっ、おいちょっと！まだ話は……」
キリトが慌てて茅場を止めようと手を伸ばすが、すでに遅く茅場はいくつもの青いリングに包まれて消えてしまった。
少しの間静寂が続いたのち、リーファが最初に口を開いた。
「これってつまり、ただのイベントってこと？」
「ただの、じゃなくてスペシャルなイベントだろうが……まあどうやら危険はないようだし、今度は店を長期間空けなくて済みそうだぜ」
今まで口をはさまず黙って聞いていたエギルがやれやれと溜息まじりの声で言った。
「それに彼の話が全部信じられるわけではありませんが、もし本当ならすごいことですよ、これは！」
続けてシンカーが興奮した様子でまくしたてた。
「何にせよ、とりあえず彼女たちの話を聞いてみるのはどうでしょうか？先ほどからお待ちみたいですし」
サクヤが扉の方を指さすと、扉の隙間から覗いていた三つの目が

慌てて引っ込んで行くのが見えた。
「まあそうだな……よし！とりあえず話しを聞こうぜ」
ポーションで完全回復したクラインが声をあげ立ち上がり、キリト達は扉に向かった。

「それで、そちらの話しはまとまりましたか？」
「ああ、とりあえずあんたたちの頼みごとがなんだか教えてくれ」
キリトが答えると、白い服の少女（確かアウラという名前だ）が語り始めた。
「そもそもの始まりは私の愚かで考えなしな母さんが……」
「こら、母親のことを愚かとか考えなしとか言うんじゃありません！」
モルガナがぷんぷんと怒りながら我が子をたしなめると、
「……そもそもことの始まりは、アホでマヌケな駄目母さんがしでかしたことにより始まりました」
はぁ……、とモルガナがため息をつく横でクビアがクククと笑いをこらえてるのを無視して、アウラは話しを続けた。
「その前に、この世界の歴史に付いて少し語りますね。
この世界、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄには特殊な力を持つプレイヤーが存在していました。そのプレイヤーたちは、ある時は世界が生み出した歪みと戦い、またあるときは世界を歪めようとした者たちから世界とそこにいる者達を守りました。そして、そのプレイヤーたちのＰＣボディは、現実の彼らがプレーしなくなった後人格を持ち、ＡＩとしてＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄに存在することになります。
またある時、今までにない脅威が訪れましたが、それも一人の少年が彼らと力を合わせＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄと現実世界、両方とも見事守り抜き、その後も数々の苦難がこの世界を襲いましたが、それらを乗り越えやっとこの世界に平穏が訪れたのです」

なんだかよくわからないが、そういうイベントがあったのか？とキリトが思っている中、さらにアウラは語り続けた。
「しかし、過ぎた力はまた災いを呼ぶ。そう思い私はみなの力を回収し、いざという時のために保管しておくことにしたのです。しかし、それをあろうことか母さんがばら撒いてしまったんです！」
アウラが言い切りながら『犯人は、お前だ！』的なノリで母親をビシッと指差すと、モルガナは少しいじけたように言い訳をしはじめた。
「だってぇ～、こんな素晴らしい力をほったらかしにしとくなんてもったいないじゃなぁい。それにわざとじゃないのよぉ。それなのにこの子はねちねちと、まったくぅ……」
妙にくねくねした言い方をして言い訳する母親に対して、娘であるアウラはブチッ！という音が聞こえそうな表情をして畳み掛けた。
「私だって母さんにこんなこと言いたくありません！でも、いつもいつもいつもこんな調子じゃ、こうなっちゃうのは仕方ないじゃない！」
「いや、あの、できれば親子仲良くした方が……」
怒りでだんだん丁寧な言葉使いから素になってきて、剣呑な雰囲気を作り出し始めたアウラを何とかしようとサーシャが恐る恐る言うと、傍観していたクビアが助け船を出してくれた。
「そうだよ。母さんとアウラが言い合ってると日が暮れちゃうし、そろそろ本題に入ったら？」
「そ、そうですね。私としたことが、すいません……」
ちょっとへこむアウラをしり目に、となりでモルガナがそうよそうよというように頷いていたが、全員スルーした。
「それであなたたちにお願いというのは、母さんがばらまいてしまった力を回収してほしいんです」
（まあ話しの流れからそういうことになるだろうと思っていたけど……）
「でも俺たちだけっていうのはちょっと。まだこの世界のこともよ

く知らないしな……」
キリトの不安に対し、アウラは予想してたと言わんばかりに笑みを浮かべた。
「それは大丈夫です。あなたたちには騎士団に協力してもらいます」
「騎士団？」
「はい。薄明の騎士団という名前で、件の力の所有者だった者達とその仲間で構成されたギルドです。彼らはこの世界のことは熟知していますから、十分力になるでしょう。すでに彼らにも回収の依頼をしてますから、あなたたちは彼らをサポートしてくれればいいです」
騎士団か……とりあえずさっきの3人みたいに話しが通じなさそうな奴らじゃなければいいんだけどな……、なんて思ってるのをおくびにも出さずにキリトは答えた。
「それならなんとかなりそうだな」
「ではみなさん、準備はよろしいですか？」
「へ？」
「外に出てください。丁度迎えが来ました」
そう言われてアウラに促されるままに聖堂の外の橋の上に出てみると……
「なんだこりゃーーっ！？」
「おっきいー！」
「丸焼きにしたら食べ応えがありそうだな……」
そこには巨大なクジラらしきものが、空から橋のほうへと降りて来ていた。
「これがデータ潜航艦グランホエール、騎士団の母艦です」
アウラが少し誇らしげそうに胸を張って言った。

Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　『Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ』　－０２－（後書き）

モルガナはＳＩＧＮのＯＰで踊ってる人がそうらしいので、外見の参考にしました。

データ潜航艦グランホエール－０１－

「さよ¥な＋～」
「たっ（ゃ@；」
「ま：＊お／！」
グランホエールのタラップを上がっていく途中、あの三人の強敵が橋の上でハンカチを振りながら見送りをしてくれているのが見えた。彼らはとある事情で不完全に作られたらしく、あのようなツギハギだらけの格好をしてる上にＡＩにも不備があり、今はいろいろ不足しているデータを目下勉強中だそうだ。
（だけど、あのホラー映画にでも出てそうな姿でハンカチを振るって、いったいどんな教育方針をとってるんだ？）
そんなどうでもいいことを考えながらも、キリトは先ほどアウラ達と最後に交わした会話を頭の中で反芻していた。

「私と兄さん、それと母さんで、引き続き力がどこにどのような形であり、どういう影響を与えているのかを調べます。まとまり次第随時グランホエールのキャプテンにデータを送りますんで、とりあえず船で待機していてください。」
そう言い終わるとすぐに踵を返してすたすた足早に大聖堂の中へと戻ろうとしたが、何か思いついたのか立ち止まって、また振り返った。
「それとこれは忠告ですが、グランホエールにいる騎士団とクルーは……まあ基本いい人たちなんですが、同時にかなり変わってる人もいるので気をつけてください」
それだけ付け加えると、アウラはさっさと中に戻ってしまった。
そしてアウラの隣にいたクビアもその場を離れる前にキリト達に

声をかけてきた。
「すまないね、あれでも精一杯取り繕ってるつもりなんだよ。とりあえず調べるのがひと段落ついたら僕も手伝いに行くから、それまではグランホエールのみんなに色々と教えてもらっとくといいよ」
そう言うとクビアはばいばいっと手を振って同じく聖堂の中に消えていった。
そしてモルガナはというと、早くもキリト達に対する興味が失せたのか一言だけ、
「それじゃ、がんばってね〜」
と言って中に入ってしまった。
（いや、あんた（あなた）がこの厄介事を引き起こした張本人なんじゃ……）と、その場にいた全員の心の中に同じツッコミの文句が浮かんだが、まあ言っても無駄だろうとあきらめた。
（さて、鬼が出るか蛇が出るか……）
頭の中の思考を最後にそう締めくくったキリトはタラップを昇り切り、自動で開いた扉の中に躊躇わず入って行った。

通路を少し歩くと、大きな空間に出た。そこはメインホールらしく、中央には大型スクリーンとその近くに何十人も集まってミーティングできるくらいのスペースと壇がある。また、たくさんの扉や通路、エスカレーターやエレベーターがあり、まさにこの船の中心らしい。
「あー忙しーブヒ、忙しーブヒッ！」
そしてそこには、鬼や蛇の代わりに小ブタ（？）らしきものが何匹か二本足で走り回っているという奇妙な光景が広がっていた。
「ブッ、ブタ！？なんでブタが二本足で走ってんだ……？」
キリトが入口の前で立ちつくしていると、次に入ってきたクラインが一瞬呆然とした後呟いた。

そしてその瞬間！
「ブタって言うなブヒーッ！！」
という声とともに、横から何か黒い物体がクラインの頭にクリーンヒットした。
「うぎゃあぁーーー！？」
テンプレな叫び声とともにクラインは吹っ飛び、近くの開いていた扉の中に頭から突っ込んでいった。がしゃーーーんという何かが派手に崩れ落ちる音と共にクラインの呻き声が微かに聞こえてくる。
（ああ、あれじゃ受け身とれないだろうなぁ。ていうかクライン、今日はよく飛ぶな……）
そんなことをキリトが考えていると、さっきの黒い物体改め黒い服を着たブタらしきものが空中でくるりと一回転して見事に着地し、その場で毒づき始めた。
「まったく、おれ達のことをブタ呼ばわりするなんて失礼な奴ブヒ！おれ達はれっきとしたグランディだブヒ！！ん？そういえばお前たち、誰ブヒ？どうやって入ってきたんだブヒ？」
ここでやっとキリト達の存在に疑問を持ったのか、首をかわいくかしげながら訊ねてきた。
「そうかブヒ、お前たちがキャプテンがアウラ様がよこしたと言っていた新しい奴隷かブヒ……いいブヒか？これからお前たちには馬車馬のように働いてもらうブヒ。怠けるんじゃないブヒよ……ってだからべたべた触るなブヒ！」
デス★ランディ（クラインに飛び蹴りを喰らわせたグランディ）は集まってきた他のランディ達と共に女性陣にもみくちゃにされながら叫んだ。アスナ達はいたくグランディ達を気に入ったらしく、キリトが今までの経緯を説明してる最中ずっとグランディ達と戯れていた……というか一方的にいじっていた。

「わぁ、かわいいw」
「ふかふかしてる♪」
「これは何とも言えない触りごこちですね……」
サーシャ、シリカとサクヤはデス★ランディがもがきながら叫んでも、全く離そうとしない。
「あ、あんまり触られると困るブヒ。これでも一様俺は男ブヒ～」
「てれてるてれてるw」
「肉球プニプニしてるぅ」
その隣では学生服にゴーグルという妙な組み合わせの装備をしているグランディがアスナとリーファに触われて微妙に恥ずかしそうにもじもじしている。
「こっ、怖いブヒー。助けてブヒー！」
「よいではないかぁ、よいではないか～♪」
その向こうでは気の弱そうなグランディがアリシャにほっぺをひっぱられたりして滅茶苦茶にもてあそばれている。
「よくきたな、おまえたち。ブブ漬を食っていくがいいブヒ」
「ブブ漬って？」
「ようするに帰れってことですよ。ほら、リズ、そっちに行きましたよ！」
その後ろでは丸眼鏡をかけたいかにもインテリですみたいなグランディが、リズベットとユリエールを素早くかわしてる。
（というかユリエールさん、いつもはクールな感じなのに、今は目が本気でなんか怖いような……）
この状態がかれこれ１０分は続いている。これじゃ埒が明かないし、そろそろ止めてやるかとキリトが声をかけようとしたら……
「やめろブヒ！俺の仲間に手を出すなブヒ！！」
いつのまに現れたのか、新たなグランディがスクリーンの前の壇上で仁王立ちしている。そしてそのグランディはなんとキリトがＳＡＯ時代によく着ていたのに似ている黒を基調にした服を着ている。さらに両手に二振りの剣を持ち、本物よりかなり小さいがそれらは

まぎれもなくキリトがＳＡＯ時代に愛用し、最後まで共に戦い抜いたエリシュデータとダークリパルサーだった。
「せ、船長！遅いブヒよぉ」
「キャプテン！？助かったブヒィ～」
「なんとかしてブヒ～；；」
「ふ、やっとお出ましかブヒ……というか早くこの状況を何とかするのがリーダーとしての役目だと私は思うのだがブヒ？」
グランディ達は口々にその新たに現れたグランディに向かって救いの手（というか蹄）を求める叫びをあげた。
するとそのグランディは、いきなり剣を舞台に突き立て両手をばっ！と広げると言い放った。
「そいつらをやるんなら、俺をやれブヒーーッ！！」
「「……」」
全員の動きが完全に停止した。数秒間無音の状態が続き、そして次の瞬間……
「「この変態がーーーブヒッ！」」
今まで女性陣に完璧につかまっていたはずのグランディ達が一斉に壇上の上のグランディに飛び蹴りを喰らわせた。
「一瞬でもあんたを信じた俺がバカだったブヒッ、このすけこまし！」
「俺の感動を返せブヒ！」
「ひどいブヒよ～、キャプテン」
「まあわかりきったことだが、あきれてものも言えないブヒ……」
４匹の蹄の雨をかいくぐりながら、キリトに似たグランディは叫び返している。
「うるさいブヒ！大体お前ら嫌がってるように見せかけて本当は楽しんでただろ、このむっつりスケベ共がブヒ！特にそこのツンデレ野郎ブヒ！！」
壇上は一瞬にして戦場に変わり大騒ぎだ。逆にアスナ達はというと、いきなりの出来事に呆然としてしまっている。

（はぁ……、仕方ないな……）

キリトは心の中で呟きながらクライン、ユージーンとエギルを道連れに、蹄の嵐の中に突っ込んで行った。

データ潜航艦グランホエール－０２－

「自己紹介がまだだったなブヒ、俺はキリ★ランディ。見ての通りそこのキリトとかいう奴を元にしたグランディだブヒ。今はこの船の船長を任されてるブヒ。言いたいことや聞きたいことはいろいろあるだろうが、とりあえずまず最初にチュートリアルをしてやるから聞けブヒ。いいブヒな？」

キャプテンと呼ばれていたグランディがぼろぼろになりながらもなんとか壇上に立って言い放った。

「ああ、それで頼む」

キリトもまたグランディたちの血で血を争う戦いを止めるために傷だらけ（蹄の跡だらけ）で満身創痍の体をポーションで回復させながら苦笑して答えた。後ろの方ではクライン、ユージーンとエギルも全員疲れ切った様子で床に座りながらポーションをがぶ飲みしている。

「よしブヒ。まず最初にこの世界には店やギルドホームがあるタウンと、モンスター達がいるフィールドやダンジョンがあるブヒ。タウンはお前たちの世界アインクラッドやＡＬＯで言う街や都市のことブヒ。そして今この船が浮かんでいる空間は……」

ここでキリトはキリ★ランディが妙なことを言ったのに気づいた。

「いや、ちょっとまてキリ★ランディ……おまえまるで俺たちの世界のことを知ってるみたいじゃないか？」

キリ★ランディはフッと笑った。

「いやなに、先ほどデータの海を潜航していたら、ネットスラム付近に妙なデータが流れているのを見つけたからサルベージしたブヒ。で、とりあえず調べたらおまえたちのことなどが出てきたから、アウラ様に連絡しようとした矢先に彼女からおまえらを迎えにこいと連絡が来たので、迎えに行きがてらさっきまで報告してたブヒ」

妙なデータのくだりからキリトは大変なことを忘れていたことに

気付いた。そしてアスナも隣で愕然としながら、俺に訊いてきた。
「ね、ねえ、キリトくん。そういえば、ユイちゃんって今どこにいるのかな……」
「……キリ★ランディ、そのデータを見せてくれないか？」
「いいブヒよ。でもさっき逃げだそうとしたから檻の中だがブヒ」
そう言ってキリ★ランディが手元で何かすると、フッと少し大きめの鳥籠が現れた。
そしてその中には……
「「ユイっ！？」」

「わぁーーん！パパ、ママ、逢いたかったですぅ！！」
よほど怖い目に遭ったのか、ユイは先ほどからアスナに抱きついて泣きっぱなしだ。どうやら怪我をしてるわけではなさそうだが、驚いたのはユイの姿と格好だ。
一緒にいた時点ではＡＬＯのナビピクシーサイズだったのに、今は子供サイズになっている。勿論ユイは自身の意思で姿やサイズを変えることはできるが、しかし服装が今まで着てるのを見たことのない魔法使いが着るような乳白色のローブにとんがり帽子、そしてところどころにアクセントとしてか何かの紋様が随所に描かれているものになっているので、たぶんグランディ達が変えたのだろう。
「おい、キリ★ランディ、おまえ、ユイに何をした？」
鋭い視線をキリ★ランディにぶつけながら、キリトは静かにたずねた。
「な、何ってただデータの海を彷徨っていたから助けてやっただけだブヒ……」
キリ★ランディはキリトの剣幕に慌てた様子で弁解し始めた。
「まあその後ちょっとデータを調べさせてもらったのと、素材が良かったからグランディにしてやろうとしただけブヒ。それでオペ室

に連れて行って改造しようとしたら、途中で暴れて逃げ出した……って、剣を抜くなブヒ！？」
改造のくだりでキリトはエフェクトを逆らせながら剣を抜刀し、キリ★ランディの目の前に刃先を突きつけた。
「だ、だいたいお前ら人のこと言えるのブヒか？さっきの様子じゃおまえらその子のこと忘れてただろブヒ……」
最初は負い目が少しはあったのか小さくなっていたキリ★ランディだったが、最後の言葉で反撃してきた。
「いや、それは……」
キリトはすぐに反論しようと思ったが、アスナに抱かれて涙ぐんでいるユイを見て一息間をおき……そして剣を鞘に納めた。
「いや、確かにそうだ……いくら色々なことが一度に起こって混乱していたからといって、ユイのことを忘れるなんて俺は最低だ。それにおまえらが助けてくれなければユイはどうなっていたかわからない。キリ★ランディ、それに他のグランディ達も、本当にありがとう」
そう言って、キリトは深く頭を垂れた。
キリ★ランディはそれに少し驚いた様子を見せた後、フッと笑った。
「やはりオレの元になった奴な事だけはあるブヒ」
「いや、でも俺はおまえみたいにそんな変な性格してないと思うぞ。特に女の子に弄ばれたいとか……」
「何言ってるブヒ。その子のデータの中のログで見たけど、うちのカイトやハセヲぐらいモテモテのハーレム状態じゃないかブヒ。頭の中では夢は酒池肉林と考えてるくせにブヒ」
その言葉に女性陣がこちらをじとーっとした目でキリトを見る。
「キリトさん、あたしたちをそういう目で見てたんですか？」
「さいてぇー」
「キリトくんってそんなこと考えてたんだ……」
「まさかカズ兄が義理の妹に対してそんな感情を持っていたなんて

……」
「い、いやそんなわけないだろ！」
雲行きが悪くなってきたのを慌てて何とかしようとキリトがあたふたしていると、
「まあ冗談は置いておくブヒ」
「って、冗談かよっ！？」
キリトはわざと盛大にツッコムと同時に少しホッとしたが……
「でも、そんなに強く否定したってことはキリトさん、もしかして……」
なんてサーシャが余計なツッコミをしてきたのでまたまずい流れになったのをなんとかするために必死で、キリ★ランディが最後にぼそっと呟いた、
「それにその子のことを忘れてても仕方がないブヒ……」
という言葉の意図をキリトは聞くことができなかった。
「まあキリトくんの弁明は後でゆっくり聞くとして、とりあえずこれでみんな揃ったことだし、本当によかった……」
最初の方に不穏な言葉を付け加えながらも、キリトの横に立っていたアスナが泣きやんだユイを抱きかかえて安心したようにほっと息をついた。みんなもそれに同意するように頷く。
しかしここで聞き覚えのある声がどこからともなく聞こえてきた。
「いやぁみなさん、確かに僕の存在感は薄いというか、いてもいなくても同じようなもんですが、せめてリーファだけでも気づいて欲しかったなーなんて、あははは……」
それまで誰も気づいていなかったのだが、ユイが閉じ込められていた鳥籠の影にもう一つ大きめな檻が現れていた。
そこには……
「「あっ、レコン……」」
狭い檻の中にどよぉーんとした空気を垂れ流しながら丸まって座っているレコンがいた。

データ潜航艦グランホエール－０２－（後書き）

ＡＬＯではフェアリーダンス編以降全く出番のないレコンさん。この二次小説ではちょっと重要なポジションにいます。でも本編では今のところ出番はほぼないです（笑）

あとグランディの語尾をブヒで統一していますが、いつか直します……たぶん……

今までの登場人物紹介（前書き）

これは今まででてきたキャラの紹介＆今後の方針です。
なのでまだ今までの話しを読んでない人はできれば先に読んでから見てください。
ちょっとネタばれがあるので。
あとｗｉｋｉ見た方が詳しく書いてあるところもあるのでもっと詳しく知りたい人はそちらも見てください。

今までの登場人物紹介

ソードアート・オンラインからの登場人物
1：今作内でのジョブ
2：登場した話し
3：特徴
4：キリトとの関係
5：今作でのこれから

―ＳＡＯ―
キリト（桐ヶ谷和人）
1：二刀流／デュアルエッジ
2：主人公なので皆勤賞。
3：ＳＡＯ主人公。実力とモテ度はＳＡＯ最強クラス。アスナとは恋仲。現実では普通のパソオタ？
5：今作では主にツッコミと事態収拾役。もちろん戦闘とイベントでも暴れますｗ

アスナ（結城明日奈）
1：斬刀士／ブレイド（レイピア）
2：ヒロインなのでほとんど登場。
3：ＳＡＯメインヒロイン。実力、容姿、料理の腕共にＳＡＯ最強クラス。
4：恋仲
5：今作ではキリトと夫婦漫才を繰り広げる（かも？）

ユイ
1：呪療士／ハーヴェスト
2：2巻のサイドストーリー「朝霧の少女」で初登場。その後フェ

アリーダンス編ではナビピクシーとして活躍
3：超スペックのＡＩ。もともとプレイヤーのメンタルケア目的に作られたので人の心には敏感。
4：親子？
5：序盤は完璧に忘れられていたが、これからは大活躍するかも。

ヒースクリフ（茅場晶彦）
1：？？？
2：アインクラッド編全般とフェアリーダンス編の最後にちょこっと登場
3：ＳＡＯを作り、１万人ものプレイヤーを閉じ込めた天才。ＳＡＯでは攻略組最大ギルド、血盟騎士団のギルドリーダーとしてログインしていた。
4：キリトとはＳＡＯ内で２度戦い、１勝１敗。キリトに倒された後脳を過度にスキャニングし死亡したが、それによりネット上に分身を作ることに成功しフェアリィ・ダンス編ではキリトを助けた。
5：今作ではほぼ裏方にまわりあれこれいじりまわす模様。

クライン
1：撃剣士／ブランディッシュ（刀）
2：アインクラッド編本編とサイドストーリー共にちょくちょく出てる。
3：攻略組ギルド風林火山のリーダー。ちょっとお調子者だがいいやつでみんなをまとめるのが得意。リーダーの素質も十分。
4：ＳＡＯでの数少ない仲間（友達？）。
5：今作でももちろん活躍もするけど、主にやられ役になるかも……

エギル（ アンドリュー・ギルバート・ミルズ）
1：重槍士／パルチザン
2：アインクラッド編とフェアリーダンス編共に登場

３：ＳＡＯでキリトがよく利用していた故買屋を営む商人プレイヤー。業突く張りな商人に見えるが、実際は売上のほとんどを中層プレイヤーの育成に注いでいた。リアルでは喫茶店を経営しており、結婚もしている。アフリカ系アメリカ人にして生粋の江戸っ子。
４：仲間
５：今作でも商売魂を見せてくれるかも。

シリカ（綾野珪子）
１：双剣士／ツインソード
２：アインクラッド編２巻の短編のヒロイン
３：ＳＡＯでは珍しいビーストテイマーな上、年齢が低くかわいかったのでアイドルの用に扱われていた。
４：自分の慢心から使い魔ピナ（フェザーリドラ）を死なせてしまったが、キリトに復活アイテム入手を手伝ってもらい無事復活させた。キリトにはそれ以来恋心（というよりどちらかというと年上に対する尊敬？）を抱いている。
５：今作ではピナと共にイベントを盛り上げてくれるかな。

リズベット（篠崎里香）
１：鎌闘士／フリッカー
２：アインクラッド編２巻の短編のヒロイン
３：ＳＡＯに閉じ込められるまではいたって普通の真面目な子で、ＳＡＯ内でも努力して立派な鍛冶屋を営んでいた。
４：キリトの剣を打つ為の材料収集時にパーティーを組み、その時に色々あり惚れるが、親友のアスナのキリトに対する気持ちを知りＳＡＯをクリアするまでは身を引くことに。現在キリトに対しては微妙な感じ。
５：今作では新たな関係が生まれるかも。

サーシャ

１：呪療士／ハーヴェスト
２：アインクラッド編２巻の短編
３：リアルでは大学生で学校の先生を目指していた。真面目で性格も良い。
４：第１層はじまりの町で幼いプレイヤー達の世話をしていた時、キリト達がユイの親を捜索中に知り合う。
５：現実の生活が落ち着き、ゲームに戻ってきた彼女は今作では天然、世話焼き＋ときたま鋭い洞察力を発揮するかも。

シンカー
１：魔導士／ウォーロック
２：アインクラッド編２巻の短編
３：リアルではＭＭＯトゥデイという日本最大のネットゲーム情報総合サイトを運営していた。
ギルドアインクラッド解放戦線のリーダー。
４：組織の肥大化で上手く管理ができなくなっていた時に副リーダーに嵌められ、絶体絶命のところをキリト達に助けられた。
５：今作では便利な解説役を主にやってもらうことになるきがする。

ユリエール
１：銃戦士／スチームガンナー
２：アインクラッド編２巻の短編
３：シンカーの部下で、軍服が似合うクールビューティー。
４：キリト達にシンカーを助けてくれるよう依頼する。
５：今作では以外な一面（まあ原作ではあんま出番なくて詳しく書かれていないけど…）が見れるかも。

―フェアリィ・ダンス―
リーファ（桐ヶ谷直葉）
１：斬刀士／ブレイド（竹刀）

２：フェアリーダンス編全般
３：剣道少女。明るく活発。恋に悩む少女。
４：桐ヶ谷和人の義妹。和人がネットゲームにハマってから疎遠になっていた。
しかし和人がＳＡＯにログイン中親から従兄と教えられ、もう会えないかもしれないと疎遠になっていたことを後悔し、もっとよくキリトのことを知りたくなりＶＲＭＭＯ、ＡＬＯをプレイし始める。
キリトがＡＬＯに初めてログインした時リーファがサラマンダーの集団に追い詰められていたところを助けたことにより知り合い、お互いの素性に気づかないまま一緒に世界樹を目指していた。
リーファはゲーム内で共闘するキリトに惹かれる一方、現実でも堰を切ったように兄・和人への恋心を自覚した。　キリトが兄であると知った後はショックで大変だったが、その後なんとか折り合いをつけられ今はまだ恋心を抱きながらも兄妹として接している。
５：今作でも微妙な距離感でじらされるかな。

レコン（長田伸一）
１：錬装士／マルチウェポン（魔典、双剣）
２：フェアリーダンス編全般
３：オタク。戦闘能力は皆無に等しい。
４：桐ヶ谷直葉と同級生で、ＶＲＭＭＯのことを聞かれＡＬＯのことを教えた。リーファには好意がある様で、リーファと一緒にいたキリトに微妙にライバル心を燃やしていた。
５：今作では持ち前の知識を使いリーファにいいとこ見せたさにがんばって以外と活躍するかも。たぶん……

サクヤ
１：妖扇士／ダンスマカブル
２：フェアリーダンス編全般
３：シルフの領主。和服美人。何期も領主を務めている。実力もか

なりのもの。
４：シルフとケットシーの会談時にサラマンダーに奇襲を受けたところをキリトに救われた。
その後キリトが世界樹に挑んだ時に大軍を率いて助けに来た。
５：今作では原作と同じくまとめ＆収め役かな。あとバトル＆謎解き面でも活躍する予定。

アリシャ・ルー
１：拳術士／グラップラー
２：フェアリーダンス編全般
３：ケットシーの領主。獣耳美少女。明るく掴みどころのない感じ。サクヤと同じく何期も領主を務めている。
４：キリトが世界樹に挑んだ時にもサクヤ達シルフ軍と共にケットシー達を率いて助けに来た。
５：今作ではとりあえず天真爛漫な感じでイベントをおおいに盛り上げてもらいます。

ユージーン
１：撃剣士／ブランディッシュ
２：フェアリーダンス編
３：サラマンダーの将軍。その実力はＡＬＯ最強といわれている。レジェンダリーウェポンである魔剣グラムを持つ。
４：キリトとはケットシーとシルフの会談奇襲時に戦って負けている。
５：今作では冷静な武人としてバトル＆謎解き面で活躍してもらうつもり。ときどきボケもあり？

・ｈａｃｋ／／からの登場人物
一・ｈａｃｋ／／一
アウラ　？？？

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの女神。全作通してＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄに振り回されっぱなしの苦労人。
今作では母親のモルガナと兄のクビアに振り回されるも、結構幸せそう。

モルガナ　？？？
アウラの母親。原作ではアウラを生まないように必死に努力していたが、最終的に消滅した。
今作ではなぜか存在するモルガナだが、その性格は読んでもらえば分かるようにだめ人間。

ー．ｈａｃｋ／／ｘｘｘｘー
クビア　双剣士／ツインソード
原作ではアウラの失敗作としてハロルドに見捨てられたので、反存在のカイトを取り込み完全な存在になろうとしていた。
今作ではアウラの兄として、アウラをからかいながらも優しく見守っている。
アウラとモルガナの親子喧嘩の調停役もしている。

ー．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．ー
三葬騎士（葬炎・葬海・葬天）　双剣士／ツインソード・斬刀士／ブレイド・斬刀士／ブレイド
アウラがＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄを守るためカイト、オルカ、バルムンクを模して作ったＡＩ。
しかし時間がない中で作ったので不完全なものになってしまった。
今作でもアウラの騎士として陰ながら見守っている。時折奇怪な言動と行動をとるのは原作と変わらず。
なお、ＳＡＯの短編集アーリー・アンド・レイトにて面白い絡み所を見つけたので、後にちょこっと書くかも。

今までの登場人物紹介（後書き）

これからもちょくちょく更新していくのでよろしくお願いします。
あと誤字脱字、おかしい文やツッコミ、感想等ありましたらコメントしてください。

騎士団員登場

「まあ色々あったが、これでやっと話しを進められるブヒ」
キリ★ランディは溜息をつきながら疲れたように話しを続けた。
「どうせ僕なんか……」
「もう、いい加減元気出しなさいよ！」
後ろの方では未だに忘れ去られていたことに対していじけているレコンと、そんな彼に対して開き直って叱咤激励をはじめたリーファのことは完全に無視するようだ……
その後のグランディの説明によると、この世界にはいくつかのルートタウンと呼ばれるショップやアリーナなどの施設がある都市が存在して、そこからゲートで３つのワードを組み合わせることにより様々なフィールドに行けるらしい。階層やフィールドに制限があるアインクラッドと違って、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄでは無数にある単語を組み合わせてほとんど無限に近い数のフィールドを作ることができる。それ以外はほぼＳＡＯやＡＬＯと違いはなく、ファンタジー系のネトゲらしい作りになっているようだ。
そして説明は大詰めになった。
「最後に一番大事なこと、ジョブのことだブヒ」
話が続いている最中も、まったく立ち直る気配のないレコンに対し少し暴走気味になってきたリーファをなだめていたサクヤが、この話題に反応した。
「そういえば、ジョブはこのゲームの仕様に合わせるんでしたね。どのような種類があるのですか？」
雰囲気を変えようと興味津津といった感じでサクヤが聞くと、グランディが待ってましたと言わんばかりに答えた。
「よくぞ訊いてくれたブヒ！」
そう言ってキリ★ランディは手元にウィンドウを展開し、何やら入力した。すると、壇上のスクリーンにいくつかのシルエットと、

その下に説明文と思われるものが現れた。
「見てもらえば分かるように、この世界には１２種類のジョブがあり、前衛、後衛とその両方をこなすものに分けられるブヒ」
スクリーン上に表示されているのは、前衛で敵を直接叩く撃剣士／ブランディッシュ、重槍士／パルチザン、二刀流／デュアルエッジ、拳術士／グラップラー。
中盤を支える双剣士／ツインソード、斬刀士／ブレイド、鎌闘士／フリッカー、妖扇士／ダンスマカブル。
そして後衛で味方をサポートしたり距離をとって攻撃する魔導士／ウォーロック、呪療士／ハーヴェスト、銃戦士／スチームガンナー。
最後にいくつかのジョブを使うことができる玄人向けの錬装士／マルチウェポンと書かれている。
「ちなみにジョブはこのマシン、ジョブ分けヘルメットをかぶって決めるブヒ。」
グランディはパネルを操作して、突起やらねじが大量に飛び出しているごついヘルメットを取り出した。
「こいつはプレイヤーに一番合っているジョブを自動で選択してくれるブヒ。それと、あとの細かいジョブの仕様については使っている本人達に訊くのが一番早いブヒね……お、噂をすればなんとやらブヒ」
キリ★ランディはそう言って無数にある通路の内の一つの方に顔を向けた。みんなもつられてそちらを見ると、中から話し声が聞こえてきた。
「いやぁ、今日も疲れたなぁ。ねえ昴ちゃん、これからお茶なんてどう？もちろん司ちゃんも一緒にさ」
「こらぁーーっ！貴様、昴様になれなれしくするな！！いけませんよ昴様、こんな万年色ボケ男になんかついていっては。それよりどうですか、これから私と一緒に今後の騎士団の方針について語るのは……？」

「うるさいよ銀漢。うっとおしい」
「そうですよ、銀漢。いくら本当のこととはいえ、失礼です。ちゃんとクーンさんに謝罪しなさい。あと私はこれから報告書をまとめなければいけないので、すみませんがどちらもまたの機会に」
「昴様～；；」
「ていうか昴ちゃんもけっこうキツイこと言ってるような……」
「私もこのような態度は良くないと思いますが、さすがに任務中にあれだけ女の子を口説こうとされると、このようになってしまいます……」
「あれ、もしかして昴ちゃん、焼きもちやいてる？」
「んなわけあるかーーー！！クーン、貴様とはどうやらここで決着をつけねばならんようだな！だいたい、貴様には想い人がいるだろうが！」
「銀漢は堅いな～。別に好きな子がいるからって、他の女の子とお茶しちゃいけないわけじゃないだろ？」
「もう、やるんならボクの視界に入らないところでやってよ」
「はぁ……、私は先に部屋に戻りますから、ほどほどにしてくださいね……あら、あの方たちは？」
ここでようやく彼らはホールに姿を現し、先頭を歩いていた少女が真っ先にキリト達に気づいたようだ。
最初に入ってきた少女は、白いドレスを着て背中と頭に小さな羽が生えているしっかりとしてそうな女の子。その後ろに続いてきたのは、濃い緑と白を基調にした落ち着いた感じの服を着た物静かそうな少年。
さらに二人の男、一人は身軽そうな黄色を基調にした服を着てのばした青髪を後ろで束ねた陽気そうな青年で、もう一人は赤い服の上に白銀の騎士鎧をまとい、顔全体をすっぽりと覆っている兜についた二本の角が特徴的ないかにも硬そうな男だ。
「最初に戻ってきたのは昴、司、クーンに銀漢ブヒね。じゃああと説明にいる奴らはっと……待ってるのも面倒だし呼びよせるかブヒ」

そう呟いたキリ★ランディはまた手元のウィンドウを操作した。
すると突然壇上に多数の青いリングが現れ、そしてその中から人影が現れ始める。
「おっしゃー！かかってきなさい！！ってあれ、ここどこ？」
「あん、何だこいつら？おい、グランディ、いったいなんなんだよ、いきなり呼び出して？」
「ていうか俺、今戦闘中だったんだが……」
「なんてことやー！？あとちょっとでさらなる値切り交渉成立できたのに……あんたぁ、どないしてくれんねん！？」
「はぁ……、手短にお願いね。あの人のせいで今こっちは大忙しなんだから。」
「ふむ、これは面白い面々がそろっているな。実に興味深い……」
次々に現れる全員が好き勝手言ってるのに対し、慣れてるのか疲れてるのかキリ★ランディは単刀直入に言った。
「お前たちにやってほしいことがあるブヒ」

「まあこんなもんブヒかね」
最後の一人が青いリングから現れ切ると、キリ★ランディは満足したようにうなずいてこちらを振り向いた。
「それで、俺たちは何で急に呼び出されたんだよ？それにこの人たちは？」
ファンタジーＲＰＧ風の服装の中で、唯一学生服にゴーグルという明らかに浮いてる格好の少年がキリ★ランディに訊ねた。
その問いに対し、キリ★ランディは現れた全員に現状を軽く説明した。
その説明が終わると、腕を組んでしかめ面をしながら黙って聞いていた銀髪で黒衣の目つきが鋭い少年が一番に口を開いた。
「で、こいつら役に立つのかよ？聞いた感じじゃ、Ｔｈｅ　Ｗｏｒ

1dは素人なんだろ？
ただでさえあのおばさんのせいで大変だってのに、このくそ忙しい時に余計なお荷物はごめんだぜ」
　ぴきっと場の空気が凍った。そしてそんな空気の中、全身金色という2つの意味で直視しづらい姿のPCが勇敢にもしゃべりだした。
「まあまあ良き目の人よ、今は猫の手も借りたいときである。ここはひとつ彼らの力も有り難く借りようではないか！」
（勇敢というより鈍感なのか……）
　しかし彼の言葉で場の空気がある意味変わったので、キリ★ランディはすかさず話しを進めた。
「それじゃあ全員挨拶ついでに、どのジョブか説明するブヒ。よし、まずはジョブがブレイドの奴からブヒ」
「おう！」
「はぁ……、了解や」
「「……ん？」」
　ここで二つの声が上がった。
　一番初めに来たグループの一人である銀漢と、もう一人は後から来た茶髪をポニーテールにして、黄色を基調にした服に胸当や肩当てなどの最低限の鎧のみを付けている身軽そうな元気はつらつとした女の子だ。
「ちょっとグランディ、なんでブレイドだけ二人おるんや？」
　彼女の質問にキリ★ランディはしごく簡潔に答えた。
「いや、ブレイドは需要ありそうだから多めに呼んだブヒ」
「ていうことはなんや、あんたはうちの何週間もかけて交渉に交渉を重ねた大事な商談をすっぽかさせた理由が、ただブレイドの需要がありそうってだけって言うんかいな？
だいたいブレイドなんて騎士団の中にぎょうさんおるやん。なんでうちなん？」
　怒りがふんだんに混じった声にもかかわらず、能天気にランディは答えた。

「そんなの適当だブヒ……ってわぁーー、何するブヒ！？危ないじゃないかブヒ！レイチェル！？」
　レイチェルは適当、と聞いた瞬間俺の目でもやっと追えるくらいの速さで抜刀し、グランディに向かってもの凄いスピードで剣を投擲したのだ。目の前に刺さった剣を見て尻もちをついてしまったグランディはさすがにやばいと思ったのか、慌ててしゃべりだした。
「わかった、わかったブヒ！船の精製所で特別にこの前欲しがってたものを作るから、それで手打ちにしてくれブヒ！！」
　それを聞いた瞬間、レイチェルは今までの恐ろしい雰囲気をころっと変え、にこにこ顔になった。
「それやったらいいわ～。ほな、それじゃさっそく自己紹介に移りましょか。うちはレイチェルいいます。ニューク兎丸と組んで芸人やりながらサイドビジネスで色んな商売してます。そんで……」
　ここでへたり込んでいたグランディが立ちあがり、足元にささった剣を引き抜き、レイチェルに向かって放った。レイチェルはそれをパシッとキャッチして構えをとった。
「ジョブはブレイドやってます！」
　レイチェルが構えを解いて剣を鞘にしまったのを見て銀漢がうぉっほん！っと咳払いをして続こうとした。
「それでは次は私の自己紹介に……」
　しかしそれはグランディの声に阻まれた。
「今のがレイチェルで、もう一方のツノの方は銀漢ブヒ。ほら、さっさと次にいくブヒ。次はブランディッシュブヒ」
「って、私にもまともに自己紹介させろぉ～！！」
　銀漢の叫びがむなしく響く中、次から次へと騎士団員達は自己紹介をしていった。
　ブランディッシュはブラックローズという白髪で褐色の肌にイバラの模様が体に刻まれ、鎧は胸と腰回りだけという軽装な少女。ウォーロックは朔という道化師みたいな服装の気の強そうな女の子。ハーヴェストは一番先のグループにいた司一（女の子らしい）で、

パルチザンは先ほどの金ぴかアーマーのしゃべり方がかなり変なぴろし3。ツインソードはどことなく葬炎をまともにして少し幼くしたような姿をした―（本人談では二人とも元がいるらしい）シューゴという少年。グラップラーは犬耳と尻尾―（本人は狼、ワーウルフと言っていたが）をつけたスタイル抜群な凰花。続いてフリッカーは日本神話の神様が着るような白を基調にした生成の服を着て、小鹿のような小さい角を生やしたどことなくつかみどころのない感じの少年欅。ダンスマカブルは赤銅肌をした筋骨隆々の体格、剃髪して修行僧のような衣を片方の肩からかけているヨガをやってそうな八咫。スチームガンナーは一番初めのパーティーにいた青年クーン。そしてマルチウェポンが、先ほど場を氷つかせたハセヲその人で、最後にデュアルエッジが学生服というこの場にそぐわない服を着ているのにもかかわらず、どこか落ち着いた雰囲気と貫録のあるトキオという少年だ。

全員が簡単に説明を終えると、キリト達はそれぞれどのジョブになるか例のマシンを被せられて決められた。

結果……

デュアルエッジはキリト。ブレイドはアスナとリーファ。ウォーロックはシンカー。ハーヴェストはサーシャとユイ（ユイも今回はナビとしてではなくプレイヤーとして参加）ブランディッシュはクラインとユージーン。パルチザンはエギル。ツインソードはシリカ。フリッカーはリズベット。スチームガンナーはユリエール。マルチウェポンはレコン。ダンスマカブルはサクヤ。グラップラーにはアリシャ・ルーという具合になった。

訓練開始！

キリトは両手に一本づつ持った剣をゆったりと構えていた。そして目の前に新たな的が現れた瞬間、頭の中にいくつかのスキルが自動的に浮かび、キリトはその中の内の一つを素早く選択した！

「疾風荒神剣！」

高速で大量に切りつける乱舞攻撃が見事に当たり、的はポリゴンの欠片へと砕け散っていった。

間を置かずに次の標的、２つの的が離れた位置に現れ、キリトは左手の剣をしまい、代わりに呪符を手に持つ。

「はっ！」

気合いの掛け声と共に一方の的には呪符を投げ、間髪いれずにもう一方の的へと一気に踏み込みゼロ距離まで飛ぶ。

「やぁっ！」

キリトの剣が的を真横に断ち切ったと同時に、呪符から打ち出された雷光がもう一方の的を撃ち抜いた。

「ふぅっ……」

「まあ、ざっとこんなもんかな」

パチパチパチと手を打ち鳴らして拍手をしながらトキオはメニューを操作して全ての的を片付ける。キリトもいつもの癖で剣を左右に振った後、背中に持っていき剣を収めた。

今キリトたちは場所をだだっぴろい部屋（多目的ルームらしい）に移し、そこでバラけて詳しいジョブの説明を受けている。そしてキリトには正面に立っているトキオがデュアルエッジ、つまり二刀流の基本的なレクチャーをしてくれて、今丁度終わったところだった。

ちなみに武器はグランディが用意してくれたもので、キリト達の過去のデータをユイから受け取っているらしく、キリト好みの重量のあるしっくりとくる良い剣を用意していた。

「やっぱり前のゲームで二刀流をやってただけあってキリトさんは呑み込みが早いなぁ。というかオレよりも上手いかも……」
「キリトでいいよ、俺もトキオって呼ばせてもらうからさ。まあでも、トキオもただもんじゃないよな……」
ファンタジー系のネトゲで、現実にあるような制服を着ている見た目の不自然さに反し、トキオから感じられた強さはあのデスゲームの中の最高峰にいた者達、攻略組と同等かそれ以上のものだ。
「トキオの元は中学生だったんだろ？いったいどんな修羅場をくぐったんだ？」
そんな質問に対して、トキオは苦笑いをしながら答えた。
「いやぁ、オレはちょっとした特殊体質でそれをある人に利用されて、とある事件に巻き込まれたんだけど……まあその話しはまたおいおいするよ。それよりオレたちは一通り終わったから、他のみんなの様子を見ない？」
「そうだな、そうするか……」
キリトはトキオの昔話しも気になりながらも、あまり進んで話したいものではないみたいなので、今はとりあえず他のみんなの様子を見てみることにした。

ＢＡＮＧ！という音が響くと共に、宙に浮いている丸い的が撃ち抜かれた。当たったのはほぼ中心で、その的の周りには同じように命中を示すマークがついた的がいくつか浮かんでいた。
「おっ、なかなかいい腕してるじゃん、ユリエールちゃん」
「ちゃかさないでください。あと、本当にこんなに密着する必要があるんですか？」
あちらでは先ほどから銃声が聞こえていたが、どうやらユリエールがクーンに銃の使い方を教わってるようだ。この部屋では好きなものを出すことができ、ユリエール達の訓練スペースは射撃場のよ

うな場所になっている。
（それにしても、確かにあの密着具合はクーンの下心丸見えな気がするような……）
キリトが心の中で呟いていると、近くでウォーロックのあれこれを朔から教えてもらっているシンカーも同感だったらしく、ちらちらとユリエール達の方を盗み見ていた。
しかしそんな気もそぞろな状態を勝気そうな朔が許すはずもなく、シンカーは攻撃呪紋の嵐を喰らうことになった。
「ちょっと、うちがわざわざ説明してるのに、なによそ見してるんや！こんなことちゃっちゃと終わらせて、早くエン様のところに戻らなきゃいけないっちゅうのに……
ほら、なにぐずぐずしてんの！はよう立って、さっさと終わらすんや！」
攻撃呪紋によってぼろぼろになったシンカーは、ぷすんと煙を吐きながら動く様子がない……
「あちゃー、朔はエンデュランスラブだからなぁ。まあ基本ミーハーで、最近はバルムンクにも気があるみたいだけど……」
頭をかきながらそんなことをトキオは言い、さらにキリトを先導して次のペアに向かった。
「あのぉ、僕の記憶が正しければハセヲさんが活躍するまではＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄでは錬装士は器用貧乏と言われてマイナーな部類にあったと思うんですが、なんでハセヲさんは錬装士をえらんだんですか？」
「な、なんでんなことお前にそんなこと話さなくちゃならねえんだよ！？
だいたいこんなくそめんどくせえこと、俺は本当はやりたくねえんだ。だからとっとと終わらせるぞ」
レコンの問いに対して苛立ちながら答えるハセヲ。しかし根は律儀なのか、どうやら途中で放り出したりはしないようだ。
そしてあちらではキリト達同様すでに説明を終えたらしいアリシ

ャと凰花が組み手をしていた。
「キミ、凰花だっけ？なかなか強いね……それに犬耳と尻尾でケットシーの猫耳の僕とは一応かぶらないし、仲良くなれそうだよ♪」
アリシャは強力な上段蹴りを放ちながら、まるで談笑している最中かのように言う。
「これは犬耳ではなく狼なんだがな……それにきみだって、かなりの使い手じゃないか！」
アリシャの蹴りを軽く体を引いて避けた凰花はそのまま突っ込んで右ストレート！っと見せかけて足払いをしかけるが、アリシャはそれをなんなく躱し、反撃に移っている。
端から見ても、なかなかの攻防戦だ。
「凰花はこの騎士団の中でも接近戦トップクラスなんだけど、あのアリシャって子もそうとうやるな……」
感心したように呟いたトキオはさらに別のペアに目を向けた。
「ブランディッシュはまあたいしてあんたたちのプレイしてたゲームのと変わんないから、とりあえず教えることはこれ以上はあんまないわね。あ、そっちのあんたの方はあとで刀を使ってる砂嵐三十朗を紹介するから、色々教えてもらうといいわ」
あちらではブラックローズがユージーンとクラインに対して話している。
「どうやら話すことはもうないようだな。ではブラックローズよ、少し手合わせしようではないか」
ここでいままで黙って説明を聞いていたユージーンが開口一番挑戦状をたたきつけた。
「おいおい、別に今そんなことしなくてもいいだろ……つうか、さっきあんだけぼろぼろになって、まだ動き足りねぇのかよ？」
クラインがあきれたようにツッコムと、ユージーンが真面目な顔をして言った。
「クライン、お前ほどの実力者ならばわかるだろう。ブラックローズは強い。……というより、この船に現れた者のほとんどがかなり

の使い手だと感じなかったか？」
「まあ確かにここはコアゲーマーの集会場か？ってぇぐれーつぇーやつが集まってるけどよぉ……」
クラインが顎に手をやりながら同意した。
「ならば戦ってみたいと思うのは当然だろう。将軍という職種柄普段は好き勝手に戦えないから最近少しなまっているしな……。久しぶりにキリトとやった時ぐらい楽しめそうだ」
「いや、わたしはまだやるって言ってないし……」
心底うれしそうな顔をしてくくくっと笑うユージーンに対し、完全にスルーされてげんなりしているブラックローズ。
「はぁ……、仕方ないわねぇ。女の子を誘う文句としてはいただけないけど……まあ強そうって言われて悪い気はしないし、いっちょやりますかぁ！」
気を取り直したのか大剣を下段に構えるブラックローズにならってユージーンも正面に構える。付き合いきれないとばかりにクラインは溜め息をつきながら二人から離れた後、一応審判役を買って出たのか片手を真上に挙げて、スタートの合図を取る。そしてクラインが腕を振り下ろし、二人の戦いが始まるのをキリト達が見守っているといきなり背後で、
ドーーーーーンッ！！
「ぎゃーーーっ！？」
耳が割れそうになるくらい大きな爆発音とこちらにきてからよく聞く叫び声にキリトが振り返ると、少し離れたところに大きなクレーターができていた。そしてその中心には煤けた兜が一つ転がっている。
「あれって……」
キリトが呟くと、隣のトキオは溜め息をつきながらこの惨状の犯人に問いかけた。
「シューゴ、またダミー掴まされたの？だから言ったじゃん。ちゃんと確かめてからでないと使っちゃだめだって。ただでさえあの人

のトラップは極悪なんだから……」
　シリカが尻もちをつきピナを抱きしめて震えている横で、シリカにレクチャーしていたらしい双剣士のシューゴがばつの悪そうな顔をしている。
「いやー、こんどこそ本物の腕輪と思ったからつい使っちゃったw まあでも銀漢だから大丈夫ですよ。あの人タフだし、それに例のトラップって妙なもの多いけど、持続時間短いじゃん」
　そう言いながらシューゴは話しに出てきた腕輪だったと思われる黒いボロクズを右腕から剥ぎ取っている。銀漢の騎士団の中での扱われ方はともかく、どうやら彼は無事なようだ。
　しかし本体はどこにいるんだ？
「どこって、そこにいるじゃん？」
　そこ？とキリトが疑問符を浮かべていると、主を失ったはずの兜が急に持ち上がり浮き始めた。
「きゃーーっ！おばけ！？」
　ゆらゆらとゆれる兜を見たシリカが腕の中のピナをさらにぎゅーーーっと締め付けた。それにとうとう我慢できなくなったのか、ピナは火炎弾を吐き出してしまい、そしてその火炎弾は運悪く宙に浮く兜に直撃した。
「ぐうぉは！？」
　兜は叫び声をあげると吹っ飛んでいった。
（ん？中身がないはずの兜が声をあげた？）
「やっぱり、今回のは透明化か……」
「透明って、じゃあ銀漢は？」
「ああ、見えないだけであそこにいるね。まああの人のトラップにしてみたら軽いほうだしラッキーだったな。もっとえげつないのあるし……」
「これでラッキーって……まあ確かに実害はなさそうだけど。それにしてもトラップとダミーってなに？」
　爆発音を聞きつけ、斬るというより叩きつけて攻撃をするための

ハンマーの様な形をした鎌を持って駆けつけて来ていたリズベットがシューゴに訊ねた。
「ああ、聞いてなかった？君達に探してもらう物にはいくつかダミーがあって、それには必ずトラップが仕掛けられてるんだ。本来なら外敵から本物を守るためにあるんだけど、あの人がばら撒いた拍子に設定が妙な具合に変わっちゃったみたいなんだ。おかげで苦労してるよ……」
これには同意見だったのか、この騒ぎに集まってきた騎士団の面々から溜め息が漏れた。

緊急事態発生

シューゴの誤爆騒動の被害者である銀漢（未だに透明）がグランディ達に担架で運ばれる間、広間は少し騒然としていたが、よくあることなのか騎士団の面々はすぐさまフェアリーダンスのメンバーの指導に戻った。

その後３０分が経過し、ひと段落ついたので一休みしようとした矢先、唐突に事は起きた。

「緊急、緊急！カイトのパーティがスケィスを発見した模様ブヒ！手すきの騎士団員はすぐに応援に行くブヒ！！」

突然広場に響いた声はキリ★ランディのものだった。

「何！スケィスだと！？」

一番最初に反応したハセヲはすぐさま転送ゲートがある通路の方に走り出した。そして他の騎士団員達も慌ただしく動き始める。

「トキオ、これは？」

キリトの問いかけに対し、トキオはフェアリーダンスのメンバーを一か所に集めて説明し始めた。

「急ぐから手短に説明する。今モルガナがバラ撒いた力の内の一つを捜索班が見つけたらしいんだ。だけど、その見つかったスケィスは半端なく強くて好戦的だから結構まずいってわけ。カイトが本物の腕輪さえ持ってれば安心なんだけど、今もってるのはアウラが新しく作った簡易版だから……くそっ！腕輪が先に見つかってれば……」

「ようはさっきシューゴさんが使おうとした腕輪の本物がないと勝ち目がないってことですか？」

シューゴが腕輪を使うのを間近で見ていたシリカが訊ねた。

「そうなんだ。今カイトやシューゴが持ってる腕輪でも足止めくらいはできるけど、やっぱり本物じゃないと回収することはできない。それか、もっと回収しやすい八相だったら何とかできたのに、より

にもよってスケィスだなんて……」
「その八相っていうのは？」
「まあ詳しい説明は後でするけど、ようは力の塊が８つの形に別々の特性を持って生まれたもので、スケィスはその中でも攻撃面に特化してる。あと八相には各々使役する人がいて、スケィスを使役していたのはハセヲだったんだ」
「それでハセヲくんはスケィスって聞いて、目の色変えて飛び出していっちゃったのね……」
アスナが納得するように頷く。
「そうなんだけど、いくら碑文使い、あ、碑文使いは八相を使役する人のことね。スケィスの碑文使いのハセヲが行っても、腕輪の力で弱体化した後じゃないとなんともできないし、どうするかなぁ……」
頭を抱えてしまったトキオに対し、今まで黙って聞いていたリーファが口を開いた。
「じゃあ腕輪を探してくるしかないじゃん？どこか検討はついてないの？」
「今まで騎士団の連中が必死になって探してたんだろ？それでも見つからないってことは……」
クラインが珍しく後ろ向きな発言をした。
「でもまあ確かに今の状況を聞いた限りでは最悪ですね……ここは回収はあきらめて、カイトさんとやらのパーティーが撤退するのを助けに行ったほうがいいんじゃないですか？」
（シンカーまで……だけど確かに、まだ来て間もない俺達にできることなんてあるのか？）
キリトも含めた他のメンバーも後ろ向きな考えを持ち始めた……
その時！
「あるわよ～」
適当な感じの声が部屋に響いたかと思うと、メインホールにあったのと同じくらいの大きさのウィンドウがその場に展開された。そ

してそこに映っていたのは……
「その声は……」
「ハロ〜、モルガナよ！みんな、まだ生きてた〜？あら、元気なさそうね、どうしたの？」
この場にそぐわない能天気な声を出しているモルガナにキリトは思わずツッコもうとしたが……
「って、元はと言えばみんなあんたのせいだろうがぁーーー！！」
トキオがキリトよりも早く、盛大なツッコミを入れた。
「あんたが適当なせいで、どれだけオレたちがどれだけ苦労してると思ってるんだよ！」
色々溜まっていたのか、悲痛な声をしている。
「あらトキオ、せっかく大人っぽく振舞ってたのに、それじゃ地がでまくりよ。せっかくツッコミキャラからも抜け出せて、頼れるリーダーっぷりを発揮してたのにw」
わなわな震えるトキオに対しにやにやするモルガナ。そしてトキオがさらなるツッコミを入れようとした瞬間、図っていたかのように（いや、絶対にわざとだ……）モルガナが先にしゃべりだした。
「あ、そうそう、カイトの腕輪のある位置の検討がついたから連絡しに来たの、すっかり忘れてたわw今位置情報送るから、あとはよろしく〜」
そう言い残してスクリーンはブラックアウトした。
トキオは未だに怒り心頭でわなわな震えていたが、なんとか心を落ち着けられたのかさっと手元を操りメニューを操作した。そして目当てのものを見つけたのだろう、また頭を抱えだす。
一瞬考えこんだが、すぐにトキオはキリト達の方に顔を向けてきた。
「キリト、それにみんな……来て間もなくて、しかも基本的なレクチャーしかしてない状況ですまないんだけど、みんなの力が必要なんだ。頼む、力を貸してくれ！」
トキオによると、どうやら腕輪があるかもしれない場所は数箇所

あるらしい。そのうちのどこかには確実にあるらしいが、どれが本物かはまったくわからないのだそうだ。
「ま、やるっきゃないだろ！」
そう言ってクラインがキリトの肩を叩いた。
「ここはいっちょ働きますか！」
「これもイベント進行のためだしな……」
「そうね、ここはやるべきでしょう！」
みんな口々に協力に同意していく。
「乗りかかった船だしな……」
キリトはみんなが賛成なのを確認した後、トキオの方を見ていった。
「俺達はいつでもいいぜ。トキオ、指示をくれ」

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄでのパーティーの人数制限はないそうだが、あまり大所帯だと動きにくいため、フォーマンセルが基本で多くても５人１組らしい。今通常任務やスケィスの対応に追われていて、大多数の団員達が出てしまっているので、とりあえず１チームにつき１、２人団員を入れることになった。
第１パーティーがキリト（デュアルエッジ）、アスナ（ブレイド）、ユイ（ウォーロック）、そして団員からは欅（フリッカー）。
第２パーティーはリーファ（ブレイド）、サクヤ（ダンスマカブル）、アリシャ・ルー（グラップラー）で団員から昴（パルチザン）とミレイユ（ハーヴェスト）。
第３パーティーはクライン（ブランディッシュ）、ユージーン（ブランディッシュ）、エギル（パルチザン）、レコン（マルチウェポン初期ウォーロック）、団員からはぴろし３（パルチザン）が後から合流。
第４パーティーはシンカー（ウォーロック）、サーシャ（ハーヴ

エスト）、ユリエール（スチームガンナー）、団員からは一メトロノーム（特ツインソード）。
最後の第５パーティーはシリカ（ツインソード兼ビーストテイマー）、リズベット（フリッカー）で団員からは凰花（グラップラー）と月長石（ツインソード）が加わることになった。
「いや、これなんかおかしくねえか……？」
トキオはすでに現場に向かったので代わりにキリ★ランディ達がパーティー決めをしたが、クラインがそれに対して物申している。
「なんで第３パーティーだけ男ばっかなんだ？」
確かに他のパーティーに比べるとむさ苦しい気が（笑）
「おまえらのパーティーには特にきつい所に行ってもらうから、死んでも死ななそうな奴を選んだブヒ」
「あっ、そうですか……じゃねーーーっ！！なんだそりゃ！？」
クラインの絶叫を無視してキリ★ランディは話しを続けた。
「キリト達には欅が付くから問題ないブヒ。あとリーファ達はクライン達ほどではないが結構きつい所に行ってもらうから実力者で固めたブヒ。それからシンカー達にはちょっと特殊なところにいってもらうから編成も特殊ブヒ。最後にシリカ達には速さを求めるから身軽な編成にしたブヒ」
どうやらこの編成にはちゃんとした理由はあったらしい。
（まあユージーンもいるし、クライン達もあれでタフだから大抵のことは大丈夫だろ）
キリトがそう思っていると、クラインもあまり追求する気はなかったらしく、わざとらしくやれやれと肩をすくめてため息をつきながらもどうにでもなれというような身振りをした。
それを見たキリ★ランディは全員を見回して、高らかに号令をかけた。
「よし、それじゃ行動開始だブヒ！！」

腕輪探索（キリト編）－０１－

Λ大いなる　黄昏の　付喪神

「しっかし広いなぁ」
そう言ってキリトはだだっ広い草原を手をかざしながら見渡した。緑色の絨毯の上を、心地よい風が時々吹いて波のようにさざめいている。天気は雲ひとつない快晴で、こんな時でなければピクニックにでも行きたくなる陽気だ。いや、それより木陰で昼寝とか……
「このフィールドはＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄの中でもすごしやすい環境ですね。でも今は急がなくてはいけないので、堪能するのはまた今度ということで♪」
キリトの隣に立っている小さな角の生えた少年欅はおどけたように言うと、何やら笛を取り出し、ピーッ！と軽く一吹きした。
しばらくすると、彼方からドタドタドタッ！と土煙を上げながら、カバと牛を足して２で割ったような微妙な姿をした生物が２匹駆け寄ってきた。
「わー、かわいいですぅ！」
欅の側で立ち止まった妙な生き物に駆け寄るユイ（ていうか、かわいい……のか、あれ？）
「彼らはプチグソと呼ばれる種族の大人達です。右のナルシスト風の彼がクソキゾクで、左のパンクっぽいのがクソザロッカーです」
ボンジュ～ル！や、さっさと乗りやがれ！など個性的な挨拶をそこそこにすませ、欅とユイがクソキゾク、キリトとアスナがクソロッカーに跨り、クソキゾクを駆る欅を先頭に出発した。
外見とは裏腹に以外に乗り心地は良く、あまり馬などに乗りなれていないキリトやアスナでも快適に馬上の旅を楽しめる。
「あの黄色い円の近くに行くと普通はモンスターとエンカウントし

ちゃうんですけど、今は彼らに乗っているので大丈夫なんです」
欅が指差した黄色い円をいくつもやり過ごし走ること２０分、疲れることはないがただ走っているだけなので、これからどうするのかとキリトが欅に聞こうとしたちょうどその時、目の前に大きな城が見えてきた。その城は見るからに強いボスキャラがいますよ的な外観だったが、一番目を引かれたのは城の中央からそびえている天まで届くと言わんばかりの巨大な塔だ。
城の目の前まで着き、キリトたちを運んでくれたクソロッカーとクソキゾクが走り去っていくのをアスナとユイが手を振って見送った後、城をじっと観察していた欅がキリトたちの方を振り返り、ニコッと笑って話しを切り出した。
「あそこが今回の目的である腕輪の反応があった城です。あの中では強制的にエンカウントさせられるので、ここからは気を引き締めてくださいね♪」
おどけながらも少し真剣な感じで忠告する欅。
そんな欅に、キリトは軽いノリで返した。
「さすがに走ることにも飽きてきたし、戦闘は望むところだぜ。それに、実戦で動きやスキルの感じとかをチェックしたかったしな」
「あんまりはしゃぎすぎないでね、キリトくん。調子に乗ると、また痛い目見ちゃうよ」
「そうです。パパはいつもは格好いいけど、ときどき間の抜けたことしますし」
アスナとユイにいつもの調子でたしなめられ、苦笑いしながらキリトは先頭に立って城の門をくぐて中へと入って行った。

城の中に入ると、蝋燭の灯りが反射して大理石の床が冷たく光る、大きな広間に出た。城内はその蝋燭の明かりだけが光源なので薄暗く、城というよりは幽霊屋敷みたいだ。

「ここはモンスター達が巣くう城という設定ですから、こんな感じなんです」
「その言い方だと、他にも別な感じの城があるのか？」
「はい、そりゃあもう色んな種類がありますよ。まあでもそれはおいおいわかるでしょうし、今は目の前のに集中してください。ほら、見えてきましたよ」
広間の丁度中心くらいの位置にフィールドで見かけた黄色い円が浮いている。
「この城の敵はそこまで強力なモンスターは出ないですから、とりあえずはお手並み拝見しますね」
そう言って欅はキリトに道を譲った。
そう言われてしまったらキリトも引き下がれない。
「よーし、いっちょ暴れるか！」
キリトはエフェクトと共に剣を取りだし構え、黄色く輝いている円に突っ込んでいった。

「へー、やりますね。トキオさんから聞いた通りの実力です♪『環伐弐閃！』」
欅は嬉しそうに言いながら対峙しているゴーレム型モンスターを巨大な鎌で横薙ぎにして胴を断った。
「いやぁ、それほどでも『バクリボルバー！』」
キリトも強く踏み込んで、目の前に現れたゴブリン系のモンスター達に一気に接近し、炎を纏いながら高速回転するスキルで敵数体を一気に切り刻む。
「そうねぇ、キリトくんは強いよねぇ。ちょっと抜けてるところがあるけど！！」
アスナもさらに出てきたウルフ種モンスターの群れに高速の突きを喰らわせ一瞬にして塵に変えていく。

「じゃなきゃこんな状況にならないだろうし……」
「そこは、まあ、こういうこともあるということで……」
「僕もちゃんと言ってませんでしたしねw」
キリトが突っ込んだ円はモンスターを1グループ出した後すぐに消えた。
そのモンスター達はキリト一人で余裕で倒せたのだが、その後出てきた青い宝箱を誤って触れてしまったのが間違いだった。
宝箱はブービートラップだったらしく、触れた瞬間勝手に開き、その後すぐに四方の扉や通路に鉄の柵が落ちてきて通れなくなり、さらに追い打ちをかけるように宝箱があった場所には黒い魔方陣のような物が浮かび上がり、そこからモンスターが現在進行形でじゃんじゃん湧き出てきている。
「あの魔方陣を壊すには、ハーヴェストの特殊な呪紋が必要なんです。というわけでユイさん、よろしくお願いしますね」
「はい！まかせてください！」
ユイは目をつぶり、杖を両手でしっかりと持って集中している。
今のところキリトたちの役目は詠唱中の無防備なユイを守ることなのだが……
「こりゃ数が多すぎるな……」
「そうね、一体一体はわたし達の敵じゃないけど……」
「まあ詠唱にはそこまで時間はかかりませんし、これなら大丈夫でしょう♪」
欅の能天気な声を聞きながら、キリトとアスナはさらに湧いてくるモンスターの群れに突っ込んで行った。

「ふー、なんとかしのげたわね」
アスナがレイピアを鞘に入れながら溜息をついた。
その横で呪文の詠唱を成功させたユイもほっとした表情をしてい

る。
「いやー、でもみなさんなかなかいい腕前してますね♪」
「まあ、俺たちもダテに鍛えてないからな」
キリトはそう答えながら、こそこそとアイテム欄をチェックしていた。
そんな怪しい行動に気付いたアスナは、隠すひまもなくメニューをのぞいてきた。
「ゴブリンの生肉、サソリタンクの爪に……ヘビグソの尻尾！？」
「いや、アスナ、これは……」
アスナがじとーっとした目でこっちを見ていると、欅が余計なことを言ってきた。
「おや、これはなかなかのゲテモノ食材ですねw」
「いや、ＳＡＯやＡＬＯでもそうだったけど、こういうゲテモノな感じの食材が案外いけたりするんだよ！」
「そんなこと言って、誰に料理させる気なのかしら？」
「そりゃあネットでもリアルでも料理の天才アスナさんに頼みたいかなーっと……ってはい、無理ですね」
「無理です」
一言で切り捨てると、アスナはすぐにキリトのメニューを操作して全ての食材を消去してしまった。
「あーっ、もったいな……くないです、はい」
「もー、パパもそのいけそうならなんでもありっていうのは治した方がいいと思います」
キリトが心底残念そうに振る舞っていると、ユイが父親の情けない姿を見てため息をつきながら、あきれかえっている。
それを聞いてさらにがっくりとした感じを体全体で現したキリトに、欅が明るく話しかけてきた。
「まあ騎士団にもああいう面白い食材を集めたりしている人達の集まりがあるので、こんど紹介しますよ♪」

そんなこんなでキリトたちはさらに先に進んで行った。
それ以降は特にトラップといったものはなく、通常の戦闘だけだった。そしてただの戦闘でキリトたちがどうにかなるわけもなく……
「蒼天大車輪！！」
欅が空中で鎌を振り回して空中の敵を撃ち落とし、
「アニスラッシュ！！」
アスナが敵を細切れにし、
「獄炎双竜刃！！」
キリトが炎を纏わせた高速の剣戟をくりだし相手を灰にした。そしてキリトたちのうち誰かが少しでも傷つくと、
「ラウリプス！！」
ユイがＨＰを回復してくれ、まさに言うことなしだ。
しかしそんな快進撃も長くは続かなかった。

「行き止まり？」
今までも枝分かれした道は結構あったが、妖精のオーブ（レア度は中の上で結構貴重なものらしい）と言うアイテムを使っていたのですぐにマップが表示され、正しい道がわかった。
しかしマップを見てもどうやらここは完全な行き止まりらしい。
「いえいえ、そんなことないですよ。ほら、あれを見てください」
欅が指差す方向を見ると奥の方にリフトらしきものがあった。
もっと近くで見ようとキリトが歩き始めると、何かむにゅりとしたものを踏んでしまった。
「ピギャーーーッ」
それは面妖な悲鳴を上げると、スタコラサッサと逃げ去って行く。
「なんだ、あれ？」

キリトが闇に慣れた目をさらに凝らすと、リフトの近くにも何か丸っこいものが頭の上を薄ら光らせながらチョコマカ走っていた。
「ああ、あれはチムチムですね」
「チムチム？」
「へぇ、かわいいです」
アスナとユイがしゃがんで手を差し出して、猫にするようにおいでおいでとすると、何匹か固まっていたのがこちらによちよちと歩いて来て、二人にじゃれついてきた。
そんな和やかな雰囲気の中、そろりそろりとチムチム達の後ろからこっそり忍び寄っていた欅は、いきなりそれらの内の１匹をふん捕まえた。
慌てたチムチム達は、ピーピー鳴きながら欅の周りに群がって、必死に捕まった仲間を助けようとしている。
「ちょっ、ちょっと、何してるの欅くん！？早く放してあげなよ！」
欅のあまりにもいきなりな行動に、アスナはびっくりして慌てて問いただした。
「いやぁ、チムチムの頭の上に点いてる光の玉はこの世界にあるギミックを動かすことができるエネルギー源なんです。これがないとそのリフトも動かせないので……」
そう言いながら、欅はチムチムの頭の上の光る球をそっと取った。
「こうやって取るんです♪」
その後光る球を失ったチムチムを群れに帰してやると、一斉に逃げ出してしまった。
「でもどうやって採るんですか？もうチムチムさん達に警戒されちゃってますよ……」
確かに、先ほど俺が踏んだのに加えて、欅の行動で完璧にチムチム達に避けられている。
「手やチムチム取り網などの道具を使って捕まえるのもいいですし、ハセヲさんなんかは蹴りつけて玉を落としてますね」
「けっ、蹴り……」

そのあまりにもむごい仕打ちにアスナは絶句した。
「まあ玉が手に入ればいいので手段は問わないんですが、やっぱり蹴るのは……と思うならがんばって捕ましょう♪」
そう言うと欅は大鎌をしまい、大きな虫取り網（チムチム取り網？）を４本取り出しキリトたちに放ってよこした。

チムチムは外見通りすばしっこく結構捕まえるのに時間がかかったが、ほどなく必要な数をそろえられた。
「ふー、大漁大漁！」
「いやー、たくさん獲りましたね♪」
「ちょっと楽しかったです」
「虫取り網って使うの久しぶりだけど、やっぱりおもしろいわね」
最初はチムチムを捕まえるのに少し躊躇していたアスナとユイだったが、慣れればチムチム達と遊んでいるように感じたようだ（まあチムチム達にとってみたら大迷惑だろうけど……）
そんな感じでのほほんとしていると、不意に辺りが暗くなった。
元から暗かったが、今はまるで暗闇の中で数少ない明かりを一気に消されたかのようで、闇に慣れた目でも何も見ることができない。
そして続けざまにおどろおどろしい……というか恐ろしいんだけどどこか間の抜けているＢＧＭが部屋に響きわたった。
「あー、これはちょっとまずいですね……」
いままでトラップにはまっても動じず飄々としていた欅の声が、微妙ににげんなりした感じを含んでいた。
「欅、いったい……？」
キリトがさらに言葉を紡ごうとしたその時、暗がりからぬぅっと巨大な影が現れた。
「チィムチムゥ～～～！！」
それは部屋の天井に頭が付きそうなくらい巨大で、蝙蝠みたいな

羽が背中（？）から生えてる漆黒のチムチムだった！
「これはデビルチムチムです。チムチム達を捕まえているとごくご～く稀に出てくる激レアチムチムですね」
デビルと名がつくくらいだから凶悪なのだろうが、表情や姿に愛嬌があって、間の抜けた感じになっている……
「えーっと、レアってことはラッキー、てわけじゃないのよね……」
アスナが嫌な予感……と言わんばかりに欅に尋ねた。
「まあ数あるチムチムの中で当たりたくない類ナンバー1ですね。しかもダンジョンの中で会うとはこれまたやっかいな……」
「ダンジョンの中だとなにかまずいんですか？」
ユイが心配そうに尋ねると、欅はまた元の飄々とした感じに戻った。
「いえ、そんなにえげつないわけではないですし、ある意味最終的にはショートカットできていいんですが」
「ショートカット？ワープでもさせてくれるの？」
「いえ、ボクたちが今目指してるのはここよりさらに上の階の王の間なんですが、このチムチムは虐げられたチムチム達のためにプレイヤーに復讐する、というのを名目にいたずらすることが大好きで、ダンジョンにいる場合目的地と逆の方向に行かせようとするんです」
「逆？ってことは上じゃなくて……」
キリトが下を見て、それに全員がつられて床を見る。
するとその瞬間フッと足の裏に感じていた感触がなくなり、部屋の床が消え去って大きな穴が開いていた……
「はっ？ってうわーーーーー！？」
「きゃーーーーー！？」
「ひゃーーーーー！？」
キリトたちはどうすることもできないまま、真っ逆さまに落ちていった……

腕輪探索（キリト編）－０２－

「いたたた……あっ、キリトくん、大丈夫！？」
「ははは、なんとか……」
キリトはアスナとユイをかばって下敷きになるように地面に落ちたため、かなりのダメージを受けていた。
体中が軋むような鈍い痛みを感じながらも、ＨＰは半分ほどしか削られておらず、無事だった。
まあもしこれが現実だったら例え生きてはいても骨折やら痛みでまともに動けない（ついでに体の描写も１６禁になるくらいエグくなる）だろうが、ここはゲーム内（全年齢対象）なので、体に目立った外傷はなくすぐに痛みと痺れが引いていき、ほどなくすると体を動かせる程度になった。
「パパ、すぐに回復しますね！」
ユイはキリトの上から降りるとすぐに回復呪紋をかける。
緑色のやわらかい光に包まれ、キリトのＨＰゲージの欠けていた部分が瞬く間に埋まっていくと同時に、体を支配していた鈍い痛みが掻き消え、意識が完全にクリアになる。
「それで、ここはいったいなんなんだ、欅？」
キリトはいち早く起き上がって辺りを調べていた欅に尋ねた。
キリトたちが落ちたところは少し広めの地中を掘って作られたトンネルのようなところだ。高さは５ｍぐらいで立ち上がっても充分余裕があり、逆に横幅は人が４、５人に通れるくらいのゆとりしかなく、モンスターと遭遇した場合少し厄介かもしれない。
キリトの問いに欅はいつものように飄々とした感じのまま笑顔で答えた。
「どうやらここはトラップパークらしいです♪」
欅の話によると、落とし穴は序の口でここはチムチム特製のトラップパークで、名前通りトラップ満載の場所だそうだ。あの巨大チ

ムチムはいままで捕まえられ玉を奪われたチムチム達の怨みが集まってできたものらしい。それでも本来なら温厚なチムチムの怨みがあそこまででかくなるはずないのだそうだが……

「どうやらいちいち捕まえるのをめんどくさがってハセヲさんみたいに蹴りを入れる人が増えてから、あのチムチムは巨大化し始めたみたいですね」

（なんつうはた迷惑な……）

まあ今文句言ってもしょうがない……というわけで、時間もないしキリトたちは急いで出発することにした。

30分後……

「うっひゃーーーーーっ！」

数多のトラップをくぐり抜けそろそろゴールか……というかまだ終わらないのかこれ？と思っていると、それを察したのか緩めの傾斜の坂を下っている最中に『まだまだぁぁぁぁあ！！！』と、ツッコムかのように巨大な岩が転がってきた。

全速力で坂を駆け下りる俺たちの後ろからゴゴゴッ！と凄い音をたてながら巨大な岩が猛追してきている。

「なんなのもぉーーー！？」

「さっきからこんなのばっかりですぅ～！」

アスナとユイも俺の前で叫び声をあげながら飛ぶように走っている。

「あっ、あそこが出口みたいですね。みなさん、もう少しですよ♪」

そんな中一人俺達の先頭にたって走っている欅は飄々とした感じをまったく崩していない。

「通路を出たら左右に散ってくださいね。この先は崖になってますから♪」

欅はかなり重要なことをさらっと言ながらスピードを殺し、通路を抜けそのまま左の方に転がる。
「よし、アスナとユイは右に、俺は左に避ける！！」
「わかったわ！」
「了解です！」
岩との距離はまだ結構ある……出口まであと少し、いける！と、キリトが確信した瞬間、目の前でユイが転んでしまった。
「あっ！？」
アスナが急いで止まろうとするが、全速力で下っていたため急には止まれない。
「アスナ、ユイを頼む！」
キリトはそう言ってユイを拾い上げ、出口に向かって放り投げた。
アスナはキリトの言葉を瞬時に理解してくれ、出口ぎりぎりの所で待っていてくれた。
ユイをキャッチするとそのまま右の方に逃げる。
「キリトくんっ、早く！」
（くっ、間に合うか？）
岩はすでに俺のすぐ後ろにまで迫っている。
（だめだ、これじゃ曲がる為に一瞬止まって勢いを殺してる内に潰される……）
キリトが頭をフル回転させてなんとか打開策を叩き出そうとするが、出口は目の前。
だめか！？とキリトが覚悟を決めたその瞬間、出口の左側から腕が出てきた。
「キリトさん、つかまってください！」
キリトは無我夢中でその手を掴んだ！
手を出してくれた欅はそのままキリトを左にぶん回す。
「サンキュぐはっ……！？」
キリトはぶん回されながらも礼を言おうとしたのだが、勢い余って壁に激突してしまい無理やり中断された上に舌をおもいっきり噛

んでしまった。
「キ、キリトくん！大丈夫！？」
「パパーっ！しっかりしてください～」
「あはは、少し勢い付きすぎちゃいましたねw」
そんな言葉と岩ががらがら落ちて行く音を聞きながら、キリトは大の字になって少しのびていることにした……

「しかし、よくもまああんなにベタなトラップばっかり仕掛けたもんだ……」
キリトが呆れ半分感心半分で言うと、アスナがしみじみと話しだした。
「でもああいうのって、物語の中で出てくる分にはよくあるって感じで今さら特に驚かないけど、実際受けてみると結構大変だったね」
たしかに、迫る壁（槍衾付き）や大量の矢が飛んできたりとか、水攻めにされそうになったりとかいかにもという感じのトラップばっかりだったけど、どれも実際に体験してみると、結構新鮮に感じられた。
「まあアトラクションみたいで、楽しかったっちゃー楽しかったかな」
キリトがおどけた感じでいうと、みんな苦笑した。
「さて、キリトさんも回復したことですし、最後のトラップに引っ掛かりましょうか」
「あれ、まだトラップあるんですか？それに、引っ掛かる……？」
ユイが疑問符を浮かべると、欅がニコニコ顔で答えた。
「最後のはトラップというより王の間、つまり僕たちの目的地に一直線で行けるギミックがあるんです。
もともと温厚なチムチムなので、こちらが痛い目を見れば気が晴れて、最後にはいい風に働いてくれるんですよ♪」

「なるほど、だから大変だけどショートカットってわけか」
「はい。それはそうとみなさん、下に何か見えませんか？」
下？とキリトたちが崖に近づいて見降ろしてみるが、真っ暗で何も見えない。
「おい、欅、なんにも見えないぜ？」
そう言ってキリトが後ろを振り返ろうとした瞬間、後ろからポンッと背中を押された……
「は？ってまたこれかよーー！？」
「きゃーー！？」
「ひゃーーー！」
またまた転落コース……
「あ、出てきましたね、よかった♪」
どうやらキリトたちを突き落とした張本人も続いて飛び降りたようだ。
「みなさん、あれに向かってください」
よく見ると、遥か下の方に薄く光るネットみたいなものが見える。
キリトたちはとりあえず言われた通りに空中を泳ぎながら、なんとかそのネットの上の位置まできた。
「それではみなさん、飛びますよ♪」
「いや、飛ぶって、俺たちすでに飛んでて今は絶賛落下中っていうか……っあ、もしかして……」
「あれって……」
「トランポリンですか？」
3人で言葉をつないだと同時に、そのネットに触れた。
もの凄い衝撃を覚悟していたキリトだったが、あれほどの高さから落ちてきたのに衝突の痛みは全くなく、今までしていた風鳴り音がなくなり逆に静かになったくらいだった。
これなら大丈夫か？と一瞬思ったが直ぐに後悔した。
これはジェットコースターでいう頂上に達した状態であって……
「あれ、なんだか大丈夫そっって、うぎゃーーー！？」

「きゃーーー！？」
「ひゃっ……」
ものすごい勢いでキリトたちは飛び上がり、ぐんぐん上昇していく。
凄まじい圧力に歯を喰いしばって耐える。
キリトとアスナはまだなんとか悲鳴を上げる元気があったが、どうやらユイはダウンしたらしい。
ロケットにのって宇宙に上がるのってこんな感じなんだろうなー、なんて思いながら、キリトはとりあえず意識のないユイを自分の方に引き寄せ左手で抱え、残った右手をアスナに差しだした。
アスナがその手を握ったのを確認して、とりあえず目的地に着くまで待つことにした。

腕輪探索ーボス戦（キリト編）ー０１ー

「ぶはっ！」
「きゃっ！？」
「……」
飛び続けたキリトたちはようやく長い縦穴から抜け出し、塔らしき建物の広間にたどり着いた。
感覚的には何時間も飛んでたようだったが、実際は５分くらいしかたっていない。
「いかがでしたか、空の旅は？」
欅が何事もなかったかのように穴から飛び出してきてすとんと着地し、開口一番言ってきた。
「け～や～き～！！」
「あれ、もしかして怒ってます？」
欅がとぼけた様子で聞き返すと、キリトはへたり込んでいた体を起こした。
「あ、た、り、ま、え、だ、ろ！飛ぶなら飛ぶって先に言ってくれよ！」
「いやぁ、すみませんでした。でも実はあの岩に追いかけられ終わった時点ではまだチムチムの気が済んでいなかったので、しかたなくキリトさん達にさらに驚いてもらったわけですw」
「な、なるほど……ん？でも、もし俺たちが落ちてもチムチムが納得しなかったら、あのネットは出てこなかったんだろ？その場合どうなってたんだ？」
「……まあそんなことより、ついに目的地も目前ですよ♪」
まさかあのまま永遠に落ち続けてたんじゃ……
キリトはさらにツッコミをいれようとしたが、そんな考えはアスナの驚いた声を聞いた瞬間吹っ飛んでしまった。
「キ、キリトくん、外見て！」

「ん？……な、なんだこりゃ！？」
キリトが外に目を向けると、そこはとんでもない高さだった。
上は吸い込まれそうな闇色の宇宙に描かれた満天の星空、下には雲がところどころ広がり隙間からいくつもの島や海が見え、さらに地平線から太陽が昇ってくるのが見える。
「ここはもう大気圏を超えた高さなんですよ。どうです？絶景でしょ♪」
キリトとアスナはこの景色に呆然としてしまい、しばし言葉がでなかった。
写真や映像で見たことはあるが、実際（ヴァーチャルだが）見てみるとこんなにも綺麗なのか……
もちろんキリトもＡＬＯで空を飛んだことはある。しかしこんなに高いところから地上を見下ろしたことはない。
キリトはもっと近くで見ようと塔の淵に近づこうとした……が、欅のいつの間にか取りだした鎌の先を服の後ろに引っ掛けられ、無理やり止められた。
「ぐへっ！？げほっ、げほっ……何すんるだよ、欅！？」
キリトが少しえずきながら欅のほうを見ると、首を絞めた張本人は苦笑いしながら説明した。
「あんまり近づくと、落ちちゃいますよ♪」
キリトを引きとめた欅は入れ替わりで前に出ると、メニューウィンドウを開きユイと同じくらいの大きさのある立方体の金属質の塊を取りだし、それを床に滑らせる。
そしてそれが淵の近くに行った瞬間、もの凄い速さで外に吸い出され、真っ赤に燃えながら地上へと落下していった……
「ねっ？」
あっ、危なかった……
とりあえずキリト達はユイが起きるまでの間、淵から充分に距離をとって外の景色を眺めることにした。

ユイが少したってから起きてきたので、とりあえず小休憩を兼ねた作戦会議をすることにした。
「このさきの扉の向こうに腕輪が変化したボスがいるはずです。それを倒せば腕輪ゲットです♪」
欅がぷはーっとドリンクを一気に飲みきった後、気楽そうに言ってきた。
「簡単そうに言うけど、やぱり強いんだろ？」
「そりゃあもちろん。それになにか特殊な能力がついていると考えていいでしょう。あ、それとこれを……」
そう言って欅はメニューを操作し、シューゴが付けていたのと同じような腕輪をキリトたちに手渡す。
「これは？」
「前回話しに出てきた腕輪の簡易版のヴァリエーションの内のひとつです。これを身に着けていれば数回だけデータドレインの効力から身を守ることができます」
「データドレイン？」
「この腕輪のオリジナルの能力の一つで、相手のデータを改変し弱体化したりプロテクトを外すことができるんです。もしなんの防御策もない一般ＰＣがデータドレインを受けてしまうと、それだけで大変なことになってしまいますから」
「大変なことって、例えばどんなことですか？」
「……それはとりあえず言わないでおきます。まあ何回も受けなければ大丈夫なので、そこだけ覚えておいてください♪」
欅が言葉を濁したのに対して一抹の不安を抱いたキリトだったが、あまり時間が無い以上欅の言葉を信じるしかないと割り切った。

その後他のパーティーに連絡を取ろうとしたが、取り込み中らしく繋がらなかったので、とりあえず進むことになった。
欅を先頭に最後の階段を昇り切り、扉を開けるとそこは屋上に作られた闘技場のような場所だった。広さはかなりあり、だいたい感覚的には野球場くらいある。
そしてその中央に人影がぽつんと立っていた。それは全身が影のように黒く、その姿形はキリトたちが聖堂で対峙した葬炎や、グランホエールにいたシューゴにシルエットが似ている。
「これはまた、少しやっかいですね……」
欅が呟いたと同時に、その影はゆっくりとキリトたちの方へと顔を向けてきた。
全身真っ黒で、目があるかどうかさえわからないが、そいつが放つ視線はＮＰＣでは到底出せないような鋭く研がれたナイフを喉元に突きつけられたような、百戦錬磨のキリトをもぞくっと戦慄させるものだった。
キリトたちも相手の出方をうかがって動けずにいたので、お互い少しの間睨みあう形になったが、その静寂もすぐに破られた。
「グォォォォォオ！！」
そいつはいきなりものすごい雄たけびを上げると、体がぶくぶく膨れあがりどんどん巨大化していっった！
「ベースはやはり蒼炎の守護者のアバター形態ですか……」
欅はまた呟くと、キリトたちの方を振り返った。
「どうやら僕たちがあたりを引いたみたいです。では作戦通りキリトさんとボクで前衛を務めますので、アスナさんはキリトさんのサポートを。ユイさんは後衛でバックアップをお願いします」
一瞬、キリトはやっぱり欅一人で大丈夫なのか？と、尋ねようと思ったがすぐにやめた。
表面上は今までの飄々とした欅だが、発する気配が全くの別物になっている。
キリトが知りうる中で、これほどの圧力は今まで戦ってきた中で

はヒースクリフ、ユージーンやユウキ、そしてザザとやった時くらいだ。
敵じゃなくてよかった……という気持ちと手合わせしてみたい、という気持ちがキリトの脳裏を一瞬よぎったが、動き出した目の前の敵の動きによりそんな思考はすぐにかき消えた。
そして激闘が始まった。

腕輪探索ーボス戦（キリト編）ー０２ー

「アスナ、片方頼む！」
二つの巨大な輪が漆黒の炎を纏わせながらもの凄いスピードで回転しながら飛来してくる。
キリトはその輪に正面から突っ込んでいき、両手の剣を斜めに構える。
ギャギギギィッ！！
二本の剣をレールのようにして上を滑らせいなし、輪の方向をそらす。
見事に輪の描く軌道を明後日の方向に変えることはできたが、輪に触れた剣の刃の部分が両方とも黒い炎に浸蝕されぼろぼろと崩れ去ってしまう。
キリトはすぐに残った柄を投げ捨て、走りながらメニューウィンドウを操作し新たな剣を装備する。
しかしそれより早く、もう一つの輪がキリトの眼前に迫る！
「はぁっ！」
ガキィンッ！！
それを横からアスナが両手で持った片手剣で思いっきり叩きつけた！
強引に方向を変えられた輪は地面に突き刺さる。
輪は未だにギャリギャリッと回転しているが、かなり深く突き刺さっているので当分抜けないだろう。
しかしアスナの剣の刀身も、キリトのと同様ぼろぼろになって崩れ落ちてしまった。
「アスナ、下がってユイを頼む！俺は欅を援護しに行く！！」
「わかったわ！」
そう言ってキリトは前へ、アスナは後ろに駆けていった。

戦闘開始してからキリトは欅と一緒に前線で粘っていたが、データドレインでユイのいる後ろまで吹き飛ばされてしまった。
その後、先ほどの二つの炎輪に邪魔されて手こずったが、アスナの援護もありなんとかキリトは孤軍奮闘している欅のいる敵の目の前、最前線まで戻ってこれた。
「欅、大丈夫か？」
キリトは聞きながら敵の二振りの巨大な剣から繰り出される攻撃を半分自分に引きつけ、欅の負担を減らす。
「あっ、キリトさん、お早いお帰りで♪」
欅はそう言いながらも敵の猛攻をまるで舞踊でもするかのようにふわりと避けている。
一撃喰らうだけでもがっつりＨＰを持っていかれ、おまけに腐食効果まである攻撃を紙一重で避け、隙あらばすかさず反撃している。
「まあ、ホント言うと結構きつかったんですけどね」
キリトが後方から戻ってくるまで欅は一人で敵の攻撃をほぼ完璧に捌き切っていた。
しかし、どれだけ避けても敵の攻撃は少しづつかすっていたらしく、ダメージは確実に溜まっているようだ。武器はところどころ崩れかけ、いつもの飄々とした表情からは少し疲れが見え隠れしている。
「というわけで一旦下がって装備の変更をしたりするので、３０秒ほど頼みますね♪」
「まかせろ！」
キリトは短く答えを返し、メニューウィンドウの装備品の武器欄をスクロールして、一気にありったけの武器を選択して、上へと放り出した！
アイテムポーチから飛びだし、重力に従って雨のように降ってきた無数の剣で敵と己の周りを埋め尽くした後、キリトは刀身がぼろ

ぼろになった剣を放り捨て、地面から新たに二本の剣を抜き取り構えた。

後方でユイは一人小型モンスターの大群に囲まれ波状攻撃を受けながら、辛くも善戦していた。

「リウクルズ！」

広範囲の水属性の攻撃が敵を押し流していく。

しかし敵はあまりダメージを受けた様子はなく、ふらつきながらも直ぐに起き上ってまたユイへと向かう。

「やっぱり、無詠唱じゃきついです……」

そう言いながら、ユイは新たに短い詠唱を始めた。

このゲームの呪紋の使用は、詠唱と無詠唱で別れる。無詠唱はその呪紋を言えば直ぐに発動するもので、前線のジョブも使うことができる。しかしその威力は弱く、牽制や撹乱くらいにしかならない。逆に詠唱すると、かなり隙はできるがその分強力な呪紋になり、使い手であるＰＣのステータスや相手との属性の相性によっては敵を瞬殺することもできる。

また、詠唱は省略することもできるので、敵の強さなどで色々と変えることも可能だ。

ユイの力なら、本来は少し長めの詠唱をすれば眼前の敵を一掃できるのだが、いかんせん敵の攻撃が後を絶たず、短い詠唱しかできずジリ貧状態になっていた。

本来これらの敵を全て引き受けていたアスナは、前線から吹っ飛ばされてきたキリトを前に戻すために一時的にユイを無防備にさらすのを覚悟でキリトの援護に集中している。

「ふーっ、結構大変です……あっ、ママ！」

「ユイちゃん、大丈夫？」

アスナはユイの周り群がっている敵に光速の突きを喰らわせ、一

気に蹴散らす。
「ユイちゃん、さっそくで悪いんだけど、アプバクス（炎耐性ＵＰ）とアプアンダ（闇耐性ＵＰ）、それとアプドゥ（スピードＵＰ）がもう切れてるから、またみんなにかけて。その間も、またしっかり守るから！」
「はいです！」
そこにキリトに前線を任せた欅が敵を蹴散らしつつメニューウィンドウをもの凄い速さで操作するという離れ業をしながらユイたちの元へと駆けてきた。
「すみません、ユイさん。ついでに僕がい今までしていたグランホエールの工房とのアクセスもお願いします。さすがにあの敵相手だと片手間にやるのは少々骨なもんで」
敵の攻撃が武器腐食効果（それも防ぎようのないくらいもの凄く強力な）を持つと分かった後、欅はすぐにグランホエールのグランディ達と連絡を取り、工房から直接武器をキリト達のアイテム欄に転送して貰うよう手はずを整えたのだ。
「わかりました、任せてください！」
欅はユイに権限を譲渡して装備を整えると、休む間もなくすぐにキリトのいる前線に戻って行った。
「そちらはどうですか、グランディさん？」
ユイが補助や回復呪文を無詠唱でテキパキかけながら、モニター越しに工房で武器をせっせと錬成しているグランディ達に話しかけた。
「見ての通り、大忙しだブヒ！特にキリトの武器消費量が半端なくて、生産が追いつかないブヒ！！」
文句をいいながらも機械を操る手は休めていない。
グランディ達にも今回の敵が生半可のものではないとわかっているのだろう。
「もう少しだと思うので、がんばりましょう！」
「まあ、善処するブヒ……」

キィンッ！
「くっ、次！」
キリトは避け切れず剣で防御してしまった敵の攻撃により、またぼろぼろになった剣を捨て、半歩下がって追撃の一刀を避けながら新たに地面に刺さっているのを掴む。
欅が下がってから、キリトは一人で敵の攻撃を捌きながらも隙を見て少しづつ反撃していた。
周りに刺してある剣はすでに半分以下になって辺りには柄だけになった剣の残骸があちこちに転がっている。しかしこれだけの剣を消費した甲斐あって致命傷は受けず、さらにかなりのダメージを敵に負わせることに成功している。
しかしいくら致命傷は避けているといってもかなりのダメージが精神的疲労と共に看過できないところまで溜まってきている。
ユイが後ろから時々回復魔法をかけてくれていたが焼け石に水で、さっきからＨＰバーがレッドゾーンとイエローゾーンをいったりきたりして、キリトの気力と体力をもガリガリ削っていく。
と、ここで欅が前線に復帰してきた。
「お待たせしました、キリトさん♪」
体力を全快して装備も新調し、さっきよりはずいぶんましになっている。
しかし、やはりすぐには激戦の影響は抜けきらないのか飄々としている中にまだ疲れが見え隠れするのをキリトは見逃さなかった。
「なんだ、もう帰ってきたのか。こっちはそろそろ一人で片付けようかと思ったところだぜ」
キリトが手を休めないで調子よく言うと、欅が珍しく笑顔でわなく苦笑した。
「そうですか。でもまあ本当にあと少しだと思うのでもうひと踏ん

張りしましょう♪」

「これで終わりだ！旋風滅双刃！」
「いきますよっ、天葬蓮華！」
ドーーーンッ！！
キリトと欅の最後の一撃が激しくエフェクトを輝かせながら決まった。
もの凄い音をたてながら敵の巨体が倒れていく。どうやらなんとか倒せたようだ。
「ふーっ、やっと終わったか」
「大変だったわね」
「もうへとへとです」
キリトたちがその場にへたり込みそうになりながら勝利の余韻に浸っている中、一人欅だけがメニューを忙しく操作している。
「おかしいですね……敵を倒したことにより出現した腕輪の反応が小さすぎます。これではまるで……」
欅がさらに言葉を紡ごうとしたが、キリトはその先をすぐには聞くことはできなかった。
なぜなら目の前で倒れ、崩壊したはずの敵が核である腕輪を中心にどんどん復元していたからだ！
「さっ、再生した！？」
「なにそれ！？」
「反則です～！！」
思わぬ事態にもかかわらず、キリトはすぐにアスナとユイの前に立ち両手に剣を構えて警戒する。すると、先ほどまでメニューを操作していた欅が顔を上げた。
「わかりました、この敵は腕輪の一部を元に構成されているんです」
「腕輪の一部？」

「はい。つまりなぜ腕輪の反応が複数したかというと、どれも本物だったからです」
「それで、どうすればこいつを倒せるの？」
「クラインさん達他のパーティーが向かった先の腕輪のボス達と同時に倒せば大丈夫なはずです。
ユイさん、至急みなさんと通信を開いてください」
「はいです！」
そうこうしている内に着実に敵は元の形を取り戻しつつあるが、その再生速度はかなり遅く、完全に復元するのには時間がかかりそうだ。
「どうやら再生するのは時間がかかるみたいですね……再生が完了する前にまた叩いて……」
「そして他のみんなとタイミングを合わせてこいつを倒すと」
「はい、それも調べた結果によると誤差1秒以内で倒さないとダメみたいですね」
誤差1秒……
「まぁ、やるしかないか……よし、少し危険だけど、ユイは中距離で援護と他のパーティーとのタイミングの調整、欅とアスナは俺と一緒に前衛を頼む。
これで一気に片付ける！」
「わかったわ！」
「がんばります！」
「了解です♪」
そしてキリト達の戦いは最後の局面に入った。

腕輪探索ーボス戦（キリト編）ー０２ー（後書き）

呪紋の詠唱と無詠唱は、自分が考えたオリジナルルールです。
これがあればウォーロックとかハーヴェストもさらに活躍できると思いましたので、付け加えました。

あと、今回キリトが剣をばら撒いた時の風景は○ーチャーの無限の○製か、ソウル○ーターのミフ○を思い出してくれればいいと思います（笑）

VSスケィス－01－（前書き）

今回は前回のキリト達の戦いから場面を移してカイト達の戦いになります。

VSスケィス－01－

－Δ萌え立つ　過越しの　碧野－

そこは普通に入れば初心者向けらしく、だだっ広い草原が広がるフィールドだ。

しかし、今はところどころテクスチャが剥がされ、剥き出しのデータの羅列がフィールドの風景を虫食いのように侵食している。

そしてその中央で、激しい戦闘の光（エフェクト）が煌めいては消えていた。

「みんなっ、データドレインが来る！後ろに下がって！！」

スケィスオリジンの持つ赤い十字型の杖に光が集まっていく中、カイトが急いでみんなに指示を出した。

全員がすぐに反応してカイトとシューゴ以外の団員が安全圏まで下がる。

そして退避がぎりぎりすむかすまないかの瞬間、スケィスはデータドレインを放ってきた。

幾何学模様の帯を纏った巨大な黒い球体が、真っ直ぐカイト達に向かう！

「シューゴ、いくよ！」

「任せてください、カイトさん！」

カイトとシューゴは並んで腕輪を付けた腕を前に突き出し叫んだ。

「「ＤＰＷ（データプロテクティングウォール）ッ！！」」

カイトとシューゴの腕輪が展開し巨大な壁を作る。

そして衝突！

球体と壁がせめぎ合い、ものすごい衝撃波を生み、対消滅した。

「くっ！」

「うわぁーーーっ！？」

爆風で吹っ飛ばされ後退させられたカイトとシューゴと入れ替わ

る形で全員が前に出る。
「次、スケィスアバターＸｔｈの拡散ビームが来る。クーンと彩花のガンナーチーム及びＨＯＴＡＲＵ、朔、ガスパーのウォーロックチームは迎撃したまえ」
扇をタクトのように振りながら八咫がテキパキ指示を出す。
「黙示録の獣（ハセヲビーストｖｅｒ）は引き続きなつめ、レイチェルとニューク兎丸で対処。周りから湧き出ている雑魚はガルデニア、砂嵐三十郎とシラバスに加えカイトとシューゴもウイルス浸蝕度を減らす為に防衛線に加わりたまえ。それとあれらは……」
八咫が雑魚敵と獣の後ろで圧倒的な存在感を放っている今回の回収対象である3体のスケィス、スケィスオリジン、スケィスアバター１ｓｔとスケィスアバターＸｔｈを扇で指した。
「ブラックローズとレナ、ハセヲと揺光、トキオでなんとか持ちこたえ、ハーヴェストチームは援護と回復を後方で継続」
とここで淡々とした口調の中に覚悟するかのように少し間を入れた。
「……そして後は彼らを待つだけだ」

すでに戦闘が始まってから2時間以上経過していたが、状況はかなり劣勢だ。
緊急召集だったので騎士団員達はベストメンバーを集められなかった上にパーティーの編成も急造……しかしそこは百戦錬磨の猛者揃い、パーティー内の意思の疎通はかなり高度な部類な上に、パーティー関の連携も円滑で攻略部隊として充分機能していた。
通常のボスクラスなら、数匹まとめてでもなんなく倒せただろう。
しかし相手はスケィス、それも3体と獣＋倒しても倒しても湧いてくる雑魚敵による波状攻撃により、戦線を維持するために全員がスケィス達に向かっていけてない。

さらに度重なる敵のデータドレインを防ぐ為に腕輪（簡易版のため、出力は弱いがウイルス浸蝕度も低い）を多用したことにより、カイトとシューゴの体はノイズまみれになってきていてる。
雑魚敵を倒して少しは浸蝕度を下げているものの、限界に近い。
そしてこの状況を打破することができる唯一の希望であるキリト達からの知らせはまだない……
戦闘が続く中、この不安要素がだらけの状況は、確実に騎士団のＨＰと共に体力と精神をも削っていった。

「ああもう、うざったい！」
彩花が悪態をつきながら、両手に下げた一対の小型紋章砲を構える。
紋章砲とは、かつて神を討つ為に作られたという古代の兵器で、彩夏のもつそれは現在の技術で小型化したものという設定の、激レアアイテムだ。
ＳＰを消費して放つ特殊攻撃で巨大なビームの奔流を作り出し、スケィスの放つ拡散ビームを薙ぎ払い、次々と空に閃光を咲かせた。
「取りこぼしは任せな！『烈球繰弾！！』」
彩花の隣に立つクーンは彩花が撃ち漏らしたビームを連射してピンポイントで撃ち落としていく。
先ほどからスケィスＸｔｈは前に出てくる様子はないが、代わりに遠距離砲撃を雨、いや、スコールのように浴びせてきている。
「マダマダイキマスヨ！オルレイザス！！」
片言の日本語のＨＯＴＡＲＵが詠唱した光の束がいくつかのビームを相殺する。
「いい加減しつこいわぁ！オルザンローム！！」
朔が作りだした巨大な竜巻が防壁となり、後方にいるハーヴェストチームの一帯だけ砲撃の嵐から免れた台風の目のようになる。

「ふえーん、もうぎりぎりだぞ～オルパクドーン！」
ガスパーも泣き言をいいながらもせっせと詠唱し、巨大な爆発を引き起こしてビームを次々と誘爆させていく。
５人共必死になって砲撃を食い止めている。しかし……
「くっ！防ぎきれない！？司、ミストラル、援護を頼む！！」
「了解だよ～＾＾」
「もう、しょうがないなあ……」
とうとうハーヴェストチームからも援護にまわってもらわなくてはならない状態になってきている。
「ミストラルおねーちゃんたちがぬけてもまだなんとかがんばれるとおもうけど……」
必死に司達が抜けた穴を埋めようと連続詠唱をしながら望が呟いた。
「これ以上戦いが長引くと、ＳＰもアイテムも尽きちゃうね……」
カズが疲労しきった顔で残り少ない匠の気魂をハーヴェストチームで残った自分と望、そしてアトリに使い、ＳＰを回復させながら溜め息交じりに言った。
「それでも、今は精一杯頑張りましょう、みなさん！」
そんな暗くなり気味の雰囲気をアトリは空元気の声を上げてなんとか鼓舞しようとしたが、その声も次々に起こる爆音に掻き消されていった。

「ウガァァァァァッ！！」
黙示録の獣が３本の尻尾の内１本をニューク兎丸に叩きつけた。
「うぉっ！？くっ！やっぱりこのネタじゃダメか！」
「あかんわぁ。もうネタが尽きてもうた……」
「あのぉ、やっぱりこれって意味ないんじゃないですか？」
ニューク兎丸とレイチェルがやってることに対し最初から懐疑的

ななつめが呟いた。
そう、彼らはこの状況下で漫才をやっていたのだ（笑）
普通ならこんな状況で漫才って……と思うだろう。しかし一応効果はあるのだ。
黙示録の獣は知能が低く、簡単に命令を忘れて本能のままに行動するので、面白いものを見せていれば自然と集中して動きも止まる（んなアホな……）
事実、八咫の指示があって開戦からずっと漫才をやっているが、時々やってくる雑魚敵（これにはなつめが対処）以外は戦闘はまったく行われていない。
しかしどうやら漫才にも飽きてきたらしく、時々尻尾でツッコミを入れてくるようになっている。
この均衡が保っていられるのも長くはないらしい。
そして……
「おっしゃ、なら次は伝説のダジャレ１００連発いくぜっ！ってどわーーーっ！？」
「あ、ニューク……って、どひゃーーぁっ！？」
「レイチェルさーん、ニュークさーん……」
どうやらもう完全に飽きたらしい獣は、尻尾でニュークとレイチェルを吹っ飛ばしてしまった。
ニュークとレイチェルが空の星になり、なつめの呟きが空しく消える中、獣は今度はなつめにタゲをあわせた。
「あっ、ちょっとまずいかも……」
一人取り残されたなつめは少し怯えてガクガク震えながらも、愛剣であるスパイラルエッジ改をエフェクトとともに取り出し構える。
「グルルルルゥ……」
対する獣は低く唸りながら、何も持たず大上段に構えを取ったかと思うと、一気に振り抜いた！
「ガァァァァァッ！！」
獣の上の空間に亀裂が走り、そこから大量の武器が現れ、そこら

中に降りそそぐ。
そして獣はそのうちの大剣二本を無造作に引き抜き両手に持ち、三本の尻尾に器用に双剣を巻き込み、いざなつめに向かおうとした。
しかし、その後目にした異様な光景に獣の動きが固まった。
「うふっ、うふふふふ……双剣がいっぱいですぅ～」
なつめはさっきまでと打って変わった不気味な雰囲気を醸し出し、眼をとろんとさせながらそこら中に突き刺さっている双剣を見つめている。
そしてその視線が獣の尻尾に巻きついている双剣に留った。
「あ～っ、それは、トライエッジィ……」
その言葉と雰囲気に、獣はおもわず後ずさった。
「それぇ、くださぁい～～！！」
「うっ、ウガァァァァァーーーーッ！？」
獣の悲痛な叫び声がその場に響いた……

「ふっ、計画通りだな……」
八咫がメニュー画面を見ながら呟いた。
なつめのＰＫモードは当初の計画通り問題なく発動していた。
レイチェルとニューク兎丸の漫才があれほど時間を稼げたのはいい意味で予想外だったが、これで当分獣は抑えておけるだろう。
「しかし、他は少々まずいかもしれないな……」
Ｘｔｈの砲撃迎撃部隊、援護部隊はすでに疲労困憊の状態。
そして雑魚敵の大群や本命のスケィス達を相手にしているパーティーも……

VSスケィス－01－（後書き）

データプロテクティングウォールは自分が考えたオリジナル技です。データドレインって、ゲーム内だと喰らうしかなかったけど、なんか防ぐ方法がないと腕輪の加護がない一般プレイヤーとかを助けられないだろと思って、このスキルを考えました。

VSスケィス－０２－

「こいつぁーかなりきついぜ……叢雲！」
溜息をつきながら砂嵐三十郎はナイフ型モンスターの一群に紫電を纏わせた斬撃を浴びせて塵に変える。
「はぁっ！ギジュボルテクス！！」
その近くではガルデニアも片手で槍を回しながら一気に敵ゴーレムの大群に突っ込み、切りこんでいった。しかし防御力の高いゴーレム系のモンスター達のＨＰを削り切ることができず囲まれてしまう。だが、ガルデニアの目的は敵に囲まれること、つまり相手の懐に潜り込むことにあった。ガルデニアの槍に新たに緑色の光が宿る。
「喰らえっ！ジュワイプアウト！！」
自分に群がってきた敵に弱点の木属性の力を宿した槍を横薙ぎにすることにより、一瞬にして全ての敵を断ち切る！
敵がポリゴンの欠片となって散っていった場で少し息を整えていたが、すぐに新たにゾンビ系モンスターの群れが、近くで現れ始める。
「まだまだっ！次！！」
疲れた体に活を入れ、ガルデニアは次の敵に向かって駆けていった。

「ゴブゴブーー！！」
「うわぁーー、ちょっとタンマーー！？」
ゴブリンの大群が残虐な笑みを浮かべながら、纏めてある後ろ髪をぴょんぴょん跳ねあげながら逃げまわるシラバスを追いたてている。
しかし後ろから追いかけているので、ゴブリン達はシラバスの表

情に気付ていなかった。
「ゴォブゴブゴブーー！！ゴブッ……？」
シラバスが逃げている途中で宝箱を落としていったのだ。
光り物に目がないゴブリン達は早速箱のまわりに群がって親分格のゴブリンが開けた瞬間……

ドッカァーーーーーーーーーーーン！！

「ゴッ、ゴブーーーー！？」
宝箱が大爆発した。
ゴブリン達は宙高く吹っ飛ばされ、どすどすと落下していく。
だが大ダメージを喰らったものの致命傷にはならなかったらしく、ほとんどのゴブリンが3分の1以上ＨＰを残している。
ゴブリン達は煮えたぎる怒りを瞳に宿し、反撃に移ろうと起き上ろうとした……が、体が動かない！なんと麻痺状態になっている！？
「ふふふっ、残念だけど浅はかだったね♪」
そう言ってシラバスは動けないゴブリン達に順にとどめを刺していった。
しかしシラバスは満面の笑みを浮かべながらも内心は焦っていた。
今回も上手くいったが、この手のトラップはすでに尽きかけているのでもう何度も使えないのだ。そして、すでに新たに大量の魚介系モンスターが近くで出現しはじめている。
「さてと、これからどうするかな……」

ところ変わって最前線。
「くっ、レナ、挟み撃ちにするわよ！」
「はいっ、ブラックローズ先輩！」
ブラックローズの掛け声に答えながら、スケィスオリジンをブラ

ックローズと挟む形になるようレナは移動した。
「いくわよーっ、ガンズマキシマ！」
「くらえーーっ、ライオマキシマ！」
ブラックローズとレナの下段と上段を組み合わせた大技がオリジンにクリティカルヒットした！……にも拘らず、そんな攻撃なかったかのようにオリジンは反撃とばかりに十字架状の杖を横薙ぎに振り抜いてくる。
「なんですとーっ！？」
「きゃっ！？」
二人とも剣でガードしたがかなりのＨＰを持っていかれてしまった。
すぐさま回復したものの、アイテムの残りももう少ない……レナの顔に不安がよぎる。
しかしその不安を吹き飛ばすかのようにブラックローズが叫んだ！
「まだまだぁーっ！こんなんじゃあたしたちを倒せないわよっ、スケィス！！ほら、レナもボーッとしてないで、シャキッとするシャキッと！！」
その声に少し気力が戻ったのか、レナは元気に答えた。
「はいっ！よーっし、お兄ちゃん達が戻ってくる前に、ぼこぼこにしちゃいましょう！！」
そして二人はスケィスに再度切りかかっていった。

「うぉらーーーぁ！ワギリランゼツセン！！」
大鎌を装備したハセヲが連続で鎌を振り抜き切り無数のカマイタチを生んだ。
そしてその後ろに潜んでいた揺光が前に飛び出す！
「喰らいなっ！旋風滅双刃！！」
双剣から繰り出す連撃がスケィス１ｓｔに降りかかる。

そして止めとばかりに１ｓｔの後ろに回り込んでいたトキオが両手に持った二振りの剣を振りかぶった。
「いっけぇー！連牙・昇旋風！！」
全員の攻撃が１点に重なり、１ｓｔは閃光に包まれ大爆発、そしてあたりに煙がたちこめる。
「やった……？」
揺光が期待半分疑い半分で呟いた。
「はんっ！あの程度で俺のスケィスがやられるわけねえだろうが」
煙が晴れると、そこにはほとんど無傷のスケィスが立っていた。
「はぁ、まあそうだよな……」
トキオがため息をつきながら剣を構える。
それにならって揺光も双剣を構え、ハセヲも一旦大鎌をしまい、新たにエフェクトと共に大剣を取りだした。
そして、また終わりの見えない戦闘が再開した。

「よし、少しはましになったかな……」
カイトは最後のゴブリンを倒してから呟いた。
近くにいた相当な数の敵の群れを倒したので、侵食値もだいたい半分くらいになっている。
「くらえーっ！雷神独楽！！」
少し遠くの場所ではちょうどシューゴも最後のリザード系モンスターを倒したところだった。
見た感じだとシューゴもかなりの数をこなしたらしく、ノイズがほとんど治まっている。
「あっ、カイトさん！」
こちらに気づいたシューゴが駆け寄ってきた。
「お疲れ。ここも結構きついけど、そろそろ前線に戻らないと。いくらブラックローズ達でも、スケィス相手だからぎりぎりだろうし

……」
カイトはガルデニア達に向かって叫んだ。
「というわけで、僕達は前線に戻るから後は頼んだよ、みんな！」
そう言ってすぐにブラックローズ達がいる前線に向かう最短コースを敵を蹴散らしながら突き進んでいった。
「あっ、待ってくださいよ～それじゃあよろしくお願いしますっ、先輩方！」
シューゴもそれに習って叫ぶと同時にカイトの後を追い、共に新たに現れた敵群を突破し、前線へと駆けていった。

そしてさらに1時間が経過した……

「ぐっ！？」
剣士型モンスター達の刃がガルデニアの体を串刺しにした！
身動きの取れないまま、どんどんイエローからレッドゾーンに減っていくＨＰ……
「くそっ、煌火！！」
駆け付けた砂嵐三十郎が敵の真っただ中に飛び込み、攻撃を位ながらも捨て身のスキルで敵を蹴散らす。
なんとかその場の敵は全て倒せたが、その後すぐに膝をついてしまう。刀をついて気力で倒れこむのを防いでいるが、手放した瞬間その心も折れてしまうだろう。
「くっ！すまない、砂嵐三十郎。完治の水……」
刃から解放されたガルデニアは最後の回復アイテムを砂三十郎に使って、力尽きその場に倒れこんでしまった。
「ガルデニアっ！？」
回復されたＨＰゲージはグリーンゾーンに戻ったものの、削りきられ摩耗した精神はぼろぼろのままだ。

それでもなんとか倒れたガルデニアのところまで行き、抱き上げる。
「シラバスッ、俺はガルデニアを連れて一時後退する！援護してくれ！！」
「って、そんな無茶な！？」
植物系と機械系モンスターの２つの敵の群れを同時に相手にし、きりきりまいのシラバスは「むりむり！」とジェスチャーで示したが、砂三十郎の腕の中でぐったりしているガルデニアを見てその動きが止まる。
そして頭を抱えて一瞬悩んだが、すぐに返事をよこした。
「あーもうっ！わかった。こうなったら残りのトラップ全部使う勢いでいくから、何とか一人で持ちこたえとくよ。でも、あんまり長くは持たないと思うけど……」
「すぐ戻ってくるから、安心しな！」
そう言って砂嵐三十郎は後衛がいる位置まで、今だせる精一杯のスピードで駆けて行った。

「あちゃー、このままじゃあこっちも持たないなぁ」
Ｘｔｈの砲撃が一旦やんだのでやっと一息つけたクーンはおどけた調子で言ったが、体は言葉通りにふらふらになりながらもなんとか立っている状態だ。
すでに彩花、朔とＨＯＴＡＲＵらＸｔｈのビーム迎撃チームは疲労の為後方で休んで（倒れて）おり、今ちょうど戻ってきた砂嵐三十郎に抱きかかえられたガルデニアもそこに横たえられた。
ウォーロックチームで動けるのはもはやガスパーのみ（そのガスパーもすでにへろへろ状態）で、ハーヴェストチームから迎撃にまわった司とミストラルのおかげでなんとか耐えてはいるが、二人共疲労の色は濃く、力尽きるのも時間の問題だ。

ハーヴェストチームに残った望、カズとアトリも手持ちのアイテムはほぼ全て使いきり、なんとかＳＰを自然回復させながら援護しているが、もう完全に需要に追い付けていない。
獣と戦っているナツメも善戦はしていたが、さすがに息切れしてきたのか先ほどから徐々に押されてきている。
今はまだ戻ってきたニュークとレイチェルの援護のおかげで、危うい均衡を保てているが、いつ崩されてもおかしくない……

「うわっと！？」
髪を数本切られながらも、揺光がすんでのところでスケィスの鎌を避ける。
しかし、すかさず後ろに控えていたスケィスオリジンの十字架が揺光に向かって振り下ろされる！
「うぉーーー！」
「はっ！」
「とりゃーっ！」
ブラックローズ、レナとトキオが間に入りなんとか弾き返そうとするが、逆にまとめて弾き飛ばされてしまう。
さらに追い打ちをかけるように三体のスケィスが一斉に構えをとった。
「まっ、まずい！？」
カイトとシューゴはすかさず腕輪を前に突き出し防壁を展開する。と同時にスケィス達からデータドレイン×３が放出された！
「「うおぉぉぉーーーー！！」」
ハセヲと起き上ってきたトキオに後ろから支えられて、なんとか耐えるカイトとシューゴ！
二つの力の塊りが激しくせめぎ合い、そして弾け飛んだ！！

ズドォーーーーーーーーンッ！！

大爆発が起き、一瞬にして一帯が煙で埋め尽くされる。

もうもうとたちこめる煙が晴れると、そこには倒れ伏すカイト達の姿。そしてカイトとシューゴの右手に付けてあった腕輪は黒く変色しボロクズのようになっており、さらに体中が覆い隠れるぐらいノイズが走っている。

「くっ……」

カイトは何とか体を起こそうとするが、緩慢にしか動けない。

特に右腕は腕輪を付けていた部分が発する激しい痛みで、一瞬でも気を抜いたら意識が吹き飛びそうだ。

なんとか頭だけ動かして周りを見るが、そこには仲間たちがゴミ屑のように転がっている姿と、スケィス達がこちらに向かってくる絶望的な状況しか見ることができなかった。

後ろの方から砂嵐三十郎達が持ち場を放棄して駆けつけてくるのが見えたが、どう考えても間に合わない……

「まだっ……まだ諦めるもんか！！」

カイトはガンガンしてきた頭を少しでも明瞭にするために叫び、最後の力を振り絞って立ち上がった。

そしてふらふらとしていうことを聞かない体に活を入れ、なんとか双剣を構えてスケィス達に特攻ししようとした、その瞬間！

「おしっ、出れた！って、高い！？」

突如上から声がしたかと思うと、遥か上空で空間が裂け、そこからデータで見たキリトという異邦の剣士が自分と同じくらい傷だらけの上にぼろぼろな格好で現れた。

そしてその手には朝日のように燦然と輝く≪薄明の腕輪≫が握られている！

「おっ、あんたがカイトか？とりあえず、受け取れーーーっ！」

そう叫ぶとキリトはもの凄い速さで腕輪をカイトめがけて放り投げた！

カイトは反射的に双剣を手放して右腕を真っ直ぐ上に突き出す。
慌ててこちらに向かってくるスケィス達だが、すでに腕輪はカイトの腕に装備された。
カイトは右腕をスケィス達の方に向け、腕輪を展開させる。花弁が開いたような状態になった後、溜めを作る時間も惜しんでカイトはあらん限りの声で叫んだ！
「ドレインハート！！」
放たれた力の奔流は、スケィス達に直撃し、そしてあたりが閃光に包まれた……

ＶＳスケィス　ー終局ー

少し時を遡り、キリト達ＶＳ腕輪の化身場面に戻る。

「うおーーーっ！！」

キリトは右手に持った剣で腕輪の化身の双剣による攻撃を弾き返した。

今まで通りなら、追撃にきているもう一方の剣を左手の剣で弾いていたが、今回はいつもは捨てているだけの、右手に残っている刀身が粉々に崩れ落ちた剣の柄を投げつけた！

ガキィンッ！

ほんの少し敵の剣の軌道を変えぎりぎりかわし切り、さらに左手の剣を温存することに成功した。そして攻撃の後に起こるわずかばかりの硬直のため、敵は動けない。

これでとどめだ！っと思いキリトが前進しようとしたその瞬間、最後の最後に背中にゾクリとしたものを感じた。

あの二つの炎輪が後ろから迫ってきている！

キリトは一瞬振り返りそうになる、が、恐怖を信頼でねじ伏せ、さらにもう一歩敵の懐へ向かって踏み込む。

ギャリリリィッ！！

それと同時に、後ろで欅とアスナが炎輪を叩き落とした音が聞こえる。

何とか後ろに後退しようとする腕輪の化身。

しかしそこでユイが重ねがけして放った爆炎系の呪文が、敵の退路を阻んだ。

「今ですっ！パパ！！」

ユイの声を聞いた瞬間、キリトは最後の一歩を踏みこむと同時に、敵の腹部に左手に持った剣を突き立てた！

「グゥオオオオオオッ！？」

ものすごい断末魔の悲鳴をあげながら、腕輪の化身は崩れ去っていく。
キリトは数秒間敵に最後のひと刺を与えた姿勢のままで、柄だけになった剣を持った体勢でいたが、何とか体を少しづつ解して動かし欅の方を見ると、ちょうどメニューを開いて見ているところだった。
キリトの視線に気づいたのか、欅は顔をあげて、にっこりと笑った。そして、メニューウィンドウを操作して手に光り輝く腕輪を取り出した。
「成功です。完全に倒し切りました♪」
アスナとユイはどっと疲れが出たのか、へたり込んでしまう。
キリトは一応警戒を解かずに立ち続けたていたが、アスナ達がいなかったら多分その場にぶっ倒れていただろう。
「さて、後はこの腕輪を届ければいいんですけど……」
欅が言葉を濁したのを見て、キリトの脳裏に嫌な予感が走る。
それはアスナとユイも同じだったらしい。
「どうかしたんですか？」
ユイが心配そうに訊ねると、欅はいつもの飄々とした顔に少し苦渋の色を浮かばせた。
「みなさんにはこちらの戦闘に集中して貰う為に言ってなかったんですが、実は今グランホエールはクビアゴモラから攻撃を受けているんです」
「おっ、襲われてる！？」
アスナが驚きの声を上げた。
「クビアゴモラって、あのクビアと関係があるのか？」
キリトが訊ねると、欅は首を横に振った。
「いえ、キリトさん達が大聖堂で会ったクビアとはほとんど関係ありません。まあそれは置いといて、問題はグランホエール内でスケィスのいるフィールドを隔離していたワイズマンが、ほとんど手が離せない状況になってしまっていることです」

欅の話しによると、本来なら腕輪を運ぶ人の周りにも小さい結界を張り、それをカイト達が戦っているフィールドの結界に繋げてから入るという方法がとられるはずだったのだが、今はそれをできる状況ではないらしい。
「仕方ないですね、僕の空間切断能力で行くしかないでしょう」
新たにウィンドウが現れたと思うと、そこにメガネをかけた生真面目そうな青年の顔が映っていた。
「僕の能力に少し調整を加えれば、ちょっとやそっとじゃ抜け出せない複雑な切り口を作れます。そうすれば、少しはスケィス達を逃がす危険も少なくなるでしょう」
「じゃあ僕が調整をするんで、キリトさん、これをお願いします」
メニューを操作した欅は、腕輪を取り出して俺に手渡した。
欅に自分で言ったほうが確実じゃないのかと軽口をたたこうかと一瞬思ったキリトだったが、欅の飄々とした表情の中に自分に対する信頼を見たので、黙って受け取ることにした。
そしてキリトはアスナとユイの方を振り返った。
「それじゃ、ちょっと行ってくるわ」

そして今に至る。

「おい、大丈夫か？」
後方から駆けつけた誰かが地面からキリトを芋掘りよろしく引っこ抜く。
「ごほっごほっ！？はぁ、助かった……ありがとう、あんたは？」
「俺は砂嵐三十郎っていうもんだ。これからよろしくな！」
そう言って砂嵐三十郎は手を差し出した。
キリトはその手につかまり、何とか起き上がる。
「しかし、空から現れるとは粋な登場の仕方じゃねえか」

砂嵐三十郎が笑いながらキリトの肩を乱暴に叩く。
「いや、あれは俺の意思じゃないし……っていうか、欅のやつこうなることがわかってて俺にやらせたのか？……まあそれはいいや。それより、結局なにがどうなったんだ？」
無事結界内部に入れたキリトだったが、封鎖しているところにむりやり転送したので、かなり見当違いなもの凄く高いところに現れてしまったらしい。なんとかカイトに腕輪を投げたがその後力尽き、受け身を取ることもできず頭から地面に突っ込んでしまったのまでは覚えていた。
「どうやら今回捕獲できたのはスケィスオリジンと黙示録の獣だけのようだ……」
駆けつけた八咫が先ほどは気付かなかった、落ちている小さい人形のようなものを拾い上げて言った。
後ろの方では何かが鎖に繋がれて暴れているのが見える。
「ふむ、残念ながらそのようだ。やはり、キリトを転送した時に作った空間の切れ目を利用されたな……」
八咫の横にウィンドウが現れ、そこにワイズマンの顔が映し出されて言った。
そして後ろから続々と後衛にいたウォーロックチームが駆けつけてくる。
「早く応急処置をしないと……急いでください、みなさん！」
「わかったぞ～」
「急いでグランホエールにつれて帰るぞ！」
みんな忙しくしている中、その場に倒れ伏しているハセヲ達もなんとか起き上ってきた。
「くそっ、また逃がしちまった！！」
「あいててて」
「疲れた～動けない……」
「おにいちゃん！大丈夫！？って、寝てるだけ……」
ブラックローズの子供バージョンのような姿をした子が、一人だ

けむにゃむにゃ言って動かないシューゴを呆れながらゆすっている。
そんな感じでみんな大慌てながらも、やっと事態が収束に向かっているのでどこか安心した表情をしている。
しかし、そんな和やかな雰囲気もブラックローズの一言で吹き飛んだ。
「た、大変！カイトのウイルス浸蝕値が１００％になってる！！」
その一言に俺以外の全員がぴたりと動きを止めた。
だれも何も話さないので俺は軽く尋ねた。
「浸蝕率って、腕輪を使うと増えるやつだろ？１００％になるとなんかまずいのか？」
「ま、まずいってもんじゃないよ……」
トキオが倒れ伏しながらも全員を代表して答える。
「とっ、とりあえず……」
トキオは先ほどまで「動けない～」と呻いていたのにもかかわらずもの凄い俊敏さで起き上った。
「撤収だーーー！！」
トキオが叫ぶと同時にみんな泡を食ったように行動し始めた。
動けるものは傷ついて動けないものを担いだり引きずったりしながら、蜘蛛の子を散らしたように逃げ始める。
そして一人その動きに取り残されてしまったキリトはというと、疲れて上手く働かない思考でぼーっと立ちつくしながら「どうするかな～？」と考えていた。すると、後ろから肩をツンツンと突つかれた。キリトが振り返ってみると、そこにはさきほど腕輪を投げ渡したカイトが立っていた。
「あれ、もう大丈夫なのか？」
腕輪を渡した時に見たカイトの姿は遠目で見ても俺と同じくらいぼろぼろだったが、今は傷一つなくおまけに元気そうににこやかに笑っている。
「いやぁ、君がさっき腕輪を投げてくれたキリト君かい？」
そう言って右手をキリトに差しだす。

「ああそうだった、自己紹介まだだったな……俺はキリト、これから世話になるな」
と言ってキリトも手を出して握手をしようとした瞬間……
「ってやめんかーーーい！！」
ブラックローズが横から見事な飛び蹴りをカイトに喰らわせた！？
きりもみしながら吹っ飛んでいったカイトは、先ほどのキリト同様地面に頭から突き刺さった。
「えええーーーー！？な、なにやってんだよ……えぇーっと？」
「あ、私はブラックローズ……ってさっきグランホエールで自己紹介したじゃない！
って、そんなことはどうでもいいから、あんた早く逃げなさい！！」
「はい？……いったい何言って？」
「あんたあいつの右手が光ってんの見えなかったの！？あいつは今あんたに握手した瞬間データドレインしようとしたのよ！！」
「……いや、意味がわからないんだが？」
「だーかーらっ！あいつは浸蝕値１００％になると、いつもの優しいけどちょっと天然な感じから、腹黒でちょっとアホになっちゃうの！！」
「だからって、いきなり攻撃されそうになるなんて……」
「あんたさっきカイトのこと呼び捨てにしてたでしょ。あいつはそういう細かいことでいちいちイチャモン付けてこっちに何か仕掛けてくるの！」
なんだそりゃ……とキリトが思っていると、蹴り飛ばされ地面に突き刺さっていたはずのカイトがいつのまにかブラックローズの後ろに立っていた。
「いきなりひどいなぁ、ブラックローズ……そんなにあの時のことをキリト君ら新しく来た人達にも見て欲しいの？あ、ちょうどこの前起きた時に編集しといたムービーがあるけど、見る？」
メニュー画面で何かを表示しようとしながら発せられたその言葉に、ブラックローズがピキッ、っと硬直する。

「あっ、あんたまさか、まだあれをとってあったの……？あーもうっ、だからやなのよぉー！」

ブラックローズの悲痛な叫び声が響く中、キリトはなぜみんなが逃げ出したかの理由の鱗片が見えたような気がすると同時に、その場をブラックローズに預け、早々に立ち去ることにした。

VSスケィス　ー終局ー（後書き）

カイトはゲーム版のキャラも好きなんですが、４コマｖｅｒ．の腹黒であほな感じのも書きたかったのでデータドレインの反動として出してみました。

幕間　―世界の狭間で―

そこは、一面真っ白な空間。あまりにも真っ白なので、広いのか狭いのか、どこまで続いてるのかさえわからないくらいだ。

何もなければ焦点をどこに合わせていいのかわからず目がおかしくなりそうな光景だが、幸いなことに点々と物が置かれている。ある場所には天蓋付きのベット。その近くにはいくつも無造作に転がっている空の鳥籠と、たくさんの散らばった羽。さらにその向こうには一つの椅子と、周りにうず高く積まれている本の山。他にも色々なものが不規則に存在している。

ここを訪れたことがあるものは両手で数えられるほどしかいない。そして、その全員がこの世界に深く関わった者達だった。創造主、勇者とその相棒、光と闇の王、探索者と死の恐怖等々……そして、この空間において今現在ただ一人存在する人物も、例外なくこの世界の根本に触れている。

多数のモニターやウィンドウが展開されている場所、そこでは茅場が椅子に座って、目の前に展開しているキーボードを駆使してモニターに映る場面を次々と切り替えていた。

キーボードを叩くカチャカチャという音がただ淡々と響く中、唐突に別の音が挿入される。

「ずいぶんと熱心じゃないか？」

後ろから声をかけられた茅場が首を最低限の角度に曲げて振り返ると、そこには色つきのサングラスをし、左腕に筒を下げた青髪の男が立っていた。

茅場は急な来訪者にまったく驚かず、すぐにモニターに目を戻しながら答えた。

「ああ、君か、オーヴァン……もう少しで終わるから、コーヒーでも飲んで待っていてくれ」

茅場はそう言うとキーボードを操作し、その場に椅子、テーブル

とコーヒーセットとお茶請けを出した。
オーヴァンはよく来ているのか、勝手知ったる風に座り、直ぐにくつろぎ始める。
ほどなくして茅場がモニターの前から立ちテーブルの席につく。
「それにしても、ずいぶん楽しそうに観察していたようだが？」
オーヴァンがコーヒーを一口飲んでから訊ねた。
「いや、さすがキリト君達というべきか、実に良いサンプルがとれるよ」
いつも無表情な茅場の顔に、幾分か歓喜の色が見え隠れする。
「しかし、なぜ今さらキーボードなんか使っているんだ？おまえはもうそんなものを使わなくてもいいだろう？」
オーヴァンがどうでもいいような顔をしながら聞いた。
「なに、単なる気まぐれだ」
茅場は特に表情を変えずに簡潔に答える。
「それにしても、君がわざわざ私の顔を見るためだけにここに来たとはあまり考えられないが、今日は一体何の用かね？」
「封印されて消え去る運命にあったこの世界を解き放ってくれた恩人の顔を見に来ることが、そんなに不自然かい？」
オーヴァンが少しおどけた感じで逆に問う。
「私はただ自分の都合の為にこの世界が必要だっただけであって、特に礼を言われることでもないさ。
それに、この世界は私にとっても原点だからね」
答えた茅場の顔にふと過去を懐かしむような表情が出たが、すぐに消えてしまった。
「まあいい……俺が今日聞きたかったのは、俺達裏の事情を知る者はこのイベントに参加していいかということだ。というより、君は参加するのかい、茅場？」
「ふっ、私の持論は「横から見てるだけのゲームほどつまらないものはない」……なのだが、今回は残念ながら、基本的には仕掛け人として立ちまわるつもりだ。君の場合は余計なことをしゃべらなけ

れば存分に楽しんできてもいいだろう。もちろん、そこにいる君たちもだ」
　オーヴァンが振り返ると、そこにはいつのまにかクビア、ヘルバ、リョースが立っており、さらにいくつかのモニターが展開されていた。
「もちろん、こんなに面白いイベントは見逃せないわ」
　ヘルバが楽しそうにほほ笑みながら言った。
「ふんっ！こんな危険なイベントを管理するこっちの身にもなってみろ！！」
　リョースが腕を組み、カリカリしながら言い放つ。
「あら、せっかくもとの役職に戻れたんだからいいじゃないの。それとも、今回は自分も遊ぶ側にいきたいとか？」
「ばっ、馬鹿を言うな！？私はこの仕事に誇りを持っている！」
「まあまあ。とりあえず僕たちも、一般ＰＣか特殊ＰＣ程度の振る舞いをするなら、このイベントに参加してもいいということでいいですか、茅場さん？」
　犬猿の中のヘルバとリョースのいつもの喧嘩を収めるためにクビアがまとめに言った。
「まあそういうことだ」
　茅場はあいかわらずの無表情で簡潔に答えた。
「ふっ、じゃあ俺は俺で好きにやらせてもらおうとするかな」
「あんまりからかってやるなよ」
　茅場の声を背中で聞きながら、オーヴァンは青いリングに包まれ消えていった。
「それじゃあ私も色々と準備しないとね」
「くそっ、尻拭いさせられるこっちの身にもなってみろ！」
「あら、それが管理者のお仕事でしょ？」
「貴様！」
　言い争いながらヘルバとリョースも消えていく。
　展開されていたモニターも次々と消え、最後に残ったクビアも去

ろうとしたが、ふと立ち止まって茅場の方を振り返り訊ねた。
「そう言えば、あなたの考えているあれは完成できそうですか？」
クビアの顔は探るようであり、期待するようであり、そしてなにより楽しんでいる表情だった。
そんな質問に茅場は一言で答えた。
「経過は順調だ」

グランホエールに戻って

「こぉらぁーー！まちなさーーーい！！」
前が見えないくらい大量のアイテムを抱えて歩いていたキリトの前をもの凄い速さで何かが走り去って行く。あわや荷物を落としそうになったのを何とかバランスを取って回避し、後ろを振り返ると、のらりくらりと逃げるカイトとそれを鬼の形相で追いかけるブラックローズの姿が目に入った。
「はぁ、また逃げ出したのかぁ～」
一緒に荷物運びをしていたガスパーが立ち止まって溜め息交じりに呟いた。
「あの厳重な警備をか？いったいどうやって……」
「カイトがああなるとアズ○バンやインペ○ダウンも真っ青だぞぉ～。どんな厳重なセキュリティも簡単に突破しちゃうんだぞぉ～」
ガスパーはそう言うと、すたすたとまた進み始めた。
（なんだかもう、慣れ切ってる感じだな……）

キリトがやっとの思いで船に戻ると、そこには惨状が広がっていた。
船の内装は黒焦げていたり砕けていたりでボロボロ、何人か傷ついてホールの床に寝かされて治療を受けている。ネットの中のヴァーチャルのはずなのに、そこには現実で起きた事故現場を見るようにひしひしとした緊張感と嫌な感じが立ち込めていた。
そうキリトが感じた瞬間、何か頭の中をもやもやとしたものが出てきかけたが、顔を一叩きして追い払う。
「こりゃひどいな……」
「あっ、キリトくん！」

キリトがどうすればいいかわからず呆然としていると、先に戻っていたアスナが駆けつけ状況を説明してくれた。
クビアゴモラによる被害は尋常ではなかったらしい。船はスケィス戦の為にほとんど非戦闘員だけで、なんとか残っていた団員達が時間稼ぎをしている間にほかの任務で各地に散っていた団員がスケィス戦に加わろうとしていたところを呼び出し、辛くも撃退したものの、船は大ダメージを負ってしまったそうだ。
説明を聴いた後、キリトはすぐにみんなの手伝いに行こうとした……が、その時後ろから何かをずるずる引きずる音が聞こえてきたので、振り返ってしまった。
「ほら、ちゃんと立って歩きなさい！」
「はぁ～い♪」
そこには縄でぐるぐる巻きにされているのにご機嫌な様子のカイトを引っ張るブラックローズがいた。
「あ、キリト！ちょうどよかった。悪いんだけど、こいつを運ぶの手伝ってくれない？」
ブラックローズはキリト達に気付くと、駆け寄ってきてアスナに「ちょっと借りるわね」と断りを入れて、有無を言わさぬ勢いでキリトに縄を手渡す。
「ふっふーん！あんたが歩かないならこっちにも考えがあるわよ！！」
そう言ってブラックローズはメニュー画面を開き、長い木の棒を取り出し、それをカイトの背中にくくりつけ、棒でぶら下げられるようにする。
「ほら、そっち持って！」
ブラックローズの迫力に押されたキリトは、言われるがままに棒の片方を持った。
「そんじゃ、行くわよ！」
キリトは流されるままに、カイトを原始人が捕まえた獲物のように運んでいった。

「さあ、ここでウイルス浸蝕が治るまで大人しくしててもらうわよ！」
ブラックローズはよくＳＦで見るようなビームで構成された格子の牢屋に入れたカイトに向かってどうどうと宣言する。
「それじゃ、俺はみんなの手伝いに行ってくるわ」
（何か余計なこと聞くと藪蛇になりそうだし、今はさっさとここを立ち去ろう……）
「うん、ありがとね」
そしてキリトは出口へと向かったのだが……
「あれ、どこに行くんだい、キリト君？」
その言葉に振り返ったキリトは驚愕した。
なんと先ほど閉じ込めたはずのカイトが、牢から抜け出してブラックローズの後ろに立っていたのだ。
「あっ、あんたまた！？」
「ふっふっふっ。あまい、ブラックローズ、あますぎるよ。どうせならもっと厳重なところに入れないと、脱獄し甲斐がないよ♪」
カイトはにこにこ笑いながらキリトの方に近づき、唐突に聞いてきた。
「そう言えば、キリト君は以前プレイしていたネトゲで主役級の働きをしてたんだって？」
「いや、まあ確かにそうとも言えなくはないけど……って、それがどうかしたのか？」
「うん、ただ単にね……」
そう言ってカイトはいきなり右手をキリトに向ける！
「僕以外に主役の器の人がいると、困るんだよね！」
（やばい、まさかデータドレイン！？）
いつものキリトなら、こんな大ぶりなモーションによって撃ち出

される攻撃など簡単に避けられるだろう。が、今は戦闘による疲労で体が全く思うように動かない……のに加えて、もうなんかめんどくさくなってきたな～。つうか疲れたし、早く寝たい……なんて某ファンタジー小説の主人公みたいな思考が脳を占め始めていた。

そしてカイトの腕輪が光りだして……

ばきゃん！

「ふぎゃっ！？」

「だからやめんかい！」

ブラックローズがいつのまにか手にしたテニスラケットを後ろからカイトの頭目がけて振り下ろしていた！

小気味よい音を響かせ、見事にクリーンヒットしたラケット。

カイトは網を突き破って首にラケットが引っ掛かった状態で、ばたんと前のめりに倒れる。

「たっくもぉ！あんたにはホント世話焼かされるわ……」

ブラックローズはそう言いながらカイトをズリズリと引きずり出す。

「でも、あんま嫌そうには見えないけど……」

キリトがぼそっと言うと、ブラックローズがきっ！とキリトを睨む。

「なんか言った？」

「いや、なんでそんなにカイトの世話焼くのかなって」

キリトのストレートな質問に、ブラックローズは一瞬固まってしどろもどろしはじめた。

「そりゃー、まあ、あれよ……つまりー、その……」

「僕のことが好きだからでしょ？」

いつの間に気が付いたのか、カイトがうつ伏せのまま引きずられながら、ブラックローズの代わりに答えた。

「なっ！何言って！？ていうかあんた、起きてんなら自分で歩きなさい！！」

顔を真っ赤にさせながらブラックローズは牢屋の前までカイトを

引きずって中に放り込むと、備え付けのメニューを開き、扉や柵を何重にも出して閉めた上に、鍵（南京錠から電子ロックまでありとあらゆる種類）をいくつもかける。

「ふーっ、ひとまずこれで安心でしょ。それじゃキリト、また後でね！」

そう言って少し頬を赤く染めたブラックローズは、慌ただしくその場を立ち去ってしまった。

（なんかわかりやすい娘だな……）

そんなことを考えながら、キリトはホールに戻って他の手伝いをするためにその場を後にした。

新しい生活の幕開け

ピリリリリリリッ！ビリリリリリッ！！

バシッ！

けたたましい音で鳴る目覚ましを止めてキリトがベットから起き上ると、そこは見慣れぬ部屋だった。

ぼんやりしながらも、昨日ボス戦や襲撃の被害の後始末が終わった後、用意された部屋ですぐに眠ってしまったのを思い出す。

昨日は疲労と眠気でちゃんと見ていなかったが、良く見てみると内装や家具のセンスも良く、なかなか小奇麗で居心地のいい部屋だ。

そんなことをはっきりしない頭でぼーっとしながらベッドに座って考えていると、扉がノックされた。

「どーぞ」

キリトは特に考えもせず反射的に答えると、横開きに開いたドアの向こうからアスナが入ってきた。

「おはよう、キリトくん。それでこれなんだけど……ってちょっと、その格好！？」

アスナが驚いたのを見て、はじめてキリトは自分がパンツ一丁の姿だということに気付く。

昨日着ていた服は戦闘でぼろぼろになってしまった上に、代えの服はすべてホームのアイテムボックスの中にあるので（まさか必要になるとは思わなかったし）とりあえず昨日はパンツ以外全部脱いで寝ていた……

「別にいいじゃん、一緒に住んでた時にさんざん見慣れてるだろ？」

キリトはからかい半分でそう言うと、アスナは顔を真っ赤にして手に持っていた袋を投げてよこす。

「はいこれ！トキオくんがキリトくんに渡してくれって！！」

キリトが中をのぞくと、服が一式入っていた。

それはぱっと見キリトが今まで着ていた服と同じもののように見

えたが、ちょっとデザインが違っている。ところどころにこの世界の紋様などが入っていて、どこかカイト達が着ている服と似た雰囲気だ。
「昨日の戦闘で装備はぼろぼろになっただろうから、徹夜でグランディ達が仕立ててくれたんだって」
（へぇ、こりゃいいな……）
よく見るとアスナの服も、いつものものとは少しデザインが違っている。
「アスナも、その服すごく似合ってるよ。この服はとりあえずシャワー浴びたら着てみる。サンキュな」
最近になってやっとテンパらずに言えるようになったセリフに対し、少し照れているアスナに礼を言って立ちあがろうとしたキリトだったが、ふと思いついてさらに言ってみた。
「一緒に入る？」
「もうっ！キリトくん！！」

「それじゃあ、これから昨日できなかったこの依頼板について説明するね」
トキオはホールの一角にある巨大な掲示板の前に集まったフェアリーダンスの面々に説明し始めた。
メンバーのうち重傷をおって病室から動けない者（クライン達ぴろしパーティーと他数名）はその場に展開されたモニターごしから見ている。
「この依頼板には、この世界のＰＣ達からの依頼やイベント、それにアウラ達からの情報により力があると推測される場所などが書かれているんだ。この中からやりたいものを選んで進行していく感じ。逆に自分が何か依頼したい場合も、ここに載せる」
ここでさらにトキオはメニューを開き操作した。

すると、メッセージが届いたというインフォが全員に一斉に流れ、メールボックスの中の新着メッセージが来ていた。開けてみると、そこにはトキオからメンバーアドレスを受け取りました。アドレスを登録しますか？と書かれていた。

「メンバーアドレスを持っていると、好きな時に相手と連絡が取れるし、いろいろと便利だから登録しといてね。他の騎士団のアドレスも、どんどん貰っておくといいよ。

それじゃ、とりあえず今日はこれで解散！これから依頼をこなすのもいいし、昨日の疲れが抜けてなかったらゆっくり休んでもいいよ」

そう言ってトキオは急ぎの用があるのか、その場からさっさと立ち去ってしまった。

クエスト開始！

「さてと、どうするかな……」
キリトはトキオの説明が終わった後、その場に立ちつくし、これからどうするか迷っていた。
本当はアスナと一緒に、疲労困憊で倒れて病室で未だに寝込んでいるユイの看病をしていようと思っていたのだが、アスナに止められてしまったのだ。
「だってキリトくん、昨日の戦闘では欅君と同じくらいハードな戦いしてたでしょ。今日くらいゆっくり休まなくきゃ」
「いや、ただ休んでるだけじゃ逆に暇だし」
「それなら何か簡単なクエストにチャレンジするとか、とりあえずユイちゃんのことは私に任せてもらって大丈夫だから」
そう言ってアスナはユイが眠っている病室に向かって行ってしまった。
どうやら昨日の激戦による不調は、アスナには完全にばれていたらしい。
さて、どうしようか……と、キリトが考えていると、近くで肩にピナを止まらせているシリカとプチグソを抱いている騎士団員の少女（確かＨＯＴＡＲＵ）が話していることがふと耳に入ってきた。
「それじゃあ、あたしのピナもそれに参加できるんですか？」
「もちろんデス。このレースはモンスターやそれに準ずるものであれば何でも参加オーケーデス。
でも人を乗せられくらい大きくないとダメなんですが、それはここのレシピに書いてある材料を集めて、食べさせれば大丈夫デス」
悩んでもしょうがないと結論したキリトは、とりあえず何の話しか聞いてみることにした。
「なあ、今話してたのって、なんかのクエスト？」
シリカとホタルがキリトの方を振り向き、最初から説明してくれ

た。
「明日第１０回、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄモンスターレースが開催されるんデス。それにワタシもでるんですが、シリカさんも参加したいとのコトデ」
少し胡散臭い英語なまりの片言日本語でしゃべりながらＨＯＴＡＲＵがシリカの方を向くと、今度はシリカが後を継いで話しだした。
「昨日一緒に船でお仕事してる時に、ピナを見せたら誘われたんです。あっ、そうだ！キリトさんも参加しませんか？」
「へぇ、それって俺でも参加できるの？」
ＨＯＴＡＲＵの方を見ると、彼女はもちろんとうなずいた。
「キリトさんはモンスターを連れているわけではないようデスガ、これからフィールドに出て比較的慣れやすい、ラッキーアニマルを捕まえてくれれば大丈夫です。」
「これがその大会の案内です」
シリカがメニューを操作して紙を１枚取り出し、キリトに手渡す。
それを流し読みしていると、ふと賞品欄に書いてある物の内の一つが目に入る。
それは、「ＡＩのどんな怪我や病気もたちどころに治せる秘薬」という代物だ。
他の賞品が月の石や豪華なドレス、最高級ブラシなど一貫性のない上に微妙なものばかりの内の一つなので、いかにも胡散臭そうなアイテムだが、もしこれが本物だったらユイの調子も治せるかも……
「よしっ、じゃあ俺も出させてくれ」
キリトの答えにＨＯＴＡＲＵはにこやかに頷く。
「わかりマシタ。手順はまず、ラッキーアニマルを捕まえた後、ある料理を食べさておっきくシマス」
「ある料理？」
「ハイ！それはカノジョたちが作ってくれマス」
そう言ってホタルは壇上の方を見ると、急にホール全体の明かりが消え真っ暗になる。

そして壇上の上からスポットライトがいくつも照らされ、それらが真ん中に集中すると、そこには2人の少女が立っていた。
その二人は、アウラにそっくりな顔と姿をしていた。違う点と言えば、二人ともアウラより少し幼い点と、一人は髪飾りに赤い花を挿している赤い服を着た元気そうな子で、もう一人は白に青みがかった服を着て、むすっとした表情をしているところだ。
「やっほーっ！リコリスです！！」
「ゼフィです……」
「「二人合わせて、アウラシスターズです」」
リコリスと名乗った少女は元気よく、ゼフィという少女はやらされてる感とやる気のなさを隠しもせずに壇上でポーズを決めていたのだが……
「こらーーっ！またお前たちかブヒ！！勝手に明かりを消すなって、何回言えば分かるブヒ！おかげで大惨事ブヒ！！」
明かりが点くと、デス★ランディのまわりでは大量の荷物がばら撒かれており、ちょうど近くを歩いていたらしいリズベットと包帯まみれのクラインが荷物の山に埋もれていた。
どうやらクラインはリズを暗闇の中とっさにかばったらしく、荷物から守るようにリズに覆いかぶさっていた。
「ちょっ、クライン、早くどいてよ！」
「どけって言われても今動いたら……って言うか、重傷の俺が身を挺してかばったのに、開口一番それかよ！？」
「まっ、まあ確かにかばってくれたのには感謝するけど……ってどこ触ってるんのよ！？」
「ぐへっ！？」
リズの鍛冶場で鍛えられた腕で思いっきり殴られたクラインは、荷物と共に天井高く吹っ飛んでいった。
「あっ、ごめん！？」
他でも似たようなことがそこらで起こっている中、この惨事の原因の少女2人が何事もなかったかのようにすたすたとキリト達の方

に歩いてきた。
「それで、あなたがた二人がモンスター巨大化エキス欲しいんですか？」
キリト達の前に立つと、すぐに赤い少女が訊ねてきた。
「あっ、ああ……（エキス？）」
「はい！」
「それじゃホタルがさっき見せてたレシピの材料を集めてきて、さらに私たちの依頼も受けてくれれば作ってあげてもいいわ」
今度は白に青みがかった服を着た少女（こっちは確かゼフィ）が言ってきた。
「んっ、何かしなくちゃいけないのか？」
キリトが反射的に訊ねた。
すると……
「当たり前だろうが」
ばしぃん！！
「ぐはっ！？」
キリトには一瞬何が起こったかわからなかった。ただ、何回かバクテンするように縦に回転しながら、かなりの距離を吹っ飛ばされ、受け身もとれず後頭部をしたたか床に打ちつけた痛みだけが思考を占める。
何とか起き上ろうとするも、頭がふらふらして立つことができない。
とりあえず顔だけ上げると、焦点が合わず3人に分身しているように見えるゼフィがいつのまにかグローブがはめられている両手をシュッシュッと振っていた。
どうやら彼女のアッパーがキリトの目にも追えないぐらいの速さで鮮やかに顎にクリーンヒットしたらしいということを遅まきながら理解する。
ぶざまに倒れているキリトに向かって、ゼフィはにやっと笑った。
「この世にただで何かが手に入るわけないだろうが、このネトゲ中

毒者が」
　キリトはまだフラフラする頭を何とか覚醒させ、とりあえずあの驚異のアッパーと自分がなぜネトゲ中毒者というレッテルを貼られているのか（まあ事実だけど……）についてツッコミは入れないでおくことにし、その依頼とやらが何なのか聞いてみることにした。
「なに、簡単なことだ。お前たちが出るレースの優勝賞品の内ある物を私たちにくれればいい」
「優勝賞品？」
　キリトがそう訊ねると、ホタルがそれに答えた。
「ハイ。このレースはかなり大きな規模の物なので、上位3位まではかなり豪華な賞品が色々貰えるんデス。そのかわり、それ以下の人は参加賞の粗品のみデスガ……」
「それじゃあ、もしあたしたちの内誰も優勝できなかったらどうすればいいんですか？」
　シリカがもっともな疑問を口にすると、リコリスが楽しそうに答えた。
「その場合は、ペナルティとして楽しい罰ゲームを公開処刑風に執り行います♪」
　いやっ、♪って……何気に恐ろしいことをさらっと言っているような……
「まあとりあえず、それに優勝すればいいってことだな」
（ユイの為にも、負けるつもりはさらさらないし、これくらいのスリルがないと張り合いもないしな）
「話しは決まりデスネ！それじゃあ早速食材集めと、ラッキーアニマル捕獲に行きまショウ！」
「「おーー！」」
「きゅるる！」
「ブヒーー！」
　3人と2匹の掛け声があがった。

マク・アヌを訊ねて

Δサーバー　水の都マク・アヌ

「ここがマク・アヌか。綺麗なところだな」
転送ゲートがある巨大な建物の門から出たキリトの目に入ったのは、きらきらと朝日を照り返して煌めく運河と、その上を向かい側の街へとつなぐ巨大な架橋だった。
橋のすぐ近くにある噴水が中央にある広場には、人ごみでにぎわう出店らしきものがたくさん出ている。そして橋を越えた先はいい意味で古い感じがする街並みで、なんだか来るものをほっとさせるような雰囲気に包まれている。
「あそこの広場がマーケットになっていて、今回の材料も多分ほぼ全て入手可能デス」
イベントに参加することを決めたキリト達は、ホタルに連れられてマク・アヌにやってきていた。
ここはいくつもあるルートタウンの中心的存在で、かなりの人（全員ＡＩ）がいて凄く賑やかだ。
「何もたもたしてるの？早く来ないと置いてくよ……」
同じく大会に出るので一緒に買い出しに来た司は、そう言い残し、眼下の光景に見入っているキリト達を置いてさっさと階段を下りて行ってしまった。
色々と目を引くものがあり遅れがちだったキリトとシリカはホタルに先導されながら慌てて司の後を追う。
「ここの区画は主にギルドが出している店が多いデス」
階段を下りてすぐにある広場では、マーケットの半分を占めるスペースに、ケストレルや月の樹、レイブンなどたくさんのギルドの名を冠した看板が掲げられている。

そしてその一角に、こじんまりとした、しかし大量の人が集まっている店があった。
「あっ！あそこデス」
ホタルが指差したのがたまたまキリトの目に入っていたその店だった。
看板には、『カナード』と書かれていて、さらにその下に『初心者から熟練者まで満足すること間違いなしのお店』と付け加えられている。
「なぁ、もうちょっとまかんねえか？」
腰に剣を差し、青いトマトのような顔をした男が店の前で粘っている。どうやら値切り交渉をしているらしい。そしてその相手をしているのは……
「ふんっ、そりゃあ無理な相談だ。これ以上はびた一文まけられねぇな」
ＳＡＯで一流の（ぼったくり）商人として、下は初心者から上は中堅どころはおろか攻略組にまで一目置かれていたエギルだった。
「てめー、下手に出てりゃ調子にのりやがって！俺をどこのギルドのもんだか知ってるのか！？泣く子も黙る、ケストレルだぜ！！」
トマト頭はどうやら交渉を諦めて、脅しに出たようだ。
しかし、ＡＬＯに出した店でもぼったくり商売を成立させている上に、リアルでもカフェを経営しているまさに百戦錬磨のエギル相手には分が悪すぎた。
「ふんっ、おめーのいるギルドのことは知らねえが、こんなことでギルドの名前を出すような奴にろくなやつはいねえのは確かだな」
エギルの剣幕にトマト頭がたじろぎ、青い顔がさらに青ざめたように見えた。ここですかさず、エギルがメニュー画面をそろばんのように操作する。
「ま、それでもこちとら商売人だ。この値段なら売ってやらなくもないぜ」
トマト頭はおずおずとモニターをのぞき、こくこくと頭を縦に振

った。
そいつが逃げるように走り去っていくのを見送った後、キリトたちは店の前に立った。
「おっ、いらっしゃい……ってなんだ、キリトかよ」
エギルはそのいかつい顔から出るとは想像できないような、どこか愛嬌すらある営業スマイルを出しかけたが、キリトたちだとわかると直ぐに引っ込めた。
「ほんと、エギルはどこに行ってもやっていけるよ。あんな風ににやられたら、大抵の奴は押されちゃうぜ」
キリトが感心半分おちょくり半分で言うと、エギルはニヤッとする。
「まあ、商売は相手を呑んじまえば、後はこっちのもんだからな」
その後、エギルは自分がスケィス戦で重傷を負ったシラバスの代わりに、ガスパーと店番をしていることを説明した。
「ほんとぉに助かってるぞぉ～」
ちょうど列が途切れたので、ガスパーがみんなにドリンクと、この店名物のどんぐりバーガーなるものを持ってきてくれた。
「いつも初心者にはオイラが、熟練者や厄介者にはシラバスが対応してたから、ちょっと困ってたんだぞぉ～。エギル、本当にありがとうだぞぉ～」
ガスパーがしきりに頭を下げ、エギルは苦笑いをして少し照れている。
そんな様子を見られてるのを感じたのか、エギルは慌ててキリトに話を振った。
「そういやぁ、お前も今日は何か買いに来たのか？」
「あっ、そうそう」
キリトがイベントのことを話し、ＨＯＴＡＲＵが欲しいもののリストをエギルに渡す。
エギルはモニターを慣れた手つきで手早く操作し、次々と物を出していった。

「ほい、じゃあ料金はこれだ」
最初にシリカがお金を払う。
そして次にキリトが買おうとしたのだが……
「あれ、マネーが０だ？」
金を払おうとしたのだが、マネーの残高を示すところが０になっている。
「おい、キリト。言っとくがこの世界じゃＡＬＯの通貨は使えないぜ」
「あっ！」
そうだ、確かにコンバートしたわけだから、それは当たり前のことだった。
ん？でも、ならなんで……
「なんでシリカは金をもってるんだ？」
その疑問にシリカは驚いたように答えた。
「え、だって昨日の腕輪探索の時にたくさんモンスターを倒したから、結構貰えましたよ」
「なっ、なに～！？」
シリカが説明してくれたところによると、パーティーを組んだ場合普通のドロップアイテムなどは均等に配られるが、レアなものやマネーはパーティーのリーダーが一気に受け取るらしい。
普通は戻った後、パーティー内で山分けするらしいが……
「欅め～！あいつ黙ってたな！！」
キリトは怒りにわなわな震えていたが、ふと後ろからざわめきがが聞こえてくる。
振り返ると、そこには１０人くらいのガラの悪そうなチンピラを引き連れた３人の男女のパーティーがこちらに近づいてきていた。
キリトは一瞬怒りを忘れ、なんか一昔前の漫画の不良軍団みたいだな……なんて感想を彼らに抱いていると、ガスパーがうめき声をあげた。
「げっ、あれはケストレルのボルドー一味だぞぉ～」

ガスパーはこっちに来ないで欲しそうな顔をしていたが、どうやらあちらのお目当てはこの店だったらしい。
真っ直ぐこちらにぞろぞろとやってくると、一番先頭にいた女（ガスパーの話しによるとボルドー）が真っ先に口を開いた。
「よぉ、ガスパー！今日こそはみかじめ代をいただこうか」
結構凄みのある声で話したボルドーに、ガスパーはたじたじになっている。まさにいじめっ子といじめられっ子、チンピラとカツアゲされかかっている少年の構図だ。
「そ、そんなぁ～、いつもはそんなこと言ってこないじゃないかぁ～」
その問いにボルドーが答えようとしたが、先に後ろの金魚のフンの内の一人がしゃしゃり出てしゃべりだした。
「うっせぇ！いつもはシラバスに色々と弱み握られてて、手がだせねーんだよ！！」
そう言い終わった瞬間、その男はボルドーに剣でぶん殴られた。
「っ痛！何するんですか、ボルドーさん！？」
「ネギ丸、アホかお前は！余計なことぺらぺらしゃべってんじゃないよ！！」
咳払いをしたボルドーは話しの矛先を変えてきた。
「それに、さっきうちの下のもんがここの店で脅されたって話しも来てるんだけどよ」
それってもしかして……
「それってさっきのトマト頭のことか？」
エギルがそう言うと、ボルドーはきっ！とエギルの方を睨んだ。
「ほぅ、それじゃあんたが騎士団の新入りってやつかい。ずいぶんとうちのもんをかわいがってくれたそうじゃないかい？」
「いや、ただ単に普通に商売しただけなんだが……」
（確かに、エギルのあの対応の仕方は反則的だから、文句を言いたくなるのはわからなくもないけど……）
「というより、ただ単に騎士団に嫌がらせしたいだけでしょ。それ

で下部ギルドのカナードにちょっかいを出すって……本当にそういう未練がましくてせこいところは昔から変わってないね、君は」
ここでキリトたちの後ろで、どんぐりバーガーをむしゃむしゃ食べながら事の推移を傍観していた司が前に出てきた。
「ん、だれだぁ、舐めた口叩いてんのは？……って、お前、司じゃねえか！？」
「やっほぉ～」
完全にふざけている司に、ボルドーが何か言い返そうとしたが、先にさっきの男（確かネギ丸）がまたしゃべりだした。
「うっせぇ！別にボルドーさんは黄昏の騎士団時代に、騎士団のみんなと喧嘩別れしたこと何か、全然気にしてねえぞ！」
この発言に当然のごとくボルドーからツッコミの剣の一撃が来ると思われたが、それより先に後ろからツッコミと言う名の張り手が飛んできてネギ丸を吹っ飛ばす。
頭からもろに地面に叩きつけられ、びたーっん！という音を立ててもの凄く痛そうにその場で少しもがいた後、何とかネギ丸は起き上がり自分をはり倒した男に食って掛かる。
「いってぇー！？何すんだよ、グリン！？」
「……」
グリンと呼ばれた色黒の巨漢は、何も答えない。
「いや、ナイスツッコミだ、グリン。ついでにそいつを後ろに下がらせときな」
無表情のまま頷いたグリンはすぐさまわめくネギ丸の足を持って、ずるずると後ろに引きずっていった。
ボルドーは少し溜息をついた後、司たちに同情の目で見られていることに気付いたのか、すぐに話しを元に戻した。
「っつーわけだから、おとしまえはきっちり付けてもらうからな」
「どうするんだ、ガスパーにエギル？なんなら助太刀してもいいぜ」
見た感じ後ろのチンピラ達は雑魚だし、ボルドーもそこそこの腕はあるらしいが、エギルでも何とかできるレベルだろう。しかしこ

こで上手くやれば、店を守る→ガスパーが感激する→お礼に食材ただでゲット、ということが可能になる（かも？）。
……などということを考えていたキリトだったが、その発言で、初めてキリトとシリカ、そしてホタルの存在に気付いたのか、ボルドーはじーっとキリト達を見る。そして、唐突にわなわな震え始めた。
「気にいらねぇな……」
「ん？」
キリトが疑問符を浮かべていると、ボルドーはキリトにずいっと近寄り、まくしたてた。
「あたしはね、黒い服着て女侍らせてるやつが、だいっっきらいなんだよねぇ！」
（な、なんだそりゃ？）
「特に銀髪はでしょ？」
司の言葉がとどめだったのか、ボルドーはゆらりと闘気を発しながら腰に手をやり、エフェクトと共に剣を抜く。それに後ろの奴らが続き、各々の得物を取り出す。
カウンターから店の前に出てきたエギルや、司とキリトもそれに応じてエフェクトを迸らせながら武器を取り出し、構えをとる。
そしてボルドー達が襲いかかろうとした瞬間！
「そこまでだ、お前たち！」
急に目の前に転送時に出る青いリングが出現し、その中から緑の服を着た恰幅のいい髭面のおっさんが現れた。
「ボルドー、貴様何度言えばわかる！ルートタウン内での戦闘行為は禁止だと言っているだろう！！」
ボルドーは一瞬殺気をその男に向けたが、直ぐに剣をしまい、司の方を向いた。
「おい、そう言えばＨＯＴＡＲＵや司も明日の大会にはでるんだろ？アタシ達も明日それに参加するんだけどよ……」
ボルドーはニヤッとして言い放った。

「背中には気をつけな」
完璧な小悪党の捨てゼリフを言い終えると、直ぐに踵を返して立ち去ってしまった。
「助かったぞぉ～、ありがとうだぞぉ～リョース」
ガスパーが涙目になりながら先ほど現れた男に礼を言っている。
「ふんっ、私は自分の職務を全うしただけだ。それより、あんまり無茶はするなよ」
そう言ってリョースは来た時と同様青いリングの中に消えていった。

とりあえず、キリトは金は後で欅からきっちりもらうということでツケにしておいて貰った。
（しかし、明日のイベントは中々大変そうだな……）
キリトはそんなことを考えながら、ラッキーアニマルを探しにみんなでフィールドに行くために、ゲートのある建物に向かった。

モンスターレース開幕

パンッ！パンッ！
どこからか花火の音が聞こえてくる。会場はすでに大勢のＰＣ達で溢れかえっていた。昼間の晴れの草原フィールドに設定されたスタート地点は、レースが始まる前からお祭り騒ぎだ。
あちらこちらに模擬店が出て、食欲をそそる匂いもそこかしこからしてくる上に、昨今では珍しい昔のお祭りによくあった、射的や金魚すくいみたいなようなのもある。
そんな中、会場の一角に設けられた選手控え場にいるキリトは、ゼフィとリコリスに言われたことを頭の中で思い返していた。

キリトが無事フィールドでラッキーアニマルのはっしばとレースに出る交渉をすませ（報酬はレアなエサでまとまった）グランホエールに戻った後、さっそく集めた材料をゼフィ達のもとへと持っていった。
「どうやらパートナーを確保できたみたいね……それじゃ、材料を出しなさい」
ゼフィに言われ、キリトたちは集めてきた材料を全て渡す。
「えーっと、……うん！全部あるね。これならばっちり３人分作れます♪」
リコリスが横から、ゼフィが材料を呼び出したテーブルの上に並べたのをチェックした。
「３人分？俺とシリカで二人分だよな？」
「何言ってるんですか、ＨＯＴＡＲＵの分もここからとるように言われましたよ？」
キリトがホタルの方を振り返ると、ホタルは一瞬うろたえたよう

な表情をしたが、直ぐに慌てて弁解し始めた。
「そっ、それは授業料デス！けっして優勝できるか不安だったカラトカ、リコリスさん達の依頼を達成できなさそうだからとかそんな理由じゃアリマセン！」
「ホタルさん、思考がダダ漏れです……」
「まあ3人の内誰かが優勝すればいいわけだから、そこはそんなに気にしなくていいだろ」
　ホタルがソウデスソウデスとうなずくのを見て、ゼフィが話しを続けた。
「話しがまとまったようだから、とりあえず作る前にこの料理の注意点を話しておく」
「注意点？」
「まず最初に、この料理の効き目はきっかり2時間しかもたない。レースは最短でも1時間半くらいかかるから、のんびりはできないわよ」
「結構ぎりぎりなんですね……」
　シリカが少し不安げに相槌を打ったのに対し、キリトがフォローを入れた。
「まあでも俺たちは優勝しなくちゃいけないわけだから、最短を目指すのは当たり前ってことでそれも問題ないな」
「ハイ！狙うは優勝のみデス！！」
　ホタルが気合いが入った声で言うと、今度はリコリスが話し始める。
「まあ確かにそうね。じゃあ次は一番重要なことだから、しっかり聞いてね」
　リコリスの真剣な表情に、つい身構えてしまうキリトとシリカ。
「それは、これを食べさせるときはパートナーの体をしっかり固定して動かないようにすること」
「「へっ？」」
　キリトとシリカが疑問符を浮かべていると、二人はホタルの腕の

中にいるプチグソの様子がおかしいことに気付いた。
よく見ると、ガタガタ震えて逃げ出そうともがいている。
それをＨＯＴＡＲＵがあやしているのだが、その内容が……
「プチグソさん、我慢するのデス！がんばって上位に入賞して例の物を確保すると誓ったじゃないデスカ！虎穴に入らずんば虎児を得ずデスヨ！」
キリトはどこからツッコムべきかと悩んだが、すでにゼフィとリコリスはコックスタイルの服に着替えて、メニューウィンドウから呼び出した豪勢なダイニングキッチンの前で準備を終えていた。
「それじゃ、これからリコリスさんとゼフィさんの３分クッキングを始めま～す」
「活目しろ」
リコリスとゼフィがいつもの調子で宣言して、そして調理が始まった……のだが、
「それじゃ、まず最初に、こちらに今日の依頼者であるキリトさん達が用意していただいた材料を持ってきます」
リコリスが材料を巨大なボールに入れて手に持ち、そして続いて奥に引っ込んでいたゼフィが持ってきたものは……
「それでは、続いてこちらに用意したミキサーに」
そう、ゼフィが持ってきたのはこれまた巨大なミキサーだった。
「材料を全てぶち込みま～す♪」
リコリスはダイニングキッチン備え付けの調理器具には目も向けずに、言ったままに材料をミキサーに放り込み、ゼフィの「スイッチオン」という淡々とした言葉と共に開始されたもの凄い回転によりホールに騒音が響き続けること約１分、止まったミキサーの中にはなんとも言い難い色をした液体がぼこぼこと泡立っていた。
「はいっ、これで完成で～す！」
「「……」」
キリトとシリカは何も言えず、唯一聞こえるのはホタルの腕の中から逃げ出そうと激しくもがいているプチグソの悲痛な鳴き声だけ。

とりあえず、それは料理といっていいのか？とか毒じゃないのか？など色々ツッコミどころ満天の状況にキリトが出した答えはというと……

「まあ、なるようになるか……」

自分が飲むわけではないキリトは早々に思考を打ち切った……

そんなわけで、キリトはレース開始３分前になんとかはっしばに例のエキスを飲んでもらい（まあ多少強引な方法をとったが……）大きくなったはっしばに跨って始まるのを待っていた。

その隣では同じく巨大化したピナに乗ったシリカと、プチグソが巨大化した姿であるロングホーンに跨ったＨＯＴＡＲＵが待機している。

そしてスタート１分前、キリトたちの前に巨大な画面が現れ、そこに葬天と似た姿をした男（多分オリジナル？）が映し出されてしゃべりだした。

「それでは、これから第１０回Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄモンスターレースを開催する。全員、正々堂々と勝負するように！」

待機所のゲートが開かれ出場者が前に進み出ると、そこには両脇に観客で埋め尽くされた巨大な観客席が、そして目の前にはスタートの文字が書かれたこれまた巨大な電子ボードが浮いている。

「レディース＆ジェントルマーン！ようこそ第１０回Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄモンスターレースへ！司会を務めるのは、おなじみニューク兎丸と、」

「相方のレイチェルで～す！」

「「よろしく～！！」」

わぁーっ！という大歓声が湧きおこり、他に何も聞こえない状態になるが、ニュークが指揮者のようにぱっと両手をあげて閉じると場はぴたりと静かになる。

「それじゃあ、大会のルールをちゃちゃっと30秒で説明するぜ！ルールは簡単、3つあるチェックポイントを通過して、このスタート地点に戻ってこれた奴が勝ちだ！
移動する方法は問わないが、空にも地上にもモンスターやトラップがうじゃうじゃあるから、楽なコースはないぜ！」
ニュークがびしっとポーズを決めると、今度はレイチェルが前に出る。
「説明は以上や。そんで最後に、この大会の主催者は、最近管理者に復帰したリョースと、バルムンク」
観客席に設置された巨大なモニターに、先ほど待機所でモニターに映った翼の生えた2枚目剣士と、マク・アヌで会ったいかついおっさんの姿が映し出された。
「そんでここの警備を担当しているのは碧依と紅依の騎士団とその他有志」
画面が切り替わり、昴と槍を持った厳しそうな鋭い目つきをしたお固そうな美人な女性の姿が映し出される。
「それとご覧のスポンサーの提供で開催されます」
その後取ってつけたようにギルドの名前とマスターの顔がずらりと流れていった。
「それでは、カウントダウン開始するぜ！」
ニュークがそう言うと、スタートと書かれているボードに数字の10が現れる。
キリトはアイテムポーチから、ゴーグル兼サングラスを取り出してかけた。
どんどん減っていく数字。
そして、
「「3、2、1、スタート！」」
ドォーーーーン！というもの凄い音を合図に、一斉に選手たちがスタートした。
……と、同時に、ボーーーーンッ！！というさらに巨大な音が爆

風と閃光がその場にいた選手と観客たちの五感を塗りつぶした……

モンスターレース、スタート！

「なっ、なんだぁーーー、今の爆発はぁ！？」
ニュークが爆発とともに起きた閃光で見えなくなった目をこすり、なんとか視力を回復させると……
「な、なんじゃこりゃぁぁぁぁ！？、モンスターレース！全員一斉に飛び出して行きました……っと思ったらすでに脱落者続出！？」
スタート地点では爆発により半死の選手が多数、そして爆心地より離れたところにいた選手も閃光に目をやられ、なぜかスタート地点のすぐ近くに掘られていた落とし穴にパートナー共々落ちていた。
「おーっと、これはどうやらボルドー率いるケストレルチームの妨害のようだ！」
「ほんまにえげつないマネするわぁ、あのギルドは」
解説席の下にマイクを持ったまま避難していたレイチェルが顔を出す。
「ちなみにこの大会での対戦相手に対する妨害はもちろんオッケーだぜ！」
「あんたさっきそれ言わなかったじゃない」
「……まあ、そんな細かいことは気にしないで、レースの実況に戻るぜぇ！」
「よくないわっ！？」

「おらおらおらっ！ま～ちやがれぇ、このやろぉー！！」
もの凄い形相のチンピラ軍団が大声でわめきたてながら後ろから迫ってきている。
「待てって言われて、止まる、バカ、が、いるか！」
偶々サングラス機能付きのゴーグルをしていて難を逃れたキリト

は、今度はケストレルの連中に因縁をつけられていた。乗馬はＳＡＯで１回だけしたきりのキリトは、もの凄い速さで走るはっしばにしがみつくのが精いっぱいな今、気の利いた返事が返せないでいた。
というか、言葉を紡ごうとするたびにはっしばの揺れる体に舌を噛みそうになり、途切れ途切れに声を出すのがやっとの状態だ。
しかし、どうやらキリトが懸命に返した返事がお気に召さなかったのか、今度は罵詈雑言の代わりに矢や銃弾、呪紋や爆弾、その他よく分からない物が雨あられと降り注ぐ。
はっしばはそれを華麗に避けたが、まわりにいた何名かの参加者が不運にも巻き込まれる。
ある者は爆発して吹っ飛び、槍がぶつかりもんどりうって落ちるもの、網にかかって身動きが取れなくなったもの、またある者は明らかにおかしな行動をとり始めたり（さっきのよくわからない物は混乱付与のアイテムか何かだったらしい）して、当たればもれなく再起不能なものばかりだ……
「俺たちも飛べたらなぁ……」
キリトが空を見上げると、遥か上空をロングホーンとピナ達飛行組が悠々と飛んでいるのが見える。
開始早々空に飛び立ったシリカ達は一時爆風に煽られたものの、すぐに立ち直って飛んでいた。
「それは馬である私には無理な相談だな。それに空が安全だというわけでもなさそうだ」
はっしばは小さい時からまったくかわらない、子供のような声色なのに大人びた口調で答えながら、ひょいひょいと降ってきた槍のスコールを避けていく。
そしていつまでも続くと思われていた怒涛の攻撃が突然止んだ。
「んっ、なんだ？」
いぶかしんでキリトが後ろを振り向くと、そこには予想外の惨劇が繰り広げられていた。

「おーっっと、先頭グループに何かあったようだぁ！」
「それじゃ、中継のオーヴァンさんに状況を伝えてもらいましょ。オーヴァンさーん！」
ここでモニターに赤い丸サングラスをかけ、マイクを持った青髪の男が映った。かなり高い高度にいるらしく、後ろの直ぐ近くに雲が映っている。
「こちらオーヴァンだ。今私は飛行中のザワン・シンの上から中継をしている。ちなみにカメラマンは月の樹のギルドマスターである欅」
ここでカメラがくるりと回転し、画面いっぱいに欅のニコニコ顔が映る。
「アシスタントはケストレルのマスターのガビだ」
こんどはオーヴァンの隣にいる獣人タイプの男にカメラが向けられた。
どアップに映ったガビはがははは っ、と笑いながら胸を張って言い放つ。
「おうっ、ガビだぞー！」
観客全員がこのある意味豪華だが中継には向いてない顔ぶれに、人選間違ってね？と思ったが、誰も口にしない。あの3人の行動は理解しようとすること自体無意味だし、陰口を叩こうものなら、どんなことになるのかはっきりしているからだ。
「今、ちょうど第一のイベントゾーンに先頭集団が突入した。これはなかなか見ものだな」
欅がザワン・シンのごつごつした背中を歩いて首のところまでたどり着き、カメラを下に向けた。

「ぎゃーっ、助けてくれー！！」
「ジーザス！？ヘッ、ヘルプ！！」
「いやっ、ちょっ、たんまぁー！やっ、やめてくれー！！」
「きゃぁ！なにこれーっ！？」
キリトが後ろを振り返ると、そこは地獄絵図だった。
いつのまにかフィールドが草原から荒野に切りかわっており、その地面から無数の触手が参加者に襲いかかっていた。ある者は足を絡まれ宙ぶらりんにされ、あるものは全身を縛られ身動きが取れず、その他色々な形で捕まっている。
さらになぜか上からは、遥か上空を飛んでいたはずの飛行タイプの参加者たちが急降下して来ていた。
「なっ、なんだあれ！？」
逃げるように地上に向かってきている参加者達の背後から、巨大な飛行船が何隻も追いかけてきている。その船の周りには、大きくなったはっしばのゆうに倍の大きさはあるであろう機械っぽいグランディが何十、いや、何百体も飛んでいた。
「おおっ、あれは飛空船団に量産型メカ・グランディ。まさかあんな大がかりなものを出してくるとは……」
はっしばが驚き半分感心半分の声を上げる。
「飛空船団に、メカグランディ！？」
（上は軍団、後ろは触手。ここは……）
「逃げるが勝ちだな」
「同感だ。スピードを上げるが、大丈夫か？」
「もちろん。馬上にも慣れたし、これならもう戦うこともできる」
持ち前のゲーム順応能力ですでに馬に乗ることも慣れたキリトは後ろ向きに乗って、迫りくる触手を両手に持ったグランディ特製の片手剣としてぎりぎり機能するまでのサイズに大きくした斬馬刀で豪快に薙ぎ払いながら自信たっぷりに言い放つ。
そのキリトの様子にはっしばは少し考え込んだ後、さらに状況の悪化を知らせる言葉を紡ぐ。

「それなら、あれもなんとかして貰おうかな」
「あれ？」
キリトがどれだと聞こうとした瞬間、それは飛空船の部隊の一部から投下された。
それは最初は小さな芥子粒のようだったが、地上に近づいていくにつれ見る見るうちに大きくなっていき……
ドスーーーーンッ！！
もの凄い轟音と衝撃波を生みながら、それは地面に降り立った。もうもうと立ちこめた砂煙が収まると、そこには体をところどころ包帯で巻かれた、赤黒い肌の巨人がしゃがみこんでいた。
「きょっ、巨神兵？」
キリトはついつい大昔の有名な某アニメ映画に出てきた古代兵器のことを思い出して口に出す。
「安心しろ、口からビームは吐かない。ただし……」
はっしばが的確な返答をしているうちに、着地の衝撃で座り込んでいた巨神兵のような巨人がすくっと立ちあがり、キリトたち参加者の方を凝視する。
そしてその巨体から想像できないほどのスムーズさでクラウチングスタートの構えをとったかと思うと、もの凄いスピードでキリト達の方に向かって走ってきた！
「あいつらは走るのが速い！」
言い終わると同時に、はっしばはさらにスピードをアップした。
「あんなのどうすりゃいいんだ！？んっ？はっしば、今おまえ、あいつらって言ったか？」
キリトが嫌な予感に冷や汗をかいていると、先ほど巨神兵を落とした船団から続々と何かが投下されてきている……
「おっ、おい、まさか……」
そう、それらは全て今地上を猛スピードでこちらに向かって走っているのと同じものだった……
「とりあえず……」

キリトは後ろから迫ってきている触手に、小回りの利かない斬馬刀をしまい牽制のスローイングナイフナイフを休むことなく投げ続けながら叫んだ。

「走れぇーー！」

触手に捕まった参加者たちが巨人達に気付き、悲痛な叫び声を上げているのを背中越しに聞きながら、キリトとはっしばは全速力で遁走していった。

モンスターレース、スタート！（後書き）

今回出てきた飛空船団は、・ｈａｃｋ／／無印のボーナスイベントで行けた巨人を曳航している船団が元です。
当時はあれと戦えるのかと楽しみにしていたんですが、結局近くで見れただけでした……

モンスターレース中盤

「見ろ、人がゴミのようだ！」
吹きさす風に首に巻いた白いマフラーをはためかせながら、オーヴァンは触手につかまっていた参加者が飛空船団とメカグランディ、そして巨人に蹴散らされているのを見て、ははは っ！と愉快そうに笑っている。
だがガビと欅があまりにもスルーするので笑い声はどんどん尻すぼみになっていった。
笑うのを完全にやめたオーヴァンは咳払いをひとつするとカメラに向かってしゃべり始める。
「まあ冗談は置いておいてだ、飛空船団と謎の触手に襲われた中盤グループはほぼ瓦解、後方にいた者たちは迂回ルートを通らざるおえないこの状況で、そろそろ第1チェックポイントを通過しそうなのはこいつらだ」
会場のモニターが切り替わり、地図と参加者の現在位置、そしてトップ争いをしている数名の様子がアップで映し出された。
「まずトップを行くのは司とボルドーとその手下2名、その後方におなじみのホタルが迫っている。
さらにその少し後ろに、今回が初参戦のキリトとシリカを先頭にケストレルの残存部隊と上空から難を逃れてきたのが数名が中間グループを作っているな……」
「おうっ、あいつらなかなかがんばってるじゃないか！」
がははっ！と笑いながらガビは何やらメニューを操作しだした。
「褒美にもっとおもしろくしてやるぞ！」
そして無慈悲にも参加者たちに第2の試練が降りかかった。

「おっ、あれが第1のチェックポイント見たいですぜ！」
ねぎ丸は司に呪符を投げつけながらボルドーに向かって叫んだ。
「それじゃ、そろそろ司には退場願おうかね！」
ボルドーは呪符から起こった爆風に煽られバランスを崩した司に横から体当たりして、接触すると同時に剣を上段から勢いよく振り下ろした。
ガキィンッ！
「そんな鈍らじゃ、雑魚1匹も倒せないと思うけど」
司は全くあわてた様子を全く見せず、杖で剣を受け止め、はじいてボルドーを押し返す。
「ふんっ、薄明の守護者がいないあんたなんて、雑魚と変わんねえだろうが！」
さらにボルドーは司を挟んで反対側にいるグリンと挟み撃ちをしようと再度体勢を傾けたが……
ズッドーーーン！
ものすごい轟音と共に叩きつけられた突風と衝撃波に4人ともプチグソの背中から落ちそうになりながら（ねぎ丸はほぼ落ちていたが、足が手綱に引っ掛かり引きずられながらも一応セーフ）何事かと前を向いた。
そこはさっきまではチェックポイントである旗がぽつんと立っているだけのだだっ広い荒野が続いていたはずだった。しかし、今は旗がはためいている後ろに、巨大な山脈がそびえていた。

「キリトさん達ももう通過したみたいですし、そろそろいいかしら、お姉さま？」
その少女は自身の背後から召喚している触手で、多数の参加者を捕まえて人形遊びでもするかのように弄びながら、瞳の色が左右で違うオッドアイで、迫りくる巨人の大群を見ていた。

少女はアウラとよく似た雰囲気で、リコリスやゼフィと同じくらいの年格好、服はグレー系で統一されている。
そしてちょうど顔の高さにウィンドが展開されており、そこにはゼフィとリコリスが丸いテーブルの周りに並べられた椅子に座って、まったりとしている姿が映し出されている。
「お疲れさま、モルティ。もういいわよ♪」
「ご苦労。早く帰ってこい、お茶にする」
二人の短い労いの言葉を締めくくりに通信は切れた。
「はぁ……」
いつものことだが、上の姉二人の遊びに巻き込まれると大変だ。
あの二人は遊びを思いついたり、いじりがいのありそうなおもちゃを見つける度に、自分を引きずり込んで実行役に仕立ててはことをおおごとにして楽しんでいる。
今回のはレースの妨害という比較的軽めなものだったけど、いつもはもっともっと苦労させられている。
まあ本当に嫌だったらほっといて逃げてしまえばいいのだし、こんなことで悩めること自体が幸せの証であるとも言えなくはない。
（それにそれほどつまらないというわけでもないし……）
そんなあの二人の姉には絶対言えないような（言ったらあの二人は必ず調子に乗るかからかう……）思いを口の中で飴玉を転がすように少し味わった。
そしてその後少し苦笑いを浮かべ、彼女は最後の仕上げに捕まえていた参加者たちを巨人の大群の方に放り投げ青いリングと共に消えていった。

度重なる爆撃による熱と硝煙、そして緑の濃い匂いが混ざり合って息苦しくなっている森を二人と二匹があたりを警戒しながら慎重に歩を進めていた。

「ふーっ、何とかまけたかな」
「見たいですね……」
途中で合流したシリカがピナから降りながらキリトの疲れの混じった声に相槌を打つ。
キリトも一息入れるために、はっしばの上から飛び降りて警戒を解かないまでも少し気を緩めた。
走るのが異常に速い巨人の大群に地上から、そして空からは執拗にミサイルなどを撃ち込んできた飛空船団と編隊を組んで襲いくるメカ・グランディから散々逃げ回っていたので（あの触手はいつの間にか消えていた）気を張りっぱなしだった。もし森の中に逃げ込み、木で敵の視界とミサイルを防ぐことに成功してなかったらどうなっていたかわからない……
こういうことには慣れてるといえば慣れているキリトだったが（あの大きさのモンスターの大群はエクスキャリバーを入手するために入った邪神の巣と似ていたし）空から降り続けるミサイルの嵐のおまけまでつくと、さすがに今までの経験の範疇を超えていた。
「まあ、それでこそゲームって気もするけどな……」
未だゲームのジャンルとしては若いＶＲＭＭＯは、これからさらなる未知の体験をさせてくれるとキリトは予感していた。
「何か言いましたか？」
キリトの声は呟くように小さかったが、耳に入ったらしく横を歩いているシリカが訪ねてきた。
「いや、ただの独り言」
「そうですか。それにしても、他の人は誰もいなくなっちゃいましたね。ＨＯＴＡＲＵさんともはぐれちゃったし……」
シリカがあたりを見回しながら少し心細そうに呟いた。
確かに執念深く絡んできたケストレルのやつらも、あの大混戦の中で散り散りになり、何人抜けられたか定かではない。上を飛んでたやつらも何人も撃ち落されているのを目撃している。まあ弾が当たった瞬間パラシュート付きのネットに包まれて身動きが取れなく

なっていただけなので危険はないみたいだったが。しかし、捕まって地面に落ちた参加者とパートナーが巨人に網に入れられたまま連れ去られていたが、あの光景はなんだか……いや、これ以上考えるのはやめとこう……

思考がやや想像したくない方向に行きだしそうだったので、キリトは考えるのを一旦止めてシリカの不安を解くことにした。

「ホタルはああ見えて結構したたかだし、このレースも初めてじゃないだろうから大丈夫なはずだ。他の奴らはあの混乱だったから、コースを外れたやつがほとんどと見ていいだろ。俺たちはラッキーなことにほぼまっすぐこれたから……っほら、もうすぐ森が開ける！」

第1チェックポイントは目と鼻の先だ。

「しかしデカいな……」

はっしばから降りたキリトが見上げると、そこには頂上が雲に隠れて見えないほど大きな山がそびえ立っていた。いや、その隣にもいくつもの山が連なっているから山脈と言った方が正しいか。

キリト達は森を抜けるとすぐに見えたチェックポイントと、その後ろに見えた絶望的なまでにデカい山に圧倒させられてしまった。

呆けること数秒、すぐに急いで第1チェックポイントまで行きながら、これからどうするかとシリカやはっしば（一応ピナも）と作戦会議を始めた。

話すこと10分……

「それじゃあこの薄ませたやつを飲ませればまた巨大化できるんだ

？」
　キリトがシリカから渡された小瓶を見ながら尋ねた。
「はい。ピナがどうしても飲んでくれそうになかったんでリコリスさん達に相談したら、薄めたら味もましになるからって教えてくれたんです。そのかわり、効果は短くなってしまうんで何回か飲ませないとだめですけど」
「それならそうと最初から言ってくれればいいものを……」
　薄めていない原液を飲んだはっしばは、味を思い出したのか苦い顔をした。
「ごめんなさい。本当はキリトさん達にも言おうと思ったんだけど、ゼフィさんが『あいつには絶対に言うなよ。聞きに来ないやつが悪い』って、言われちゃって……」
　シリカが申し訳なさそうにしょぼんとしてしまったので、はっしばがばつが悪そうにして話を切り替える。
「それでこれからの行動は自転車のレースで言うと私がエース、ピナがアシストということだな。
最初に私が飲んだエキスをあれして元のサイズに戻り、その後ピナに二人と私を乗せて全速力で山を越えてもらう。そしてその後私がまた巨大化してゴールまで走りきる」
「ああ、これが優勝するのに一番の手だと思う。もう先頭集団とは結構離されちゃってるから、ピナとはっしばが協力しても追い付くかどうかぎりぎりだし、確実とは言えないけどな……」
　キリトが歯切れの悪そうに言うと、シリカがその不安を払うかのように明るく声を上げる。
「それじゃがんばって早く追い付きましょう！」
「キュルルッ！！」
　シリカの掛け声にピナが元気よく答えた。

「それじゃ頼むぞ、はっしば……」
「お願いします」
はっしばは無言で頷くと、ちょっと遠くの岩陰まで走り去っていった。
「大丈夫かな？」
シリカがピナのことを撫でてやりながら心配そうにこちらに聞いてきた。
「まあまだ短い付き合いだけど、あいつなら大丈夫だろ。それより、ピナは行けそう？」
「はい、さっき追加を飲ませたんで大丈夫です」
当のピナはぶるぶる震えて羽を落ち着かないようにパタパタさせている。
「戻ったぞ」
そう言われても初めはどこで言われてるのかは気づかなかった。
しかし足元の方を見ると……
「おっ、ちゃんと小さくなってるな」
「ふんっ、当たり前だ。」
はっしばが小さい体をぶるんと揺らすとキリトに向かって飛びかかったと思ったら、肩の上に乗ってきた。
「それより早く出発するぞ。私たちはだいぶ出遅れてるみたいだからな」
「よし、それじゃあシリカとピナ、後は頼む」
「はい！」
そう言ってシリカと俺とはっしばはピナの上に乗った。
シリカには座る鞍があるが、あいにくタンデムシートはないので、俺はシリカに後ろから掴まることになる。
「それじゃあしっかり掴んでください！」
シリカが少し緊張して裏返った声で言ってきた。
キリトはちょっと悩んで、とりあえず肩を掴む。

「フルスピードで行くんですから、そんなんじゃ確実に落ちますよ！」
そう言われてはしかたないので、キリトは肩においた手をシリカの腹のほうに回してぎゅっと掴んで、ぴったりと密着した。呆れるほど緻密に再現された感覚が、シリカの体温や髪からほのかに漂ういい香りをキリトの脳へと届ける。
（な、なんか後ろに乗るのって結構恥ずかしいんだな……）
普段はバイクなどで後ろに人を乗せることはあっても、誰かの後ろに乗ったことがほとんどないキリトにとって、新鮮さと気恥ずかしさがない交ぜになって何とも言えない心境になっている。
「そ、それじゃ行きます！お願い、ピナ！！」
キリト同様かなり緊張した様子で顔を真っ赤にしながらシリカはピナに命令をだす。それに答えてピナは翼をはためかせ、妙な空気を孕んだままの二人を乗せて矢のように頂上を目指して飛びたった。

モンスターレース中盤（後書き）

はっしばが元の大きさに戻った方法は……食事中の方もいるかもと考慮して（いや、いないだろうけどw）詳しくは語りません。

モンスターレース終盤

「前が、ほとんど、見えません……！」
シリカが顔にへばり付いた髪の毛をかきあげながら雨音に負けないくらいの声で叫んできた。
キリトたちが山に入ってから急に空模様が悪くなったと思ったら、ぽつぽつっと水滴が顔に当たり、瞬く間にスコールになっていた。
目の前が霞むほどの雨がもうすでに１０分ぐらい降り続いている。
「まあ山の天気は変わりやすいって言うからな」
キリトもゴーグルについた水滴を意味が無いとわかっていながらも拭いながら何とかできないかと考えを巡らせていた。ずぶ濡れになってもＨＰが減るわけではないが、精神的にきついものがある。
「レインウェアでも持ってくるんだったな……」
まさかこんな展開になるとは思っていなかったので、特に用意していなかったのをキリトが悔んでいると、唐突に雨脚が弱まり始める。
「やんできた……？」
そんなことを考えてるうちに、降り始めたのと同じくらい唐突に雨はやんでしまった。
なんだか色々考えてたのがバカみたいだなっと思いながらもやっと一息つける……と、キリトが気を少し抜いた次の瞬間、何か白くて冷たいものが頬に当たった。
「あれ、これってもしかして……雪？」
その言葉をシリカが言い終わるか終らないかのうちに、こんどはぱらぱらと雪が降り始め、あっという間にブリザードになってしまいわずか数十秒後には一面雪景色になっていた。
「やっ、山の天気が変わりやすいって言っても、限度があるだろうがーーーー！？」
キリトの誰へのツッコミかわからない叫び声が虚しく山へとこだ

ましていった……

さらにとどめと言わんばかりに、今度はどこからともなく飛行型モンスターの大群まで湧いてくる。

「くそっ、切りがないな……」

先ほどからキリトは迫りくるモンスター達にナイフや呪符を投げつけている。

しかし、倒しても倒しても湧いて出てくる上に、スコールによってびしょ濡れになった後に吹雪にあい服が凍って動かしにくい上に、体がかじかんでいつもの威力と命中率の半分も出せていなかった。

ゲーム内だから歯をがちがちいわせる程度ですんでるが、現実だったら凍死確実だろう。

しかしここでも寒くて動きが悪くなるのは変わりなく、吹雪による視界の悪さも加わり、キリト達はかなりの苦戦を強いられていた。

「キリトさん！あと少しで頂上です！！でも、予想以上に時間が掛っちゃったから……」

そう、この図ったかのような悪天候のせいでピナは思うようにスピードが出せず、そろそろ巨大化していられる制限時間になってしまう。

そしてキリトが次善の策を頭から捻り出そうとしている間にも、どんどん頂上に着くまでのタイムリミットが近づいていき……

「さぁて、次は何が起きるかな！」

高度数千メートル上空、ザワン・シンの背中の上ではガビがふんふんっ♪と鼻歌を歌いながらダーツを持ってルーレットが回っているのを見ている。そのルーレットが止まっていれば、そこにモンス

ターの大群出現！や、猛吹雪、大雨、噴火、落雷などが書いてあることがわかったろう。
　つまり、先ほどからの悪天候とモンスターの大群は、ガビがダーツを投げて当たったことにより引き起こされていたのだ。
「さて、今どんどん追い上げてきていたキリトペアとシリカペアだが、ここにきてどうやらあの竜の巨大化が解けたようだ。このままだと……」
「モンスターの餌食ですね♪」
　オーヴァンが淡々と解説をしていると、カメラを持った欅が口を挟んだ。
「欅、お前は確かキリトと一緒にパーティを組んだんだろ。少しは心配しないのか？」
　オーヴァンがあきれ半分どうでもよさそうな感じ半分で聞くと、欅はニコニコ笑って答えた。
「心配なんてしてませんよ。まだ短い付き合いですが、キリトさんは……」
　欅は言いながらカメラをオーヴァンから遥か下のキリト達の方に向けた。
「これくらいでどうにかなる玉じゃないですからね♪」

「もう、ダメみたいです！？」
　ピナが頂上に差し掛かったと同時にシリカが叫び声をあげた。それからすぐにぼんっ！という音と共にピナは元の姿に戻ってしまう。
　頂上に差してある第二チェックポイントの旗の近くの地面に着地した後、キリトはゴーグルに付いた雪を拭き取って視界を確保し、メニューウィンドウを操作してアイテムポーチから例の小瓶を取り出した。そして一瞬、麓に降りてから使う予定の巨大化エキスをピ

ナかはっしばに飲ませようと迷う。しかしそうしたらこの場はやり過ごせるだろうが、確実に優勝争いから脱落してしまう……

そう悩んでる間にも、背後からモンスター達が迫ってきているのが聞こえてくる。

「うわっ！あぶね！？」

寒さでかじかんだ手を滑らせて、キリトは危うく小瓶を地面に落してしまいそうになった。

（まあ下は雪が積もっているから、落しても大丈夫だろうけど……。ん？滑る……雪……積もる……）

それらの言葉が頭に浮かんで一つに繋がった瞬間、キリトはあることを閃いた。

「うおぉぉぉぉぉーーーー！！」

キリトは気合いの叫び声をあげながら、はっしばとピナを肩の上に乗せ、シリカを抱きかかえながら猛スピードで雪の積もった斜面を下っていた。モンスターの大群は今もまだ近くを追走しているが、ピナに乗って飛んでいた時とほぼ変わらない距離を保てている。

「少し飛ぶから、しっかり掴まってろ！」

キリトは少し出っ張っている所をジャンプ台にして飛び上がり、さらにスピードを速めた。

「キッ、キリトさん！大丈夫ですかこれ！？」

乱暴に着地した後、シリカが自分の腕の中で丸くなりながら寒さと緊張と恐怖のためか顔を真っ赤にしてぶるぶる震えているのをキリトはちらりと見る。

「キリト、もう少し安全走行で頼む。ただでさえ即席のスノーボードなんだからな」

「キュルルルッ！！」

「大丈夫！それに、これくらい速くしないと追いつかれる！！」

肩の上に乗ったはっしばとピナにたしなめられながら、キリトはスノボーを操り、さらにスピードを上げていった。そう、キリトが思いついたのはスノボーを作ることだ。
材料は一昨日のグランホエール修繕作業中に持ち運びが大変な板やらなんやらをアイテムポーチに入れておいたのをそのままにしていたのを使用。
それらを使い即席のスノボーを作り、運よく先ほどから吹きつけていたブリザードも風向きが変わり今は追い風なった助けも借りて、スピードをどんどん上げて2人＋2匹で猛スピードで下山している。
「おっ、上から敵が来てるな……後のも結構近いし……」
だんだん迫ってきた敵に対して少し悩んだ後、キリトはシリカにある考えを伝えた。
シリカはびっくりした表情をしたが、すぐに黙って頷く。
「よしっ、じゃあ3数えたらやる！3、2、1、今だっ！」
掛け声とともにキリトはシリカを思いっきり空高く放り投げ、それと同時にスノボーを操り後ろを向いた。
「火炎独楽！！」
シリカが上空で炎を纏いながらの回転攻撃で敵を蹴散らすのを視界の隅で見ながら、キリトは手持ちの残り全部を使う勢いで、ナイフと呪符を投げまくった。
ピナも援護で火炎弾を放ちまくってくれたことも加わって、あたりは吹きつける雪を吹き飛ばすくらいの大爆発が起こり、ほとんどのモンスター達を倒すもしくは行動不能にすることができた。
上空のモンスターを倒した後、重力の法則に従いかなりのスピードで落ちてきたシリカを見事にキャッチして、キリトはまた勢いをつけようと体を傾けた。
しかしその直後、吹雪が吹き付ける音とは別な地鳴りのような音が辺りに響いてることに気付いた。そしてシリカが後ろを直視したまま硬直してるのを見て、キリトも恐る恐る振り返ってみると……

「クソッ！いったいここの天気はどうなってんだい！？」
ボルドーが滅茶苦茶に変わる天候に悪態をついていると、斜め後ろで追走しているねぎ丸が傷だらけでボロボロになった状態で答えた。
「このレースはいつもこんな感じですぜ。それよりボルドーさん、いくら作戦とは言ってももう限界なんですが……」
そう、ネギ丸は先ほどまで追ってきていたモンスターからボルドーを守る盾として応戦していたのだ。
「なにいってんだ、なさけない！グリンも応戦してたけどぴんぴんしてるじゃないかい！！」
ネギ丸の隣を走っているグリンも少しは傷を負っているものの、ネギ丸よりはずっと軽傷でいつも通りの無愛想な表情でぴんぴんしている。
「そりゃあグリンがさりげなく俺の方にモンスターを誘導していたからで……って知らん顔するなよグリン！？」
ネギ丸につっこまれたグリンは横を向いてしらを切っている。
「まあそんなこたぁどうでもいい。それより、あんたらにはいい加減あたしの視界から消えて貰いたいんだがねぇ」
ここでボルドーは少し離れたところにいる司とホタルを睨みつけると同時に、また新たな呪符を投げつけた。
「はぁ……だから、無駄だってば……。というか、もうそのセリフは聞き飽きたよ」
呪符から出てきた炎の塊が周りの雪を融かしながら司とホタルの方に向かっていったが、二人は杖を一振りして水系呪文を使い、簡単に消してしまった。
「もう呪符のストックも残り少ないみたいデスシ、ソチラがここらへんで諦めてくれるとアリガタイのデスガ」
図星を突かれたボルドーは、悔しそうにじたばたしそうになった

が、ぐっとこらえてさらに呪符を投げつけようとしたが……
「うわぁーーーん！逃げてくださぁーーーーい！！」
後ろからもの凄い絶叫と共に、昨日会った新参者の黒服の男と獣使いの女が後ろから滑り降りてくるのが見えた。
しかし二人が追いついたということより、もっと問題なものを引き連れていた。
「「「「「なっ、雪崩ぇ！？」」」」」
その場にいた5人（グリンまでも）が、迫りくる大津波のような雪崩に驚きの声をあげ、あぜんとしてしまった。

１０分後……

「すごいな……」
麓にたどり着き、後ろを振り返るとそこにはすべてを呑み込む勢いだった雪崩が、巨大な氷の壁により見事にせき止められていた。さらに驚嘆すべきは、雪崩すべてを防ぎきるという無理はせず、氷の壁を何枚も重ね合わせながら微妙に斜めにすることにより、上手い具合に俺たちがいるところだけ雪崩がよけるようにしたらしいことだ。
（そんな精密な作業をあの短い間にするなんて……）
しばらく感心していたキリトだったが、さっきの雪崩で近くにいたモンスター達は散り散りになっていてとりあえずは安全そうなので、シリカ達を下してはっしばに小瓶の中のエキスを飲ませることにした。
少しすると後ろから司がやってきたが、いつものポーカーフェイスを取り繕っているものの、その表情からは隠せないほどの疲労が見えている。
「ふぅ、これじゃレース続行は無理かな……」
そう言ってメニューを操作してリタイアしようとしていると、遅

れてやってきたボルドー達がキリト達の方に向かってくる。
　そしてボルドーがクソロッカーから降りて司の方に歩み寄り、いきなり胸倉を掴んだ。
「てめぇ！一体どういうつもりだ！！あんたらは十分逃げ切れたのに、なんで雪崩を防いだ！まさか、恩に着せようとかじゃないよな！？」
　そう、あの巨大な氷の壁を作ったのは司だった。
　キリトたちと司、そして空を飛んでいたホタルは雪崩から十分逃げ切れる位置にいたが、ボルドー達は少し遅れており、あのままいっていたら麓につく前に確実に呑みこまれていた。しかし麓付近で急に司が１８０転回し、ＳＰ回復アイテムを湯水のように使いながら氷系呪紋を雪崩に向かって連続詠唱したのだ。
「別に。ただ単に、僕のプチグソが無理してたから安全策を取って防いだだけだよ。だから感謝する必要もないから安心しなよ」
　そう言って司が肩をすくめると、ボルドーは地団駄踏んで頭をがしがしかいた後、メニューを開きアイテムをいくつか取り出して司に向かって投げつけた。
「……何のつもり？」
　受け取ったアイテムをしげしげと眺めながら、司は無愛想な表情の中に少し意地悪成分を含ませながらわざとわかりきったことを尋ねた。
「どんな理由があろうと、結果的には助けられちまった。このままだと借りっぱなしになっちゃうだろ。これで貸し借り無しだ！……ってそんな顔で見るな、お前ら！」
　キリトたちや上空から降りてきて一息ついていたホタルが生暖かい目で見ているのに気付いたのか、ボルドーは顔を真っ赤にしてそれを誤魔化すかのようにクソロッカーに飛び乗り、後ろで控えていたねぎ丸とグリンを引き連れて駆けて行った。
「ふぅ、素直じゃないんだから……」
「マッタクデス」
　司がそう呟きながらアイテムを使い、さっとプチグソに乗るとボ

ルドー達の後を追っていった。
　ＨＯＴＡＲＵもやれやれとジェスチャーをした後、ロングホーンの背中に上り空高く飛び立った。
「準備ができた。私たちも行くぞ」
　巨大化したはっしばがむくっと起き上がったので、俺ははっしばに乗った後シリカを引き上げて後ろに乗せた。
「じゃあ今度はシリカがしっかり掴まってくれよ。全速力で行くから！」
「はっ、はい！」
「きゅるるっ！！」
「おっ、ピナも援護頼むな。よしっ、それじゃはっしば頼む！」
「ふんっ！振り落とされるなよ！！」
　そう言ってはっしばは嘶きと共に駆けだした。

モンスターレース決着

「さぁ！ついにレースも大詰めだぁ！！
第３チェックポイントを通過すれば、あとはこの会場まで続くトラップなしのストレートコースを走り抜けるだけ。果たして優勝するのはだーれだぁ！」
　ニュークが実況席のテーブルに足をかけながら、派手なマイクパフォーマンスをして会場のボルテージはどんどん上がってきている。
「おっと、ここで中継のオーヴァンがまた何か伝えたいみたいなんで、モニターに映しますぅ」
　レイチェルがそう言ってメニューを操作すると、会場の巨大モニターにオーヴァンの顔のアップが映し出された。
「こらっ、欅、近づけすぎだ！何、もう映っている？」
　オーヴァンは少しあわてた様子を見せたが、すぐにいつもの憮然とした態度に戻った。
「こちら中継のオーヴァンだ。今第３チェックポイントに選手たちが肉薄しているのだが、ちょっとしたトラブルが起こった」
　会場がざわめく中、欅はカメラをオーヴァンから遥か下の地上に向けた。

「このぉー！まちやがれ！！」
　ボルドー達が追いつこうとするが、まったく差を縮められない。
　スピードを出しても、あざ笑うかのようにそれに合わせて向こうもスピードを上げていく。
　上空ではホタルが果敢に降下しようとトライしているが、何度も相手の攻撃により後退せざる負えなくなっている。
　かくいう俺たちと司も、成すすべなくただ追いかけることしかで

きていない。
「っていうか……」
キリトはその場にいる全員が思っていることを叫んだ。
「何であんたがここにいるんだよ！！」
それに満面の笑みで答えたのは、プチグソに乗ったカイトだった。

遡ること３０分……

「あっ、見えました！５ｋｍぐらい先にフラッグがあります！」
シリカが片手に持った望遠鏡を覗きながら叫んだ。
フィールドは乾燥した砂漠のような荒野に変わっていた。さっきの凍てつくような寒さから打って変わって灼熱地獄のような照りつける太陽に閉口しながらも、ここがゲーム内であることにキリトは感謝した。現実で５０度以上の気温の変化を一気に体験したら、確実に体は持たないだろう。
まあそれでも暑いのには変わりないのだが……
そんなことを考えながら駆けているはっしばに乗っていたキリトだったが、モンスターもボルドー達からの妨害もない今、総合的に見れば比較的楽な状態だった。
しかし、最後のフラッグを抜ければあとは直線コースを残すのみ。そこからは今は静かなボルドー達も本気で来るだろうから、潰し合いになるだろう。
そんなことをキリトは覚悟していたが、すぐにそんな先のことを考えるのは早計だったことに気付かされることになった。

１０分後

「おっ、やっとフラッグが見えた。けど結構遠かったな」
（はっしばの速さなら５ｋｍなんてすぐなはずなのに、こんなにか

かるなんてな……）
「おかしいです。さっきは大きな砂丘の上に立ってたのに……」
「ん？それってさっき通過したところ？」
「はい。それになんだか、あのフラッグ動いてるような……」
シリカが言いかけたが、その続きはねぎ丸の驚きの声により遮られた。
「なっ、なんだありゃあ？」
長いフラッグの下に、何かの群れがいて、その群れの動きに合わせてフラッグも移動していたのだ。
どうやら先ほどシリカが見たときは、砂丘の陰に隠れて先っぽしか見えていなかったらしい。
「見てクダサイ！誰かがフラッグを持ってマス！！」
ＨＯＴＡＲＵが上空から叫ぶと同時に、近づこうとしたが、それはあえなく断念させられた。なんとその人物が、右手を突出し幾何学模様の帯を纏った黒い球体を発射したからだ。
「あれはデータドレイン……ってことはまさか……」
そのあとの言葉を紡ぐ前に、キリトたちの前にいきなりウィンドウが現れた。
そして、そこにはやはり予想通りの人物の顔が映し出されていた。
「やあ、みんな。ごきげんよう♪」
「「「「カッ、カイト！？」」」」

「こっ、これは大変なことになったーー！なんと、あの悪名高いウイルス浸蝕値１００％のカイト―（以下腹黒カイト）が、レースに乱入してフラッグを持ち去ってしまったーーー！！」
「って、そなアホな！？あのフラッグはちょっとやそっとの力じゃ抜けないはずでしょ！？」
レイチェルが手元のメニューを忙しく操作しながらツッコンだ。

「いや、だからちょっとやそっと以上の力だったんだろ……っていうか、たぶんデータドレインで根元をぶち壊したんじゃね？」
ニュークが素に戻って冷静に解説すると、レイチェルがいつの間に取り出したのかハリセンで頭をスパコーンッ！と小気味良い音をたてて叩いた。
「あんたはなんでそこで素に戻るんや！常時漫才の心掛けを忘れたんかぁ！？」
きっちりツッコミ終えた後、レイチェルはメニュー画面からルールブックを表示し、会場のモニターに映し出した。
「えー、大会の規約によりますと、フラッグの半径１０ｍ以内を通過しないとだめらしいです。今回みたいなことは想定しとらんから、とりあえずカイトの持つフラッグの半径１０ｍ以内に入ってください」

「そんなムチャナ！？」
レイチェルの説明を聞いたＨＯＴＡＲＵがロングホーンの上で悲鳴に似た叫び声をあげた。レイチェルのムチャぶりにツッコミながらも、ＨＯＴＡＲＵは先ほどから休む暇がないほど撃たれているデータドレインを避けて避けて避けまくっている。
「こんな状況でどうやって近づけと言うんデスカ！」
一方地上では……
「なっ、なんか色んなプチグソがいるな……」
追いかけられるのに飽きたのか、カイトは逆にキリト達を完全に包囲して追い詰めた。司やボルドーたちも遠くのほうで囲まれているのが見える。そしてその包囲網を作っているのが、多種多様なプチグソ達だった。
「クソキゾク、クソアイアン、ポイズングソ、クソザボーン、スネーグソ、クソザアクア、ミルキーグソ、クソロッカー、クソザウッ

ド……どうやらプチグソ勢揃いみたいだね……」
　司がメニューを見ながら呟いた。
「そりゃあもちろん、僕は主人公だからすべての種類を集めてなきゃおかしいでしょ？それに１匹１匹パラメーターが違うから、最強探して集めてたらこんなに大所帯になっちゃったんだよねw」
　そう言って笑いながらもカイトは上空から近づこうとするホタルにハエを追い払うかのようにデータドレインを撃ち続けている。
「というかなんであんたがここにいるんだ？確かブラックローズに閉じ込められてたはずじゃ？」
　一昨日のブラックローズがした厳重なロックを見ていたキリトが問いかけると、カイトはニコニコした表情で返答した。
「まあやろうと思えばデータドレインであのロックを全部ぶち抜くこともできたんだけど、ウイルス浸食値が余計に消費されちゃうからブラックローズに出してもらうことにしたよ」
「いや、素直に言っても出してくれないだろ？というか出しちゃダメだろ……」
　キリトがげんなりしながら疑問符を出していると、カイトが説明を続けた。
「ただ単に防御システムの内通信妨害だけ壊して、そのあとＴＨＥＷＯＲＬＤ中にブラックローズのあんなことやそんなことを嘘と本当を交えながら面白おかしく語っていたら、すんなり開けてくれたよ？」
　そのあと起こったであろう腹黒カイトと怒れるブラックローズの追走劇が目に浮かぶようだ……と、キリトは思いながらも、カイトが気になることを言っていたのに気づいたが、何も言わずに話しを続けた。
「それよりカイト、なんで俺たちの邪魔をするんだ？賞品がほしいとか？でも勝ちたいんだったらこんなとこで油売ってないでゴールに向かうはずだよな」
　キリトのもっともな問いに、カイトはあっけらかんと答えた。

「そんなの君たちをおちょくって楽しみたいからに決まってるじゃないかwそれに、キリトたちの場合時間制限がある上に、優勝できないとリコリス達からの罰ゲームがあるんでしょ？あの二人はなかなかわかってる人達だからねぇ。きっと面白いことになるだろうし♪」

カイトは本当にいい顔で楽しそうに話し終えた後、急にむっ、とした表情をした。

「というか、そろそろ諦めてよＨＯＴＡＲＵ。いい加減鬱陶しいんだけど……」

先ほどからデータドレインの射程圏内を行ったり来たりしているホタルをさすがに煩わしく思ったのかカイトが文句を言った。

時を同じくして、ショートメッセージが送られてきたことを示す音がキリトの耳元で響く。キリトはカイトに気づかれないようにこっそりメニューを開いてメッセージを確認すると、差出人はホタルで、そこには『後３発』とだけ書かれていた。

キリトは同様にメッセージを受け取ったのかこっそりメニューを見ている司のほうを見ると、視線に気づいたらしい司はこちらを見て無言でうなずいた。

「ところでさあ、カイト」

「ん、なんだい、キリト？」

データドレインを撃ちながら答えたカイトは、少し苛立っていた。

「いや、カイトは優勝賞品の中で何が欲しいのかなって」

キリトはメニュー画面をこっそり手元で操作し、シリカにこれから起こるであろうことを伝える。

「何？もしかして勝つのは諦めるから賞品のうち欲しいものを譲ってくれってこと？」

華麗にデータドレインを避けたホタルに追い撃ちでもう一発放つが、それもぎりぎりでふわりと躱される。

「勿論条件次第で譲らないこともないけど、でもね、キリト……」

ここで右手と視線を常にホタルのほうに向けていたカイトがこち

らを向いた。そして、なんと左手に持っていたフラッグを地面に突き刺した！
「僕は優勝する気ないから。あ、それとウイルス浸食値のことなら、確かにあとデータドレイン一発で打ち止めだよ」
いきなり言われて一瞬反応できなかったが、すぐにカイトは自分たちが浸食値が0になるのを待っていたことに初めから気づいていたことをキリトは悟った。
「まあ一応僕が眠っている間のことも朧げに思い出せるし、キリトたちがどんな罰ゲームを受けるか楽しみにしてるよw」
そう言ってカイトは右手をキリト達に向けてデータドレインを放った。

「ふむ、どうやらカイトのウイルス浸食値は0になったようだな」
先ほどからデータドレインの流れ弾に当たらないように急旋回を繰り返していたザワン・シンの上に乗っていたオーヴァンたちは、少しよれよれとした格好になっていた。
「カイトのやつ、イタチの最後っ屁よろしくあいつらにデータドレインを撃ってったぞ！その相手を定めたらどこまでも付け狙う根性、なかなかだ！！」
ガビは鬣が乱れながらも、いつものごとくがははは！と笑っている。
「しかしこれでキリト達の状況は絶望的だな。データドレインはそれたのか狙ったのか分からないが、キリト達の足元に当たったことにより、巨大な穴ができ、そこに落ちてしまった。飛べない彼らは脱落。これで先頭争いはボルドー一味、ホタル、そして司に絞られたわけだ」
「……」
いつもここで何か言うはずの欅は黙したままいたので、ザワン・

シンはゴールを目指している選手たちをまた追走し始めた。

「何か最近よく落ちるなぁ……」

キリトが体を逆さまにしながらしみじみとしながら言うと、横でピナをしっかり抱えたまま同様に落ちているシリカがじたばたした。

「ってそんな悠長な！それよりどうするんですか！？ってか深すぎ！！」

キリトは何か言おうと思ったが、その前に下のほうでぼんっ！という音がしたかと思うと何かが浮かんできた―（というより落ちるスピードが減速し、キリトたちのほうが追いついた）

「ああ、やっぱり時間切れか」

「そのようだな……どうやらあのカイトとかいう男、初めから計算づくだったらしい」

まあ今更その話をしても仕方ないし、それよりこれからどうするかだ。

「とりあえずシリカ、俺につかまってくれ」

キリトは近くを落ちているはっしばを引き寄せて肩につかまらせた。

シリカも掴まったのを確認した後、キリトはエフェクトとともに剣を取出し、穴の側面に思いっきり突き刺した！

ガガガガガガガガガガガガッ！

ものすごい衝撃がキリトの両手を襲うが、何とか数秒間こらえて、少し経つと減速、そして完全に止まった。キリトは二本の剣がちゃんと刺さっていることを確認した後、刃を寝かしてその上に乗った。

「ふぅ、これで何とか一息つける」

「あ、ありがとうございます。でも、かなり落ちちゃいましたね……」

まだぎりぎり上のほうには明かりが見えているが、それももう少

し落ちたら消えてしまうほどのか細いものだった。
「うーん、一つだけ方法があると言えばあるんだけど……タイミングがなぁ……」
キリトが呟くと、シリカが喰いついてきた。
「何かあるんですか？それなら、やってみましょう！」
そのやる気っぷりにキリトは少し驚かされる。
「いや、なんかすごいやる気だな。どうしても欲しいものがあるのか？」
そう聞くと、シリカは頬を少し赤らめて何かごにょごにょ呟いたが、そのあと逆に質問してきた。
「そ、それじゃあキリトさんはなんでこの大会に出たんですか？」
「ああ、俺はＡＩの病気に効果抜群の秘薬が賞品の中にあるって書いてあったから、ユイの為に手に入れようと思ってな。まあなんか胡散臭いけど」
そう笑って言うと、シリカは少し考え込んだ様子になった。
しかしすぐに顔をあげて元気に言い放った。
「じゃあがんばらないと！！それで、キリトさんの秘策とやらを教えてください」
「いや、秘策ってほどでもないけど、この前たまたま疑問に思ったことを欅に聞いただけで……」
そう言ってキリトは説明し始めた。

「もう少しデスヨ！頑張ってクダサイ、プチグソサン！！」
ホタルは下から止めどなく放たれてくる呪符による攻撃を連続無詠唱でさばきながら叫んだ。
ゴールである会場が視界に入ってくるまで、かなりの無茶をして先頭を保てているが、ボルドーたちの攻撃は苛烈さを増すばかりで、終わる気配がない。

さすがに完全に防ぎきるのも限界で、ロングホーンはところどころ傷を負ってしまっている。

一方司のほうはというと……

「これでアイテム切れ……」

今のＳＰ回復で、先ほどボルドーから受け取ったアイテムは使い切り、あとは手持ちの呪符と残りのＳＰを使っていくしかない。しかしボルドー達ももうそれほどのストックがあるわけでもないらしく、今最後の猛攻に出ているらしい。

（これを防ぎきれば、あとは純粋なスピード勝負。とはいえまずはここを耐えきる必要があるけど……）

そんなことを思いながらも、疲労でふらふらしていたねぎ丸に火炎系呪紋を放ち、丸焦げにしてやった。

「ねぎ丸の野郎、へましやがって！！」

防戦一方だった司の不意の反撃により、ねぎ丸はこんがりいい色に焼かれていた―（それでも辛うじてクソロッカーの上から落ちなかったのは、やられなれているからだろう……）

少し後方を追走しているグリンは、絶えずホタルのほうに呪符を投げ続けている。

相手はかなりぼろぼろだが、こちらもすでに呪符は底を尽きかけている。

このままでは誰が勝つかわからないな……

そんなことを考えながらも、近づいてきたゴールを視界の端でとらえ、最後の攻撃に移った。

「さあ、ついにレースも大詰めぇ！どうですか、オーヴァンさん。このレース誰がものにするでしょうか？」
ニュークが会場の上空に待機しているザワン・シンの上に乗っているオーヴァンに尋ねた。
「どうやら全員のアイテムとＳＰも底を尽きかけてるみたいだ。ここまでくればあとはスピード勝負だが、それも全員ほぼ互角。これは誰が先頭になるかはわからないな……」
隣に立っているガビも、がははははっ！と笑いながら続けた。
「おうっ！本当に見ものなレースだ！！」
と、ここで、会場が沸き立った。とうとう選手たちの姿が朧げながらも見えてきたのだ。
「ついに来たーーーー！さあ、このレースを勝つのはいったい誰なんやーーー！？」
レイチェルがマイクを持ちながら興奮して顔を真っ赤にしながら叫んでいる。
そして会場のボルテージがＭａｘになったと思われたとき、欅が自分のほうにカメラを向けた。モニターにドアップで映し出された欅はのんびりと言う。
「あっ、やっと彼らが来たみたいですね♪」

「ちっ、これで最後か！」
ボルドーは最後の呪符を司に投げつけた後、体勢を攻撃しやすいものから速く走らせやすいものに変えた。それを見た司やホタルも、最後のラストスパートをかけてきた。あと数ｋｍで勝負がつく！そう心の中で叫んだあと、全神経を前に集中した。
ビーッビーッビーッ！
しかし、そんな姿勢も、いきなり鳴りだしたアラームにより途切

らされた。それは後ろから誰かが急接近しているときに鳴るようあらかじめ設定しておいた音なのだが、今レースに残っているものは上空にいるホタルと横に並んでいる司だけ。
仲間であるねぎ丸とグリンには反応しないはずだし、それじゃいったい誰が……？いや、今追いついてこれるとしたら……
そう思いながら急いで振り返ると、そこにはやはりあいつらがいた。
「やっぱりあんたたちか！……って、なんで空飛んでるんだ！？」
そう、それは猛スピードで飛んでいるキリト達だった。

「で、お前は知ってたわけか。キリト達が飛べることを知っていることを」
ザワン・シンの上に立つオーヴァンが、呆れながらもやっと納得いったという表情をしている。
「どおりでお前がキリト達の肩を持つわけだ。この世界でも飛べるということを教えたのはお前だろ、欅？」
オーヴァンの問いに欅はニコニコ笑いながら答えた。
「まあそういうわけです。もちろんこの世界で飛ぶにはデメリットもあるということを伝えましたから、このタイミングで使うこともわかっていましたし♪」
そう、この世界、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄでも翼をもつバルムンクなどの一部のキャラクターは飛ぶことができるのだ。なのでＡＬＯから来たキリト達も、当然飛ぶことができる。
しかしそれにはいくつか制約がある。
まず最初にＳＰをものすごく消費すること。だいたい５分くらい飛んでいたら、高レベルプレイヤーでもＳＰはつきてしまう。もちろんジョブにより違いがあるが、それでもＳＰが一番ある最高レベルの呪紋使いでも１０分ぐらいが限界だろう。

次に行動の制限がいくつかある。
飛べるのは開けたフィールドのみで、飛行中は攻撃はおろかアイテムさえ使うことはできない。なのでその間は完全に無防備になってしまう。
これらのことにより、飛空スキルは敵のいないフィールドの移動くらいにしか使うことのできない（しかもＳＰを消費しまくる）かなり扱いづらいものなのだ。
しかし、上手く使えば有効なものでもある。
「なるほど、だから選手達の呪符やＳＰの尽きる終盤まで使わなかったわけか……しかし、キリトのＳＰではあそこにたどり着く前に、尽きているはずだが？」
「それはこうしてるみたいですよ」
そして欅はカメラをズームしてキリト達の姿をモニターに映し出した。

「シリカ、また回復頼む！」
キリトは神経を羽に集中させて、猛スピードを出していた。
「はい、キリトさん！これがラストです！！」
腕の中にいるシリカがＳＰをアイテムを使いＭａｘまで回復する。しかし、所詮焼け石に水、回復した端からどんどん削られていく。
「くそ、燃費悪すぎだな！」
抱えているシリカに無くなりそうになるたびに回復して貰っているのでまだ何とか飛べていたキリトだったが、ここまで来るのに手持ちのＳＰ回復アイテムは全て使ってしまった。それでも、あの差を縮めてゴールの手前で追いつけたのは奇跡に近い。
「それじゃそろそろ準備よろしく、シリカ！それにピナ！」
「はいっ！」
「きゅるるるるるっ！」

そしてゴール目前でキリトのＳＰが切れかけた瞬間、
「いっけーーーーーー！」
キリトは全力でシリカを放り投げた！

「おーーーーっと！キリト選手、シリカ選手を放り投げたーーー！！」
ニュークが興奮のあまり放送席を飛び出してゴールの前までマイクを持って出てきた。
モニターでは、シリカを放り投げた後、地面に何とか着地したものの、衝撃で足が痺れたのかジタバタしているキリトと、放り投げられた勢いを利用して飛ぶことにより、どんどんスピードを上げているシリカが映し出されていた。
「そして、そしてついに、追いついたーーーー！！」
レイチェルもテーブルをひとっ飛びで越えて、ニュークの隣に立った。
もう選手たちは肉眼でとらえられるくらい近くまで来ている。
「後１ｋｍ！」
そしてどんどんその姿は大きくなっていく。
「後５００ｍ！」
もうはっきりとその姿が見えた。
「後１００ｍ！全員横一列に並んでいる！！」
いつの間に移動したのか、横に並んで飛んでいる欅のカメラの映像からでも差がわからない。
「後５０ｍ、そしてっ、ゴーーーーーーーール！！」
ほぼ全員同時にゴールを通った。
ゴールに設置されたカメラの写真判定を待ち静まり返る会場。
そして……
「さあ、結果が出ました！ではモニターをどうぞ！！」

全員の注目がモニターに集まった。
そこには……
全員ほとんど並んでいるが、シリカが小さいピナを両手で前方に突き出して、他の選手たちより先にゴールを割っている映像だった。
「ということは、優勝は……」
「今回が初参戦、シリカ選手に決定ーーーー！！」
わーーーーっ、という声と紙吹雪が会場を埋め尽くした。
まあ良く見れば、その紙吹雪はこのレースのトトカルチョの券だったりするわけだが……
「は、はずしてもうたｏｒｚうちの、うちの今月の食費がぁ……」
レイチェルががっくりとうな垂れているのをニュークが慰めている。
どうやら大半の人が新人で大穴のシリカが勝つとは思っていなかったらしく、会場は純粋な歓声と欲望に敗れた絶望の叫びが混ざり合って混沌としている。しかしそんな状況も、いち早く立ち直ったレイチェルがニュークと共に静めて、最後の表彰式に移ることになった。

「ということで、今回の優勝は、シリカさんでしたーー！」
表彰台に乗っているのは、真ん中がシリカ、１段下がって右に司、左にボルドーだった。
ボルドーは心底悔しそうな顔、司はまあこんなもんかとでもいうような表情をしている。
そして他の途中で脱落した選手と共に会場の真ん中で拍手を送っていたキリトは、シリカが満面の笑みを浮かべて喜んでいるのを見て、充足感に満たされていた。
「それじゃ、表彰状と賞品の授与に移らせてもらうぜ。バルムンク、よろしく！」

ニュークが道を開けると、白銀の鎧に翼を付けた男、バルムンクが前に進み出た。そして、シリカたちの前に立って、いざしゃべりだそうとした瞬間、闖入者が現れた。
そう、それは……
「その表彰式、待ってもらおうか」
それはザワン・シンに乗ったオーヴァンたちだった。
会場がざわめく中、せっかくの見せ場を邪魔されたバルムンクが、不機嫌さをちらりとも見せずに突然乱入してきたオーヴァンに尋ねた。
「どうした、オーヴァン。何か問題でもあるのか？」
その簡潔な問いにオーヴァンはサングラスをきらりと光らせながら、にやりと笑って答えた。
「なに、本当に彼らが勝者なのか今一度映像を見せてもらいたいと思ってな」
そう言って手元のメニューを操作すると、モニターに先ほどのゴールする瞬間をとらえた映像が映し出された。
「何もおかしいところはないと思うが？」
バルムンクの言う通り、確かにピナが他の誰よりも早くゴールラインを割っている。
「よく見てみろ。奥のほうに何か映ってないか？」
？っと会場全体が疑問符で埋め尽くされながら、オーヴァンは画面をズームしていった。
そしてそこに映っていたのは……
「これは、ザワン・シンの尻尾？それがどうし……っは、まさか！？」
そう言ってバルムンクが急いで手元にメニューを開き、忙しく操作した。
「なるほど……これはまた、してやられたな……」
バルムンクが呆れたような感心したような表情をして溜息を一つついた。

そしてメニュー画面から顔をあげると、とんでもないことを言い出した。
「えー、大変申し訳ないが、勝者が変わった。優勝者はオーヴァン、2位がガビ、3位は欅だ！」
バルムンクがそう言ってプチグソやらモンスターやらを象ったトロフィーと、賞品の入った宝箱をオーヴァンのほうに放り投げた。
まったく事態についていけず呆然としている会場にいる観衆と選手達の中、一番最初に我に返ったのはボルドーだった。
「ふっ、ふざけんじゃないよ！こんなバカげた話があってたまるか！！大体あんた等とガビ様は主催者側だろ！？」
ボルドーのもっともな言い分に周りからの賛同の声が徐々に上がってきた。
しかしその波はバルムンクの言葉で打ち消された。
「いや、彼らはボランティアで中継係をしてくれただけで、別に主催者側じゃない。匿名でエントリーされているが、これも別にルール違反ではない……それに選手がレースの状況を撮ってはいけないという決まりもない、というか普通そんな余裕はこのレースにはないはずだった……
最初から変ではあったんだ、オーヴァンたちが無償であんなことをするなんてな」
一気にまくしたてた後、バルムンクは一息ついてまた話し出した。
「一つ確実に言えることは、大会の規定と照らし合わせても、完全に彼らは選手だ。そして写真にザワン・シンの尻尾が移っているということは、シリカ達より前に彼らは通過してたということ。つまり優勝はオーヴァン！以上！！」
バルムンクはいうだけ言ってさっと翼を翻すと、すたすたと壇上を去ってしまった。そしてその後、モニターに映った欅の顔がにこにこ笑いながら告げた。
「それではみなさん、また次回のレースも楽しみにしていてくださいね♪」

大会の閉めの言葉を言うと、ザワン・シンは空高く飛び立ていった。

その数秒後、我に返った選手や観客の怒声と、シリカに賭けたトトカルチョの券が再度紙ふぶきのように空を舞って会場を埋め尽くしたが、すでにオーヴァンたちの姿はなかった……

モンスターレース決着（後書き）

補足です。
腹黒カイトが使っているデータドレインは本作オリジナルで、体に溜まっているウイルスを放出しているものなので、ウイルス値を消費して０になると元に戻ってしまいます。
普通のデータドレインには対象のデータを書き換える能力ですが、腹黒カイトの使うものはウイルスを相手に付与するものというわけです。

レースが終わって

「それで、結局賞品は欅さん達に全部持って行かれちゃったわけだ」
アスナがオレンジジュースを飲み終えたコップをテーブルに置いた後、からかうようにキリトに訊ねた。
「もう完全にしてやられたよ。なんかこっちに来てから誰かに振り回されっぱなしだ……」
キリトが苦笑いしながら言うと、隣に座っていたシリカがため息をつく。
「おかげで骨折り損のくたびれもうけでした。でも、ユイちゃんが元気になってよかったです」
ここでパフェを無心に食べていたユイは、自分の名前を呼ばれたので忙しく動かしていたスプーンを止めて、しゃべりだした。
「はい！自分でチェックしても原因はまったくわからなかったんですが、欅さんがくれたアイテムを使ったら一発でよくなりました！」
そう、結局入賞と賞品を全部オーヴァンたちに掻っ攫われたキリトたちは負け犬のごとくグランホエールに帰還したのだが、病室に行くとユイはすでに元気全開な状態だった。
アスナから話を聞くと、ふらりとやってきた欅が使ったアイテムですぐにユイは目をさまし、こうして元気に動けるようになったそうだ。ちなみに欅からの伝言があり、内容は「腕輪探索時の報酬はこれでチャラということで」だそうだ。
「まったく、憎いことしてくれるよ。これじゃ次会ったとき怒れないな……」
その後少し雑談していたが、シリカがメニューを開いてメッセージが来たので失礼しますと言って行ってしまった。
そしてキリトがアスナとユイにレースの内容についてさらに詳しく話していると、カフェテリアの外から激しい音がしたが、もう日常茶飯事なので放っておくことにした。

遡ること１０分……

「アイナ、いるかい？」

オーヴァンはグランホエールの居住区画の一室の前に立っていた。

「あ、兄さん？空いてるから入っていいよ」

オーヴァンは自動で開いた扉を通って部屋の中に入ると、ちょうどアイナは何か読んでいたのか本を広げた机の前に座っていた。

「何、兄さん？」

「今日はお前にプレゼントがあるんだ」

アイナが小さく首をかしげると、オーヴァンはメニューを操作して中くらいの小包を取り出す。

それを受け取ったアイナが丁寧に包みを開けると、中からは綺麗なドレスが出てきた。

「わぁ、かわいい。兄さん、これどうしたの？」

「いや、今日出たレースで勝ったら賞品がこれだったから、アイナにちょうどいいかなと思ってな」

珍しく少し照れくさそうにするオーヴァンに、アイナは満面の笑みで答えた。

「ありがとう、兄さん！さっそく着てクーン達に見せに行くわ」

「クー……ン？」

オーヴァンの表情がぴきっとこわばり、サングラスにひびが入ったのにアイナは気付かず、鼻歌を歌いながら着替えようとした。

とりあえず外に出たオーヴァンは、少しの間呆然とした後、メニューを操作して転送していった。

その後、サーシャやアリシャ、ユリエールと雑談しているところを怒れるオーヴァン（ＡＩＤＡ解放ｖｅｒ．）に見つかったクーンは、身に覚えがないのにオーヴァンにグランホエール中を追い回さ

れることになる。
　そして、それによりせっかく直したグランホエールの内部がまたぼろぼろになったのはまた別のお話し……

一方、リコリス&ゼフィプレゼンツの罰ゲームはというと……

レースのあった日の夜、リコリスたちの部屋。
　リコリスたちの部屋は彼女らの外見から察せるように、男が踏み入るのにはかなり勇気がいるかわいいもの一色の部屋だ。しかし彼女らの趣味がいいのか、こういう部屋によくあるギトギト感や圧迫感はなく、少し留まっていると意外と居心地良さを感じられるくらいの落ち着きがあり、この部屋唯一の男であるキリトにとってその点だけは救いだった。
「お待たせしました、お嬢様」
　そこでキリトは執事服に身を包み、完璧な作法でお茶を淹れていた。
「うむ、御苦労」
「ありがとう♪」
「いただきます」
「へぇ、上手ね」
「本格的です」
　お茶菓子やティーセットが置かれた丸テーブルの周りにはリコリス、ゼフィ、そして彼女らの妹のモルティに加えて、招待されたアスナとユイが座っている。
「ケーキのおかわりはいかがですか？」
「クッキーもありますよ」
　プレートの上に山積みになっているケーキをバランスよく持っているのは、メイド服を着たシリカだ。肩にはひらひらフリルがたく

さんついているゴシック風の服を着せられたピナが止まっている。
その隣には、クッキーなどの焼き菓子が乗ったプレートを持つシリカと同じようにメイド服姿のホタルと、足元に燕尾服を着せられた彼女のプチグソがいる。
「よし、いただこう」
「ワタシも」
「ホタルちゃん、こっちもお願い」
ゼフィ達が頼んだのをシリカとホタルは手際よくお皿に乗せていった。
「あの、お嬢様、ひとつ質問してもよろしいでしょうか？」
キリトが頭を低くしながら（強制的に）ゼフィに尋ねる。
「ん？なんだ、言ってみろ？」
ゼフィはそんなキリトの問いに偉そうに答える。
「なぜ罰ゲームが執事とメイドで御奉仕なんですか？それとさっきから動きと言葉使いが妙に強制されているのですが……」
そう、なぜだか自分でも知らない作法やら言葉づかいが自然に出てきてしまうのだ。
「その服すごく似合ってるよ、キリトくん」
アスナが口元を隠して笑いをこらえながら言った。
「シリカさんとホタルさんもとっても似合っててかわいいですよ。ピナとプチグソさんも、すごくおしゃれです」
ユイがシリカ達をべた褒めしているが、メイド服姿を褒められてもうれしいもんなんだろうか？いや、まあ確かに似合ってるけど……。なんてことをキリトが思っていると、ゼフィの声がその悶々とした考えを遮る。
「こら、執事キリト、質問が２つだぞ！……まあしかし私は寛大だ。いいだろう、答えてやる」
「それはですね、そのキリトさん達が着ている服にアシスト機能が付いているからですよ♪」
絶賛尊大に振る舞い中のゼフィに代わり、リコリスが答えた。

「その服を着ている限り、初心者だろうがどんなに才能の欠片もなかろうが、その服を着るに相応しくなれるんですよ。便利でしょ？」
（や、まあ確かにいきなり何の準備もなしに執事になれとムチャぶりされるよりはましだけど……）
「あとなぜ執事とメイドかというと、これで決めたからです」
そう言ってモルティがメニューを開いて操作すると、テーブルのわきに一昔前にテレビ番組でよく見られていたルーレットが出てきた。
「最近Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄではこれにダーツを投げて物事を決める遊びが流行っているんですよ」
そのルーレットをよく見ると、コシュタバウア戦場跡で宝探し！、アルケケルン大瀑布にダイビング！や死世所エルディルーで肝試し&冥界の王と対決！など、少し面白そうなものから物騒なものまで多種多様な事柄が書かれていた。
「これらのことをあのレースが終わったその日の内に、私たちにやらせようとしておられたのですか？」
（どう考えても精神的にも体力的にも無理……）
「あたりまえじゃないか。そうでなければ罰ゲームの意味がない。それよりおかわりだ。というか言う前に気づけ」
ゼフィはこれまた偉そうに言うのだが、その言葉になぜかすぐに体が反応して謝りながらお茶を入れてしまうキリト。
「まあ今回の罰ゲームは軽いほうですよ。以前ホタルさんが例の料理を頼まれたとき、クエストに失敗して行われたあの壮絶な罰ゲームに比べたら……」
こうして夜のお茶会は夜明けがくるまで、結構楽しくにぎやかに行われた。

レースが終わって（後書き）

今回のオーヴァンネタは、Ｇ．Ｕ．　ＴＲＩＬＯＧＹのおまけが元ネタです。

それと次回新しい話を１本書いた後、そろそろクライマックスに行こうかと思いますので、最後までお付き合いのほどよろしくお願いします。

まあ最終章書いた後、他のＳＡＯキャラがＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄで体験した話などを書いていくつもりなので、当分終わりそうにありませんが……

囚われの姫を救え？

Ａ．Ｍ　８：００　グランホエール居住区画　キリトの部屋

「ふぅ～、さっぱりしたぁ。やっぱり朝風呂もいいな……」

同じく風呂に入る必要のなかったＳＡＯ時代には特に入る習慣はなかったキリトだったが、この世界にはヘルバ達が趣味で作った色んな効能やおもしろ機能が付いた温泉がたくさんあるので、なんとなくよく入っていた。

今日入った明け方しか出現しないという薄明の湯から部屋に直接転送して帰ってきたキリトは浴衣姿で頭の上から湯気を立ち昇らせながら、ベットの上にぼすんっと腰かける。

先ほど買ったばかりの良く冷えたレトロな瓶入りコーヒー牛乳の蓋をきゅぽんっ！という小気味良い音を立てて開け、早速風呂上がりの一杯を呑みながら右手でメニュー画面を開いた。

キリト達がＴｈｅＷｏｒｌｄに来てから、すでに２週間が経過していた。

ネットの中に長期間滞在経験があるＳＡＯ帰還組はすぐにここの生活に慣れ、他のみんなも数日経つと適応していった。そしてこの２週間で多数のクエストをこなし、モルガナがばら撒いてしまった力もすでに７割方回収されている。

なので最近はかなりのんびりムードで……

「えーっと、アスナとユイはブラックローズ達と買い物で、クラインは……砂三十郎達と秘刀と名酒探索の旅。ユージーンは揺光達宮皇への挑戦権獲得の為にアリーナでバトル中っと……」

キリトは半透明のウィンドウに表示されているメンバーアドレス

を交換しているみんなの状態をチェックしながら―（メンバーアドレスを交換したものはお互いに簡単な位置や状況を知ることができる。もちろん隠すことも可能）今日はどうするかなと考えていた。
カナードでのバイトも入ってないし、誰かとクエストを受ける約束もしていない。よくよく考えてみると、ここに来てから久しぶりの一人でいられる時間だった。
（こんな時は晴れの草原フィールドにある湖で、釣りでもしてのんびりするのもいいかな……）
そうして少しの間湯上り後の心地よい余韻に浸りながら悩んでいたキリトだったが……
「まあ、とりあえず依頼板見とくか」
キリトは飲み終えたコーヒー牛乳の瓶をメニュー画面で削除して、ついでに浴衣からいつもの服に装備を変え、依頼板がある中央ホールへと転送していった。

中央ホールは閑散としていた。
大規模戦闘やお祭り騒ぎの下準備時などの全員が集まる時と比べるとかなり物悲しい感じもするが、まあいつもあんな調子だったらそれはそれで疲れちゃうよな……
そんなことを考えながら、キリトは目的の依頼板の前にたどり着いた。
「さてと……やっぱりクエストの更新は無しか」
こちらに来てから重要そうなクエストや面白そうなものは更新されるたびにやってたから、どうやらほとんどネタ切れのようだ。
（まぁ、今日はのんびりするかな……）
キリトがそう決めて踵を返そうと掲示板に背を向けるのと同時に、その方針を１８０度変えさせる人物達が歩いてきていた。
「それで、まだそのクエストのことは誰にも言ってないんだな？」

「もぉう、何回も聞きすぎ！わたしって、そんなに信用ない？」
「それは自分の胸に聞いたらどうだ？」
「やだぁ、胸だなんて～。アルのエッチ！」
そんな会話をこっちに歩きながらしていたのは、こちらに来てからキリトがよく世話になっているアルビレオとほくとだった。
アルビレオは浅黒い肌にウルフカット、特徴的なオッドアイをした軽装のフリーランス風の槍使い（パルチザン）
ほくとはまさに魔女っ娘といったようなきわどい服装をしたスタイル抜群のウォーロックだ。また、ほくとは別にW・Bイェーツとしての姿も持っており、ほくとの方はちょっとおつむが足りない感じで、W・Bイェーツの姿ではここＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄの有名な詩人として名を馳せている。まだW・Bイェーツの姿ではあったことはないが、カイト達のフィアナの末裔の名も彼女が冠したものだそうだ。
ちなみに他にも元になったリアルが同じＰＣが何人かいるそうだけど、ほくととW・Bイェーツと同様に同じＡＩだったり、まったくの別のＡＩだったりとケースバイケースらしい。
「おっ、キリトじゃない。おはよぉ～！」
キリトに気付いて手をぶんぶん振るほくとに対し、アルビレオはその子供っぽい行動をやや呆れた表情で見たあと、小さく苦笑してキリトの方へと顔を向ける。
「やあ、キリト。今日は一人なのか？」
「はい。そっちはいつも一緒ですね」
キリトがからかい半分に言うと、ほくとがそうだよ～と言ってアルビレオの腕に抱きつく。アルビレオはそんなほくとを引き剥がそうとするが、すぐに諦めて溜息と共にまた苦笑する。
ちなみにこの二人は、キリトがレースの時に関わったリコリスの親代わりだ。なので、ユイのことを知ると、その道の先輩として色々キリトとアスナに教えたり相談にのったりして、その為親しい仲になっていた。

（そういえば、リコリスの明るいながらも裏のある性格は母親代わりのほくとの影響を色濃く受けてるって、アルビレオが酒の席で嘆いてたっけ……）

キリトは酒で少し饒舌になったアルビレオのいつもと違う少し情けない姿を思い出して笑いそうになったが、すんでのところで押し止めた。

「それで、今話してたクエストってなんですか？」

キリトが問うと、アルビレオは少し迷った表情を見せたが、すぐに心を決めたのか話しを切り出した。

「まあキリトなら信用できるし、手伝ってもらうのもいいか……実はほくとが神槍ヴォータンに関するクエストの情報を一般に流れる前に入手してくれたんだ」

神槍ヴォータンはモルガナがばら撒いた力の内の一つで、なんでもあの有名なオーディーンの槍を元にしたもので、もの凄い力を秘めているらしい。

「あの槍は古い神の作りしものだ。本来なら処分すべきだったんだが……」

その槍とアルビレオとほくとの間に何があったかキリトは詳しくは知らなかったが、何か悲しいことがあったことだけは二人の雰囲気から察せられた。

「それで、手伝ってくれるの、キリト？」

ほくとが絶対何か含みがある猫なで声で訊ねてきた。

「いや、まあ今日は暇ですし、二人には世話になってますからもちろん手伝いますよ」

キリトがとりあえず即答すると、アルビレオをぱっと解放したほくとが今度はこっちに抱きついてきた。というより首を極められた。

「ありがと～！やっぱり持つべきものは素直な後輩だね～」

キリトは首を見事にホールドされわしゃわしゃと髪を滅茶苦茶にされながら、側等部に当たっているものの感触と首を絞められての呼吸困難で顔を真っ赤にしながらじたばたする。

しかしほくとはウォーロックとは思えないほど強い力で完璧にがっちり掴んでいたため、アルビレオがさすがに見かねて止めるまでそのままの状態が続いた。
「はぁーっ、はぁーっ……殺す気ですか？」
（ＨＰバーは減らないけど、今のは精神的に死ねる勢いだったぞ……）
キリトが息を切らせながら問うと、ほくとはけろっとした顔で
「ごめ～んｗ」
ものすごく軽く返してきた……。まあこんなことは出会ってからよくあることだけど……と、キリトは諦めの境地でとりあえず追求せず本題に戻ることにした。
「それで、そのクエストがこれから依頼板に更新されるんですか？」
「ああ、ほくとの情報通りだったらな……」
「あー、やっぱり信用してないの～？」
ほくとがぷんすかぷんすかと口で言って怒ってますとアピールしていると、目の前の依頼板がぴろりろりんっ！と言う音を立てた。
更新を知らせる音だ。
キリトが急いで依頼板にアクセスすると、そこには

クエスト：囚われの姫を救出せよ！
依頼者：ヘルバ
大盗賊Ｈ＆Ｒが某国の姫を拉致した模様。至急救出に向かわれたし。
なお、この盗賊は各地から盗んだ様々な財宝を所持しており、彼らを倒した者にはそれら全てを譲渡する。
場所：Ω　隠されし　財宝の　行方
クエスト条件：パーティは５人まで。
姫を救出すればクリアされてしまうので、財宝を手に入れたい者は先に盗賊団一味を倒すこと。
注意：盗賊団は凄腕の傭兵を雇ったそうだ。十分気を付けてくれ

たまえ。

「この財宝の内の一つが、神槍ヴォータンってことですかね？」
キリトが呟くと、アルビレオはまあそうだろうなと頷く。
「このクエストは早い者勝ちだ。急いで行動を起こそう」

囚われの姫を救え？（後書き）

ご指摘があったので、ほくとのアルビレオの呼び方をアルに訂正しました。
月影さん、ありがとうございました。

大迷路を突破せよ！　―０１―

Ω　隠されし　財宝の　行方

そこは青空の下をグランドキャニオンのような峡谷が延々と広がっているフィールド。切り立った絶壁同士を頼りなく風に揺れる吊り橋がところどころ繋げ道を作っている。
普段ならそこは砂煙が舞い、風の音だけがこだまする静かなところなのだそうだが……
「で、なんでこんなことになってるんだ……？」
アルビレオが額に手をやりがっくりとしている。その隣ではほくとがあらら～という表情を浮かべながら、あたりを見回している。
「らっしゃ～い、らっしゃ～い！安いよ美味いよ～！！」
「へい、そこのにおふたりさん、焼きトウモロコシ食べてかないかい！」
香ばしい醤油のいい匂いにつられたのか、カップルが焼きトウモロコシ屋の前で立ち止まっている。そう、そこは出店や人でごった返しになっていたのだ。さらに奥の方には巨大なモニターとたくさんの観客席まで用意されている。
「……これって、今回のクエストの野次馬ってことですよね……」
キリトが唖然としていると、アルビレオが認めたくない様子ながらも頷いた。
「しかし、なぜだ……？さっき更新されたばかりのクエストの情報がこんなに早く出回るなんて……」
確かに耳の早いクエスト挑戦者が何人かいるならまだわかるが、出店やら野次馬が来るのはいくらお祭り騒ぎができる機会を虎視眈々と狙っているこの世界の住人でも、少し考えられない早さだ……
「おーい、キリトー！ほくとにアルビレオー！」

と、ここで聞きなれた声が転送ポイントからしてきた。
「あっ、トキオだ！チェロもいる～！」
そこには見慣れた学生服姿のトキオと、確か薄明の騎士団と同盟関係にあるギルドシックザールのメンバーのチェロがいた。
「トキオも今回のクエストを攻略しにきたのか？」
キリトは右手を上げ、トキオと挨拶代わりのハイタッチをかわした。
「それがさ、今回のクエストのさらわれた姫が実はＡＩＫＡちゃんなんだよ……いつものごとくふわふわとあちこち散策してる内に捕まったみたいなんだ」
トキオが頭をかきながら苦笑いした。
「というわけで、ちょうどグランホエールにおつかいに来てたチェロを誘って、ＡＩＫＡちゃん救出作戦ってわけ。あ、キリトはチェロに会うの初めてだっけ？」
たしかに、グランホエールで見かけたことはあるが、キリトがチェロと話すのはこれが初めてだった。
サーカス団員のような服装を主にしているシックザールのメンバーであるチェロも、動きやすそうな軽装で、長いボリュームのある髪を大きなリボンで束ねている。手にはかわいい人形を持っている。
「初めまして。俺はキリト、よろしく」
キリトが手を差し出すと、チェロは慎重な顔になって、キリトの顔をじっと見た後ふむふむと頷いた。
「アナタが噂のキリト……とりあえず、あいさつはしっかりできるみたいネ。はじめまして、アタシはチェロ、よろしくヨ」
そう言ってキリトの手を小さな手で握ってきた。
キリトは自分のどんな噂が耳に入っているのか少し気になったが、藪蛇になりそうなのでとりあえずやめておいた。
「それにしても、凄い人だかりだよな……」
キリトが同意を求めるもなしに呟くと、トキオが意外そうな顔をした。

「そりゃ、W・Bイェーツが紡ぐ伝説を生で見れるんだから、みんな来るでしょ？」
トキオがW・Bイェーツの名を出した瞬間、ほくととアルビレオは別々の反応を出した。ほくとは冷や汗をたらーんと流してこそこそと立ち去ろうとし、アルビレオはこめかみにピキッっと怒りのマークを浮かべ、逃げようとするほくとの服の襟を後ろからむんずと掴んだ。
「ほくと、もう一度確認するが、このクエストのことは誰にも話してないんだよな……」
猫を捕まえるようにほくとを掴みながら、口調は静かでゆっくりながらも凄みのある声で聞いてきたアルビレオに対し、ほくとは慌てて頷く。
「や、やだな〜、アル！わたしは誰にもしゃべってないよ！」
しかしここでほくとは慌てた様子から一転おどけた感じにころっと変わって続けた。
「ただ〜、W・Bイェーツとして掲示板にちょこっと書き込みしたけど、別に話してはいないよ〜」
ほくとの子供のような屁理屈を聞いた瞬間、アルビレオはブチッ！と言う音が聞こえてきそうなくらいの表情になりかけながら途中で何とかその怒りを押し込め、ほくとを解放して全てを諦めた顔をした。
「それで、どんなふうに書いてあったんだ？」
ほくとの行動はまだ短い付き合いながらももう慣れっこだったキリトは、それよりもリアルタイムで初めて見る噂のW・Bイェーツの詩の方が気になっていた。
「えーっと、ちょっと待って。……あっ、これこれ！」
メニューを操作していたトキオは掲示板の書き込みを全員が見えるようにモニターに映し出す。
そこには……

謎多き盗人、大峡谷にあり。
連星の瞳の重槍使い、彼の伴侶と異邦の剣士とともに敵場を疾駆し、古き神が作りし槍を目指す。
W・Bイェーツ

へぇ、これがそうか……とキリトが思っていたら、下にさらに続きがあった。

……っというわけで、Ω　隠されし　財宝の　行方　でクエストがあるから、みんなわたしとアルと、ついでにキリトの活躍を見に来てね～w
ほくと

「って、誰が伴侶だ誰が！」
ぺちんっ！
ここでいつのまに取りだしたのか、アルビレオはハリセンでほくとの頭をいい音を立てて叩いた。
「あいたっ！？も～なにするの、アル！というか、なんでそんなもの持ってるの～？」
ほくとはそれほど強く叩かれた感じではないのに、うるうる涙目になりながら酷いっ！っと大げさに言い、泣きまねをする。
「いや、俺がほくとのことでよく頭痛薬と胃薬に世話になってるとニュークに話したら、ほくとが何かやらかしたらこのハリセンでツッコンでストレス発散するようにとアドバイスをもらったんでな……」
「えっ、アル、わたしのせいで薬なんか飲んでるの……？」
ほくとは呆れを通り越して感心するぐらい素早く泣きまねを終え、ちょっと心配そうな顔をした。
「いや、薬の下りは冗談だが……」

「ってウソなの！？も～、真顔で冗談言わないでよ！」
ほくとが本気で驚きの声を上げた。
アルビレオの冗談にとれない冗談にキリトもツッコミそうになったが、とりあえず話しを戻すことにした。
「トキオ、そっちはＡＩＫＡの救出、こっちはヴォータンの回収が目的だし、パーティ組まないか？」
キリトが訊ねると、トキオはもちろんと頷いた。
「みんなでやった方が効率良さそうだし、それにこういうクエストは大勢で行った方が楽しいって相場は決まってる！チェロもいいよな？」
チェロは少し考え込んだ後、直ぐに頷いた。
「まあ観察するいい機会だし、いいヨ」
そう言って、チェロはキリトのことをじっと見つめ出した。
（何か俺、狙われてる……？）
チェロの熱い視線にちょっとたじろいたが、すぐにいつもの調子を取り戻したほくとによってうやむやになってしまった。
「よ～し！それじゃ、はりきっていこ～！」
ほくとのかけ声と共に、キリトたちはメニュー画面からパーティを組んで、出店が続く道を奥へと進んで行った。

出店の列の終わりにあった巨大モニターと観客席を過ぎると、目の前に巨大な迷路が現れた。
「地上からじゃ外観が掴めないな……キリト、ちょっと飛んで上から見てきてくれないか？」
「いいですよ。んじゃ、ちょっと行ってきます」
アルビレオに頼まれ、キリトは翼を展開して勢いを付けて飛び立つ。
緑に茂った生垣で作られたその迷路は見渡しただけでも端が霞ん

で見えないくらいの長さだった。
「キリト～、ちょっと迷宮に上空から入れるかどうか試してみて～！」
「了解～！」
ほくとのリクエストに返答して、キリトは迷路を作っている生垣を越えようとしたが……
バリバリバリッ！
「あががががっ！？」
何かバリアのようなものに引っ掛かったらしく、キリトは丸焦げ状態になって真っ逆さまに落ちてしまった。
「まあたぶんバリアか何かが張ってあって無理だと思うけど……って、遅かった？」
「遅かったです……」
「まあＨＰは減らないし、もう一度観察お願いねｗ」
ほくとの全く悪びれない態度に、キリトはため息をひとつついて煤を払った後また飛び立った。

数分間観察しているとやっかいなことに迷宮がその中身の形を変えることがわかった。この迷路はどうやらアインクラッドの迷いの森と同じようなものらしく、数分ごとにブロックがランダムにシャッフルされるらしい。ついでにＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄでは妖精のオーブを使えば一発でダンジョンのマップが表示されるし、使わなくても一度通った道は自動的にマッピングされるのだが、この迷宮では例外らしくメニュー画面に表示されたマップは真っ白のままだ。唯一のヒントは最初に入ったところにあった立て看板で、それによるとこの迷宮を突破するには迷宮を操作している敵を見つけて、設置されている装置を壊さなければならないらしい。
出発当初、いつものごとくトラップやモンスターだらけであろう

ダンジョンの攻略は骨が折れると思われたのだが……

「いくヨッ！グリちゃん～！」

どか～ん！

ずど～ん！！

ぐも～っとそのファンシーな外見に似合わないもの凄い雄叫びをあげながら、巨大化した人形（グリちゃん）がチェロを乗せて迷宮に張り巡らされたトラップエリアを驀進している。通常なら数十分は突破するのにかかるはずの多数の罠を正面突破でわざとかかりながら、どんどん進んでいる。

「何か、今回のクエストの仕掛け人に同情したくなる光景だな……」

（確かに楽だけど、これはチートと言われても文句を言えないような……）

キリトがグリちゃんが均した後を悠々と進みながらも、釈然としないように言った。

「まあこのまま上手く行けばいいけど、今回のクエストの依頼人はヘルバだし、まだ油断はしちゃだめなんだよな、これが……」

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの勇者＆ツッコミ担当のトキオが、長年の経験から来るであろう苦労が滲み出ている言葉を返してきた。

「さあ～グリちゃん、次いくヨッ！」

この迷宮に入ってから数回目のシャッフルが実行されていたが、チェロとグリちゃんのおかげで順調に進めていた。

「よし、ここら辺でいいか……」

ブロックの中央ら辺に着くと、アルビレオがマーカーを打ち込む。打ち込んだところが一瞬赤い丸を描いた後、溶け込むように消えて

いった。
　このマーカーは本来モンスターなどに付けて追跡するためのものだが、こうして地面に打ち込めばマップに赤い点として表示される。これを通ったブロックごとに打ち込んで行けば、マップが赤い点滅で埋まっていき例えシャッフルされたとしてもどこが通っていないところか瞬時に分かるというわけだ。
　このマーカー事態はこのゲーム内ではポピュラーな物だが、こういう使い方を思いつくのはさすがアルビレオだった。
「なに、マッピング不可のダンジョンは前にも何回かチャレンジしたことがあるから、その時に思いついたことだ。年の功と思ったらいい」
　アルビレオが謙遜している中、代わりに横でほくとが鼻高々になっている。
「ね、アルはすごいでしょ！やっぱ困った時のアルだね～。さすがわたしのカレシ！」
　カレシ発言を否定するアルビレオとほくとのいつもの痴話喧嘩をキリトたちは苦笑いしながらスルーしていたのだが……
　ぶわっ！
　急に全身の毛が逆立つような殺気を感じ、キリトとトキオ、そしてほくとにかまっていたアルビレオがエフェクトと共に得物を素早く取り出し構える。
　パァンッ！
　そして一発の銃声が鳴り響いた。そして、その後に続く静寂……
「誰か撃たれたか？」
　アルビレオは構えを解き、落ち着いた様子で全員に聞く。
「いや、今の撃った主は確かにこっちに殺気を放ってたけど、撃った方向は違ったみたいだ。何かの合図……？」
　トキオが誰に言うわけでもなく呟く。
「待って。何か音がしない……？」
　ここでさっきまでふざけていたほくとが真剣な様子で耳に手を当

てている。キリト達もそれにならって周囲の音に集中すると……。
シュッシュ、ポッポ、シュッシュ、ポッポ……
「蒸気の音？」
この独特の音は遥か昔に船や機関車に使われていた蒸気機関の音だ。この世界ではチムチムのエネルギーを使った蒸気機関の乗り物が発達している設定なので、よく耳にする音でもある。
「蒸気機関……乗り物……はっ、しまった！チェロ、早くグリちゃんをもどし……！？」
トキオが慌ててチェロのいた方を振り返ったが、そのときすでにチェロはそこにいなかった。少し遠くで、猛ダッシュするグリちゃんに必死に振り落とされないようにしているチェロが見えた。
そしてグリちゃんの様子はどう見ても暴走しているものだった。
「なっ！？いったいどうしたんだ、あれ！？」
キリトが驚いていると、トキオが急いで走りだしながら説明する。
「グリちゃんは乗り物が大好きで、音を聞いただけでもそっちの方にいっちゃうんだ！たぶん敵はそのことを知っていて、チェロを孤立させようとしているんだと思う！」
焦るトキオに対して、淡々とした様子でアルビレオが話しを引き継ぐ。
「そしてどこかに誘導して倒す算段だろう。しかし、逆にこれは好機とも言える……」
「それって、どういうこと？」
ほくとが少し遅れながらも必死に走って追いすがりながら疑問を挟む。
「先ほどの銃声からして、相手の武器はたぶん狙撃銃だ。そして銃声があった後に乗り物が動いたということは攻撃を当てることで発動するタイプのトラップの可能性が高い。ということは相手はそれほど離れていないということだ。相手はチェロがトラップを薙ぎ払えるということが分かっているだろうから、直接攻撃を仕掛けてくるはず。その時どこから撃たれたかを見れれば……」

「どの方向に敵がいるかわかる……って言いたいの、アル？」
ほくとが少し怒った顔になりながら訊き返す。
「というのが一番効率のいいやりかたなんだが……」
アルビレオはここでポーカーフェイスを崩して、フッと苦笑いした。
「しかしそれだとチェロを一時的にでも危険にさらすことになる。なので、とっとと追いついて近辺を探そう」
このセリフを聞いたと同時に、ほくとはアルビレオに飛びついた。
「やっぱりアルはアルだね～w」
「こ、こら、やめろ！重いだろうが！」
「あ～、女の子に重いだなんて言うのはだめなんだよ～！」
（なんだか、緊迫した空気が一気に緩んだな……）
「まあそれに、ここら辺はマーカーが多いし、結構簡単に見つかる可能性が高いのもあるからな」
アルビレオは照れ隠しのつもりか、モニターにマップを表示しながらそう言い訳してほくとを引き剥がした。
「よ～し！それじゃ、さっさと追いついちゃお～！」
ほくとのかけ声が迷宮に響く中、キリト達はチェロとグリちゃんを追いかけどんどん奥へと駆けていった。

大迷路を突破せよ！　―０１―（後書き）

トキオともう一人、チェロとクラリネッテのどちらを出すか悩みましたが、結局チェロにしました。

大迷宮を突破せよ！　―０２―

「さ～って、どこに連れて行こうとしてるヨ……？」
チェロがグリちゃんに必死にしがみついているようなふりをしながら呟いた。
そう、チェロがグリちゃんに引っ張りまわされているのは全て演技だったのだ。もちろん、グリちゃんが暴走しているのは本当なのだが、チェロに止めるすべがないわけではない。
それなのになぜ敵の罠にはまった振りをしているかというと……
「まあこれで敵の位置も特定できるだろうし、それにキリトの能力と本質を見極めるにはいい機会を作れそうだからネ……」
そう呟きながら、チェロは数日前の団長との会話を思い出していた。

「ほら、ちゃっちゃと仕事をかたづけるヨッ！」
事務所の中をチェロが独楽鼠のように動いて掃除しながら、一番奥にあるデスクにべた～っとやる気なさそうに座っている男に言った。
「あ～、もちろんやるよ～。このアメちゃんなめ終わったらねぇ……」
その男、片目にモノクルをしたシックザールの団長フリューゲルはけだるそうにしながらやる気ゼロの生返事を返した。
「そんなこと言って、なめ終わったら今度は別のことを言い訳に使う気でしょ！まったく、ちょっとはシャキッとしなさいヨ！」
「ケ～ケケケケケッw団長～はお疲れなんですよぉ。カレラのことでここ数週間徹夜しっぱなしでしたからねぇ」
ここで事務所のスペースと繋がっているバーからフォローの言葉

が入る。
　ソファに座りメニューウィンドウからよびだした雑誌を読みながら、サーカスの道化師（ピエロ）姿の男、ポザネオが甲高い声で笑っていた。
「ったくよ、あいつらのせいで俺たちは大忙しだぜ！いっそのこと、全員ぶっ壊しちまうか？」
　ポザネオと反対側のソファに寝ころんでいる男オルゲルが目を鋭く尖らせ、少しイライラしたように危なっかしい発言をした。
「僕達シックザールと彼らの全面戦争か……それはそれでおもしろそうだねw」
　仮面をつけて顔半分が隠れている奇術師ガイストが、ビリヤードをしている手を止めて楽しそうに言う。
「Ｙｅａａａｈ！ウォーかぁ。確かにベリーたのしそうＤＡＺＥ！」
　バーの一角に場違いに設置された（まあそれを言えば事務所とバーが隣り合わせなのも変だが）トレーニング用の器材が置いてあるスペースで、これ以上筋肉をつけてどうするんだよと突っ込みたくなる体をしたアメコミヒーロー風の男トロンメルが持ち上げていたダンベルを下ろし、いつもの変な英語を交えたしゃべり方で話に入ってきた。
「まったく、君たちは馬鹿な会話しかできないんですか？今彼らと事を構えると騎士団まで敵に回すことになりますよ。この世界でＡＩである僕たちが活動するには彼らの協力が不可欠です」
　ちょうど部屋に転送してきたナイフ使いのメトロノームがため息交じりに団員たちの考えなしの発言を諌めた。
「しかし、茅場晶彦の行動には気になる点がいくつかあります。やはりこの世界を安定させ解放したのには彼なりの意図があったみたいです。そして今回初めてリアルの人間をこの世界に呼び入れたことも……」
　そう言いながら、メトロノームはフリューゲルの目の前に大量の資料をどすんっ！と置いた。

「あー……もしかしてこれ、今すぐ片付けないとダメ……？」
びっしりと文字が詰め込まれた紙束の１枚をペラッとめくりながら、フリューゲルがめんどくさ～という顔をしながらメトロノームに尋ねた。
「事態は急を要するんです。今すぐお願いします。それに団長、まさか現実の僕たちがなぜこの世界にリアルの分身たるシックザールＰＣをＡＩにして残していったか、忘れたわけじゃありませんよね？」
メトロノームの鋭い言葉に、フリューゲルの顔つきが少し引き締まった。
「愚問だな。それをわかってるから、こうやって俺は滅私奉公しようとしてるんじゃないか」
「それなら早く片付けちゃってください」
「そうヨ。早くやっちゃうヨ！」
フリューゲルの引き締まってやる気になった顔つきに容赦なく鞭を打ち付けるいつもの２人。
「あ～でも、ちょうどアメちゃんきれちゃったし……」
「買ってきました」
席を立ちあがろうとしたフリューゲルより早くメトロノームが大量のアメが入った袋をアイテムポーチから取り出し机に置く。
「じゃあ気分転換に事務所の掃除でも……」
「今終わったヨ」
チェロが掃除道具をロッカーにしまいながら逃げ道をふさいだ。
「あー……っあ、そうだ、チェロ、今度機会があったらキリトのことを調べといてくれないか？」
「なんでヨ？」
フリューゲルはまた少し真面目な顔になった。
「あいつは今回きた連中の中で一番電脳世界に対する素養がありそうなのも理由の一つなんだが、他にもちょっと気になる点があってな……とう言うわけだから、あとはよろしくな～」

そう言ってエフェクトと共に時計をあしらったハンドガンを取り出した。
「あっ、団長、それはずる……」
メトロノームが急いで止めようとしたが、すでに時間は止まっていた。
「さーってと、そんじゃ俺は俺で動くとしますか。まあでもその前に、ちょっとどっかでのんびりしてからにしよ……」
そう呟いてフリューゲルは転送していった。

そんなわけで、チェロは団長の最後の言葉に従ってキリトと行動を共にできる機会を窺っていたわけだ。そしてそれらのことを頭の中で回想しているうちに、グリちゃんが引き寄せられているものを目視することができた。
「アレは……チムチム列車？」
普通のフィールドでもチムチム達がよく自分のエネルギーを利用して移動手段に使っているのを見かける。ただし今目にしているのはチムチム達が縛り付けられ、さらにレールが円を形作っているのでその場を無意味にグルグル回るだけのものになっている。
「ということはここが終着点ってことネ……」
注意深くまわりを見渡そうとしたその瞬間っ！
パァンッ！
キィンッ！
左方向から銃声がしたのと同時に、どこからか投げられた片手剣が銃弾を弾き返していた。
「ぜーっ、はーっ……間に合った！トキオッ！そっちのほうだ！」

キリトは息を切らせながら剣を投擲した後すぐに銃声のした方向を全員に知らせた。見た感じチェロにも怪我はないようだ。
チェロはグリちゃんを引き寄せていたチムチム列車のチムチム達を解放したあと、キリトの方に駆け寄ってきた。
「キリト、ありがとヨッ！それで、敵の位置は？」
チェロが全く動じてない様子に、キリトは自分がチェロのことを甘く見ていたことを悟った。
「チェロ、もしかして俺の助けなんていらなかった？というかまさかわざと自分を囮に……？」
（何だか焦ってた自分がバカみたいだ）
「なんのことヨ？キリトが助けてくれなかったら今のはちょっと危なかったネ。それより、ちゃっちゃと敵を見つけてやっつけちゃうヨ！」
そう笑いながら言って、銃声のした方へとグリちゃんに乗って駆けだす。キリトもそのあとに続く。
「トキオ、今そっちに向かってる。もう敵は見つかったか？」
キリトがトキオと再度通信しようとしたのだが……
「わっ、なんだ？ちょっ、たんま！うっ、うぎゃあぁぁぁぁーーーーーー！？」
物凄い轟音とトキオの悲鳴とともに、通信はブツンッ……と、途絶えてしまった。

キリトたちがそこにつくと、その場は今までのブロックと違い、生け垣による壁が全くなくだだっ広い空間で、真ん中にぽつんとマンション5階建てぐらいの高さの櫓が立っていた。天辺には旗がはためいていて、迷宮操作装置とでかでかと書かれている。
先に着いていたアルビレオとほくとと櫓の間にはどういうわけか黒焦げになったトキオがぴくぴく痙攣している。

そして櫓の上では灰色の襤褸マントで全身を覆っている小柄な人物が大声で演説をしていた。
「えーっと……わ、わたしはこの櫓を守るために雇われた傭兵だー！……この櫓に設置された装置を壊したければ、わたしの百発百中の弾丸の嵐を見事駆け抜けるがいい！」
（……ん？この声って……？）
キリトはそのはずかしそうにセリフを大声で棒読みしている声に聞き覚えがあった。
「もしかして、シノンか……？」
半信半疑でキリトは『シノンッ！』と声を張り上げて名前を呼んでみた。
「ちょっ、なんで私の名前を知ってるの？まだ言ってないのに……って、ウソ、もしかして、キリト……？」
フードを取った下から出てきた顔はまさしくシノンだった。よく見ると、背中には彼女の身の丈ほどある愛銃ヘカート？がかけられている。
「やっぱりシノンか……ってかなんでここにいるんだ？」
キリトがもっともな疑問を口にすると、シノンはあたふたしながら説明し始めた。
「わたしはバ、バイトなんだけど……」
その後のシノンの話によると、どうやらガンゲイルオンラインの運営の方からシノンに特殊クエストの敵役になってくれるよう頼まれたらしい。シノンほどのプレイヤーになると、ネームバリューも大きくイベントなどにでるようオファーが時々来るという。いつもはほとんど断っているそうだが、今回はバイト料として結構な額を貰えるということで受けたそうだ。
「でもキリト、あんたのその姿ってＡＬＯのアバターよね？なんでＧＧＯでその姿なの？」
どうやらシノンは未だにここがＧＧＯの中だと思っているらしい。
（まあでも確かに他の誰とも会っていない状態で、ここが新しく追

加されたフィールドと言われれば俺も納得してしまうかもしれないな）

しかしキリトが一人で納得している間にも、事態は進んでいた。

「あ、あんたが相手でも容赦しないわよ！こっちは長く守れば守るほど報酬が上がるし、それに負けたら……とっ、とにかくここは通せない！」

なぜか顔を真っ赤にしながらそう言って、シノンはメニューウィンドウを開いた。

「キリト、彼女はキミの知り合いなのか？」

アルビレオが興味深げにキリトに尋ねる。

「そうなんですけど……なんか現状をちゃんと把握できてないみたいですね。ここがＴＨＥ　ＷＯＲＬＤとも認識してないみたいだし……」

キリトはそう言いながらも、剣を構えながらこの状況にいくつか違和感を感じていた。

シノンがいるのは１００歩譲って茅場のサプライズとして、問題はトキオのやられ方だ。シノンのライフルに撃たれてやられたのなら、あんな風に真っ黒焦げになることはないはずだ。

例えば地雷が地面に仕込まれていたとしても、その場合は地面が捲れあがっているはず。なのに地面には黒い跡が残っているだけだ（勿論現実だったら上から撃たれた爆弾でも地面は荒れるだろうが、ここではそういう特性がないかぎり地形に変化はもたらさない）

「アルビレオ、トキオはどうやってやられたんですか？」

キリトが静かに問うと、アルビレオは少し困惑したような表情になった。

「いや、俺が来た時にはすでにあの状態だった。しかし確かに彼女の持っている武器（狙撃銃）からあの状態を作るのは無理な気もするな……」

アルビレオが少し思案げな表情をしていると、すぐにその答えの回答がシノンの行動で出された。

シノンが何やら手元のメニューウィンドウを操作すると、ただの櫓に見えた建物から、おびただしい砲門が現れたのだ。
「な、なんだそりゃ……！？」
キリトが唖然としながらハリネズミのような姿になった砦を見ていると、それらを全てオートにしたのかシノンはメニューウィンドウを閉じて床に寝そべり、ライフルをこちらに向かって構えた。
「さあ、いくわよ！」
シノンのやけくそ気味にも取れる叫びと共に、全ての砲門が一斉に火を噴いた。と、同時に……
「逃煙球っ！」
ほくとがいつの間にか手にしていた逃走用アイテム逃煙玉を使い、辺りは白い煙で埋め尽くされる。
「一旦引くぞっ、キリト！」
そして気絶しているトキオをいつのまにか回収したアルビレオを先頭に、キリトたちはブロックの入口まで一時撤退した。

「さて、どうするか……」
アルビレオが肩に担いでいたトキオを下ろして呟いた。
未だに気絶しているトキオに、この状況でもマイペースなほくとは油性ペンを取り出して何やら顔に描こうとしていたが、身の危険を感じたのか覚醒したトキオが地面を横にごろごろ転がって避け、さっと起き上がった。
「今何しようとしてた、ほくと？」
トキオがじとーっとした目で見ると、ほくとは油性ペンをくるくる回しながらどこ吹く風というように、
「えっ、別に～何もしようとしてないよ～」
と、わざとらしく口笛を吹きながら嘯く。
「漫才もいいが、そろそろあれをどうするか考えたほうがいいと思

うんだが？」
　アルビレオがあれと差した方向には大量の砲門でハリネズミのようになっている櫓がある。
「トキオ、一度はあれに突っ込んで行ったんだろ？何とか突破できそうだったか？」
　キリトが尋ねると、予想通りの答えが返ってくる。
「いや、まあオレのさっきのありさまを見た通り、あの火力だとさすがに一人で突破は無理だったよ。
だけどこの5人が力を合わせれば……」
　そう、たぶん上手くやればほぼ確実にあの防衛線を突破できるだろう。
　しかし……
「よし、じゃあフォーメーションは……」
「ちょっとまってくれ。みんなに話しておきたいことがあるんだ。確証はないんだけど……」
　キリトはそう前置きして、先ほどから感じていた違和感から導き出されたある仮説を語った。

大迷宮を突破せよ！　―０２―（後書き）

シノンさんやっと登場です。
ファントムバレット編はこの小説が中盤くらいのときに出たんですが、当時はシノンをどうやって出すかよく迷いました……

大迷宮を突破せよ！　―０３―

「よし、それじゃみんな、予定通り行動開始だ」
「了解！」
「まかされたヨ！」
「よ～し、がんばっちゃおう！」
アルビレオの静かな作戦開始の声に、全員が勢いよく返事をする。
「じゃアルビレオ、トキオ、行きますか」
「ああ、そんじゃ二人とも、援護よろしく！」
「しっかりな！」
ほくととチェロを残し、キリトたちは砲台の射程内へと近づいていった。

ピーッ、ピーッ、ピーッ！
セットしておいた警報が耳元で鳴り響く。
「来た……」
シノンは櫓の柱に寄りかかりながら静かに呟き、閉じていた目を開きメニュー画面を操作してこのブロックに入れる唯一の入口の映像を見る。人影は3人……確かキリトを入れて5人はいた。どうやら残りの2人はバックアップで、アタッカーがあの3人らしい。
しかし、いくら援護があるとはいえ、たった3人でこの火力を突破できると本当に思っているのだろうか？
「いや、キリトならやりかねない……」
初めて会った時からキリトには驚かされっぱなしだった。不可能を可能にし、踏みとどまりそうになった時背中を押してくれ、わたしのトラウマを克服するのにも手を貸してもらい、最後には命まで救ってもらった。

そう、キリトはシノンにとっても朝田詩乃にとってもかけがえのない大切な人だ。
（だからこそ……）
「ここだけは絶対に堕とさせない……！」
そう言いながら顔がちょっと赤くなるのを感じたシノンはぶんぶんっと頭を振り、両手で頬を叩いて気合いを入れると、床に寝そべりライフルを構え意識を研ぎ澄ませ始めた。

キリト達のフォーメーションはいたって単純な縦列形態を取っている。
先頭の人間が正面からの攻撃を全て受け流し、ＨＰが半分を切ったら最後尾に下がり回復するというものだ。これを３人でローテーションしながら進んで行ければ、いつかは必ず櫓までたどり着ける。
そう、相手の攻撃がしのぎ切れる程度のものだったらの話しだが……
「ほっ！、やぁっ！、とぉうっ！、ふっ！、どりゃあーー！」
何回目かのローテーションを経て、先頭トキオは歩くような速さで進みながらも、様々な気合の入った声を上げて砲弾や色とりどりの紋章弾など飛んでくるものを片っ端から弾いている。
ダダダンッ！、キィンッ！、ドドンッ！、ボンッ！、ガガガガガッ！
放たれてくる弾が多種多様なので、弾く音が多彩なメロディーを奏でてまるでトキオの剣が楽器になったかのようだ。
それはトキオも実感しているのか、先ほどから剣を振るう型がまるで練武を舞っているかのようにリズムに乗ったものになっている。
しかしだからこそ、その動きは読みやすくなってしまう。
バァンッ！
キィンッ！

動きが単調になりがちだったトキオの隙を突き、シノンのライフルの一撃がトキオの剣を弾き飛ばしてガードの構えを強引に解かせた。
「あっ……」
一瞬無防備になったトキオにここぞとばかりに砲撃が集中する。
「交代だ！」
トキオの後ろにいたキリトは叫ぶと同時にトキオの首根っこをひっつかんで無理やり後方に放り投げ、代わりに前に出て放たれた銃弾全てをいなし弾き返す。
「サ、サンキュー、キリト。助かった……」
トキオが少し情けない声を出しながら、すぐさま回復アイテムを使いＨＰを全開まで回復させたあと、深く息を吸い乱れた呼吸を整え始める。
「これ以上進むのは少しきついか……？ほくと、またでかい呪紋（やつ）を頼む！」
２番手になったアルビレオは呪符や無詠唱で援護してくれながら、キリトの後ろで忙しく指示を出している。
常時表示されるよう設定してある小さなモニターに映ったほくとはアルビレオのオーダーにムリムリと首を振った。
「こっちはもう援護だけで手一杯！」
「あの火力はやっぱりだてじゃないヨ！」
チェロがキリトたちに切れかかっていた補助系の呪紋をかけてくれながらまくしたてる。
「くそっ、少し早いがあれを使うか……？キリト、トキオ、リンクゲージはどうだ？」
アルビレオがモニターをチェックしながら訊ねてきた。
「オレはもうずいぶん前から満タン！」
「俺のほうも大丈夫です。だけど今使っちゃうと、最後まで持ちますか？」
一瞬でも気を抜けばハチの巣にされる緊迫感の中、キリトは一杯

一杯ながらもなんとか答えた。
「使えるのは３０秒。ギリギリだが、俺達ならできる！」
いつになく強気に言うアルビレオがモニターから目を離し、槍を構える。トキオもそれにならって再び両手に剣を持つ手に力を込める。
「よし、行くぞ！」
アルビレオの号令と共に、キリトたちはあるコマンドを一斉に叫んだ！
「リンクゲージ解放！フォームＸｔｈ！」
言葉と共に、キリト達は光に包まれた。

「何……あれ……？」
ここにきて、シノンはさすがにこのイベントがおかしいことに気付いてきた。
キリトのアバターのこともそうだけど、他にも一緒にいた人達の服装や装備は明らかにＧＧＯのものではない。ここがどこで何が起こってるのかわからない今、なし崩し的にこの櫓を守ることに従事しているのは仕方のないことだったし、もしここが墜ちた時におこることがまだ有効なら、絶対に阻止しなければならない。
なので全力で潰しにかかっていたのだけど……
「変身した……？」
そう、前に進めずに立ち往生になる状態にまで追い詰めた瞬間、急にあの３人が光り出して、エフェクトが消えて次に姿が見えた時にはキリト以外の二人の姿が変わっていたのだ。
キリトと同じ二刀流の少年は学生服にゴーグルというゲーム内では妙な恰好から、明るいグレーと白を基調にした剣士が着るような服に一本の角が尖っている額当てを付けた姿になっている。
もう一人の浅黒い肌をした軽装の青年はその身を騎士鎧に包み、

フリーランスから正式な騎士になったような姿に変わっていた。
そして変わったのは姿だけではないと、数多の強敵と対峙してきたシノンの直感が告げていた。その感通り、相手は各々の獲物を構えると、一気に櫓に向かって疾走してきた。

リンクゲージ、それはのこのゲーム特有のシステムで、パーティメンバーの感情（テンション）が昂るごとにゲージのメモリ増えていく。このリンクゲージが一定以上溜まると、Ｘｔｈフォームを使うことができる。
しかしＸｔｈフォームになるにはメンバー間の絆という不確定で測りずらいものが強くないとできず、できるかどうかわからない非常に信用のおけない技なのだ。さらにこれはリアルのプレイヤーとＡＩの間でしかできないという制約まである。
これらの条件付けから使えない場合が多いが、なれればもの凄く強力なのは言うまでもない。
「Ｘｔｈフォームにチェンジ完了っと！久しぶりだな～」
感慨深げに自分の姿を見るトキオ。
「無駄にする時間はない。行くぞ！」
アルビレオがそう言うなり武器を構えて、颯爽と駆けだしていった。
「この真槍ヴォータンで過去の因縁を砕く！トキオ、キリトッ！ついてこい！」
気合いを入れながら走っていくアルビレオに続くキリトとトキオ。
一瞬戸惑ったのか砲撃が止んでいたが、すぐに気を取り直したらしく攻撃は瞬く間に再開され、あっというまに視界は弾幕で埋め尽くされたが……
「はぁーっ、やっ！」
気合い一閃、アルビレオが駆けている勢いと共に槍を横に薙いだ！
ブワッ！

ズドドドンッ！！
光の烈風が弾幕にぶちあたり、ものすごい衝撃と共に目の前が爆風と閃光で埋め尽くされる。
「なっ！？」
声は聞こえはしなかったが、もう見える位置にまで近づいているのでシノンの驚く顔が一瞬見える。爆風で巻き上げられた土煙に上手い具合に隠れてさらに接近する。
ダダダダダッ！
しかしシノンも櫓からの下手な鉄砲数うちゃ当る的な弾幕で行く手を阻んできた。
「とりゃりゃりゃりゃっ！」
と、今度はトキオが前に出ていき、当たる可能性のある弾だけを見極めて次々に弾き落していった。
「バカッ！？大声を出すな！」
アルビレオの忠告も遅くトキオの声でこちらの位置がばれ、煙の向こうからでもわかるくらい巨大な中型紋章砲がエネルギーをチャージしている光が見える。
「なんのぉーーーってね！」
トキオが二振りの剣を中段にためを作るように構え、一気に振り抜く！
ギャギャギャギャッ！
ズドーーーーーンッ！
二振りの剣に付いる飾りに見えた巨大な歯車（ギア）が光り輝くチェーンと共に飛び出し、煙の中に消えると同時に新たな爆風と閃光が生まれた。
ギュルルルルンッ！
チェーンに引き戻され、ギアが戻ってくる勢いで辺りの煙が晴れる。
煙の向こうに現れた櫓の姿は見るも無惨なものだった。主砲である中型呪紋砲はトキオのギアにより爆散して大破。その誘爆に巻き

込まれて周りの砲門もほぼ沈黙。
　これでは上にいたシノンも無事では済まないと思われたが……
「けほっ、けほっ……し、死ぬかと思った」
　顔は煤けているものの、羽織った灰色のマントには傷一つ付いていなかった。しかし、それ以外のところは……
「シ、シノン……」
　キリトは戦闘中ということも忘れてシノンのことをじっと見つめてしまった。その視線に気付いたのかシノンはキリトを見てその真剣な眼差しに顔を赤らめてあたふたしだした。
「ちょっ、なんでそんな風に見てるのよ！？なにか変なものでもついてる……？」
「……シ、シノン……その髪……」
　キリトはとうとう我慢できず吹き出してしまった。
「えっ、髪……？って、えーーーー！？」
　そう、シノンの動きやすいように短く切りそろえられた水色の髪が爆発でアフロと化しているのだ。
（元の髪の量から考えられないほどのアフロっぷりはゲームの仕様か？）
「……っぷw」
「……くっw」
　トキオとアルビレオまでが口を押さえて笑いをこらえている。
「こら～！女の子のことを髪形で笑っちゃだめなんだよ～」
「って、笑いこらえながらスクショ撮るのはいいのネ、ほくと？」
　後方でもやりたい放題のほくととそれにツッコムチェロ。
　そしてシノンはというと……
「あ、やばい……みんな、シノンがマジ切れ寸前なのでさっさと装置を破壊した方が……」
　とキリトが言った直後、アルビレオとトキオの体がエフェクトに包まれ、ポリゴンの欠片が舞い散らせながら元の姿に戻ってしまった。

「「あ……」」
アルビレオとトキオがしまったっ！という表情をしたが時すでに遅く、ポリゴンの欠片が全て消えるのと同時に二人はＸｔｈフォームになった反動でその場に力尽き倒れこんでしまった。
「し、しまった……あまりの予想外な展開にタイムリミットを失念した！」
アルビレオが仰向けになりながら悔しそうに拳を握りしめる。
「まさかあそこでアフロだなんてっ！ちくしょ～、反則だ～！」
前のめりに倒れたトキオはしたたかにぶつけただろう鼻の痛みを我慢しながら、もごもごと自分の愚かさを悔いていた。
キリトはこういう展開もこちらにきてからよく経験しているから、たいして気にならない。
しかしシノンはというと……
「えっ、なっ……えぇ？」
もう何がなんだかわからないという表情をすること数秒、とりあえずアフロを隠すためにフードをまた被ってみたが……
「シノン……それ、あんまり意味がない……ｗ」
逆にアフロがフードを盛り上げて余計笑いを誘う格好になっている。そしてキリトの進言に対して、シノンは銃弾で答えてきた。
「わっと！」
笑いをこらえながらも油断せずにシノンの行動を見ていたキリトは紙一重で避けることができた。
（まあ今の怒り狂っていつもの氷のように冷たく鋭い集中力が散漫になっているシノンの弾丸なら、いくらでもよけれる自信があるけどな……）
キリトは続けざまに放たれた銃弾を右へ左へとよけ続け、ついに櫓が目と鼻の先まで近づいた瞬間……
ゾクッ！？
シノンの今までの怒りに任せて放たれるプレッシャーが、一瞬にしてまったく別種の、ＧＧＯでいつも見せていた凍てつくようなも

のへと変貌したのをキリトは感じ取った。
パァンッ！……パァンッ！……パァンッ！
「なっ！？」
息をつく暇もなく続けざまに放たれる必殺の威力の籠った正確無比の弾丸！
キリトはなんとかそれを回避したが……
「そこっ！」
そういわれたと同時に、足元から殺気を感じてすぐに飛び上がろうとしたが、鈍い痛みとともに急に足に力が入らなくなり、キリトはその場に倒れこんでしまった。
「あっは～、さっすがシノンちゃん！ぼくちん、ほれぼれしちゃうなぁw」
笑いながら地面から現れたのはアサシンのような格好をした双剣使い、楚良だった。

このゲームには部位破壊というものがある。たとえば、手に一定以上のダメージを与え続けると、動かすことができなくなる。まあ本当に手や足が吹っ飛ぶわけでもないので、部位破壊というより麻痺と呼んだほうがいいかもしれない。とにかく、これに成功すると回復するかタウンに戻る以外その部位は動かすことができない。
しかし、この技は少しでも回復されると今までその部位に蓄積された分のダメージは一瞬でおじゃんになり、成功するのはかなり難しい。ただし、キリトがＳＡＯやＡＬＯで使っている武器破壊（アームブラスト）や魔法破壊（マジックブラスト）のようにウィークポイントを見つければ一発で決めることも可能である。
もちろんそれをするには並大抵の奴には無理だが……
「さすが暗殺者みたいな恰好してるだけあって、奇襲が上手いな……」

にやにや笑いながら自分の周りを獲物を前に舌なめずりするようにぐるぐる回っている楚良にキリトは軽く称賛を送った。
「べっつにー。最後のシノンちゃんの誘導の仕方がうまかったのもあるしね～。そんなことより、ここまで遠いと味方の援護呪紋もうけられないよ～。さあ、同料理してほしい？」
だがそう言った後、ふと顔をしかめる。
「あんた、なんでまだそんな顔してるんだ？」
そう、キリトは全く動じていなかった。
「まあ最初からそっちが複数いるってのは気づいていたからな」
そう、あの時最初の銃声の時に感じた殺気は銃を放った主ではないことをシノンが相手とわかったときにキリトは気づいていた。もしシノンがあの時キリト達に向けて殺気を放っていたのなら、櫓で会った時にあれほど驚いていなかっただろう。
最初は演技かとも思ったが、あの慌てぶりはフリとは思えなかった。
（まあ、そうでなくとも伏兵を忍ばせとくのは定石だし、どっちにしても用心はしただろうけど……）
「でもそっちの方が一枚上手だったみたいだ」
キリトが仰向けになって笑いながら言うと、楚良は不機嫌そうに尋ねる。
「じゃあなんでそんな余裕なんだ？」
それにキリトは簡潔に答えた。
「それは……」
キリトは楚良の死角になるようにメニューをさっと開いて操作した。
「相手の策なんて関係ないくらい強力な武器をこっちが持ってるからだ！」
アイテムポーチから選択して取り出したものをキリトは勢いよく天高く放り投げた！
「なっ！？グリちゃん！？」

楚良が慌ててシノンに撃ち落すよう言おうとしたが、もう遅い。
ボンッ！
巨大化したグリちゃんは櫓めがけて真っ直ぐと落ちていく。
「バカなッ、なんで持ち主から離れてるのに巨大化して！？」
そう、キリトが持ち主であるチェロからグリちゃんを預かった時点でチェロはおろか誰もグリちゃんをコントロールすることはできなくなっていた。
しかし……
「グリちゃんの習性は乗り物に惹かれる以外にもう一つ、尖ったものに襲いかかるっていうのがある」
ここでハッとした楚良が櫓の天辺にはためく旗が付いている尖った棒を見た。
「ちっ！ここは……逃げるが勝ちみたいだねぇ……」
楚良は悔しそうな表情をしながら呟くと、しゅばっ！と言いながらジャンプして逃げ出していった。
「さて、俺も逃げ……あれ、足が……」
キリトもさっさと逃げようとしたのだが、足が動かない……って楚良にやられてたの忘れてた！
「やばっ、早く回復しないとっ！？」
急いで回復しようとするが、すでに櫓に到達したグリちゃんはもの凄い勢いで破壊しながら地面、つまりキリトの方へと向かって迫ってきていた。
「あ、死んだか……」
キリトが死を覚悟したその瞬間、いきなり体を掴まれてふわりと浮いたかと思うと、抱え上げられた。
「あれ、シノンか……？」
そう、キリトをお姫様だっこしたのは、櫓の上にいたはずのシノンだった。
「大会の時と逆ね」
シノンがしてやったりと意地悪く笑っているが、ヘカート？を背

負ったままキリトを担いで走るのは相当きついらしく（まあダメージを負っていたとはいえ、俺がした時も結構きつかったし……）歯を食いしばっている。
そして何とか櫓の崩壊に巻き込まれないところまで退避すると、シノンは急にその場に止まり、キリトをポイッと放り出した。
「さあ、なにがどうなってるか説明してもらおうかしら……、っと思ったけど、その前に……」
そう言いながらシノンは腰に差してあったＭＰ７短機関銃を取りだし構える。
「ちょっと顔面破壊させてもらうね」
キリトは一瞬『はっ？』という間の抜けた表情をした後、ハハハッと笑ってみた。
しかしシノンの表情がマジなのに気付き、一応聞いてみる。
「えーっと、シノンさん、一体何をおっしゃられてるので？」
キリトが馬鹿丁寧に訊ねると、シノンは少し顔を赤らめながら答えた。
「ちょ、ちょっとこれからあることが起こるから、それを見て欲しくないの。だから顔面、というかより目を見えなくさせてもらおうってわけ」
あー、なるほど。確かに足をやられた時と同じように、顔にダメージが加われば同じような効果はあるけど……でも別にそんな過激なことしなくても、というか何を言っちゃってるんだろうかこの子は……なんて思考をキリトがぐるぐる頭の中で駆け巡らせていると……
ダダダダダダダッ！
キリトは反射的に横に転がった。
フルオートでばら撒かれた弾丸は先ほどまで俺の顔があった地面をハチの巣にしていた。
「……ちょっ、本当にシャレにならないよ、シノン！？」
キリトが悲鳴さながらの声を上げたが、シノンはゆらりとこちら

に銃を向け、再度撃とうとしたその瞬間！
バサッ！
シノンが着ていた爆発でも傷一つ付かなかった灰色のマントが跡形もなく弾け飛んだ。
そしてその下には……
「みぃ、見るなぁぁぁぁーーーー！？」
フルオートで乱射された弾丸が、今度こそ自分の顔に目がけて飛んでくるのを見た直後、キリトの意識は吹っ飛んだ……

大迷宮を突破せよ！　―０３―（後書き）

今回出したＸｔｈフォームについてはサイドストーリーで詳しく書くつもりです。
クライマックスでリンクシステムは重要なファクターとして出す予定なので、無理やりっぽいですがここで出しました。
ちなみに、何人かのキャラのＸｔｈフォーム時の恰好はゲームとは変えるつもりです（ブラックローズやミミルの角＆うさぎ耳等……）

最初にキリトが感じたのは後頭部に当る柔らかい感触だった。
意識がはっきりしないまどろみの中、キリトはその感触を一番よく感じられる場所を探そうと頭の位置を微妙に調整してみた。
「ちょ、くすぐったいっ！……こいつ、もう起きてるんじゃないですか？」
「ん～、まだみたいだけど、そろそろ出発しないと晩ご飯にやるつもりだったクエスト達成パーティーできなくなっちゃいそうだから、強制的に起こしちゃおっか？」
その言葉が聞こえたと同時に、キリトの後頭部から心地よい感触が消え、何か硬いものに頭をごつんっと軽く打ち付けた。
「むぅ……」
「あっ、起きちゃった……」
キリトが目を開けて初めに見たものは、ほくとが俺を見下ろす格好でバケツを持っている姿だった。中には水がたっぷり入っているらしく、たぷんたぷんっと言う音が聞こえてくる。
「あ、おはよう、キリト！」
「ほくと、そのたっぷり水が入ったバケツで何をしようとしてたんですか？」
キリトが馬鹿丁寧に尋ねると、ほくとはあたふたとしだした。
「えーっと、んーっと……花火をする時はバケツをちゃんと用意しよう……みたいな？」
ほくとがてへっwと笑った後、そんなことはどうでもいいという感じに話しを切り替えた。
「あ、そうだ、そんなことよりシノンちゃんのことなんだけど、キリトが気絶させられている間にこっちでできるだけ事情は説明しておいたよ」
今一はっきりせず朦朧としていた意識がいっぺんに覚醒する。

（そうだ、唐突過ぎてあのときは考える余裕がなかったけど、シノンには色々と聞きたいことがあったんだ）
キリトは辺りをキョロキョロ見回すと、お目当てのシノンがさっきからほくとの後ろに隠れていたことに気づいた。
「ん、なんでそんなところに隠れてるんだ、シノン？もしかして、まだアフロとか？」
キリトが冗談半分に尋ねた後、ふと思い出してそう言えばと続けた。
「確かシノンに気絶させられる前に何か灰色のマントが消えたような……」
と、キリトが何か思い出しかけた瞬間、
ダダダダダッ！
キリトの座っているところの周りに銃痕でできた線がきれいに引かれた。
「思い出したら、今度はちゃんと忘れるほどショックを受けるまで撃ち続けるけど？」
ＧＧＯで着ていたいつもの軽装（いや、少しばかりこのゲームの様式や紋様が入っているからたぶん現地調達したものか？）を着たシノンが今までに見た中で一番怖い鬼の形相で静かに宣告する。
「と、思ったけど、気のせいだったみたいです……」
キリトは自分の自我の喪失の危機を察知し、素早く答える。
（だけど、あのシノンをここまでうろたえさせる格好っていったいどんなのだ……？）
キリトは少し気になったが、好奇心は猫を殺すともいうし、ここは命あってのもの種だと思うことにした。
「で、シノンにはどこまで説明してくれたんですか、ほくと？」
ほくとがシノンに教えたことはこの世界が彼女のいたゲーム、Ｇ（ガンゲイルオンライン）

ＧＯではなくＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄであるということ、キリト以外にもＡＬＯからフェアリーダンスのメンバー＋その他数名か来ているということだった。
「ＧＧＯからの依頼は正式なものだったのか？」
キリトの質問に、シノンはちょっと自信なさそうに答えた。
「いつも通り運営のアドレスからだったし、報酬がちょっと高めだったのが気になったけど、あの事件以来結構優遇されてたから、こんなもんなのかなと思って……」
ちなみにあの事件、前回大会の前後に起こった連続殺人が解決した後、ＧＧＯの運営が事件の被害者であるシノンに１年間料金無料他優待遇を申し出てきた。
もちろんシノンは最初断ったが、キリトの「もらえるもんはもらっとけば？」という助言を与えたのもあり、最終的には受け取っていた。
「まあ茅場なら運営になりすましてメールを送ることぐらいしかねないからな……あ、それと、シノンは何月何日の何時くらいにダイブした？」
「日時？８月×日の、んー……だいたい０９：３０くらいかな？」
キリトたちがこのゲームに飛ばされたのが８月×日の９：００頃だ。つまり、茅場の言っていた１ヶ月で１時間というのは本当らしい。
「それじゃ最後の質問だけど、俺たちが始めてキスしたのはいつどこでだったっけ？」
「……は？」
シノンはたっぷり数秒思考停止した後、見る見るうちに顔を真っ赤にして反論する。
「ちょっ、なに言って……！？あ、あんたとキスしたことなんてないでしょう！？」
「わー、キリト、アスナという人がありながら……二股だ～」
「調査結果を改めるネ。キリトは人格最低ヨ……」

いつのまにいたのか、チェロまでキリトのことを言いたい放題に言っている。
キリトは恥ずかしさで顔を真っ赤にしそうになりながらも、ポーカーフェイスでさらに続けた。
「俺がバイクで学校まで迎えに行ったことあったろ？」
「あ、あの時は普通に送ってくれただけじゃない！もう、一体なに言ってるの！？」
ここでキリトはシノンの表情をじっと見て、少し黙考したあと結論を出した。
「ふぅ……やっぱり本人か、よかったよかった」
キリトが一人で納得していると、わけがわからない様子のシノンが慌てて聞いてきた。
「ちょ、何一人で自己完結しちゃってるの！？説明しなさいよ！」
「あ、ああわるいわるい、いや、シノンが本物かどうかわからなかったから、ちょっとカマかけさせてもらったんだ。茅場なら偽者くらい用意しそうだしな……」
キリトがうんうんと頷いていると、シノンがゆらりとＭＰ７短機関銃を構えた。
「あ、あれ、シノンさん、もしかして怒ってらっしゃる……？」
キリトが恐る恐る尋ねると、シノンはにこっと笑った後、一瞬にして氷のような冷たい表情に変わった。
「当たり前でしょーがーーー！」
こうして乙女心を全く分かっていないキリトは、シノンの放つ銃弾をまた避けまくるはめになった……

「なんかシノン、トリガーハッピーに目覚めてないか……？」
キリトが尋ねるというわけでもなく呟くと、シノンは猛然と反論してきた。

「あ、あんたがへんなことばっかり言うから……っもう！あんたといるとやっぱり調子狂うわ」
シノンがさらにキリトに何か言おうとしたが、
「も～う、さっきから二人だけでもりあがっちゃって～！」
背中にほくとが飛びついてきたことにより中断させられた。
「わっ、ほくとさん！？」
シノンが慌ててほくとを振り払おうとするが、ほくとの関節技のごとく決まっているべったり張り付きはちょっとやそっとじゃ解けないことを身をもって知っているキリトは、新たに生まれた犠牲者にただ黙祷した。
「ちょっ、キリト、見てないでなんとかしてよ！」
「まあいいじゃない、女の子同士なんだからさ～」
ほくとが猫なで声を出しながらふっ、とシノンの耳に息を吹きかけてひゃっ！？と言わせて見たりして遊んでいるのをキリトは内心眼福と思いながら、火の粉が飛び掛らないよう距離を置いている。
「中身はすでに女の子というには年を食いすぎていると思うが？」
覇気ゼロの声がほくとの後ろから聞こえたかと思うと、アルビレオがほくとをシノンから引っぺがしていつものごとく猫を持つようにする。
「あ、あら～アル……もう起きても大丈夫なの～？」
鬼のいぬまになんとやらだった状態からいっぺん、ほくとはいたずらを見つかった子供のように首をすくめた。
「っていうかアル～、私がなんだってぇ！」
「元になったリアルのことを言及した件なら、本当のことだろう？」
アルビレオの有無を言わさぬ物言いに、ほくとはぐうの音もでないようで、静かになった。
「ところで、トキオはまだ反動で？」
「ああ、Ｘｔｈフォームは普段テンションが高い奴ほど反動がきついからな……」
アルビレオが近くで巨大化しているグリちゃんの上に乗っけられ

てぐったりしているトキオを指差した。いや、あれはぐったりしているというよりは元気が無いと言ったほうがいいのかもしれない。
先ほど櫓攻略戦で使用したリンクゲージは勇気、元気、士気、敵意などの感情の昂ぶりそのものを消費する。なので、Ｘｔｈフォームになってから戻るとそれらが全て無い状態に戻り、今のトキオみたいに腑抜け状態になってしまう。
トキオは結構熱い方なので終わった後の落差は激しいが、その分リンクゲージが溜まりやすい。逆にアルビレオみたいにクールなタイプはわざと強気な発言をしたり感情を高めないと中々溜まらないが、元のテンションが低い分すぐに戦闘に復帰できるだけの状態に戻りやすいと、一概にどちらがいいとも言えない。
「まあ歩いているうちにトキオも回復するだろう……シノンさんのことはこのクエストが終わってから考えるということでいいか？」
アルビレオがシノンに尋ねると、シノンは助けて貰った恩人であるアルビレオに感謝の念を込めながらこくりと頷いた。
「よ～し、それじゃラストスパート、張り切っていこうか～！」
櫓の迷宮操作装置を破壊したために出来た盗賊のアジトまでの一本道を例によってほくとが先導して出発した。

「これは……」
一本道を真っ直ぐ進んで行くと盗賊団アジトと書かれた看板が立っている洞窟までたどり着いた。
いよいよ盗賊団と対決かと各々の武器を取り出し、臨戦態勢で突入したのだが……
「ようやく来たか！」
洞窟に入ると、そこにはいかにも盗賊という風な服装をしたリョースとヘルバがいた。
そして……

「むしゃむしゃむしゃ……ぱくぱくぱく……ごくんっごくんっごくんっ……ぷはぁー、おいしいです」
囚われの姫役のＡＩＫＡが巨大なテーブルについて料理を食べていた。しかし驚いたのは虜囚の身であるはずのＡＩＫＡが繋がれもせずにいることではなく、その食事の量だ。
テーブルにある大量の料理はまるでマジックのように見る見るうちにＡＩＫＡの口の中に消えていき、ヘルバが部屋の奥の方にある調理場で鍋やフライパンをふるって料理を作り、リョースがそれをどんどんテーブルに運んでいる。
「おまえら、ＡＩＫＡを救出にきたんだろう？早くこいつを連れてってくれ！もうこのアジトの食料は尽きそうなんだ！」
リョースが演技とは思えないほど切実な声で訴えかけてきた。
「えー、もう帰るんですか。まだお腹いっぱいじゃないのに……」
空になった大量の皿の前で心底残念そうにしているＡＩＫＡ。
「ＡＩＫＡって、食いしん坊キャラだっけ……？」
「いや、まあカナードのどんぐりバーガーを好きになって一杯食べてた時からよく食べるな～とは思ってたけど、まさかここまでとは……」
どうやらトキオも知らなかった新事実らしい。
（まあこれで労なくしてクエストクリアか……んっ、ちょっとまてよ……？）
「いや、あんた達を倒さないと神槍ヴォータンを手に入れられない」
アルビレオが前に出て槍を構える。そう、クエストの報酬アイテム入手条件はＡＩＫＡを助ける前に盗賊を倒すということだった。
「ああ、あれか……それなら傭兵としてやとったそこの娘を倒したから、槍だけを持っていくならいいぞ。宝物庫はそこの扉だ」
「……わかった、こちらは神槍ヴォータン入手が目的だからな」
アルビレオはあっさり了承した。
（何か呆気ないほど簡単に終わったな……まあでも櫓を攻略するのは結構大変だったし、そこそこ充実したクエだったかな。）

「んじゃあ遠慮なく……」
キリトがそう言ってリョースが指差した扉に手をかけて開くと……
グサッ！
「……っえ？」
キリトは一瞬何が起こったのかわからなかった。
目の前には逃げたはずの楚良、そして目線を下の方にずらすと、そこには深々と突き刺さった槍があった。
「ばみょ～ん。ゆだんたいてきだよ～」
その言葉に槍に刺されているという状態ながらもキリトは違和感を感じていた。
キリトは決して油断していたわけではない。実際軽いノリでいるように見せて警戒しながら扉を開けたので、楚良の殺気は感じ取れていた。その時点ではギリギリ避けることは可能だったはずだった。
しかし、まるで自分の体が、いや、このアバターの中にある俺の意志の深いところが引き寄せられるかのように槍へと誘われたような不可思議な感覚をキリトは得ていた。
そしてキリトの違和感は、楚良の顔色が一変したことで確信に変わった。
「なっ、こいつ勝手に反応を……！？」
後ろにいたみんなが何かを言っているのをまるで遥か遠くから聞いているように感じながら、キリトに刺さっている槍がスキル発動時特有の光を帯びる。
そしてキリトの意識は暗闇へと引きずり込まれていった……

「色々経験して、みんな成長していくんだから！」
ユイと似た少女の夕暮れ竜に対する切実な思いを含んだ声。
「俺の、せいなのか……？」
アルビレオの悔やむ声。

「ボク、ログアウトできないんだ……」
司の不安そうな声。
「アウラ……なんで？」
アウラの行動に対するカイトの戸惑いの声。
「うぉおおお！」
バルムンクに挑む勇者の卵シューゴの全身全霊をかけた声。
「君たちが覚えていてくれれば、僕は本当の意味で消えることはないのかな……？」
クビアの少しさびしそうながらも満足した声。
「アイナァァーーー！？」
オーヴァンの自らが犯した罪に対する慟哭の声……
「こいっ、こいよっ、俺は……ここにいる……スケェェェェイス！」
ハセヲの力を求める声。
「オペレーションギア、開始！」
トキオの決意を秘めた声。
「わたし達、双子なんだね」
カイト似のツインテールの少女の優しくも悲しげな声。
「％…×蛾ァ？―￥：＆」
プロテクトが掛っているのか上手く見れないが、別のカイト似の少女が……いや、黒髪のショートの女の子がカイトと重なるように存在して、何かを懸命に言っている。
そして、訪れた静寂と平穏。
しかし……
「……この世界はザッ、ザザザザッ！……実験ザザッ！……使い捨てザザザザザザッ！」
ノイズまみれの中、白衣の人間達が何かを目の前に話している……

そして、世界は暗闇に放り込まれた……

「キ……！、……ト！、キリ……！、しっかりして、キリト！」
キリトは頭の中をごちゃごちゃにかき混ぜられたような痛みを感じながらも、なんとか目の前で自分を揺すっているのがシノンだと認識できた。
「あれ……、シノン、何で俺の部屋に……？」
「って寝ぼけてる！？」
シノンの後ろに立っているほくとがズッコケながらツッコム。
「もう、心配したヨ！」
人形のグリちゃんに乗っかったチェロはやれやれとポーズをとっている。
「で、大丈夫なのか？」
一番最後にアルビレオがいつものポーカーフェイスながらも少し心配そうに訊ねる。
言われてキリトは少し体を動かしてみたが、特に問題はなかった。しかし、キリトは自分の調子よりも気になることがあった。
アルビレオは先ほどキリトの体を貫いた槍持っている。
意識が暗闇に引き込まれた後に断片的に見たもの……布で厳重に巻かれて外見を把握しづらいが、キリトが刺れたあの槍はもしかして……
「アルビレオ、一つ聞きたいことがあるんですけど……」
「ん、なんだ？」
キリトが神妙な面持ちで聞いてきたのに対し、アルビレオは軽く答えた。
「アルビレオは以前神槍ヴォータンでリコリスを……」
キリトの質問にアルビレオの顔色がサッと変わったと同時に……
「あーっ、キリト、何か頭にタンコブができてるよ～」
キリトが言い終わる前にほくとが割り込んできてキリトの頭を両手でがしっと掴んでぐいっと引き寄せた。

「あいたたたたたたっ！？何するんですか！」
少しは意識が明瞭になっていたものの、未だに酷い頭痛がする頭を掴まれてキリトもさすがに本気で抵抗しようとした。
しかし……
「帰ったらわたしの部屋に来て」
と小声で耳打ちされると同時に、呆気ないくらいあっさりとキリトは解放されてしまった。
「ごめんごめん。ついついいつもの調子でやっちゃったwまあ、お目当ての槍も手に入ったし、ＡＩＫＡちゃんも救出できたってことで、さっさと帰ろ～！」
ほくとの押しにうやむやにされた状態ながらも、疲労困憊だったキリトたちは同意して、シノンにやり方を説明した後全員青いリングに包まれて転送していった。

Ｆｒａｇｍｅｎｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｍｅｍｏｒｙ　－Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの記憶

キリトに引き寄せられた古き神の残滓、垣間見たＴｈｅＷｏｒｌｄの歴史……
そしてキリトはついに、ＴｈｅＷｏｒｌｄに隠された真実を知る。

・ｈａｃｋ／／の歴史は一応原作に沿ってますが、アニメやゲーム、小説などで矛盾や相違点があるので自分なりにまとめたものを基準にしています。

次にエピローグを入れた後、最後の章に入ります。

真実の歴史

ーグランホエール居住区画ー

「ここだったよな……」

グランホエールに帰ってきた後、体調も良くなっていたのでキリトはクエスト達成の打ち上げに参加した。そしてかなり遅くまで続いた宴会が終わった後、今はほくとの部屋の前に来ている。

ほくとは何を話す気なのか……キリトは逸る心を落ち着かせ、ドアをノックした。

コンコンコンッ！

「どうぞ」

中からほくとの子供っぽいものとは違う落ち着いた女性の声がして一瞬躊躇ったが、ここで立っていても仕方ないので、キリトは中に入った。

「おじゃまし ま……っえ！？」

キリトは入った瞬間自分の入った場所の光景に目を見張った。以前アスナとユイと一緒にほくとの部屋を訪ねたことがあったが、そのときはピンクで統一された何とも言い難いファンシーな部屋だった。

しかし今いる部屋はそれとまったく真逆だ。

四畳半くらいのスペースに散らかったゴミ、机の上には2台のアンティークと言っても過言ではない古いパソコンが置かれ、その横の本棚には大量の本や雑誌、辞書が詰め込まれている。

（なんだかまるで一昔前の現実の部屋みたいだな……）

キリトがそんなことを考えていると、机の前のオフィスチェアーにこちらに背を向けて座っていた女性がくるりと回転してこちらを向いた。詩人風の装束に身を包んだ大人の女性タイプのアバターだ。

「この姿でははじめましてね。私はW・Bイェーツ、このゲームでは吟遊詩人みたいなことをやってるわ」
自己紹介をしながらメニューウィンドウを操作してゴミを片付け、真ん中にテーブルとティーセットを出した。
「ここは私の元になったリアルの女性が使ってた部屋を再現してるの。ちょっと散らかってるけど、まあ座って」
キリトは勧められるがままに安っぽい木製の椅子に座ったが、ほくとと中身が同じと言ってもイェーツは言葉や仕草がまったく違い、緊張を誘う……
「別に取って食おうってわけじゃないんだから、そんなに緊張しないで。それで、あなたは神槍ヴォータンと接触して何を見たの？」
少し深呼吸をして、キリトはあの時見た過去にこのゲームで起こった出来事らしい映像のことを話しだした。説明している間、イェーツはゆったりと椅子に座って興味深げに聞いていた。
そしてキリトが話し終わると、彼女は徐にメニューウィンドウを開き、近くに小型のモニターを出した。
「後半の方は私も知らないことだけど、それらの出来事は私の記憶とこの記録が正しければ実際に起きたことだわ」
モニターに映し出されたのは簡素なゴシック体の文字の羅列『Ｃｈｒｏｎｉｃｌｅ　ｏｆ　Ａｕｒａ』というタイトルだった。
「ここにアウラと関わって戦ったもの達、・ｈａｃｋｅｒｓの歴史が記されている」
「・ｈａｃｋｅｒｓ……」
キリトはその聞いたことのない名前を呟き、モニターに映し出される情報に引き込まれていった。

「これが……これが本当に現実で起こったこと……？」
現実の歴史をひっくり返すような驚愕の事実に体の震えが止まら

ない。
「主観的なものや根拠の薄いものも含まれてるけど、概ね事実よ」
イェーツがティーカップから口を話して静かに肯定する。
「あの学校のテキストにも載ってる一連のネットワーククライシスのほぼ全てがこのゲーム、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄが原因……？」
（ありえない……あの大災害（サイバークライシス）は世界規模のものだ。その原因がたかがゲーム……？）
「そう、普通はそのたかがゲームにそんな危険が備わっているはずがない。でも彼には作れてしまった」
イェーツがメニューを操作して先ほどの説明にも出てきたある人物を映し出す。
「ハロルド・ヒューイック。天才と謳われたコンピューター関連の研究者。人間とコンピューターのあるべき未来を語り、究極ＡＩを生みだそうとしていた……」
「きゅ、究極ＡＩ！？ちょっ、ちょっとまってくれ！」
キリトは混乱しすぎて地の言葉遣いが出かかっていたが、そんなことを気にしていられるほどの余裕はすでになかった。
「こんな馬鹿げた話し、信じられるか！第一そんな大事件の中心なら、いくら隠そうとしても耳に入るはずだ！俺はＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄなんて言うゲーム聞いたこともない……ってあれ？そう言えば……どこかで聞いたことあるような……」
（おかしい、今思ってみれば俺はＴｈｅＷｏｒｌｄのことを知っている。勿論今見せられたような情報はまったく知らなかったが、昔そんな大人気のネットゲームがあったという知識は持っていた。なのに今の今まで思い出せなかった……？）
キリトが混乱していると、イェーツは落ち付けという仕草をした。
「それはこのゲームに入る時に茅場があなた達にＴｈｅＷｏｒｌｄについて思い出さないよう制限をかけたから。まあでも２人を除いてあなた達にとってＴｈｅＷｏｒｌｄは過去の遺物、特に問題なく通過させられたみたいだけどね」

（２人……ユイとレコンのことか。だからあの二人は後から現れたのか……？）
「でも、それじゃあなんで今はそのプロテクトが効いてないんだ？」
「それはここがグランホエールの中ではなく認知外空間、ＴｈｅＷｏｒｌｄであってＴｈｅＷｏｒｌｄではない場所だから。ここなら誰からの干渉も、あの茅場明彦の目や束縛からも逃れられる」
　キリトの混乱する思考をまとめるため、イェーツは一つ一つ今キリトが知った事実を簡潔にまとめて言葉に出した。
「ハロルドが究極ＡＩを作るためにＴｈｅＷｏｒｌｄとモルガナを作ったけど、母体であるモルガナは自分が消滅することに対抗してアウラを生むことを阻止しようといろいろと妨害工作をし、その影響であの大惨事が起きていたのをカイト達が解決したのが第一章。その後数年たって消えたアウラをＣＣ社が蘇らせようとして、ＡＩＤＡという別のネット生命体を変異させてしまい、それにハセヲ達が巻き込まれた事件が第二章。
そして第三章、全人類をリアルデジタライズでネットの世界に誘おうとした計画、イモータルダスクを阻止したのがトキオと今この世界にいる私達……」
「言われたことは頭に入った。でも……」
　知識としては頭に入ったキリトだったが、理解が追いつかない。
（そもそもリアルデジタライズなんて非科学的なものが本当に存在するのか……？）
「まあリアルデジタライズについては実践方法が先に進んじゃって、その理論や仕組みはまだ遅れてる部分があるし、危険な研究ということで禁止にもなって詳しいことは何とも言えないわ。でも、ソウルデジタライズはあなた達がネットに来るために使っているナーヴギアやアミュスフィアにも技術が使われてるのよ」
　確かにソウルデジタライズの話しを聞いた時にはナーヴギアやアミュスフィアとの関係をキリトも考えついていた。
「だけど、それじゃあそのハロルドって学者は何十年以上も前にす

でにフルダイブシステムの理論を作って実践してたってことですか……？」
（ということは茅場はどこかでその情報を得てソウルデジタライズを応用してナーヴギアを作っただけ？）
その考えはキリトの顔に出ていたらしく、イェーツが自分の見解を話してくれた。
「茅場がハロルドやこの世界についてどれだけ情報を持ってたかは知らない。だけど、さっきの説明の中に出てきた番匠屋ファイルにあった通り、ハロルドが作ったブラックボックスは当時世界トップレベルの巨大企業だったＣＣ社きっての天才コンビと言われていた番匠屋淳と天城丈太郎ですら開くことができなかった。だから誰もアウラを複製することはおろかコントロールすることすらできなかった。
でも、茅場晶彦はそのブラックボックスを開くことができ、この世界にアクセスすることができた。
まあつまり、君の尊敬している彼は盗人ではなく本物の天才というわけ」
完全に胸の内を見透かされていたことに少し顔を赤らめたキリトを見て笑ったイェーツはその後直ぐに顔をしかめた。
「まあだからこそ厄介なのよね……」
「そういえば、さっきの説明にカイト似の少女達のことが出てこなかったんですけど……？」
先ほどキリトが見た記録にはトキオのことまでしか載っていなかった。
その質問に、イェーツは溜息をつき肩をすくめる。
「それが、私がアクセスできる情報はここまでなのよ。まあ後は自分で調べなさい」
「いや、調べろったって……」
（まあでも、これだけの情報―（事実かどうかはともかく）を入手できたのは大きいか……）

「それよりも問題なのはキリト、なんであなたが神槍ヴォータンに惹かれたかということ」
確かに、キリトがここへ来た一番の目的はそれだった。
「これは言うか言わないかどうしようかと考えてたんだけど……」
初めて歯切れの悪くなったイェーツだったが、すぐに心を決めたのか語りだす。
「当時のモルガナはアウラを究極ＡＩにしないようにするために歪んで生ませようとしていた。だから、モルガナの力の断片である神槍ヴォータンにもある特性があるの」
ここでイェーツは一旦間を置いて、その後重々しく口を開いた。
「それは心の闇、っていうと中二くさいけど……まあそんな感じのものが深いと反応するようになってるの。これはさっきの説明で見たように、司が彼女のいた状況から心に大きな傷を負っていて、その闇をモルガナは利用していた所からもわかるでしょ？」
確かに詳しくはプライバシーの為か言及されてはいなかったが、司はアウラの誕生を歪めるためにモルガナに利用されていたと言っていた。
「つまり神槍ヴォータンが君に反応したということは君が何かとても大きなものを抱えているからだと思う。それも、すでに化石となり果ててほとんど力を失いかけているはずの槍が当時のように力を発揮するくらい……」
イェーツはそう言って口をつぐんでしまった。
「確かに今まで生きてきた中で色々あったし、俺の心にそういう負の部分があってもおかしいとは思いませんね。まあでももうそんな年じゃないし、闇に飲み込まれてバーサークとかいう展開は勘弁して欲しいな」
キリトがわざとふざけた感じで言うと、イェーツは少し微笑んだ。
「まあ君に限ってそれはないと思いたいけどね。さぁ、今日は疲れでしょう、もう部屋に戻って休むといいわ」
「夜分遅くまでありがとうございました。いつも世話になってばか

りで」
キリトが仰々しく礼を言うと、イェーツの微笑みが苦笑いに変わった。
「それは私がほくとの時の意趣返しかな？」
「それもあるけど、本当に感謝してますよ。それじゃ、お邪魔しました」
キリトが横開きの自動ドアを通って部屋を出たと同時に、イェーツが何か思いついたのか引きとめてきた。
「ああそうだ、キリト、ここに行ってみるといいかもしれない」
そう言ってイェーツは手に持ったカードを投げてよこした。
キリトがメニューで読み取って見ると、そこには痛みの森という場所に行くためのエリアワードが書かれていた。
「痛みの森は一人限定のフィールドだ。もし自分の何が槍を引きつけたのかを知りたかったら行ってみるといい。ただし……」
イェーツは不敵な笑みを浮かべながら続ける。
「覚悟はしておいた方がいいわね……」
扉がしまった後もしばし廊下に佇んでいたキリトは、鉛のように重くなっている体を動かして自分の部屋に向かって歩き出した。

真実の歴史（後書き）

ついに歴史の真実の一端を知ったキリト。
そして次章、キリトの過去と向き合う戦いが始まる。

幕間

そこはほとんど闇しかない空間だ。ただ黒く塗りたくられた視界は長時間そこにいれば精神に異常をきたしてしまうだろう。

そしてその空間にいる唯一人の男、茅場晶彦は闇に身を委ねてゆらゆらと漂っていた。

「イェーツがキリトと認知外空間に入ったということは、真実の歴史の一端を話したか……」

特に感情を含まず呟かれたその言葉は底なしの闇へと呑みこまれていく。

「しかしそれもまた、物語の流れならいたしかたないことだな」

ここでポッと茅場の顔の前に光と共にウィンドウが現れた。闇の中の唯一の光源であるそのウィンドウの光はすがりたくなるように温かく輝いているが、茅場はまったく表情を変えず、いや、むしろ思考を邪魔されたことから苛立ちすら見せながら訪問者に対応した。

「プロテクトを破ってまで何の用だ、イェーツ？」

ウィンドウ越しに映っているイェーツは、椅子に腰かけ手に持ったペンをくるくると回しながら微笑んでいる。

「一応報告しとくのが義理かと思って。キリト君にこのＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄの歴史を語ったけど……まああなたのことだからすでに予測はついてたでしょう？」

「ならわざわざ報告する必要もあるまい」

茅場は少し鬱陶しげそうにウィンドウを閉じようとした。しかしその行動をイェーツはすんでのところで止めた。

「あなたの考察の時間を邪魔したのは悪かったわ。でもこれだけは言わせてもらう。キリト達とは短い付き合いだけど、みんなイイ子達よ。もしあなたが彼らに危害を加えようとするなら……」

イェーツは微笑みを険しく鋭いものに変えて言い放った。

「私達ＴｈｅＷｏｒｌｄの住人はキリト達を全力で手助けする」

「守る、ではなくてか？」
茅場はどうでもいいように尋ねた。
「あの子たちはそこまで弱くない。だから手を貸すだけで充分。それに、あなたが何を考えてるかわからないけど、一応この世界の恩人だし、敵対はしたくないのよね」
険しい表情を和らげて苦笑したイェーツに対し、茅場は珍しく感慨深げに答えた。
「ここＴｈｅＷｏｒｌｄは全てを受け入れる。そして全ての者たちにそれぞれのストーリーを紡がせる」
茅場は歌うように言葉を紡ぎ、その目にはいつもの無機質なものではなくどこか子供っぽい感情が込められていた。
「この世界に来た者達がどのような物語を紡ぎ終えるかは私にもわからない。唯願わくば、それがそのものにとって大切なものになることだな……」
その答えにイェーツは微笑み、そしてウィンドウを閉じた。再び場が漆黒の闇に包まれる。
そして茅場はまた作業に戻った。自分の望むものに近づくために……

ボコッ、ボコボコッ……
電燈が全て消され、薄暗い闇の中大量のカプセルが並べられている。中にいるものが息をしているからか、時折気泡が一つ二つ浮き出ては消えていく。
その中にいる者たちは男や女であり、背が高いものや小柄なもの、耳が長いものや手足が尋常のものではないなど様々なものがいる。
カプセルの外にいるものは皆無で、動いているものはいない。そこの施設は自らがすべきことを無人で淡々と実行している。創造主の願いを成就させる一端を担うために……

ーグランホエール居住区画キリトの部屋ー

「ふぅ……」

キリトはほくと、いや、イェーツと話し終わって部屋に戻った後、すぐにベットへ向かいバサッと倒れこんだ。

「どうするかな……」

（心の闇……なんて本気で考えるのも恥ずかしいようなことで悩むことになるなんてな……）

そう思いながらもメニューを開いてイェーツが教えてくれたエリア、痛みの森を調べてみる。

ざっと見たところ、痛みの森は一人専用のフィールドで、１００層ものダンジョンを攻略していく結構ハードなものだ。しかし１０層ごとに回復、２５層ごとに休憩ポイント（回復＋アイテム屋）があり、時間をかければクリアできる可能性は十分ある。

「ま、アウラからの依頼が終わったら行ってみるか」

キリトはこの時は深く考えずに軽く決めたが、しかし後にこの時の軽い決断をキリトは後悔することになる……

幕間（後書き）

キリトについて、原作ではまだ詳しく書かれていないエピソードがあります。
最終章ではそこに焦点を置いて書いていくつもりです。

そしてもう一つ重要なのが茅場がなぜＴｈｅＷｏｒｌｄにいるのかと、その関係。
これは・ｈａｃｋ／／とのクロスオーバーにすると考えた時に真っ先に思いついたことなので、やっと書けて嬉しいです。

痛みの森　―０１―

―痛みの森、第２３ブロックー　昼頃

「はっ！」

袈裟がけに振り下ろした剣がゴブリンの胴体に吸い込まれていく。刀身がゴブリンの体を通過すると同時に敵のＨＰがごっそり削れる。それを見た後方で控えているゴブリンメイジがすかさず回復呪紋を唱えようとする。

「させるかっ！」

キリトは間髪いれずに左手に持った呪符を投げつける。

ボワッ！

呪符から炎が燃え上がり、敵のメイジの詠唱を中断させる。その隙に目の前の瀕死のゴブリンを叩き伏せ、砕け散るポリゴンの中を突っ切って後方にいるゴブリンメイジに一気に接近する。

「ゴブゴブッ！？」

慌てたゴブリンは逃げようとするが、すでにキリトのスキル射程圏内に入っていた。

「バクリボルバー！」

炎を纏った片手剣スキルがクリーンヒットで決まり、ゴブリンメイジは粉々に砕け散る。その時ちょうど吹いた一陣の風がポリゴンの欠片を空高く運んでいくのを見ながら、キリトは今の戦闘で少し目減りしたＳＰをアイテムで回復しながら息を整え始めた。

「ふぅ……」

久しぶりのソロプレイに感じていたわずかな違和感も今は消え去り、研ぎ澄まされた感覚がキリトの体に戻りつつあった。防具に付与できる素材は全て対ステータス異常にまわしている為、ＳＡＯのソロプレイ時のように麻痺などで動けず死ぬことはないが、その分

純粋な力量による一回のみの命をかけての戦闘をこのダンジョンに入ってから何回も繰り返している。
もちろん、ここでの死が本物の死ではない。それでも……
「ここは一回もやり直しをするのはだめだ……」
キリトは決意の意思を込めた言葉を呟いて、次のブロックへの道へと進む。

同日朝ーグランホエール中央ホールー

「おっしゃぁ！全クエストクリアだ！」
キリト達と多数の騎士団員が集まった中央ホールにクラインパーティーの凱旋の掛け声が響いた。
「やったじゃん、クライン！」
「大活躍だったな、ＨＯＴＡＲＵ！」
「お疲れ、砂三十郎！」
「徹夜で大変だったね、お兄ちゃん」
皆それぞれ最後のクエストを達成したパーティーのメンバーに労いの言葉をかけている。そしてそのざわめきは壇上にカイトが上がってマイクを手にしたことにより収まった。
「それじゃあ、これからクエスト達成組以外の人でアウラからの全依頼達成打ち上げの準備をします。打ち上げは明日やるからみんな張り切ってやってください！」
その宣言にみんな歓声で答え、各々割り振られた作業の為散り散りになっていった。そして中央ホールに残ったのはキリトとカイトだけになった。
カイトは壇上から降り、キリトに静かに話しかける。
「それで、本当に行くんだね……？」

「ああ、わるいな、俺だけ準備に参加できなくて」
いや、別にそれはいいんだけど、と苦笑いするカイト。
「僕は痛みの森には行ったことはないけど、あそこは相当きついらしいよ。肉体面でも、精神面でも……ってまあここはキリト達にとっては仮想世界なわけだから、肉体面って言うのは変か」
「いや、ここは俺にとってもう一つの現実だから、この体も本物だ」
たとえデータでできたポリゴンの集まりといっても、この体（アバター）には俺の意識が宿っている。なら現実のたんぱく質の塊である体と同じようなもんだろ。キリトのその答えにカイトはまた苦笑する。
「そうだね、その答えを持っているからこそ、僕たちは君たちと友達であり仲間になり得たんだと思う。だからキリト……」
カイトは表情を一瞬曇らせたが、すぐに笑顔と共にキリトに手を差し出す。
「絶対明日までには帰ってきてよ」
「もちろん！」
キリトはカイトの手を堅く握った。

「で、キリトくんはどこに行こうとしてるの？」
転送ゲート前まで来たキリトはばったりとアスナとユイに出会った……と、いうより、待ち伏していたようだ。
「ど、どこって……まあちょっと野暮用で……」
慌ててごまかそうとするキリトをアスナはじとーっとした目で睨んだ後、大きく溜息をついて諦めたように話しだした。
「まあ言いたくないんならいいけど、でもちゃんと晩ご飯までには帰ってくるんだよ」
「そうですよ、ちゃんと帰ってこないとダメですからね、パパ！」
「なんか、飲んでよく帰りが遅くなる夫と父親に言うセリフみたいだな、それ……」

キリトが照れ隠しに頭をかきながら苦笑いすると、アスナもちょっと頬を赤く染めながらも言いきった。
「そうよ、キリトくんはいつもフラフラしてるから、ちゃんと言っておかないと」
「パパ、絶対に帰ってこないとダメですよ」
最近のキリトの雰囲気から何か察していたらしいユイがいつものように振る舞いながらも、最後だけ心から心配してくれていることをにじませた言葉を呟いた。
「大丈夫、なんだよね……？」
アスナも少し心配そうに尋ねる。不安げに揺れる瞳をしたアスナに、キリトが返せる答えは唯一つ……
「もちろん！今日の晩飯楽しみにしてるから、できるだけ早く帰るよ」
その答えにアスナとユイはもう何も言うまいと頷いた。
「それじゃ、ちょっと行ってくる」
「いってらっしゃい」
「がんばってください、パパ！」
キリトは青いリングに包まれて、転送ゲートからルートタウンへと転送していった。

ー痛みの森、第５０ブロックー

痛みの森は遺跡を模したダンジョンだ。遥か太古の昔、人に堕ちる前のエルフ達が築き上げた文明。謎の物質で造られた壁や緻密な装飾からエルフ達がいかに栄えたかを物語っている。しかし今では栄華の残り香のように苔やツタに覆われた廃墟が広がるのみだ。その場所を妖精の国から来たキリトが訪れるのは偶然か、はたまた何

かの因果か……

そんなことを頭の片隅で考えながらも、キリトはこの１００ブロックという苦行のような迷宮区を、残り半分のところまで踏破していた。

「それにしても、意外と普通だな……？」

精神面できついとイェーツやカイトから脅されていたので、いったいどんなことが起こるかと緊張半分興味半分でいたキリトだったが、今のところ通常より２、３割くらい強いモンスターが出てきたくらいだ。休憩所やアイテム屋もあり、アイテムやＳＰが無くなってジリ貧になることもない。これでは普通のクエストだ。

そんなことをキリトが考えているうちに、そのブロックの出口までたどり着いていた。痛みの森ではブロックごとに中ボス的存在がおり、それを倒さないと次のブロックに進むことはできない。

立ちはだかるボス達はそこそこ強かったが、キリトが今まで戦ったことのある敵ばかりで傾向は掴んでおり、対策はきっちり立てられてはっきり言って苦にはならなかった。

しかし、ここ５０ブロック目は今までとは少しばかり様子が違った。

「だれか、もう戦ってる？」

そう、すでに青い筒状のバトルフィールドが展開され、中から戦闘音が微かに聞こえてくる。青い筒に触れれば戦闘に乱入することができる。

（ここは様子を見るべきか……？）

一瞬迷ったが、とりあえず中の様子だけでも見てみるか……と、キリトはギャラリーモードでモニターから中を覗いてみた。すると、そこにはあり得ない姿があった。

「……サ、チ……？」

そう、そこにはＳＡＯで月夜の黒猫団にいたサチの姿があった。

さらに戦っている相手は……

「他の黒猫団のメンバー……？」

そしてサチが剣の一撃を派手に喰らいＨＰを半減させたのを見た瞬間、キリトはこの状況が何を意味するかを考える間もなく乱入していた。

「サチッ！」

キリトはバトルフィールド内に入ると同時に味方するパーティーをサチに選択、アイテムを使いサチのＨＰを回復すると同時に黒猫団のメンバーとサチの間に陣取り、剣を構える。

「……キ、キリト……？キリトなの！？」

サチは驚きと安堵の声を上げると同時に、泣きそうな顔になる。

「キリト……キリトぉ……」

「サチ、いったい何がどうなってるんだ！？」

キリトはその場にへたり込んでしまったサチに背を向けながら、この状況が何なのかを慌ただしく尋ねる。

「わかんない、わかんないよ……きづいたらここにいて、それであてもなく歩いてたら……みんなが……」

そう言ってまたぐすんっ……と涙ぐむ。

「みんな、俺たちのことがわかんないのかよ……？」

キリトが尋ねるでもなく呟くが、相手には全く通じない。団長以下メンバー全員が白目を剥き、口をだらんと開けて、見た目だけでも到底まともな状態には見えない。

（まあ、それを言ったらこの状況もありえないっちゃありえないけどさぁ……）

しかし、そんな風に悠長に考えている間にも、敵はじりじりとキリトとサチに近づく。

（敵？俺はまたみんなを殺すのか……？しかも、今度は直接この手で……？）

その考えがキリトの思考と体を一瞬停止させ、そしてその致命的

な隙を敵は見逃さなかった。
「ガァァァァァァァッ！」
口から涎をまき散らしながら全員が一斉にキリトへと飛び掛る。見た目のバーサーク状態に反して、そのフォーメーションは精密で避けようが防ごうが絶対に数人の攻撃をまともに喰らうようになっている。
キリトは一瞬の判断で剣を変え、捨て身の覚悟で攻撃をくらいなんとかカウンターで新しく装備した剣に付与された睡眠効果で眠らせようとした……が……
「な……！？」
（体が、動かない……！？いや、装備は変えられたんだから、麻痺じゃない……なら、なんで？）
キリトは自問自答しながらも意識の隅ではなんとなく答えは出ていた。それは、目の前に自分のせいで死んだみんなを目にした時からなんとなく感じていた。
（ああ、そうか……俺は、ここで、殺されたいのか……）
一度死なせてしまった仲間をまた殺すことは例えこれが幻想だとしても自分にはできない……それを悟った瞬間、キリトの手から剣が滑り落ち、地面にからんっ……という寂しい音を立てた。
そして黒猫団のみんなの武器がキリトの目の前まで迫ったその瞬間！
グサグサグサッ！
キリトの目に映ったのは、自分を庇って両手を広げ全ての攻撃を受けたサチの姿だった。
「キリト……」
サチのＨＰゲージが一気にイエローゾーンからレッドゾーン、そしてＨＰバーが弾け飛ぶ。何か言いたげな瞳をしたサチが次の言葉を発する暇もなく、彼女の体はポリゴンの欠片となって砕け散った。
「……」
団長達はサチが消えたのに、なんの感情も現さずすかさずキリト

の方に武器を向ける。キリトはその動きをスローモーションのように見ながら、やけに頭がクリアになっていくのと同時に思考が閉じていくという不可思議な感覚に囚われて……

――――――――――――――――――――――――――――

そして、次にキリトの意識が明瞭になった時、目の前に黒猫団のメンバーのアバターが倒れ伏し、ポリゴンの欠片になって霧散している最中だった。

「……え？」

キリトはわけがわからずみんなのところに駆け寄ろうとするが、仰向けに倒れていた団長の自分を見る目と発した言葉に動けなくなった。

「このビーターが……」

そのかつてと同じように呟かれた言葉を最後に、団長達は完全に砕け散る。

そして、その場には初めから何もなかったかのように、時折ふく風とそれに揺らされた木の葉と蔦の擦れる音のみが響く静寂が訪れた……

痛みの森　―０２―

―痛みの森、第７５ブロック―

スドーォン……

ボスモンスターが倒れ、最後の休憩所（アイテム屋と回復ポイント）がアクティブになる。

キリトは機械的に剣を背中の鞘にしまい、休憩所でレッドゾーンまで削れているＨＰとＳＰを回復し、少なくなっていたアイテムを上限まで補充した後、近くにあった壁に寄りかかり、座り込みそうになったが何とかこらえた。

（今座ったら、絶対もう立ちあがれない……）

「はぁ、はぁ……」

ＨＰとＳＰバーはフルになったが、それでも息が切れ、体中から嫌な汗が流れては消えていく。

５０ブロックから１０ブロックごとに敵……というよりキリトの思い出したくない記憶から作りだされたらしい人物が立ちふさがってきた。第６０ブロックでは俺が初めて自分の意志で殺した血盟騎士団に所属していたクラディール、第７０ブロックではキリトが討伐戦で恐怖に駆られて殺したラフ・コフのメンバー。

「やっぱダメだな、俺……」

壁に寄りかかりながら、シノンに以前いった言葉がキリトの脳裏に蘇る。

『俺は俺が殺したあいつらのことから目を背けたり忘れたりしちゃいけない。向き合って背負って行かなくちゃいけないんだ……』

（何が向き合うだ……何が背負うだ……！）

言葉では、気持ちでは決意していたはずだった。しかし、相手と実際に対峙したら自分はただ恐怖し、思考をふさぎ、倒すことしか

できなかった……。
シノンは銃への恐怖をなんとかするためにＧＧＯをプレイして、見事克服することができた。アスナも長年険悪だった母親との関係をＡＬＯを切っ掛けとして改善することができた。
（俺は……俺はどうすればいいんだ……？）
その誰も答えてくれない問が頭の中でグルグル渦巻き消えない中、キリトは鉛のように重く感じる体を動かして次のブロックへと向かった。

ー第８０ブロックー

遺跡の中を爽やかな風が吹き抜けていく。上からは多い茂る木の枝の隙間から木漏れ日が差し込み、暖かな雰囲気をその場に作り出している。たぶん通常だったらそういう感覚が俺の頭へと流し込まれ、ほっとした気持ちのいい気分になるんだろう。しかし今、キリトはそのすべてがまったく感じられない。彼の目の前に、ある人物が立ちふさがっているから……
その人は、白髪交じりの黒髪に背は中肉中背、年はかなりの高齢だ。にもかかわらず、姿勢はしっかりして剣道着に身を包んだその体からは厳格で真っ直ぐな雰囲気がキリトを圧迫する。
「じいちゃん……」
キリトはその人、自分の祖父を昔呼んでいたように呟いた。

ーーー

「きゃっ！？」
和人は小さな体を道場の冷たい床にしたたかに打ち付け、痛みとともに涙がこみ上げてきそうになる。
「女みたいな声を出すな、この馬鹿者！」
竹刀を持ってキリトを見下している人、和人の祖父は厳しく一括して、早く立つように怒鳴りつける。
和人はふらふらしながらもなんとか立ち上がり、また竹刀を正面に構えた。
「よしっ、もう一度だ！」
祖父が和人の前に立ち、竹刀を丁度俺が打てる位置に構えた。その竹刀に向かって和人はまた竹刀を打ち付ける。かれこれこの練習をインターバルを挟ん1時間は続けている。１０歳の体ではかなり厳しい。
そう、この記憶はキリト、桐ケ谷和人が１０歳の時のものだ。和人はまだこのときは剣道を続けていた。仲が悪いわけではないがどことなく自分を避けてる節がある祖父と唯一接点を持てるのが剣道だった。
なので、あまり好きではなかったが、キリトはこうしてよく祖父に稽古をつけてもらっていた。
「ああ、だめだだめだ……もういい、今日はここまでだ……」
祖父は竹刀を下し、ため息を一つついた。そして、その後の和人の運命を決定づける一言を呟いた。
「やはりあやつの息子だからか……」
和人が疲れた顔にきょとんっとした表情を浮かべると、祖父ははっとした表情になり、さっさとシャワーを浴びて着替えるようにと言い残して道場に一礼して去って行ってしまった。

和人がこの違和感を初めて持ったのはいつだったか彼自身はっきりとわかっていない。物心ついた時からかもしれないし、もう少し後かもしれない。

しかし、確かに言えるのは前々から持っていたものであること。母と仕事でよく出張に行っている父、そして妹の直葉と祖父……この家族の中で自分だけが異物である感覚。

祖父のあの言葉がきっかけでこの感覚が疑念から確信に変わった。祖父は家族のことをあやつなんて呼び方をしたことはなかった。そのことから、和人は前々から考えていたことを試してみることにした。

和人は小さい頃から母の影響でパソコンに興味を持ち、性に合っていたのかすぐに自分でパソコンを組み上げられるまでに精通するようになった。そして、ある時ネットの情報から住基ネットで自分の戸籍を調べる方法を知った。

本当はもっと前に調べることはできたが、彼はなんとなく躊躇っていた。今のキリトにはその理由がわかる。そう、恐れていたのだ。本当のことを知るのを……。

しかし、祖父の言葉をきっかけに調べてみた。この時点で和人は半分軽い気持ちだった。疑念はあったものの、まさかそれが本当だとはあまり考えられなかったから……。

そして実際調べてみると、そこには書き換えられたような不自然な点があった。

その後の展開はあまり多く語ることはない。和人が両親……義父と義母にかまをかけてみると、見事に引っ掛かった。二人とも和人が自力で調べてことに最初は驚いていたが、観念したのかすぐに説明をした。

和人の父と母は大学院時代に知り合い、在学中に母さんが彼を身籠ったことで結婚しようとするが祖父が猛烈に反対。それを押し切って駆け落ち同然で家を出て、自分が生まれた。しかし和人が1歳の時に交通事故で二人とも死に、赤ん坊だった和人は母の妹である

今の両親に引き取られた。
和人はその説明を淡々と聞きながら、特に何の感慨も浮かばず、ただ事実を受け入れた。
真実を知った後、祖父とも剣道をやめることで完璧に疎遠になった和人は、結局亡くなるまでまともに話しをできなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

そして、その祖父が……キリトにとって恐怖と自分が家族にとって異物であることを認識させられた存在である祖父が、目の前に立ちふさがるのは当然なのかもしれない。
たぶん、キリトにとってのトラウマ……心の傷ということで言えば一番古く深いものだ。
だが、今回現れた祖父には不可解な点があった。今まで現れた相手は自分の意識が戦う前と最中はなく、倒した後に彼らが実際に死んだ時と同じようにキリトを憎み呪うセリフを吐いて消えていった。
しかし、今キリトの目の前にいる彼の祖父にはきちんと意思が宿っているように見える。そしてその考えは祖父が彼に話しかけてきたことで証明された。
祖父は手に持っていた竹刀を地面に突き刺し、にやりと……そう、キリトがほとんど見たことのない笑顔で語りかけてきた。
「ひさしぶりだな、和人……いや、この世界ではキリトか？」
まるで生前の祖父が目の前にいるみたいだと、キリトが錯覚するほどに、精巧なまがい物……そのはずだった。
しかし、キリトの知っている祖父と少し様子が違った。彼の祖父は、キリト、いや、和人に微笑みけることなどほとんどなかった。
「まあお前と直葉（すぐは）の記憶、それと様々な電子記録に残っているわしの事柄を参考に作りだしたそうだから、これくらいの再現度は当然

じゃろう」
（俺の考えが読まれた……？）
キリトは警戒心を露わにする。
「お前は昔から読みやすい顔をしとるからな。それより和人、わしはお前に言いたいことがあって化けて出てきた」
彼の祖父が皺だらけの顔に苦笑いを浮かべる。これも、キリトが今まで見たことのない表情だ。
「お、驚いてるか？まあ、お前の前ではあまり笑わなかったからな……っと、そんなことはどうでもいい」
老人は道着の袂から封筒を取り出す。
「今のわしは本物のわしではない。しかし、この手紙は生前のわしがしたためたものだ。ここに、わしがお前が大きくなった時に生きていなかったら伝えたいことが書かれている。ちなみになぜそれがここにあるかは企業秘密だ」
好々爺といった感じになっているキリトの祖父は、悪戯っぽくウィンクすると、また手紙を袂にしまった。
「まあ、本当はこの手紙を渡してわしは消えようかと思っておったんだが……」
祖父は地面に突き刺してあった竹刀を掴み構えた。
「ここでは相当な剣士として名を馳せとるんだろ、和人？わしに一撃でも喰らわすことができたら、この手紙を読ませてやろう」
（な、ちょっ、何がどうなって……？）
キリトがこの予想外の話しにどう反応していいかわからず混乱していると、祖父は不敵に笑って言い放った。
「キリトッ！お前の進んだ道の成果をわしに見せてみろ！」
ドンと構えて、来いという仕草をする祖父に、キリトは痛みの森に来てから最大の疑問符を頭の中で渦巻かせながら、昔のように言われるがままに剣を構えて駆け出していた。

「メェーーーーンッ！」
祖父の上段からの一撃が稲妻のように鋭く素早く振り下ろされる。キリトはそれを左手に持った剣で受け流そうとして……完全に力負けしそうになり右手に持った剣を加えることで、なんとか弾き返すことができた。
（強い……！）
フルダイブシステムは脳の反応速度に加え、想像力が問われる。例えば、剣を振るにしてもどのように振れば効果的であるかを知っているのといないのとでは、イメージを作りこの世界でその動きを再現しようとするときの威力と完成度は段違いだ。さらに、それが現実で身に沁みこんでいるものならなおさらいい。剣道を続けている直葉がＡＬＯで上位プレイヤーの一角を成しているのがいい例だ。
さらに、この世界では現実の肉体と関係なしに力をふるうことができる。今再現されているキリトの祖父の姿は年をとっているものだが、身体能力はＴｈｅＷｏｒｌｄに合わされている。
そして、祖父の何十年もの研鑽された技術がそれを存分に使うことができる肉体と合わさると……
「反則だろ……これは！？」
キリトは何とか息を整えようと後ろに飛び下がって距離を取ろうとするのだが……
「ふんっ！あまいわぁ！」
剣道のすり足でまさに滑るように間合いを瞬時に詰め、また剣戟の嵐が降り注ぐ。
（まずい……これじゃジリ貧だ……！）
キリトは何とか防ぎながらも反撃の糸口を探そうと必死に相手の攻撃に集中する。どんどん意識が研ぎ澄まされ、広がっていく懐かしい感じ、そう、これは茅場と最後の戦いをした時と同じもの。
しかし、今はあの時のように切羽詰まった感じではない。むしろ、楽しかった。

キリトが小さい頃練習をつけて貰っていた時の祖父はいつもどこかつらそうで、悲しそうで、怒っているわけではないけど少し苛立っている感じしかしなかった。
しかし今、キリトは祖父と全力で戦っている。そして祖父の顔はどこか嬉しげで、満ち足りた表情だ。
そんなことを感じ考えながらも、キリトの戦闘に向いている部分の意識が何度も切り結ぶ中、祖父の癖を見つけ出す。剣道では珍しい二刀流を相手にしていることに起因するのかもしれないが、キリトが左手の剣を袈裟がけに振り下ろすと、ほぼ必ず少し後ろに下がって紙一重で避け、その後の俺の右手の剣の一撃を竹刀で弾きとばし、無防備になった腹に肘鉄などを喰らわせてくる。
キリトはさりげなくそのような状況になるようにして何回か確かめ、それが正しいと確信を得た。
（よし……次で決める！）
キリトは大きく後ろに飛び退り、そして今までと同じようにこちらに向かってくる祖父に対して今度は逆に一気に踏み込んで距離を詰める。
「むっ！？」
祖父は一瞬キリトの行動をいぶかしむが、すぐに不敵な笑みお浮かべ、かかってこいという表情をする。
キリトは左手の剣を振りかぶり……そして祖父の道着を浅く切り裂いた。
「ほぉ……」
完璧に紙一重で見切っていたはずの剣先を見誤ったことに一瞬驚いた表情を見せた祖父だったが、すぐにキリトの剣の持ち方に気付いた。
そう、キリトは柄のぎりぎり先端部分を持ってリーチを少し長くしたのだ。
「しかし、今のふ抜けたのは一撃とは認められんぞ！」
祖父は言いながらキリトの第二撃である右手の剣が振り下ろされ

たのを余裕で弾こうとして……そしてその瞬間、その目は切り上げられている左手の剣に気付き驚愕に大きく開かれた。
「なっ！蹴りあげただと！？」
そう、キリトは振り下ろした左手に持った剣を思いっきり蹴り上げ、上下からの攻撃を繰り出したのだ。もしも全力で振り下ろされた剣なら、例え現実の肉体ではなかったとしても蹴りあげ切る前にキリトの足は持たなかっただろう。
だが、キリトは柄の先を持って振り下ろした為に力がほとんど籠っていない。その力の籠っていない剣を怪しまれないようにするためにリーチを長くすることを目的としたように見せたのだった。
そしてその二筋の剣筋が祖父の体に吸い込まれていき……
「みごとだ……」
クリティカルヒットのエフェクトが祖父を包んだ。

「それじゃあ、わしはそろそろ行くとするかの。直葉……いや、この世界ではリーファか、リーファによろしくの」
キリトの一撃が決まった後、手紙を渡した祖父は体からポリゴンの欠片を煌めかせながら消えかけていた。しかしその消えかけの体で立っている祖父はいつも見ていた厳格な雰囲気の中に、優しさが混じっているようにキリトは感じた。
「お、その前に……和人、お前はこの世界で色々あったみたいじゃが……」
その世界というのがここＴＨｅＷｏｒｌｄだけではなく、ＳＡＯとＡＬＯ、ＧＧＯも含んだ意味だというのをキリトは察する。
「まあ、なんだ……わしは偽物なわけだが……とにかく、本物のわしでも思うだろうことを言っておく」
その表情、少し照れたような顔も、キリトがこの世界で初めて見たものだった。

「わしはいつでもお前の味方だ……」
そう言い残し、キリトの祖父は完全に消えた。

痛みの森　―０２―（後書き）

キリトの祖父のことはすべて当筆者の想像上のもので、原作には剣道をやめて疎遠になったとしか書かれていません。
ですが、ユウキが最後にアスナに言った言葉、キリトの闇についての件から、いつかキリトの過去編が出てくるかなと思い、先んじて妄想してみました。

ボーナスステージ　ー実験場ー

ー認知外空間某所ー

「さて、これからどのような行動をとるかな……」

真っ白な空間の中、ぽつんと置かれているオフィスチェアに座る茅場は、目の前に展開されている多数のモニターの内の一つを見て呟いた。その画面の中央にはキリトの姿が映し出されている。

「このまま祖父からの手紙を読んで号泣、その後痛みの森を最後まで突破してクリア、仲間のところに戻ってめでたく現実に帰還というのが王道かな……？」

エンドロールに『主演：桐ケ谷和人、監督：茅場明彦』とでもつけるか……などと考えながら、誰に言うでもない茅場の言葉が紡がれては何もない空間に吸い込まれていく。しかし、その特に何の感情も含まない声に次の瞬間いぶかしむような響きが含まれた。

「少し様子がおかしいな……？」

モニターにアップで映し出されているキリトは封筒を持ったままピクリとも動かない。先ほどまで祖父との再会を喜んでいたのは観測していたデータ上でも確認されている。しかし今のキリトからは何も読みとれない……どころか、ふと顔を上げたかと思うと、見えるはず……いや、存在すらしないが、もしカメラあるとしたらある場所、つまり、茅場の方を睨んだ。

そしてキリトは封筒を投げ捨てると、徐にメニューウィンドウを開き、一本のナイフを取り出す。

「あれは、メトロノームのナイフか……？なるほどな……シックザールも中々面白い伏線を作ってくれる」

茅場が呟いている間にも、キリトはもしカメラが実在するならあるだろう場所に向かってナイフを投げつけた。そしてナイフが空中で何かに当たり弾き飛ばされると同時に、大人一人が通れるくらい

の真っ黒な穴がぽっかりと空く。そして茅場の脇に同じような穴が現れ始める。
「ふむ……別に痛みの森を飛ばしてここに来るのもそれはそれでありだが……。まあ、王道のつまらない展開にしなかった礼は用意しなければな……」
茅場はそう呟くと、メニューウィンドウが目の前に自動的に現れ、そして何かのプログラムが打ち込まれる。すると、茅場の横に現れかけていた穴が瞬く間に消えていった。
「1名様ボーナスステージにご招待だ」
言葉づかいとは裏腹にいつもの淡々とした調子で呟いた茅場は、モニターとメニューウィンドウを閉じ、またキリトの行動を観察し始めた。

―？？？―

「……」
メトロノームのナイフが作った転送ポイントを通過してキリトが出たところは大規模な研究施設のような場所だった。無人なのか人の気配はせず、機械が出すブーンッという低い音だけがわずかに響いている。灯りがないため暗くてよく見えないが、いくつもの大きなカプセルが標本のようにずらりと並べられているのがわかる。
少し歩くと、キリトは近くに端末があるのを見つけ、それを起動させた。
「一体、ここはなんなんだ……？」
端末のモニターが放つ明かりでぼんやりと顔を照らされながら、目の前に展開されたウィンド上の多数の項目に目を走らせる。とりあえずその中の、カテゴリーというところを選択する。
「剣士……これは名簿……？」

剣士と言う項目に目を引かれ開いたキリトがそれをさらに選択すると、一覧が現れそこには以下のような名前が書かれていた。
シャナ：ｓｅｘ－Ｆ、ｗｅａｐｏｎ－大太刀型宝具『贄殿遮那』、ｓｋｉｌｌ＆ａｂｉｌｉｔｙ－剣術、自在法、ｓｔｏｒｙ－灼眼のシャナ
火乃香：ｓｅｘ－Ｆ、ｗｅａｐｏｎ－刀、ｓｋｉｌｌ＆ａｂｉｌｉｔｙ－抜刀術、天宙眼一（特）、ｓｔｏｒｙ－ザ・サード
緋村剣心：ｓｅｘ－Ｍ、ｗｅａｐｏｎ－逆刃刀、ｓｋｉｌｌ＆ａｂｉｌｉｔｙ－抜刀術、飛天御剣流、ｓｔｏｒｙ－るろうに剣心
平賀サイト：ｓｅｘ－Ｍ、ｗｅａｐｏｎ－インテリジェンスソード（デルフリンガー）、ｓｋｉｌｌ＆ａｂｉｌｉｔｙ－使い魔（ガンダールヴ）、ｓｔｏｒｙ－ゼロの使い魔
ミフネ：ｓｅｘ－Ｍ、ｗｅａｐｏｎ－刀一（千本）、ｓｋｉｌｌ＆ａｂｉｌｉｔｙ－無限一刀流、ｓｔｏｒｙ－ソウルイーター
シェルティス・マグナ・イール：ｓｅｘ－Ｍ、ｗｅｐｏｎ－双剣、ｓｕｋｉｌｌ＆ａｂｉｌｉｔｙ－剣術、魔笛、ｓｔｏｒｙ－氷結鏡界のエデン
こんな感じで名前がずらりと並んでいる。さらに名前を押すと、詳しいプロフィールなどが表示されていく。
「……物語（フィクション）の登場人物のデータか？」
いや、さらに下にスクロールしていくと他にも宮本武蔵や沖田総司、アーサー王などの名前もあることから、どうやらフィクションノンフィクションを問わず書かれているらしい。
「……ん、これは……？」
一旦そのページを閉じて最初のメニュー画面に戻ると、先ほどは気付かなかった項目が点滅しているのが目に入り、試しに開けてみる。
「Ｅｘｐｅｒｉｅｎｃｅ－２０１１１４５１４１４１９９１１２５１５２１１１５２０５９１９５１４（Ｃａｓｅ－Ｋｉｒｉｔｏ）……実験……？一体何の……それに、俺の名前？」

キリトは数える気さえ起きないほどずらりと並んだ一覧の中の一つを試しに開いてみた。
すると……
「な、なんだ……って、わぁーーーーー！？」
キリトは瞬く間にウィンドウの中に引きずり込まれ、そして後にはずらりと並ぶカプセルと無人の端末だけが残された。

―アンダーワールド・人界―

ゴブリン達等五氏族が住む暗黒界に囲まれるように存在する人間が住む人界、そこは以前は人間と五氏族間で絶え間ない争いが続いていたが、ある青年とその仲間たちの活躍により、長きに渡った戦争は終結。今では暗黒界とも和平を結んでおり、比較的平和な日々が続いている……
「ぽりぽり、ぽりぽり……ごくごく……」
そんな映画のようなナレーションの文を目の前に広がる世界の光景と一緒に見ながら、キリトはリクライニングシートに座ってくつろいでいた。

―θ隠されし　禁断の　意馬心猿　『糖蜜の館シフ・ベルグ』―

ロストグラウンドの内のひとつ、糖蜜の館シフ・ベルグには膨大な量の書物が収められている。そしてそこには劇場も併設されている。この劇場も例に漏れず、普通の劇場や映画館と同じように中は

明かりが消えて薄暗くなっている。
　キリトはその中世のオペラ劇場のような様式をした建物の中、まったくその場の雰囲気と合っていないコーラを片手にポップコーンを食いながらリクライニングシートに座って眼下で繰り広げられている戦闘を見物していた。いや、させられていた……？
　疑問符がつくのは、キリトがいつ、どのように、そしていったいなぜ自分がこうしているのか全くもって見当がつかないからだった。しかも、このような不可解な状況に叩き込まれながらも、キリトの無意識のところでは状況を受け入れていた。意識的には違和感があるのに、無意識では受け入れていて、頭の中で歯車が噛み合っていない状態だった。
　しかし、そこはキリト。思考がこんがりながらも、持ち前の楽天さでそこそこリラックスして座っていたのだが……
「隣、いい？」
　一応警戒していたのに全く気配のしなかった方から急に話しかけられたキリトは、少し驚いて横を向くと、短い黒枝のようなものを持った小柄な猫型ＰＣがちょこんと立っていた。
「ん、まあ別にいいけど」
　キリトは驚いたことなどなかったように、そして今置かれている状況に困惑しているのを悟られないようにポーカーフェイスで、どうぞご自由にという風に身振りをすると、そのネコ型ＰＣはキリトの隣の椅子にひょいっと飛び乗って座った。
「キャラメル味だけど、食べる？」
「おっ、サンキュ。じゃあ、こっちの塩味もどうぞ」
　眼下に広がる世界の光景を見ながらお互いにポップコーンを交換してポリポリと食べ続けること数十秒、キリトは痺れを切らして尋ねた。
「で、キミは誰なわけ？」
　キリトがいつでも動けるように、しかしあまり相手を威圧しないように軽い感じで聞く。

「ボク？ボクはハーミット。職業は……カヤバの助手かな。認知外空間にあるカヤバの実験場の手伝いをしてるよ。キミはキリトでいいんだよね？」
「ああ、そうだけど……キミは、ハーミットは茅場の助手ってことは俺に何か伝えに来たんじゃないのか？」
言葉を慎重に選びながら尋ねようと思ってもつい本題に一直線に行ってしまいそうになるのを抑えながら、キリトは苦笑と共に尋ねた。
「まあそうなんだけど……それより今ボクかなり暇だし、おしゃべりに付き合ってよ。ついでにこの世界の情報も教えるからさ。とりあえず、ボクのことについてかな……」
キリトが肯定する間もなくさっさとメニューウィンドウを開いて眼下に映し出されていた世界の情景を消す。天井の暖色系の明かりがついてあたりを照らすと、ハーミットの毛並みがミアのように紫色なのがわかった。
「それじゃ、始まるよ」
その言葉と同時にまたあたりがまた暗くなり、キリトの眼下に、新たにどこかの現実の世界の風景が現れた。

―３０分後―

「なるほど、ソウルジェイルに囚えている囚人の脳を利用した量子型コンピューターの作成か……やっぱりぶっとんでるな、このゲーム……」
キリトが驚きを通り越して呆れていると、ハーミットも同意して頷いた。
「このゲームはゲームであってゲームでないを地でいってるし……まあそのおかげで現実のボクは蘇生できたみたいだけど」

そう、今キリトが見てきたシーンの中でハーミットの元になった少年がサクヤという少女から無事移植してもらい、さらに冷凍睡眠時に起こる記憶障害もＴｈｅＷｏｒｌｄに保存しておいたハーミットの記憶で補填することにより何とか回復していた。
回想の中にはサクヤのリアルの少女とハーミットのリアルの少年が病院で抱き合って喜んでいるシーンもあった。そのとき、自分の隣に座っていたハーミットの表情は嬉しそうで、でも寂しそうななんとも言えない複雑な表情をしていたのをキリトは見ていた。
「でも、なんでＣｈｒｏｎｉｃｌｅ　ｏｆ　Ａｕｒａでハーミット達のことが書かれていなかったんだ？アウラはこの世界の神なわけだから、すべてを知ってなくちゃおかしいだろ？」
キリトがもっともな疑問を口にした。
「トキオ達がアウラを救ったとき、彼女は記憶と力を失っちゃったんだ。アカシャ盤は残ったからそれ以前のデータはあるけど、その後の記憶や記録は外部からのものしかなくて、サクヤ達の記録もまだリカバリー中で補填できてないんだ」
（だから、別のカイト似の少女のことも出てこなかったってことか……）
どうやらカイト似の少女が活躍したのはハーミット達の事件以降のことらしいので、今回の映画のように編集された（ＢＧＭやＳＥまで派手についていた）回想にも出てこなかった。
「で、ここはいったい何なんだ？実験場とか呼んでたけど？」
「文字どおりだよ。この世界にはたくさん実験場があってここはその内の一つ。で、ここでは主に様々なシュミレーションをやってるんだ」
「シュミレーション？」
「そう。例えば、もしあの物語の登場人物が別の物語の登場人物と戦ったらどうなるとか、別の時代を生きたスポーツ選手が競ったらどうなるとかそんなことをね。キリトが見てたのは……君を主役にしたとある世界の話しだね。まあ、ここには様々なプレイヤー達の

情報がザ・シードに組み込まれたカーディナルから送られてくるから、そういうデータを運用した実験も結構あるよ」
ログを見ながらハーミットが説明してくれているのを聞き終えたキリトは最後の質問をした。
「じゃあ、最後に茅場の居場所を教えてくれ」
その質問に対してハーミットが腕を組んで顔をうつむかせてうーんっと唸っているのをキリトが神妙な面持ちで待っていると、ハーミットはいきなり顔をバッと上げ、あっさり
「いいよ」
という言葉と共にキリトに手のひらくらいのザイズのカードを手渡してきた。
「それをメニューウィンドウを開く要領で横にさっと撫でれば、茅場のところに転送されるよ」
「そっか、ありがとな」
キリトが短く礼を言うと、ハーミットは別に……と、呟きながら椅子から飛び降りた。
「それじゃ、またどこかであえたら」
キリトがその言葉に答える暇もなく、ハーミットは青いリングに包まれて転送していってしまった。
「……」
キリトはその後少し肘を膝の上に乗せて考える人のようなポーズをとっていたが、意を決して立ち上がり、カードを横にすっと撫でた。
ブーーン
キリトの体の周りに青いリングが現れ、瞬時に転送されていった。

ボーナスステージ　ー実験場ー（後書き）

キリトがシフ・ベルグで見ていた世界は川原礫先生が運営されているサイト、ＷｏｒｄＧｅａｒ掲載されている外伝、『月の揺りかご』（未完）のものです。
この外伝を読んだ時、いくつかの状況が頭の中に浮かびましたが、今作ではキリトを模倣したＡＩを主人公とした実験世界という設定にしています。

The Seed of All Origin ―全ての始まりの種―

視界から転送中に流れる幾何学模様の渦が消えると、キリトの目の前には真っ白な、見渡す限りどこまでも真っ白い空間が広がっていた。ところどころに意味があるようでなさそうな、ガラクタのようで大切そうなものが疎らに置かれていなければどこが地面なのか、上か下なのか分からなくなりそうな場所。

そしてキリトが転送した場所のすぐ近くに、というか目の前に茅場がオフィスチェアに座っていた。ただし、茅場はキリトに背を向けてモニターに向かって何か話しているようで、まだ彼が転送してきたのには気づいていないらしい。

その証拠に……

「何、もうキリトは転送済み？もう少し待たせておけと言っただろうが！まだ準備は終わっていないというのに……」

という会話を何やらガサゴソ準備をしながらモニターに映っているハーミットとしていたからだ。

キリトが話しかけるべきかどうかちょっと迷っていると、キリトの姿に気づいたハーミットがモニターの中で悪戯っぽく笑っているのに気が付いた茅場が椅子を回転させて体ごと後ろを振り返えり……キリトの口は顎が外れんばかりにあんぐりと開いた。

「久しぶりだな、キリト君。ようこそ、世界の狭間に」

先ほどまでの慌てようが嘘のようになりを潜めていつもの無機質な表情で淡々と歓迎の言葉を口にした茅場……まあそれは別におかしくない。ただ……

「かっ、茅場！？何だ、その恰好……？」

そう、茅場の恰好がなんというか昭和の悪役のような頭に巨大な角付の兜、髑髏を象った禍々しい造形をした鎧、その上から漆黒のマントをはおい、そして膝の上には丸々太った猫を乗せているといういでたちだったのだ。

「っと、これではなかった……」
茅場は少し慌てたようにそそくさとメニューウィンドウを開きさっと操作すると、旧アインクラッド崩壊間際に見せたリアルの白衣姿になった。
「これでよし……それでは改めて、ようこそ、世界の狭間に！」
仕切り直しとばかりに、珍しく少し語彙を強め、両手を広げて高らかに言った。
「……とりあえずいろいろ聞きたいことがあったわけだけど、まずさっきの服装がなんなのか教えてくれ……」
キリトがどっと疲れが出たような顔をしながら尋ねると、茅場はしれっとそれに答える。
「あれは１００層まで昇り詰めたプレイヤーと対峙する時着ようと思っていた服の案のうちの一つだ。他にも大魔王風、策士風など色々と取り揃えていたのだが……まあ君のおかげで日の目を見ることはなかったがな」
最後のほうだけ若干皮肉を込めて話し終えた茅場は、そんなことはどうでもいいというように手を振ると、椅子から立ち上がりキリトをじっと見る。
「それよりこちらからも聞きたいことがある。まず最初に、この件にシックザールがどの程度からんでいるのかと、君がどの程度の情報を知らされているかだ」
茅場の全てを見透かしているような物言いに、キリトは少し考えを巡らせ、そして数少ない持ち札を晒すことにした。
「フリューゲルからはあんたの狙いを探るよう依頼されて、その代りに色々とアイテムやプロテクトを融通してもらっただけだ。もっとも、あいつらのことだから俺のことをトレースしてるだろうし、ここの場所が特定されるのも時間の問題だと思うけどな……」
「なるほど……彼らも舞台に立つ役者として場を大いに盛り上げてくれているようだな。ところで、懐かしの面々との再会はどうだったかな？」

世間話でもするかのような軽さで尋ねてきた茅場に、キリトは一気に湧き上がってきた煮えくりかえるような怒りを内に閉じ込め、溜息を一つ付いて短く答える。
「偽物にしては、中々よくできてたと思うぜ」
（これ以上言葉を続けると、罵詈雑言が溢れ出てくる……）
短く言い捨てたキリトに対し、茅場は特に表情を変えず話し続ける。
「……偽物か。確かに彼らは私が作りだしたＡＩだ。しかし、それでも彼らの……特に君の祖父の想いは本物だ」
茅場はそう言ながら手を横に振ると、虚空から白い封筒を取り出した。そう、それは……
「じゃあ、それも本物だっていうのか……？祖父はパソコンなんかほとんど使えなかったから、メールとかではないはずだけど？」
キリトは感情を律するのがそろそろ限界に近づくのを感じながら、それでも平静を装って尋ねた。
「そうだ。これは生前君の祖父が現実でしたためたものを再現したものだ」
「そんなこと、できるわけないだろ。それより、本題に入らせてもらうぜ」
キリトはこれ以上の問答に耐えきれず強引に話しの主導権を奪い取り、そして焦る表情を何とか隠そうとポーカーフェイスで尋ねた。
「俺がここに来た理由はわかってるんだろ……？」
「理由か。検討はついているが……しかしそれならなぜ最後まで痛みの森をクリアしなかった？君の知りたいことは……」
茅場は言いながらさっと手を振り、傍らに巨大なモニターを出した。そしてそこに映っていたのは……
「なぜ君の両親が死んだかだろう？」
そこにはキリト、つまり桐ヶ谷和人の両親が、彼が写真でしか見たことのない本当の両親が、血まみれになって道に倒れている姿が映し出されていた。

「君の両親の死の理由は事故とされているが、確かに妙な点が多い。明らかに事件の情報を意図的にもみ消そうとしているな」
キリトには淡々と一定のスピードで話す茅場の声が遥か遠くからしゃべっているように聞こえた。モニターに両親の姿が、血まみれでところどころ体の部位がおかしな方向に曲がっている姿が映った瞬間、キリトは叫びだしたい衝動にかられたが、喉まで出かかったところでなんとか気力を絞り出してねじ伏せ、俯いて少し呼吸を整えた後茅場の方に顔を向けた。
「そうだ、俺の両親は事故死ってことになってる。でも、事件のことを調べようとすると妙に情報が消されていたりしているから個人では調べられなかった。だけどここならどこの機密情報だろうがお構いなしに調べられるはずだ」
「おいおい、ここはＴｈｅＷｏｒｌｄ、ただのゲームの世界……」
茅場が呆れているようで、しかし少し期待を含ませた表情で話しだそうとしたのをキリトは遮り話し続けた。
「違う、ここって意味はＴｈｅＷｏｒｌｄのことじゃない。今ＴｈｅＷｏｒｌｄがある場所のことだ……」
キリトは深く一呼吸して、ここに来た目的のうちの一つである質問をした。
「茅場、ここはいったいどこなんだ？」
「どこ、という意味は？」
茅場がまるで正誤を表情から出さないためかのようにまた無機質な表情に戻って、質問に質問で返す。
「さっきの実験場ってのを見た時点で確信した。ここは明らかにおかしい」
「おかしいというのはこのゲームにとっては常套句なのだがな」
フッとため息をつきながら微妙に苦笑いのような表情をした茅場

に向かってキリトは自分の考えを話し続ける。
「このゲームがじゃない、このゲームを支えている環境がだ。このゲームの規模、数多くのユイクラスの……いや、それ以上に精巧なＡＩ達、そしてさっきのような規模のシュミレーションが数えられないほど同時進行できるようなキャパシティがあるものなんて並大抵じゃない」
そう、通常のＶＲＭＭＯでさえかなりの容量のあるサーバーを必要とする（それでも、ザ・シードのおかげで以前よりは断然ましになったが）それがこんな人間と同じくらい……いや、もしかしたらそれ以上の性能のＡＩだらけの世界を維持するにはどれだけのものが必要なのか、見当がつかない。
ただし……
「もしさっきのハーミットが見せてくれた量子コンピューターを使えば維持できるかもしれない」
それどころか、量子コンピューターを使えば現行使われているパソコンやセキュリティなどないも同然、情報を好きに見放題取り放題改竄し放題のはずだ。
「では先ほども尋ねたが、なぜわざわざこんなショートカットなどしたんだ？痛みの森での進行を見ていれば最後に君の両親の死の真相が見れるとわかっていたはずだろ？」
その答えにキリトは至極単純に答える。
「あんたが本当の答えを見せるかどうかなんてわかんないだろ？それより、フリューゲル達シックザールに協力して……」
「協力して……？」
無機質な、何を考えているか全くわからない瞳をした茅場の目を睨み付けながらキリトは宣戦布告をする。
「あんたからこの世界をぶんどって俺が自分で調べる」
「……」
茅場は少し考え込むように俯いて……
「ふっ、ふ……ふっ、ふはははっはははっ、あぁはっはっはははは

は！」
　いきなり、狂ったように大笑いし出した。
「あんたもそんな風に笑うんだな……」
　キリトは自分が笑われたことより茅場が大声を上げて笑っていることのほうに少し驚きながら、何が起こっても対処可能なように身構える。
「いやぁ、すまない。今の答えはだいたい６０点といったところだが、予想通り中々いい線をいっていてくれて嬉しかったのと、その自分の目的のためなら何でもするという真っ直ぐに研ぎ澄まされた決意が昔の自分を見ているようでな……」
　その目的というのがＳＡＯでのことなのかキリトにはわからなかったが、茅場がどこか懐かしそうな顔をして目の前の俺を通り越してどこか遠くの、もう届くことはないところに思いを馳せている表情を一瞬浮かべるのを見て取った。
　その後打って変わって気軽そうな表情になった茅場は、顎をなでながらキリトに尋ねる。
「まあつまり、君は私のことが信用できないし、自分の問題に上からゼウス・エクス・マキナ気取りで回答を与えられるのは気に食わないから、戦って勝ち取りたいということでいいのかな？」
「まあそんなところだ」
　キリトは答えながら、剣を握っている両手にに力を込める。
「なら……そうだな、私に一太刀入れるごとに質問に一つ答えることにしよう。それなら勝ち取ったことになるだろ？」
　茅場は言いながら服装を白衣から血盟騎士団の服に変え、左手に装備した巨大な純白の十字の盾から剣を引き抜き、構えた。
「ずいぶん気前がいいじゃないか。で、俺が勝ったらどうしてくれるんだ？」
「その時はすべてに答えよう。ここも好きにするといい」
　そう言いながら、茅場はメニューウィンドウを開き、何か手早く操作する。

「さらに私のステータスを君の総合値と同等にした。これで、条件は完全にイーブンだ。戦績は今のところ1勝1敗……これでどちらが上か決まる」
普段ほとんど感情を見せなかった茅場は今明らかに楽しそうにしている。
そしてかくいうキリトも、自分の知りたい情報を得るためという理由付けはあるにしても、やはり茅場との決着ははっきりつけたかったという気持ちも大きかった（1勝したといっても、アスナに助けられたものだし……）
構えてから睨み合いが続くこと数秒、その数秒が何時間、何日にも感じられ、いつまでも無限に続くように思われた。しかし、近くにうず高く積まれていた本が何かの拍子で崩れ落ちた瞬間、緊張をはらんだ静寂は、交差する剣が紡ぎだした金属と金属がぶつかり合う鈍い音で破られた。

――――――

茅場はキリトを仰ぎ見ながら、諦めたような表情をしている。この勝負をこれ以上楽しむことすら……！

（ふざけるなよ！）

キリトは心の中で雄叫びをあげ、翼を展開する。

ちなみに、通常飛んでいる時は2種類の力を使うことでＳＰを消費する。上空に留まろうとする力と、上下左右へ移動する力だ。この両方を使っていると、あっという間にＳＰは無くなってしまう。しかし、例えば落下している最中に一瞬、軌道を変えたりスピードを上げたりする分には1試合分の間くらいは何回か使える。

キリトはＡＬＯで培った空中戦闘の経験をフルに動員して、小刻みに軌道を変えながら重力の力も借り、ほぼ真っ直ぐ茅場に向かって切り込んでいく。

「やぁぁぁぁっ！」

キリトは幾度かの方向転換の末に、やや右上から突っ込んでいたが、最後の最後でさらに角度を深く変え、一度茅場の少し上を通り過ぎる形になる。予想より鋭い角度でキリトに通過された茅場は迎撃に向かっていた盾の軌道を変えねばならず、ほんの少し無理な体勢になり僅かに勢いが鈍った盾をキリトは紙一重のところで躱す。

（いける！）

キリトは最後に残ったＳＰを使い空中で急停止、そして体を捩じるように回転させ、茅場のガラ空きのわき腹に渾身の一撃を叩き込んだ！……がっ！？

「なっ！？」

キリトの剣は茅場の剣で完璧に弾かれていた。

（バカなっ！あの体勢で剣が振れるはず……まさか……？）

そう、キリトの予測では、盾の一撃は自分を僅かだがかすめていたはずなのだ。それを紙一重とはいえ完全に回避できたということは……

（わざと外すことで俺の一撃を迎撃できる体勢にもちこんだ……？だけど、そんなことが……？それに、そもそもあの体勢で反撃でき

るなんて……）
　キリトの頭は混乱して疑問符で一杯になりながらも、体の方は地面に足をつくと同時に反射的にもう半回転し、こんどはさらに勢いのついたもう片方の剣で二撃目を喰らわせようとしたが……
「がはっ！？」
　剣が振りきられる前に、キリトは茅場の強烈な蹴りを喰らい、地面に転がされた。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
　なんとか立ち上がったキリトだったが、次の瞬間がくんっと膝が自分の意志とは無関係に折れ、地面に片膝を突く形になり、そのまま倒れこみそうになるのを何とか剣を地面に突き立てて防ぐ。
「化け物……がぁ……！」
「どうした、もう終わりかね？」
　キリトの目の前に悠然と立っている茅場はつまらなそうに呟く。
「ふざ……けるなっ！」
　キリトは渾身の力で立ち上がり、しかしその後の行動に移ろうとしても体に力が入らず、その場に立っているのがやっとだった。
「ふむ……やはり今の私とキリト君では実力が違いすぎるか……仕方ない」
　言いたい放題の茅場に何か言い返してやりたいキリトだったが、実際に手も足も出ない状態なので沈黙を貫くしかなかった。
　そう、戦いの火蓋が切られてから約５分、キリトの攻撃が茅場をとらえたのはわずか２回、それもキリトが必死に伏線やフェイク、攻撃を積み重ねて作ったどうしても避け切れない状況でのもので、それでもわずかに掠めただけで茅場のＨＰバーは数ドットしか削れていない。
　逆にキリトの方はというと、茅場の以前戦ったときとは比べ物にならないほどの本当の意味での神業の大盤振る舞いにより、残りＨＰが半分を切ってオレンジゾーンに入っている。
　さらに驚くべきことに、茅場はシステムアシスト、闘技場で初め

て戦ったときに使ったシステムの介入によるによる通常ではありえない動き、を一度も使っていない。つまり、純粋な実力で圧倒されているということだ。まるで数百年の隔壁があるかのような……。

ここで、キリトはある絶望的な可能性を思い当たった。

「まさか……？」

「気づいたかね？そう、私が新たに作り出した現実の時間を何倍にも引き伸ばすことができる世界、仮に加速世界（アクセルワールド）とでも名づけるか……。それができてから、私は果てしないほどの時間を使って修業し、今の境地に至った」

（それが本当なら、例え俺にどんなに才能があり、どれだけ努力していようと、その数万倍の時間努力されてしまってはまさに万に一つ敵うはずがない……）

元々紙一重だった茅場とキリトの実力は、たった数年の月日で、まさに天と地ほど離れてしまっていた。

「しかしこのままではつまらない……というか当初の目的を達成できない。というわけで、今のところキリト君が私に当てることができた回数は2回、ここでひとつ、君の力を引き出すであろう情報を2つ教えてやろう」

「だれがそんな情けを……っぐは！？」

「人が話をしているときは静かにするものだ」

茅場が手をスッと横に振ると同時に、何もないところから鎖が伸び、キリトの体を数本は貫き縫いとめ、また何本かは手足を絡め捕り拘束した。初めは襲い掛かってくるであろう激しい痛みを覚悟したキリトだったが、その鎖はどうやら拘束目的のものらしくまったく痛みを感じない。

さらに注意して見てみると、鎖にはｓｋｅｉｔｈやＩｎｉｓの文字が刻まれており、鎖の合計数は8本だった。

「モルガナが幼き頃のアウラを縛っていた鎖だ。この世界では何者も破ることはできない」

茅場は言いながら先ほどキリトの両親の姿を映していたモニター

に別の、一人の少年の姿が映し出した。その少年は背格好から中学生ぐらいにみえる。そして彼は姿や雰囲気から察して、どうやら茅場の若いころの姿のようだ。
「旧アインクラッドが消えるとき、君はなぜ私がＳＡＯをデスゲームにしたか聞いたな……？私はそれに対して、空に浮かぶ城に行ってみたいと、確か答えたな？」
　モニターがさらに切り替わり、そこには先ほどの茅場の姿と、そして現実ではありえない光景、蒼空に逆さまに浮かぶ城（いや都市といったほうがいいのかもしれない）が目の前にあった。
「あれは……逆城都市……？」
（たしかＣｈｒｏｎｉｃｌｅ　ｏｆ　Ａｕｒａに出てきた司達がＫｅｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｔｗｉｌｉｇｈｔを求めて行ったところだ。でもなんで……？）
「なんでリアルのあんたがあそこに……はっ、まさか……！？」
　ここまでの道中で何度も驚かされたキリトだったが、この事実は最大級のものだった。
「そう、私は子供のころ、リアルデジタライズした……。と、いうより、イモータルダスクに巻き込まれたことがある」
　茅場は十字架のような盾に剣を収め、そして自らの過去を語りだした。

「私の両親は私が幼い頃死んだが、幸い多額の遺産と保険金を残していてくれたので、十分生活でき、祖父母が亡くなるまで私の面倒を見てくれた」
　自分の両親のことをまるで他人事のように淡々と話している茅場の目はいつもの感情を含まない無機質なものだった。
「まあとくに不自由なく暮らしていた私は、主に理系が得意でパソコンやネット、その他色々と調べて精通していたわけだが、それで

もその頃はごく普通の理系オタク程度だったと言えるだろう。しかし……」
茅場はここで一旦言葉を切り、モニターを見る。
「私はある時、たまたまＣＣ社（サイバーコネクト）、ＴｈｅＷｏｒｌｄを運営していた企業だが、その前を通ったとき、イモータルダスクに巻き込まれてしまった」
次々と切り替わるモニターに、ＣＣ社と書かれた巨大なビルや、当時の監視カメラの映像なのか人が消えて行く姿が映し出されている。普通に見せられれば映画の１シーンぐらいにしか思えないだろうが（というか事実を知っていても未だに信じがたい……）これは紛れもなく現実に起こったことなのだろう。
「そこで体験したことは、はっきり言って圧倒的だった。五感のすべてが……いや、未知の第６感を含めて全ての感覚がまるで今まで使われていなかったかのような新鮮さだった。しかしその感覚もわずかな時間だけで終わり、すぐに現実に戻されてしまったがね……」
キリトは茅場の長話のおかげで幾分体力と精神力が回復しているのを感じながら、今は茅場の話の行く末に集中することにした。
「その後はあの世界にもう一度近づくため、色々と調べ、学び、研究していき……最終的に今のＴｈｅＷｏｒｌｄに至るにはある環境と条件、つまりＳＡＯとデスゲームが必要だということになったというわけだ」
「なんか最後の方はでかくはしょったな」
キリトがなんとか苦笑を浮かべて言うと、茅場は簡潔に答えてきた。
「最後のほうを詳しく話すと、知りたいことの２つ目を話してしまうことになるからな」
「じゃあ２つ目は何を教えてくれるんだ？」
キリトが軽い調子で聞きながら、息が整ってきてかなりましな状態に戻ってきているのを感じ、鎖をなんとかできないかと思索する。
「君の両親の死の理由だ」

「……それは、俺が自分で……」
拘束のことを一瞬忘れ、キリトが反論しようとするのを茅場は遮る。
「今の君にはこの事実しか発火剤になりえない。自分で調べたいなら私を倒してから改めて確認の為に調べればいいだろう？」
キリトが沈黙を保っていると、それを了承と取ったらしい茅場が話を続ける。
「さて、なぜ私がわざわざ私の過去の話をしたかというと、それが君の両親の死の真相にも繋がるからだ」
「繋がる……？……まさか！？」
キリトはモニターに映っているイモータルダスクによる惨状を愕然としながら見つめる。
「そう、君と君の両親はＣＣ社が行った最後のイモータルダスクに巻き込まれ、一時的にＴｈｅＷｏｒｌｄの中に飛ばされ、そして戻ってきた時に運悪く交通事故にあった」
モニターが切り替わり、監視カメラか何かの映像なのか、赤ん坊の和人と両親が突然虚空から現れ、走っている車にぶつかりそうになった瞬間、父が母を突き飛ばし、車に跳ね飛ばされるシーンが少し荒れた画像のムービーで流される。突き飛ばされた母も車に掠ってかなりの距離を吹き飛ばされ、頭から血がどくどくと流れているのが見える。そしてその血が瀕死の状態になってもしっかりと抱きかかえている赤ん坊の和人の頭にどろどろと垂れてきて……
視界が赤く……いや、黒く染まっていった……
「ぐっ……！？」
その映像を見た瞬間、まるでそれを今じかに体験しているような感覚にキリトは襲われた。そしてその直後、頭と胸がどくどくと脈打つかのように激しく痛みだし、体中から力が抜けていき、逆に何かが体の内を駆け巡る感覚に襲われる。

剣が手から離れ地面にからんっ……と物悲しい音をたてるのを遠くのことのように聞きながら、前のめりに倒れ伏しそうになったキリトだったが、体を拘束している鎖により操り人形のように体がだらんと支えられる。
「君は黒に固執しているようだが……それは多分、この時の血の色が心の奥底で覚えているからだろうな」
茅場の声がまるで遥か天上から話しかけられているようにキリトの耳にわずかに響く。
「君の心の傷は、この時のものが一番深いはずだ。そしてその傷は、この世界では大きな力となりうる」
茅場の言葉に『力』という単語が入ったのを耳にした瞬間、なぜかその言葉だけが頭の中を駆け巡った。まるで、無秩序に体の中を巡っていた黒いものが、一つの方向性を得たかのように。
そして……
「ガ……ガガガガッガガガガァ……ガガガガガァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！」
キリトの意思とは無関係に体中から外へと溢れ出してくる衝動に駆られ獣のように叫び……、キリトの意識は完全に途切れた。

「ふむ、実験は成功か……」
茅場は目の前に佇んでいるキリトを、いや、キリトだったものを見ながら呟く。
今、茅場の前に立っているキリトは全く別物の姿をしていた。
余分なものを一切そぎ落とした金属的な流麗なフォルムに、両手のあるべき部位には二振りの刀身。無機質なヘルメットには飾りは何もなく、まるでアバターを装飾する前の状態のようだ。
しかし、そのボディの色である黒が、何もかも吸い込みそうで、逆にすべてを拒絶しているかのような、矛盾を孕んだ漆黒がそのア

バターの飾り気のなさを補って余りあるほどの存在感を与えている。
「やはりキリト君ぐらい電脳世界に耐性がないとここまでのものはできないだろうな……。いや、素質以上に幼少時にリアルデジタライズされた影響や、心傷殻の大きさや深さも関係あるか……？」
次々と表示されていくモニターに目を走らせながら、茅場は一人考えに耽っていた……がっ！？
「おっと、危ない危ない……」
八相の鎖で繋がれていたはずのキリトはいつのまにか拘束を逃れ……いや、鎖を自身の体内に取り込み、迷わず腕についた剣を茅場目掛けて振り下ろした。振り下ろされた剣の太刀筋を完璧に読み取った茅場はギリギリで見切った、はずだったのだが……
「よもやここまでとはな……」
完璧に見切っていたはずの太刀筋は、躱す寸前に黒く輝く光により伸びた刀身で、茅場の体を見事に抉っていた。
「まさかあの姿になって、すぐに心意を使えるとはな……」
心意……アスナが麻痺で動けるはずのない状態でキリトを庇うために動き、キリトがＳＡＯで最後に茅場と戦ったときにＨＰが０の状態で剣を茅場に突き刺し、そしてＡＬＯでは覚醒状態になかった茅場を目覚めさせた、世界の法則を心の力（イメージ）でねじ伏せ、上書きする力。
「制作者が作ったルールを無視する力、しかし世界に受け入れられる力……」
茅場は呟きながらも、十字の盾から剣を引き抜き、目の前に複数のモニターを展開させながら応戦する。
剣と剣がぶつかり合い、その接点では火花の代わりに空間が弾けるような輝きを発し、世界が軋むような音を立てて二人の世界の事象を改変するほどの圧倒的な力のぶつかり合いに悲鳴を上げる。
「ふむ、これ以上やるとこの空間自体が壊れるか。しかし、もう少しデータを取りたいんだがな……」
茅場が少し迷うような表情をしながら呟くと……

パァンッ！
「その前にキリトが壊れるだろうが」
一発の銃声が鳴り響き、キリトがまるで時間が止まったかのように動かなくなった。いや、実際に時が止まっている。
「フリューゲルか。早い登場だな……」
茅場が振り返ると、そこには黒いコートに身を包み、右目にモノクルをつけた男、フリューゲルがいつもはダルそうな目を今は険しくして立っている。
「あのキリトの姿はＸｔｈフォームか……？いや、それよりも、スケィスに取り憑かれた楚良や、ビーストフォームのハセヲに似てるか……。茅場、キリトに何しやがった？」
フリューゲルがキリトの異形の姿を目を細めながら尋ねる。
「いい目の付けどころだが、少し違うな。それより、君のことだから面倒ごとは敬遠すると思ったんだがな？」
「いや～、俺としてはできればこのまま出番なしで、エンディングにのんびりしてる姿をちょこっと映してもらうだけでよかったんだけどよ」
「ならそうするといい。別に君を呼んだ覚えはないしな」
茅場が淡々と言うのに対し、フリューゲルは苦笑いをした。
「そりゃできればそうしたいんだけどな……だが、若いのががんばってて苦境に立たされてたら、年上のお兄さんとしてはやっぱり助太刀の一つや二つしとかないとあれだしな。それに……」
「それに……？」
茅場が特に興味はなさそうに、ただ相槌を打っただけのような声で聞くと、フリューゲルは肩をすくめながらため息をついた。
「茅場、あんたのその被験者がどうなろうと関係ない、っていうのは同じ研究者としてゆる……って、ぐぇぇぇぇーーーー！？」
茅場の視界から突如として消えたフリューゲル。その原因はフリューゲルが立っていた場所にふわりと舞い降りたキリトの姿によって示された。

「まさかフリューゲルのブリーラー・レッスルをあの短時間で解除した上に、こちらの視認できる速さの限界を軽々超えるとはな……さすがはキリト君、と言ったところか」
　モニターに逐一表示される情報を目ではなく頭で直接受け取りながら、情報を咀嚼していく茅場。
「わざわざ口に出して解説してくれてるのは俺のためってか……？お気遣いありがと……な！」
　キリトに遥か蹴り飛ばされ地面に埋まっていたフリューゲルがやっとこさ抜け出て口に入った土をぺっ、ぺっ、と吐き出したあと、口直しに棒付き飴を咥えながら呟いた。
　しかし次の瞬間、フリューゲルはたった今咥えたばかりの飴を口からポロリと落としてしまいそうになった。
「な、なんだ、ありゃ？」
　目の前に立っていたキリトが、ふわりと宙に浮かんだかと思うと、ブゥンッ！という音と共に2体に分裂したのだ。
「増殖……メイガスの力か。どうやら、先ほど取り込んだ八相の鎖に宿っていた力を吸収したようだな。これはまた興味深い……」
　感心しながらモニターを眺める茅場の横で、フリューゲルがげんなりとした表情をした。
「で、あれをどうにかする策はあるのか？」
　フリューゲルがめんどくさそうに聞いたのに対し、茅場は淡々と、
「策はない」
「って、ねぇのかよ！？」
「というわけでもない」
「どっちだよ！？」
　茅場はいつもの無機質な表情で続ける。
「キリト君のあの状態は、私が考案した人の人格からＡＩを作り出し、それを外装として纏うもので、あの状態なら上手くいけばこの世界の外にアクセスすることもできるという画期的なものだ。しかしいかんせんキリト君の適応率と心傷殻の深さが規格外で、現状こ

の世界でいちＡＩでしかない私の使うプログラムは良くて拮抗、最悪ほとんどが上書きされるだろう」
「ってことは、まさか打つ手なしでこの状況に持ってきたってことか？」
フリューゲルが呆れを通り越して心底面倒くさそうな顔をすると、茅場は少しだけ、期待を瞳に宿して答えた。
「いや、キリト君には神槍ヴォータンが暴走したさいに一つ仕掛けをしておいた」
「仕掛け？」
「私の期待通りの成果を携えて、尚且つ戻ってこれるかどうかは彼しだいだが……なぜだかな、私は彼を信じている」
「って、勝手に信じられてるキリトもいい迷惑だな……。んじゃあ、ようするにあいつが戻ってくるまで抑えてればいいってことか？」
「手伝ってくれるのか？」
茅場が意外そうな声を上げると、フリューゲルは面倒くさそうに手を振った。
「あんたにはこの世界を救ってくれた恩もあるし、ここでキリトを見捨てると、ここに来るまでにサポートしてくれたうちの連中が煩そうだしな……。ま、あいつらも後から来るし、何とかなるだろ……」
フリューゲルが舐め終わった棒付きキャンディーの棒を吐き捨て、二丁拳銃を構える。
「で、この戦闘が終わったらあんたのやろうとしていることを洗いざらい吐いてもらう」
「無事だったらな……」
茅場も剣と十字盾を構え、そして二人は駆け出した。

――――――――――――――――――――――――――――――――

黒い世界。暗くもなく、闇でもなく、ただ黒い世界。もしここが本当にそれ以外何も無いところだったら、常人では数分と経たず精神に異常をきたすだろう。
「なんか……綺麗だな……」
しかし、そこには在った。いくつもの、いや、幾億もの光が。小さいながらも、互いが輝きあって、全体で巨大な光を作り出し、まるで星が輝きあって作り出す天の川……いや、銀河をこの何もない世界に存在させている。そして、その中心には他のものとは比べ物にならないくらい大きく、存在感を放っている光があった。
その光を抱きかかえるように存在るのは……
「これが、本当のアウラの姿なのか……？」
キリトが初めてアウラとグリーマ・レーヴ大聖堂で会った時抱いた印象、かわいらしいけど、気高そうだけど、それ以外はいたって普通の女の子。彼女が自称ＴｈｅＷｏｒｌｄの女神と聞いた時には失笑しそうになった。
しかし……
「確かに、これは神……いや、女神だな……」
その神々しさもさることながら、到底人が辿り着くことの不可能なほどの慈愛と献身の境地。そんな見るものを圧倒させ、畏怖を抱かせるのと同時に、親しみを覚えてしまう姿。
（これは、帰ったら謝んないとな……）
キリトはそんなことを考えながらも、なぜか体が震えているのに気づき、そしてそれが自分の無意識が何かに恐怖していたのだと、すぐ近くで起こった光景により悟った。
「なっ、光が……！？」
そう、アウラの抱える光を囲むように展開していた無数の星のような小さな光たち。そのうちの幾つかが、唐突に黒色に染められ、一瞬にして存在を消されたのだ。
「いったい、なにがどうなって……？」

キリトが消えた光を探そうと動いたその時、偶々近くに浮いていた別の光に指先が触れて……
「うっ！？」
次の瞬間、キリトの頭の中をどこかの世界の戦いと平穏、出会いと別れ、生と死、友情と裏切り……それらの情景が無規則に駆け巡る。その圧倒的な情報量に頭がおかしくなりそうになりながらも、キリトは無意識に指を数ミリ動かし、光から離した。
その瞬間、ピタリと情報の流入は収まる。
「ハアッ、ハアッ、ハァッ……」
キリトが荒い息を何とか整えながら、この光たちが何なのかを理解した。
「これが、この小さな光一つ一つが、全部世界なのか……？」
『そう。そして、これらの全てはあなたが蒔いた種が芽吹き、広がってできたもの……』
「なっ！？」
唐突に頭に響いてきた声にキリトが驚き、警戒心を露わにしていると、キリトの目の前に人影がふわりと舞い降りてきた。
少年とも少女とも見える中性的な容姿全身を淡く輝く白い光に覆ったその子供は、感情を一切排した表情でキリトに慇懃に一礼した。
「おまえは……？」
『私はオリジナルカーディナル、この世界達を見守るものです』
その姿を見たキリトは、どことなくアウラから受ける感じと似ているのに気付いた。
「オリジナルカーディナル……？って、カーディナルはシステムの名前？それに、この感じ……まさか、あんたは、というよりカーディナルは茅場が作り出したアウラのコピーってことか？」
キリトの脳裏に以前したイェーツとの会話が過る。
『お察しの通り、私カーディナルはマスター茅場によって作り出された疑似アウラです。ちなみに私のさらにコピーであるマスターがあなたに託したＴｈｅＳｅｅｄに組み込まれたカーディナル達は、

表向きはサーバーの管理等を職務としてますが、本当の存在理由は別のところにあります』
（別にある？）
キリトはその言葉を聞いた瞬間、ある考えが思い浮かぶ。そして、その可能性が起点となり次々に点と点だった事柄が結ばれていく。
「もしかして、茅場は世界中に大量のカーディナルのコピーをばら撒き、何かに利用するためにＴｈｅＳｅｅｄを俺に託したのか……？」
ＴｈｅＳｅｅｄの凡庸性は、例え作ったのが稀代の大量殺戮者茅場明彦でも、見逃しがたいものがある。それは、今現在も広まり続けていることからわかる。
（だけど、いったい茅場はカーディナに何をさせようと……？）
そこで、キリトは目の前にいる子供が自分のことを？オリジナル？と名乗ったことに気付いたと同時に、新たな疑問が湧いてきた。
「あんたがオリジナルのカーディナルなのはいいとして、なんでこんなところにいるんだ？というより、ここはいったいどこなんだ？」
キリトのもっともな疑問に、カーディナルは表情を全く変えず、ただ淡々と答える。
『ここがどこかという問いには、残念ながら私には回答権が与えられておりません。ただ、私がここにいる理由は先ほどお教えしたように、この世界達を見守るためです』
目の前の子どもが見守るという言葉を口に出したとき、初めてキリトはその子供に感情を見た気がした。悔しさや歯痒さといった、自分の無力を噛みしめているかのような焦燥感。
奇しくもそれはキリトがこの場所に来る前に茅場と戦っていた時に抱いた感情だったので、惹かれるかのようにキリトはたずねた。
「見守るだけじゃなくて、護りたいのか、この世界たちを？」
キリトの言葉は的を得ていたらしく、目の前の子ども、カーディナルはキリトを凝視し、そして小さく頷いた。
「で、俺は何をすればいいわけだ？」

『えっ？』
カーディナルは驚いたような表情を見せたが、キリトにとっては当然の問いだった。あの茅場が、ここに自分を送り込んだのには必ずわけがある。というより、そうでなければいったい何なのだと言いたい……。
キリトは茅場に言ってやりたいことが山ほどあったが、とりあえずはこの子の手助けをしてあげたいと、場当たり的に思っていた。
カーディナルはじっとキリトのことを見た後、徐に口を開く。
『今、この世界たちとＴｈｅＷｏｒｌｄは消滅の危機に瀕してます』
「は……？」
その予想の範疇を軽く超える大事のカミングアウトに、キリトは一瞬言葉を無くす。
『先ほど見られたように、この空間は異物が存在することを許しません。元々ここに単独で放り込まれたＴｈｅＷｏｒｌｄは、マスターが辿り着いたときには風前の灯でした』
キリトは何か言おうとしたが、それを遮りカーディナルは話し続ける。
『マスターはこの空間に現実世界のネットで使用されているＴｈｅＳｅｅｄのカーディナル達が集めた彼らの管理する世界の情報を元に、幾千もの世界を作り出し、ＴｈｅＷｏｒｌｄに対する浸食を抑えにかかりました。しかし、それも所詮場つなぎにすぎません。本当に必要なのは、この空間にこの子（世界）達の存在を認めさせる鍵、ＴｈｅＷｏｒｌｄ的に言うと、キーオブザトワイライトが必要なんです』
キーオブザトワイライト……ＴｈｅＷｏｒｌｄに語り継がれる幻のアイテム。それはある時は万能の願望機と言われ、またある時は少年が手にした腕輪かもしれないと推論され、また別の時代には少年の成長した力そのものだとある男が言った。
その形は時代ごとに姿を変えたが、定義は変わらない……それは、『希望』だということ。

黄昏(よる)の世界を薄明(あさ)に変える力。なら、今この時点においてのキーオブザトワイライトとは……？
キリトは頭をフル回転させて考えたが……
「で、結局そのキーオブザトワイライトってのはなんなんだ？」
あっさり思考を放棄して、カーディナルに尋ねる。
『マスターは、キリトさんがあることを願えばそれは現れると言ってました』
「あること？」
キリトはヒントくらい貰えないかなくらいの気持ちで尋ねたのに、簡単に答えを貰えてしまい肩透かしを食らった気分になりながらも尋ねる。
『この空間から出たい、と思えばいいそうです』
「は……、それだけ？」
『それだけです』
なんだそりゃ、簡単すぎるだろ……？と、思いながらもキリトはとりあえずここから出たいと思おうとしたが……
（な、んだ、これ……？）
どれだけ出たいと念じようと、まったく気持ちが湧いてこない。まるでキーを回しているのにエンジンがかからないかのような……。
『この空間が異物を許さない……と言ったのは、語弊があったかもしれません』
カーディナルが、少し寂しそうな、諦めたような顔をして語る。
『この空間は、その性質上何もかも取り込んでしまうんです。だから、ここに来たものは出たくなくなる。そして、いつしかその存在を空間と同一化させてしまうんです』
（そんな、バカ、な……？）
しかし、カーディナルのいう通り、キリトの心はこの空間から出たいと思えば思うほど、どんどん逆へと向かっていく。そしてそれにつれてキリトの体が、和人の心が黒に取り込まれていく……
空間を満たしている黒は、粘ついてるわけでも、纏わりついてく

るわけでもなく、かといって空虚さを感じさせるわけでもない、居心地がよくてそのまま溶けて同化したくなるよう誘惑する。
　さらに、ここで同化すれば長年求めてきた、日常の中でどれだけ楽しいことや辛いこと、出会いや別れがあろうと忘れることのなかったもの。一度は障害の大きさに逃げ出し、しかしＳＡＯに閉じ込められ死を間近に感じた時、ビーターと蔑まれ、一人戦い続けてでも生き残り知りたかったもの……自分の両親の死についての真実が全てわかるという確信をなぜかはわからないがキリトは持ててしまっていた。
（俺は、これから、どう、すべき、なん、だ、ろう……？）
　途切れ途切れになりながらも、最後の足掻きとも言える想いを頭の中に浮かべ……そしてキリトの思考は言葉として紡がれることは無かったが、しかしこの空間だからこそ想いが形になって現れる奇跡が、いや、必然の事象が起こる。
　キリトの目の前に、次々とリアルのことからＳＡＯ、ＡＬＯ、ＧＧＯやＴｈｅＷｏｒｌｄ等電脳世界での出来事とそこで出会った人達の姿や思い出が走馬灯のように現れては消えていく。
　それをぼんやりと見ていた体をところどころ黒に同化しかけているキリトは、最後の幻が消えた後に残された淡い光、今を生きている人間にしか持てない未来（さき）のように不確かで、でもだからこそ掴み取りたい希望を象徴するかのような光に、惹かれるようにゆっくりと、ぎこちなく右手を伸ばし、手に取る。
『し、信じられない……。いくらマスターの仕掛けが有ったとしても、本当にこの空間の誘惑を退けるなんて』
　傍にいて絶望に浸ろうとしていたカーディナルの驚きを余所に、光を手にしたキリトの体が燦然と輝きだし、体とところどころ同化しかけていた黒はキリトの左手に移動し、手のひらへと集まる。
　そして、右手の光と左手の黒はその持ち主にとって馴染みの双剣を形どった。
『キー、オブザ……トワイライト……』

カーディナルが呟いた言葉が呼び水となり、空間に浮かぶ光達が輝きを増す。そして眩いばかりの光に包まれたキリトは、両手に持った白と黒の剣を、奇しくもＳＡＯ時代に自分が最後に手にしていた漆黒の剣ダークリパルサーとアスナの純白の剣を思いだし、ふと微笑む。

そして、光による白と、空間による黒がお互いの存在を認め合うかのように絶妙な均衡をとると、キリトの目の前に木製のアンティーク仕様の扉が現れた。

そして、音もなくその扉がゆっくりと開くと……白衣姿の茅場が入ってきた。

「茅場……か……？」

『マスター……』

キリトとカーディナルが呟くと、その場に立ち止り、扉の前に佇む茅場は初めにキリトの方を向く。

「紙一重だったようだが、どうやら成功したらしいな」

キリトが手に握る白と黒の剣を見ながら、茅場は鉄仮面に一瞬安堵のような表情を過らせた。

「これが、あんたが俺をさんざん挑発してまで作らせたかったものなのか？」

キリトが自分の持つ剣をしげしげと見る。細工や飾りを一切排した、しかしだからといって無骨というわけでもなく、素っ気なさを感じさせるわけでもない、不思議な存在感を放つ剣。

そして、キリトはそれを数秒見つめた後、茅場に放り渡した。

「……いいのか？」

茅場の無表情に向かって、キリトは苦笑しながら答えた。

「そんな剣、俺が持っててもしょうがないしな。それに、別にあんたのためじゃないさ。そこにいるカーディナルのためだ」

僅かな時間しか共有していないカーディナルに対する過剰とも思えるキリトの感情移入は、この異様な空間に存在した自分以外の誰かというものもあったが、それ以外にも長い間一人孤独に世界を見

守ることしかできなかったということに、かつてのユイ姿を見たというのもあった。
そんなキリトの胸中を察してか、茅場はそれ以上何も言わず、今度はカーディナルの方を振り返る。
「今までご苦労だった、カーディナル」
『はい……マスター』
茅場の言葉に、初めて微笑んだカーディナル。しかし、キリトはその中に違和感を見る。
（これは、何かの決意か……？）
そして、茅場がキリトから受け取った双振りの剣を中段に構えたのを見て、嫌な予感を察したキリトが慌てて駆け寄ろうとしたが……キリトが手を伸ばした時には、すでに茅場の振るった剣がカーディナルの小さい体に突き刺さっていた。
「なっ！？」
そしてキリトが驚く暇もなく、カーディナルの体は接触した剣と化学反応でも起こしたかのように、眩い光を発し弾け、空間を埋め尽くし、キリトの意識を一瞬で刈り取った……。

――――――――――――――――――――――――――――

≪茅場ファイル≫

そこは壁に石や土が露出している、天然の洞窟。そしてその洞窟の中央には無数のコードに繋がれた、拳サイズの小さな球体状の石、いや石のような何かが置かれていた。それをただ単に石と呼ぶには憚れるくらいの圧倒的な存在感を放っている。
そして、その石（便宜上Ｓｅｅｄと呼称する）こそが、今現在ＴｈｅＷｏｒｌｄが存在する空間の正体だ。

それがどこにあり、今どうなっているかはわからない。ただ、Ｓｅｅｄは日本という国が誕生する前から同じところにずっとあるらしい。それは物理的にどのようなことをしようとも動かしたり傷つけることができず、また触れようとしたものは一様に廃人となった。故に、それは呪われてるとされ、厄介物扱いされながらも厳重に保管されていた。

その評価が変わったのは２０世紀末、パソコンやネットが普及してきた頃だった。たまたまそれを監視していたものが近くでノートパソコンを起動させると、いきなり大量のデータがそのパソコンに注ぎ込まれ、そして次の瞬間壊れた。

そのことから研究チームが作られ、そして調査の結果、その石は電子的な情報を保存する機能があるらしいことがわかった。その記録範囲は、予測すると地球規模、いや、それ以上にこの太陽系全体に及ぶ可能性があること。また、記録するだけではなく逆にこちらから保存されているデータを取り出すことが可能にすることができるかもという推論が出された。人が触ると廃人になるのは、接触したときに送られてくる無秩序で膨大な情報量に精神が耐え切れないと予測される。

早速極秘裏に研究が開始されたのだが、当時のコンピューターの性能では中々成果が出なかった。

そんな閉塞した状況に風穴を開けたのがＣＣ社だった。パソコンやネット業界で頭角を現していたＣＣ社はハロルドヒューイックがネットゲームＴｈｅＷｏｒｌｄを母体に作り出そうとしている究極ＡＩアウラを利用できないかと持ちかけてきたのだ。極秘だったＳｅｅｄのことを知られていたのと、すでに手詰まり感があった政府はＣＣ社と提携、Ｓｅｅｄの持つ圧倒的な容量を提供して（この時すでにＳｅｅｄの中の余って使われていない一部の領域を使うことはできるようになっていた）、アウラを完成させるのを手伝った。

その途中でＳｅｅｄ内の空間の断片が意思を持ちＡＩＤＡとしてネットワークに出現してしまったことや、当時ＣＣ社の上層部が持

っていた人類休止計画や政府の思惑はここでは長くなるので省くが、この後司やカイトにハセヲ、そしてトキオにサクヤやソラ達の活躍によりアウラは成長し、一時期は力を失うも、最終的には究極ＡＩと言って過言ではないほどの存在になった。

しかし、ここでＣＣ社が人体実験に手を出していることが世間にばれ、反対勢力の後押しもあり瞬く間に倒産に追い込まれてしまう。

そしてその後、ＴｈｅＷｏｒｌｄのデータは調査の名目で政府に回収される。

政府にとってＣＣ社というパートナーを失ったのは痛かったが、実験は最終段階に入っていたので、アウラをＴｈｅＷｏｒｌｄごとＳｅｅｄの中に放り込んだ。目論見通りいけば、アウラはＳｅｅｄの中で自分の領域を確保、その後Ｓｅｅｄ内に保管されて今直更新されている地球上のあらゆる時代の情報を引っ張り出すという世紀の、いや、人類史上初の快挙を成し遂げるはずだった。

しかし、あまりにも強大な空間の浸食力に、アウラという一点の光は世界（ＴｈｅＷｏｒｌｄ）が消されないように維持するのが精一杯で、彼女はその神性をＴｈｅＷｏｒｌｄ維持の為に切り離した。

そして……

「あんたが来たってわけか」

一人ぽつんと白い空間、ＴｈｅＷｏｒｌｄと、さっきまでいた空間の狭間にある緩衝材のような場所、認知外空間にいつのまにか佇んでいたキリトは、どこかで見聞きしているであろう茅場に向かって独り言のように呟く。

そう、キリトは先ほどの爆発で気を失い、気づいた時にはこの場所、認知外空間に一人立っていたのだ。そして、キリトがはっきりと意識を取り戻すと、待っていたかのように目の前にモニターが展開され、≪茅場ファイル≫なるものが流された。

キリトはいつ、なぜ、どのように自分がここに来たのか劇場の時のようにさっぱりだったが、とりあえず目の前の言い訳のような情報を見終わるまで黙っていた。

『そう、そして、私は私の望みの為にまたキリト君、君を利用することにした』
どこからともなく響いてきた返事に、キリトは淡々と質問を続ける。
「で、結局なんで俺が選ばれたんだ？それに、なんであの子は死ななきゃならなかったんだ？それと、さっきも言ってたけど、なんでＴｈｅＷｏｒｌｄを救うためにＳＡＯをデスゲームにしなければならなかったんだ？」
その短いながらも≪茅場ファイル≫を見た後に残った最後の謎の核心を問われた茅場は、一息間を置き、徐に語りだす。
『今回の件でのキーオブザトワイライトは、今生きている人間があの空間で元の、外の世界に出たいと思うことで、空間を暫定的に束ねている意思に異物を観測したくなるよう興味を持たせる、つまり、異物の存在を許すように仕向けることだった。そして、あの世界に入り、尚且つ戻ってこられる可能性を持っていたのはキリト君、君だけだったというわけだ』
茅場の声はここでいったん途切れ、また話し始める。
『カーディナルは、君ならすでに予想していると思うが、以前アウラがしたこと、アポトーシス（自己犠牲）をした。あの子は最初から君が成功すれば、自らを捧げて空間と世界達の橋渡しになるように作ったＡＩにすぎない。だから、君が気に病む必要はまったくない』
茅場の事実を言ってるだけなのか慰めてるんだかわからない淡々とした言葉を聞きながら、キリトは自分がやったことに対して後悔するべきなのかさえ分からずにいた。
『そして、最後に私がＳＡＯをデスゲームにした本当の理由。それは……いや、これはやめておこう。これは唯の言い訳に過ぎない。それに、結局私は自分の為にデスゲームを行ったのだからね』
その答えに対し、キリトは何も言えずにいたが、最後の質問をした。

「で、これからあんたはどうするんだ？」
『……そうだな。とりあえず、あの空間にある他の世界を回ってみるつもりだ』
「じゃあ……」
茅場が『んっ？』と言ったのをに対し、キリトは続ける。
「今度会った時にもう一度戦って、それで勝てたら、あんたがなんでデスゲームをしたのかを教えてくれ」
『次会う時には勝てるとでも？』
茅場の挑発的な発言に、キリトは覇気を込めて答える。
「次に戦う時までに、必ずあんたの達した……いや、それ以上の高みに行って見せる」
『……楽しみにしていよう。っと、そろそろフリューゲル達が来るな』
キリトが振り返ると、青いリングがいくつか現れ始めていた。
『それではキリト君、またどこかで会えたら会おう』
そして、茅場の気配は完全に消え去った。

The Seed of All Origin ―全ての始まりの種―（後書

かなりのとんでも設定になってしまいましたが、これはこの話しを思いついた時から考えていた設定なので、悔いはないです（笑）
Ｓｅｅｄについては、ＳＡＯの後に続くアクセルワールドを読んでいる時にいつも感じていた、「どうやってこんな大容量確保してんだ？」という疑問に対する自分なりに考え付いた一つの回答として組み込みました。
こんなのありえないだろ……と思いながらも、科学が発展することで今まで無用だったものや害だったものが１８０。価値を変えるなんてざらにあることかなと書きました。

あと、キリトが過去の真実を知って発現させた形態は、アクセルワールドのデュエルアバターの原型みたいなもののつもりで書きました。
デュエルアバターは原作を読んでると、ただの体というより持ち主の分身のようなものに思えたので、デュエルアバター自体に潜在的に意思（ＡＩ）があるという設定を妄想してみました。
・ｈａｃｋ／／にも、碑文使いとアバター（八相）や、トキオと騎士団達ＡＩによる連携などがありますし。
それと、キリトの姿が黒雪姫のデュエルアバター《ブラック・ロータース》に似てるのは、和人と明日菜の娘が黒雪姫かな～っと思ったので似せました（まあ違った場合は他人の空似という方向にします……）

年代表

２００６年：ララ・ヒューイックがリアルデジタライズし、黄昏の碑文の世界を旅する

２００７年：Ｆｒａｇｍｅｎｔ始動

２００９年：ＴｈｅＷｏｒｌｄ本格始動。司がゲーム内に閉じ込められるが、仲間と協力しアウラを解放。（アニメ展開）

２０１０年：親友オルカを未帰還者にされたカイトがブラックローズ達仲間と共にモルガナをあと一歩のところまで追い詰めるも、最後はアウラの自己犠牲でＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄは正常に戻る。（ゲーム展開）

２０１４年：シューゴとレナがキャンペーンでカイトとブラックローズのボディをゲットして、仲間と共に放浪ＡＩであるゼフィとアウラを探す。（マンガ展開）

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄに戻ってきたカイト達はシューゴ達と共に放浪ＡＩモルティと、その反存在になることで存在を復活させた、かつてできそこないとしてハロルドに処分されたクビアがＴｈｅＷｏｒｌｄを破壊しようと画策しているのを知り、対決。最後はモルティとクビアが消滅してエンド。（オリジナル展開）

２０１５年：ＲＡ（リバースアウラ）計画始動。チャップチョップ事件などで八相を回収。天城丈太郎と番匠屋淳の天才２人により計画は進められるが、失敗し火災が発生。ＴｈｅＷｏｒｌｄ消滅。

２０１６年：データ生命体ＡＩＤＡの発生。碑文使い候補の一人オ

ーヴァンに取り憑き暴走、彼の妹アイナが未帰還者に。オーヴァンがキーオブザトワイライトを探す黄昏の旅団を結成するもオーヴァンが行方不明になったうえに志乃も未帰還者になり自然消滅。（アニメ展開）

２０１７年：ハセヲが碑文使いとして覚醒し、その力をキーにオーヴァンが再誕を発動、その後現れたクビアも無事撃破し、平穏が訪れた（ゲーム、小説、映画の内容Ｍｉｘ＆オーヴァンは生きている）

２０２０年：リアルデジタライズできる特殊体質の少年トキオが石化された騎士団員を救い、アウラへの道を開くも天城丈太郎のバックアップＡＩガイストにアウラを洗脳され、全人類をリアルデジタライズするイモータルダスクを発動しようとするが、敵対していたシックザールのメンバーとも協力し、なんとか被害を最小限に食い止めることに成功。（ゲーム展開）

２０２３年：サクヤ、トービアス、メアリがＴｈｅＷｏｒｌｄに潜む闇を垣間見る。ソウルデジタライズされた少年ハーミットの起こしていた事件をシャムロック（ＰＣパイのプレイヤー佐伯令子）と共に解決に導く。（ＯＶＡ展開）

２０２４年：そらというカイトタイプの主人こうが活躍する話しという意外不明。トキオとも関係があるらしいが……？（？？？）

２０２？年：茅場がイモータルダスクに巻き込まれ、リアルデジタライズされる。（オリジナル）

２０４１年：キリトと両親がイモータルダスクにあい、その後事故で両親が死亡。（オリジナル）

２０４２年：ＴｈｅＷｏｒｌｄ崩壊。？？？に安置されたＳｅｅｄの中に全データを放り込まれる。
アウラ自らの神性を犠牲に世界をＳｅｅｄの中に広がる闇の中から守る。（オリジナル）

２０５０年：茅場明彦アーガスに入社。アーガス急成長。ナーヴギア開発。（小説＆年度オリジナル）

２０５５年：ＳＡＯ発売。キリト達２万人のプレイヤーが虜囚となる。（小説＆年度オリジナル）

２０５７年：ＳＡＯクリア。フェアリーダンス編（小説＆年度オリジナル）

２０５８年：マザーロザリオ編（小説＆年度オリジナル）

２０５９年：現在

店番　ーカナードにてー　０１（前書き）

エピローグに行く前に短編を書いていこうと思います。
今回のはモンスターレースが終わった直後のお話です。

店番　ーカナードにてー　01

「……」
「……」
（き、気まずい……）
キリトは店の前の広場に溢れる雑踏を遥か彼方からするかのように錯覚しながら、隣で不機嫌そうに立っている人物が放っている無言のプレッシャーでさっきから冷や汗をだらだらと背中をつたわせている。
（はぁ……なんでこんなことに）
心の中で溜息を一つつき、今いる状況に俺を叩き込んだ人の良さそうな顔をして腹の中は真っ黒なあいつのことを思い出した。
そう、あれはモンスターレースが終わった次の日のことだった……

ーーー

「ああ。リコリス達のお茶会に付き合わされてな。もっとも、後半はゲーム大会と化してたけど……」
お茶会の後に行われたゲームに負けてやらされた罰ゲームは、昔流行った某サウンドノベルの主人公達が部活でやっていた罰ゲーム並みに過酷なものだった……。
まさに見ている側と受ける側では天国と地獄だったあの光景を一瞬脳裏に浮かべたキリトは、思い出し笑いをしていいのか、逆に恐怖に震えればいいのかわからなくなった。
そんなことを眠気に侵された頭でぼーっと考えていたキリトだったが、シラバスの次の発言で一気に現実に引き戻された。
「ところでキリトくん、君、たしかカナードでツケで買い物したよね？」
「あっ……」
確かにあの時持ち金が無かったキリトは、後で欅からクエストの報酬を貰おうと思っていたのだが……。
「悪い、もうちょっと待ってくれないか？あてがはずれちゃってさ」
そう、欅は眠り続けていたユイにレースの賞品である薬を『報酬の代わり』にと使ってくれた。まあ欅が勝手にしたことなのだが、一度納得した手前、後から金もよこせというのはさすがに気が引ける。
「んー、困ったな。明日決算だから、できれば今日中に返してもらいたかったんだけど……」
「そ、そうなのか……どうすっかな」
キリトは頭を掻きながら言葉を濁したが、無い袖は振れないってやつだ。
「あれ、シラバ……アイテッ！？い、いたいぞ～！」
ガスパーが何か言いかけたが、突然ピョンッ！と跳ねて足を抱えて痛がりだす。
「だ、大丈夫、ガスパー？」
心配そうに話しかけるシラバスだが、さっき一瞬シラバスの足が

ガスパーの足をふんづけたように見えたのは気のせいか……？
　キリトが自分の見た気がしたものと今の状況を照らし合わせて、いや、無いか……と一人勝手に納得していると、やっと痛みが引き始めたらしいガスパーをなだめていたシラバスが話しを切り出した。
「あ、じゃあキリト。今日カナードで店番してくれない？」
「店番？って、つまりバイトってことか？」
「そうなんだ。今日の午後、僕とガスパーは用があって出かけなくちゃいけないんだけど、バイトで入って貰う人が一人しかいないから、ちょっと心配だったんだ。もし今日バイトに入ってくれたら、ツケはチャラにするよ」
　バイトか……接客はやったことないけど（というより、俺ってクリスハイトから時々来る依頼とか以外、まともなバイトってやったことないな……）午後からなら午前中は寝れるし、これでツケをチャラにできるんだったら……。
　８割方早く寝たいという願望に押されて、キリトは頷く。
「わかった。じゃあ午後からカナードでバイトに入る。でも、俺接客なんてやったことないぜ。それでも大丈夫か？」
「大丈夫大丈夫。同じバイトの人がちゃんと教えてくれると思うよ」
　シラバスが自信満々に話している横で、落ち着いたガスパーはちょこんと首を傾げて「大丈夫かな～」と呟いていたが、すぐに笑顔になって「よろしくたのむぞ～！」と言ってきた。
　もしもこの時キリトが眠気に侵されておらずまともに頭が働いていたら、節々に見えた不自然な点を見逃さなかったろうが、この時は無理な話だった……。

店番　ーカナードにてー　０２（前書き）

お久しぶりです。
週１で書くとか言っときながら、すでに１０月末……。
更新するする詐欺になってしまい、申し訳ありませんでした。

店番　ーカナードにてー　02

「いらっしゃいませ～！」
カナードの店の前まで来ていたキリトは、その予想外の姿に立ち止まってしまっていた。
午前中爆睡したキリトは、アラームによって強制的に叩き起こされた眠い目を擦りながら軽くシャワーを浴び身支度を整え、マク・アヌに転移してマーケットがある広場の一角にあるカナードに着いたのだが……。
「癒しの水ですね。初心者の方ですと、異常ステータス回復アイテムとセットでお安くなりますが？あ、はい。ではセットでお買い上げですね。ありがとうございます！」
その人物は、愛想良くテキパキとした感じで初心者らしき装備が貧弱なＰＣに応対していた。
一瞬近づくかどうか迷ったが、意を決して店に歩み寄る。
「あっ、いらっしゃ……あん？てめぇは確か……キリトって言ったか？なんかようか？」
カナード印のエプロンをしてキリトを睨んだ人物は、漆黒の禍々しい外装に銀髪、目つきの鋭さが見るものを威圧し、俺に関わるなオーラ全開の少年……そう、ハセヲだった。
「いや、シラバスに言われて臨時のバイトに来たんだけど……」
聞いてないか？と続けようとしたキリトだったが、ハセヲの『チッ！』という舌打ちにより遮られた。
「あの野郎、何考えてやがる……？」
どうやらキリトが来ると聞かされていなかったらしいハセヲはイライラした様子。
「もしかして、俺、お邪魔かな……？」
キリトが控えめに尋ねると、ハセヲは一瞬顔をしかめて……面倒くさそうな表情をする。

「ま、シラバスの野郎にはあとで文句言うとして、あんたも仕事で来たんだったら、やるしかねえだろ」
と、ハセヲは言って屋台に入ってくるよう身振りで示す。
キリトはしばし逡巡した後、屋台に入ると、ハセヲがメニューウィンドウから一着のエプロンを取り出し、キリトに放り渡す。
「で、あんた、接客経験は？」
「いや、全く無しだ。シラバスは同じバイトの人に教えて貰えって言われたけど？」
キリトがどうする？と言った感じで聞くと、ハセヲはまた不機嫌そうに眉をひそめる。
「あっ！？それでいきなりバイトかよ……？クソめんどくせぇ……」
しかし、最終的に乗りかかった船……的な境地に至ったらしいハセヲは、まばらに現れる客の対応をしながらキリトに仕事を教授する。
「いらっしゃいませぇ！……キリト、そっちのアイテムの整理頼む」
「お客様の装備ですと、こちらの剣なんかが適正レベルですし、少しレベルが上がっても十分使えるので長く使えますよ。……おい、キリト、それ間違ってんだろ。その客は初心者だから、そのアイテムは3割引きっつったろうが！」
「お客様が今狙ってるクエストですと、水属性付与、火属性耐性と毒耐性が必須なので、こちらの素材を装備につけるといいかと。……ってキリト、そっちはバラ売り不可だろ！」

そんなこんなで店を回すこと2時間、昼時に広場に集まっていた人ごみが薄れ、客足がやっと途絶えた時には、キリトは店の裏でへたり込んでいた。
（ま、まさか、店を回すのがこんなに大変だなんて……）
勿論簡単な説明しか事前に無い状態のぶっつけ本番だったので元々ムチャな話だったが、それを差し引いても初めての接客業は思っていたよりもきつかった。

ＳＡＯやＡＬＯ、現実でも店を持っているエギルのことをキリトはなんとなくすごいとは思っていたものの、今回それを身をもって実感していた。
「ふぅ、これで一息つけるか……。ま、あんたもそこそこ役に立ったと思うぜ」
レジの前にいたハセヲが裏にやってきて、意外なことにキリトに労いの言葉をかける。
「いや、むしろ邪魔しちゃったろ？わるいな」
少し自嘲気味に笑うキリトに対し、ハセヲは頭を掻きながらキリトから目をそらして話す。
「まあ、はじめての店な上に接客業未経験なわけだしよ……もう少しやったら慣れてくると思うぜ」
何とも微妙な空気がキリトとハセヲの間に流れる。そして、どちらも居心地悪そうにしていると、二人にとって幸いなことに訪問者が現れた。
「ま＊@ぉ！」
そこに立っていたのは……
「葬炎……？」
そう、そこにいたのはグリーマ・レーヴ大聖堂でキリトが戦った3葬騎士の内の一人、葬炎の騎士だった。ただし、今の彼は町の定食屋がしているような前かけを腰につけ、手にはおかもちを持っていた。
「お、待ってたぜ。今回こそ上美味く出来たのか？」
「自¥&あ%」
おかもちの中からラーメン2つと餃子の乗った皿を2つを取り出し、その場にあった段ボールの上に置いた葬炎は、キリトの方に小さく会釈し、ハセヲに「#想を%た頼¥」と一言いうと、転移してしまった。
「あー、ハセヲ、いったい今のは……？」
キリトが？マークを頭の上に浮かべながら聞くと、ハセヲは少々

言いにくさそうに話しだす。
「いや、あいつには昔ちょっとばかし貸しがあってよ。それで、今あいつら3人飯屋始めるらしいから、料理の試食頼まれてんだよ。んで、今日はあんたがいるから、2人前頼んだんだ。まだ、飯食ってねえだろ？」
そういえば、と、言われて初めて朝から何も食べていないことに気付いたキリトは、急に腹の虫が鳴りだした。
「じゃあ、お言葉に甘えてゴチになります」
「ま、あんま味の方は期待しない方がいいぜ」
ハセヲは言いながら、メニューウィンドウを操作して小さな椅子を2脚取り出す。
「あと30分くらいしたらまた客が増えるから、さっさと食うぞ」
「了解」
キリトは空腹の為答えも短くいただきますというのもそこそこに、まずは餃子へと箸を伸ばし、醤油とラー油の入った小皿に付けて食べる。
「……なんだ、普通に美味いじゃん」
空腹というスパイスがあるにしても、ハセヲの言った味の保証はしないという言葉は謙遜だったようだ。瞬く間に餃子を食べ終えたキリトは、今度はラーメンを食べた、が……
「……こ、これは……ラーメン、か……？」
これをラーメンと認めるのは全国のラーメン屋の方々に申し訳ないような味……まあ、ようするに美味くなかった。
「まあ、餃子はましになったけど、ラーメンは変わってねぇ。葬天の奴もまだまだだな……」
早くも食べ終わったハセヲが、感想を呟きながら半透明のメニュー画面を操作している。どうやら、早速3人にメッセージを書いているらしい。
（ん？でも、これどっかで……？）
キリトの舌に残っている味は、なぜだか昔どこかで良く食べてい

たことがあるようなきがした。しかし、こんなラーメンを好き好んで食べるなんて、ありえないか……いや、そういえばＳＡＯでアスナとヒースクリフ（茅場）を連れてったあの店のアルゲードそば、そうだ、あれにそっくりだ。

さらに、キリトの脳裏であの店のやる気のないボサボサ頭の店長の顔が三葬騎士の内の一人、葬天と重なり……。

（いや、関係ないだろ……）

まさか三葬騎士が旧アインクラッドに出稼ぎで定食屋をやってるはずないよな、あははは……何て事を考えながら、とりあえずキリトは空腹の助けも借りて、ラーメンを食べきることにした。

店番　ーカナードにてー　０２（後書き）

茅場ことヒースクリフすら存在を知らなかったアルゲードそばの店、その正体は三葬騎士の葬天！という考えは原作を読んだ瞬間に浮かびました。
ボサボサ頭（髪の色は特に言っていなかったので、銀髪と仮定）で言葉を話さない（いや、きっと話せない）
これはもう葬天さんしかないでしょ！（笑）

ＳＡＯやアクセルワールドって、結構．ｈａｃｋ／／と繋がりそうなところあるんですよね（例えば、セブンアークス最後の武器『揺光』を守っているのが８体の敵とか）

ＳＡＯとアクセルワールドアニメ化するんですし、公式でコラボやらないかなと密かに期待してます（笑）

次回更新は……たぶん今週中にはできると思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5378m/

.hack//×SAO -繋がり、続く物語-

2011年10月30日04時37分発行